
IS ~インフィニット・ストラトス~ 破戒の錬鉄者

無限の剣製作者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS〜インフィニット・ストラトス〜

破戒の錬鉄者

【Nコード】

N8679Q

【作者名】

無限の剣製作者

【あらすじ】

やっちまった……。つい、衝動で書きしまった……。

これは弓弦イズル様の作品、ISの二次創作となっております。

オリ主、原作崩壊、主人公最強等の成分が含まれております。

また、携帯で投稿しているため、更新が不定期になったり一話がとても短くなりますが、それでもいい、と思われる読者様はお読み下さると駄作者はとても嬉しいです。

プロローグ（前書き）

やっちまった…つい衝動のあまり…

プロローグ

「ふう、この土地にくるのは三年ぶりだな」

IS学園の正門前で一人の少年がつぶやいていた。

年は15〜6歳だろうか。身長は170位ありそうだ。そして何よりその男が他の男と違うのは、

- - その少年が、真紅の外套を着ていたからだ。

今は4月。外套を着る時期では無いのは明らかであり、少年自身も暑そうにしながら、それでもその外套を着ていた。

「おい、その男。何を考えて - - お前、麗我か？」

「久しぶりだね、姉御。」

「その口調はかわってないな、麗我。……だが、まあいい。本当に久しぶりだな。」

「全くだよ。」

「で、どこをほつつき回っていたんだ。お前が中学校に入学していないと知ったときは、流石の私も肝を冷やしたぞ。」

「色々。世界中を見てまわったよ。ヨーロッパにアメリカ、アフリカ……地図に載っている大半の国を回ったんじゃないかな？」

「お前のISでか？」

「歩きでに決まっているじゃん。そんな国際法に抵触するような真似をしたら、命がいくつあっても足りないよ。」

「……歩きで、だと？」

「うん。ひたすら歩きに歩いた。たまに盗賊さんや追い剥ぎさんが襲ってきたのには苦労したけどね。」

「……まあ、全員撃退したんだろうな。」

「最初はISに頼ってたけどね。いまは鍛えたから並みの相手には負ける気はないよ。」

「……だろうな。私の時代でも、お前の年でそこまでの殺気を出せ

る奴は皆無といっても過言ではなかったからな。」

「あれ？出てた？おつかしいな、抑えてる筈なのに……」

「……まあいい。で、どうするんだ？ここ、IS学園に入学するのか？」

「するに決まっているじゃん。じゃなきゃ何のためにここに帰ってきたんだよ。」

「まあ、そうだろうな。じゃあ、転校という事で処理しておこう。」

「ありがとう、姉御。」

「お前のクラスは一年一組だ。また明日から来い。」

「わかったよ。……元気にしてるかな、一夏……」

「ああ、楽しみにしているよ。《赤き錬鉄者》。」

その日、少年は織斑千冬と3年ぶりの再開を果たした。
それは偶然か？

いや、違う。

それは、必然だった。

「ふう、3年ぶりか、この家も……。」
まるでいくつも家を持っているような口調で少年――氷雪麗我は言った。

「懐かしいな……。」

次帰ってくる時は、IS学園に入学する時だ、と麗我は思っていた。その理由は……

「全く、一夏も凄いよ。俺について二人目の男IS操縦者だなんて。」

突如、ISの操縦者になってしまった麗我の旧友、織斑一夏。

一人目の男IS操縦者として彼を助けたい、それが麗我の本心だった。

・元気にしてるかな・

そう思いつつ、麗我の意識は闇に沈んでいった。

これから一夏と繰り広げる、色々な事に期待しながら。

プロローグ（後書き）

はい、見ての通り駄文ですね。もっと精進しなければ…

第1話 顔合わせと再開（前書き）

ああ……自分の文才のなさに涙が……

第1話 顔合わせと再開

「全員揃ってますね。今日はなんと、転校生を紹介します!!」
転校生?こんな時期に?

と思いつながら、織斑一夏は前を向いた。

それこそ入学式からまだ1日しかたっていない。そんな時に入学してくる奴は誰なのか、一夏は知りたくなったのだ。

「それがですね、なんと、男の子です!!」

……何、男?

一夏は驚いた。

一夏は二人目のISを操縦できる男として世界に報道された。

――そう、二人目だ。

なので、最初のISを操縦できる男という話を聞いてはいたが、まさか同学年だったとは。「氷雪麗我だ。これから一年間、よろしく願います。……久しぶり、一夏。」

「お前……麗我か……?」「ああ、そうだ。3年ぶりだね、一夏。」
「嘘だろ……?」

ありえない、と一夏は思った。

そして、あつけにとられたのは俺を含めてクラス全員だった。

「お、男……?」

誰かがそうつぶやいた。

「はい。千冬先生のたつての希望でこうなりました。一夏君がこの雰囲気慣れるためにもよいだろう、と。」

そりゃそうだろうなあ、と一夏は思った。

なんせ幼なじみであり、二人目の男子生徒。一緒の方が、双方にとって利益があるというものだ。

「きゃ……」

「どうかしたか?」

「きゃああああーっ!!」

そしてそれはクラス全員も嬉しかったようだ。

「男子!二人目の男子!!」

「しかもうちのクラス!」

「織斑君とはまた違う、線の細い美形!」

「地球に生まれてよかったー!」

『なあ、一夏よ。』

麗我は、目線で助けをよんだ!『なんだ、麗我。』

『助けてくれ。』

『どうしろと?』

しかし、却下されてしまった!

「あー、騒ぐな、静かにしろ。」

とここで千冬の援護が入り、麗我は逃げる事ができた。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介がおわってませんから!」

と、ここで麗我は改めて前を向き、こちらに向かって、最後の締めを言った。

「皆さん、まだ俺はこの学校に慣れていないので、困った事があつたら助けて欲しい。それでは、この一年間よろしく。」

こうして、波乱だらけの自己紹介が幕を閉じた。

一時間目が終わって休み時間。「だ、駄目だ……」

机に倒れ込む一夏を見て、

(こりや殆ど何も理解出来ていないな)

と麗我は思った。

「ねえ織斑君、今度のセシリアさんとの戦い、大丈夫なの?ハンデ、今からでももらったほうがいいんじゃない?」

「昨日も言っただろ?男が一度言い出したことを覆せるか。」

「なあ……そのハンデってなんなんだ？」

（またろくでもない事に巻き込まれてるな、コイツ）

「あ、麗我君は知らないんだったね。昨日の事を」

そして麗我は聞いた。

昨日、一夏がイギリス代表候補生であるセシリアとクラス代表決定戦を行うという事を。

（こりゃ、正直勝ちの目は薄いな。）

と思い、麗我は行動を開始した。

「なあ、一夏。」

「なんだよ。」

「セシリアとの戦い、俺に変わってくれないか？」

「別にいいけど……何でだ？」

お前が弱いからだよ。

「いや、ちよつとセシリアって奴が気に入らなくてな。」

「珍しいな。お前が気に入らない相手がいるなんて。」

一夏は心底驚いたという表情をし、麗我は苦笑しか返せなかった。

「……で、あなたはいつたいなんですか？」

「今日転校してきた氷雪麗我だ。よろしく。」

「それは知ってますわ。朝に紹介されたではありませんか。」

「おお、かのイギリス代表候補生に名前を覚えて頂けるとは。光栄の極みです。」

「御託はいいですわ。それで、話とは？」

「今度の月曜の選手変更を、と思つてな。」

昼休み。

セシリアを呼び出して麗我が頼む事とは、来週の月曜日に行われる一年一組のクラス代表決定戦の選手変更だった。

（まあ、今のアイツじゃ十中八九ポコポコにされるだろうからな。）

「あなたが？イギリス代表候補生たるわたくしに挑むと？」

「ああ、駄目か？」

「別に構いませんけど……専用機持ちのわたくしに挑むなんて、命がいくつあつても足りませんよ？」

「なあに、専用機持ちだからといつてお高く止まつてるお嬢様にちよつとお仕置きを、とおもつてな。」「わたくしに、お仕置き？」

アッハッハッハッ、と声を上げてセシリアが笑う。

（今のうちに笑つてな）

力とは何か。専用機の本当の意味。

それを、セシリアはわかつていないという事が、この数分間話している間にも麗我には理解出来ていた。

「だいたい、あなたがわたくしに勝てると思いますの？何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから。」

「それだけか？」

その程度なら、余裕で勝てる。

「それだけかつて、あなた、本当に舐めてますわね。」

「事実だしな。」

正直、今の慢心しているセシリアには負ける気がしない。それが、数分間話してわかった唯一の結論だった。

「まあ、わかりましたわ。せいぜい頑張る事ですね。」

「一つ忠告しておこう。その慢心、無くしたほうがいいと思っぜ。」

「あなたこそ」

返す言葉は互いがない。

そして、二人セシリアは教室に、麗我は学食へと向かった。

「で、お前はなにをしてるんだ、一夏？」

「いや、箸を引っ張って学食にきたんだけど……」

箸のムスツとした顔を見て、ああ、またこいつのお人好し属性が発動しやがったな、と思った。

（箸も照れてなにも言えなくなってるし……）

ムスツとした顔で視線だけ天井に逃がす箸。これを見て、ああ、転校しても変わってないな、と理解する。

（まさか6年間も一夏の事を思い続けてるなんて……凄いやつだよ、箸ちゃん）そう思い、麗我自身もランチを注文する。

「そ、その……ありが……」

「はい、日替わり二つお持ち」

「ありがとう、おばちゃん。おお、うまそうだ」

「……………」

（全く、こいつは……）

ゴチンッ！！

「痛っ！！何するんだよ、麗我！？」

「うるさい。箒ちゃんが礼を言おうとしてるのに、他の人と話してるな、馬鹿」

「馬鹿とは何だ馬鹿とは」

「だまれ朴念仁。」

「い、一夏……その、ありがとう……麗我も……」

「ああ、気にするなよ。」

「全くだよ、箒ちゃん。」

「ふふっ、お前ならそういうだろうな。それで一夏……さっきのは、その……嬉しかった、ぞ？」

ここで箒が見せた笑顔に、一夏は見とれていた。「さ、とりあえず食べようぜ。早く食わないと姉御のこわいお仕置きが待ってるぞ」

「あ、ああ、そうだったな」

「う、うむ、その通りだな」

結局、麗我が彼らを起こしたのは、自分のランチが届いた5分後だった。

『ありがと、麗我。おかげで箒の不機嫌が収まったよ』

『何、貸し一つ、だな。』

目線で会話する。聞かれたくない会話は、こうするのがとても効果がある。

……まあ、3年ぶりで会った初日にこういった事が出来るというほど、この二人はなが良かったのだろう。

「そういえば、麗我。今までどこにいつてたんだ？」

「ああ、それは私も気になるぞ」

食べ始めて、唐突に一夏は麗我に尋ねた。

それを聞いて、麗我は苦笑した。

「答えてもいいが……いま、ここですか？」

「「当たり前だ！」」

「なかないのなお前ら。将来の夫婦仲は円満ってか？」

「な、何を言い出すのだ麗我！そ、そんなこと……」

と顔を赤らめて俯きながら言う箒に対し、

「何冗談言つてんだよ、麗我。」

あくまで普通の対応をする一夏。

（はあ……この朴念仁が……）

そう結論づけ、麗我は話を変えることにする。

「三年間ねえ……ひたすら世界を回ってたな」

「全く、お前らしいな」

「歩いて」

「「はあ？」」「」

声が重なる。

第1話 顔合わせと再開（後書き）

次は主人公の過去！

次も短いですがぜひ良ければお読み下さい。

第2話 少年の過去（前書き）

主人公の過去がとんでもない事につ！！？

第2話 少年の過去

「きっかけは、篠ノ之博士がISを開発した事だ」

あの世界を揺るがした最大の事件。

篠ノ之束によるISの開発。

「だから、その時思ったんだ。この揺れ動いている世界を、自分の足で見て回りたいって」

「なるほど……」

「本当にお前ら息があつてな。もう結婚しちまったらどうだ？」

「全く……変な冗談言つなよ麗我」

「そ、そっそそそそうだぞ！第一、い、一夏はまだ結婚出来ないじゃないか」

「お？それは、18歳以上になったら結婚してもいいって事いたあつ！」

「うるさい。黙れ」

竹刀を袋に収めながら篤が言う。

（全く……もし私の思いがきずかれたらどうするんだ……）

そんな事とは露知らず。

「一夏、勉強の方はどうだ？ついていけるか？」

「今、勉強の事は言つなよ……」

そして、残り時間5分になるまで話していて、授業に遅れて全員千冬に出席簿で頭を殴られたのだった。

「上手くいったな…」

授業を受けながら、麗我は思った。

あの時、無理に話題を変えたのには、理由があった。

（一夏と筈にはあんな過去は出来れば知られたくない）

例えば、中国でチャイニーズマヒアに襲われた事があった。

中東で、テロに巻き込まれた事もあった。

研究所で体をいじられている女の子もたくさん見てきた。

その度に、体を鍛え、ISを起動させ、多くの組織や研究所を潰してきた。

別に、後悔はしていない。ああしなければ、確実に殺されていた。だが――

（もつといい方法があったんじゃないのか？わざわざ潰さなくてもよかったんじゃない）

「痛あつー！」

「何を考えることをしている。罰則としてグラウンド3周。その後、私の所に来い。わかったな？」

余談だがIS学園のグラウンドは一周5キロもある。3周もしたら確実に死ぬ。

（やべえ。今日が俺の命日か……？）

「わかったな？」

「了解しました」

ドゴスッ！

「返事はいいだ」

轟音が麗我の頭から響いた。

そして放課後。

「ふっふっふっふっ」

麗我は外周を走っていた。否、走らせられていた。

「ふう、結構キツいな」

そして30分で走り終わり、千冬の下に向かってから言われた一言が、

「お前は人間か？」

だった。軽く泣きそうだった。

「酷いよ姉御」

パンッ！

「織斑先生と呼べ」

「申し訳ありませんでした」

「よろしい。……で、本題だ。麗我、お前は今日、何を考えていた？」

その心の奥までのぞき込まれるような瞳に、改めて麗我は旋律した。やはり、この人には勝てない、と。

「今日の午後の授業、お前は一応話を聞いているように見えた。だが実際は、今日あった何かについて考えているみたいだったな。答えろ氷雪。お前に今日、何があった」

そしてこの言葉には、逆らえない重みがあった。

（話すしかない）

今日起きた事の全てを。

そう結論に至り、麗我は話始めた。

今日という日に起こった全ての事を。

「なるほどな。要するに、自分の過去を一夏と箒に話せない、と。とんだヘタレだな」

「ぐつ。事実だし何もいえないよ織斑教諭。でも、何を話せっていうのさ。まさか『アレ』について話すわけにもいかないでしょ？」

「確かに。まだ『亡国企業』について話すのは早すぎるだろう。だが、それ以外にも話す事があつたんじゃないのか？」

「ないよ」

そうとしか返せない。

最近まで普通の中学生だった一夏や箒に話すにはまだ早すぎる。しかし、麗我に返せるのはそれが手一杯だった。

「まだ早すぎる。彼らは知らないんだ。内乱も、戦場も。何も知らない彼らに俺の過去は話せないんだよ」

「確かにそうだろうな。その『赤い外套』……それがお前のＩＳか」
返すのは無言の肯定。

「……なる程な。お前が、かの『赤い錬鉄』か。全く、まさか男、しかもお前だったとはな」

「全くだよ。あんな組織が関わってこなきゃ良かったのに」
きっかけは中国だった。

『初めての男ＩＳ操縦者』である麗我を狙い、ある研究所が追っ手を差し向けてきたのだ。

この追っ手を難なく撃退した。ここまではいい。

だが、あるうことかその研究所は麗我の身体に懸賞金をかけたのだ。そして、芋づる式に追っ手は増え、麗我は戦い続けた。

そして、その原因となった研究所を潰した後も、無駄な名声がついて回ったのだ。

曰わく、『赤い錬鉄は人を絶対に殺さない』

曰わく、『赤い錬鉄はブリュンヒルデをも打倒した』だの。

その噂には尾鰭がつきまくり、ついに彼は日本に逃げたのだった。

「もう、こんな事は嫌なんだよ、織斑教諭。戦っても戦っても、次々敵は増えてくる。俺は戦いたくなんか無いのに、名声と賞金目当

てによってくる。最後の一年は酷かった。夜襲に集団戦、なんでもありだ。しかも町中だから、ISも使えない。だから、体を鍛え、戦術を磨いた。こんな事、アイツらに話せるか？」絶対に話したくない。

アイツらと一緒にいたい。

また、アイツらと一緒に遊びたい。
騒ぎたい。

それが、氷雪麗我の唯一無二の願いだった。

（俺は、今の生活を守る為なら、例え悪魔にだって命を売ろう。この『赤い錬鉄』の名にかけて）

「そうか。だが……」

突如、千冬は麗我を抱きしめた。

「ちょ、教諭？」「その願いを抱いているのがお前だけだと思ったか？何故もつと早く連絡しなかった！」

「え？だって姉御に迷惑が」

パチンッ！

「迷惑なんて関係ないだろう。お前は血は繋がっていないが『家族』なんだ。迷惑なんて、気にはしない」

その張り手は力こそ強くはなかったが、

麗我の心を瓦解させるのには十分だった。

「姉御……」

「忘れるな。お前は、私達の『家族』なんだ。いつでも私に出来る事なら助けてやる。お前も、一夏と同じ『弟』なんだから」

「姉御……」

「さあ、私の胸で泣け」

そして、結局日が暮れるまでそのままだったのだった。

第2話 少年の過去（後書き）

はあ、全くもって文才がない……

ここで、氷雪麗我のパーソナルデータを書いておきます。
もし良ければお読み下さい

氷雪麗我

15歳

身長：172

体重：56

好きな物：食べ物全般、仲間

嫌いな物：納豆、出席簿、追っ手

性別：男

IS

???

待機形態

赤い外套

ではまた次回お会いしましょう！

第3話 専用機と代表決定戦（前書き）

ふっ……やっぱり毎日投稿するのはキツいな……

第3話 専用機と代表決定戦

「……悪い。時間をとらせたな、氷雪」

「別にいいって姉御」

バシンッ！

「織斑先生と呼べ」

「了解しました」

バシンッ！

「返事はいだ」

あんな話をした後も出席簿の調子は変わらないようだ。

「わかりましたよ織斑教諭。それに――」

（こんな話を聞いてくれたり、俺の事を『家族』なんて言うてくれ
て、本当にありがとう、姉御）

「む、何かいいたそうな顔だな」

「いえいえ、別に何もありませんよ」

（こんな話を話したら、恥ずかしいじゃないか）

いくらなんでも、こんな事は話せない。

これは心の中に取っておくべき物だ、麗我はそう認識した。

「……ふん、まあいい。明日も遅れるなよ」

「わかりました。……ああ、あと織斑教諭、一つ話しておきたい事
が」

（今度の月曜の選手変更について話しとかないと）

「手早く済ませよ。こちら暇じゃないんだからな」

「わかりました」

ここで選手変更の事を千冬に伝え、千冬が爆笑するのは別のお話。

そして時はたち、一週間後。

「なあ一夏、箒ちゃん」

「なんだ」

「どうした」

「なんで一夏のISがまだ届いてないんだ？」

二人とも苦笑しか返せない。

この日はクラス代表決定戦当日。この日にはISが届いている筈だったのだが――

「で、箒ちゃん」

「なんだ」

「一夏にISの事を教えるという約束はどうなったの？」

ギクリという擬音が聞こえるくらいの箒の様子を見て、麗我は軽いため息をつく。

「し、しょうがないじゃないか！まだ一夏のISが届いてないんだから……」

「届いていないからといっても出来る事はあつたはずだよ？それに――」

『せっかく一夏と二人つきりになるチャンスだったのに』

「な、なっとなっとなつ何を言う！そんな事、全然、これっぽっちも気にしてないぞ！」

「な、なんだ！？急に大声を上げて」

ハツとなり、こちらを真っ赤に染めた顔で睨みつける箒を見て、麗我は笑いをかみ殺す。

（落ち着け俺。今笑ったら確実に殺られる。だからポーカーフェイスを維持しろ）
その時だった。

「お、織斑くん織斑くん織斑くんっ！」

誰だ人の名前をわざわざ3回も呼ぶ奴は、と思ったら山田先生だった。

本気で転びそうで、危なっかしいと麗我は思った。

そして、それは一夏も同じだったようだ。

「先生、落ち着いて下さい。はい、深呼吸」

「は、はいっ！すゝはゝすゝはゝ」

「はい、そこで止めて」

「うっ」

どうでもいいが止めるタイミングには気をつけろよ。……お、凄い速度で顔が赤くなっている。

「……………」

「……ぶはあっ！ま、まだですかあ？」

だから気をつけろと……って一夏、あぶ

「目上の人間には敬意を払え、馬鹿者」

バアンッ！

今日も威力は衰えない見事な一撃が一夏の頭へ吸い込まれていった。

「千冬姉……」

二発目。

（学習能力がないのか、こいつは？）

「織斑先生と呼べ。学習しろ。さもなくば死ね」

（うわあ、なんとという女王様発言）

「お前もやらないのか？氷雪」

「ごめんなさい」

ヤバいと思ったら即座に謝る。これが氷雪麗我の人生哲学の一つだった。

「そ、そ、それですねっ！来ました！織斑くんの専用のISS！」

（……よし）

「じゃ、アリーナに行ってくるわ」

「ああ、気をつけろよ麗我」

一夏から激励をもらい、麗我はいつもよりも軽い足取りでアリーナに向かうのだった。

「あら、逃げずに来ましたのね」

セシリアがふふんと鼻をならす。

「お前も、俺の忠告を聞いてはくれなかったようだな」

心底残念そうに麗我也返す。

「あら、どうして慢心してはいけませんの？ どうせ勝つのでしたら少しでも楽しんだ方が得ではありませんか」

心底わからない、といった表情でセシリアは言う。

（これは、この勝負貰ったな）

「……まあいい。早く始めよう」

「それはこちらの台詞ですよ。早く、あなたのISを装着なさつてもらえませんか？」

それを聞いて、初めて麗我はISを装着していないことにきずく。

（ヤバイ。慢心しているのは俺の方か……？）

「さあ、早く」

「わかったよ。……投影・開始……」

瞬間、麗我の身体が光に包まれた。

そして、彼のISが姿を表した。

全長はセシリアのISと同じくらいであろうか。背中に二つのブースターがつき、赤い外套が前進を覆っている。

しかし、最大の特徴は、武装といえるものが両手に一本ずつ握っている中国風の短剣二本ということだろう。

「な、何故そのISをあなたが！？」

「どうでもいいだろそんな事」

焦っているセシリアと落ちていて挑発している麗我とは対照的である。「まあいいですわ……どうせ勝つのはわたくしなのですから」
そいつって距離をとるセシリア。おそらくは彼女の最も戦いやすい距離に移動する気なのだろう。

しかし、それでも眉一つ動かさずセシリアが戦闘体系に移行するのを待っている麗我は、

ただの馬鹿が。

それとも――

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲^{ワルツ}で！」

「女子をエスコートするのは男性の義務だ。せいぜい気をつけろ、セシリア・オルコット！」

ただの大馬鹿か。

第3話 専用機と代表決定戦（後書き）

次はセシリアVS麗我！！こんな駄文ですがもし良ければお読み下さい。

第4話 代表決定戦の終結（前書き）

バトルシーンは駄文書きの俺には難しい……けど楽しい！

第4話 代表決定戦の終結

「はあっ！」

先に仕掛けたのはセシリアだった。

4つのピットを上手に操り、二つの砲口から荷電粒子砲を放つ。

それを麗我は

「ふっ」

両手の短剣で全ての攻撃を『切り裂いた』。

「なっ！？」

「どうした？」

そして背中のブースターで飛行し、

その姿が『かき消えた』。

「くっ……どこですの！？」

「驚く前に動け。ただの的だぞ」

セシリアが気づいた時は、麗我は短剣を首筋に突きつけていた。

「ただの瞬時加速『イグニッション・ブースト』だ。こんなものでもたつくくらいだから、実力も底が知れるな、イギリス代表候補生？」

「くっ……うるさいですわ！」

セシリアは歯噛みする。

麗我が瞬時加速『イグニッション・ブースト』を発動した事は、セシリアもなんとか理解はできていた。

ただ、その速度と回数が並みの物とは桁が違う。

（やはり……桁違いですわね）

目の前の敵がかなりの手練れであること。それを、セシリアは改めて理解した。

「おつ、織斑先生、あの子、いったい何者なんですか!？」

「落ち着いて下さい山田先生。後、織斑と篠ノ之も聞きたいのなら近ずけ」

同じ疑問を持っていた一夏と箒は、素直に千冬の近くに集まった。

「……織斑先生。アイツ、本当に麗我なんですか？」

「ああ、本当だ。」

一夏の疑問を軽く返され、彼は本当に驚いた顔をする。

「凄い……強い……」

「当たり前だ。あのISの操縦者は、私と同格か、それ以上だ」

「……え?」「」

3人揃って驚いた顔をする。

「おいおい、私の話もいいが、あの戦いも少しは面白くなってきた所だぞ?」

そういわれて、試合を見ると、麗我がセシリアから離れる所だった――。

「……これは侮辱でして?」

「いや、違うな。どうせ勝つのならお前の本気を見てからにしようと思っただけ」

「たいそうな余裕なこと……この私を前にして、これ以上の慢心は
なくしたほうがよくってよ！」そして、再び始まる一斉射撃。そ
れを、麗我は再び瞬時加速『イグニッション・ブースト』でかわす。
「どうしました？今度は近づけなくて？」

「いや、違うな」

そして、麗我は言う。

まるで、ここまでの事が予定調和のように。

「俺は、これ以後一度しか攻撃しない」

「ふっ……ざけてんじゃなくてよ!!」

そしと再開する戦い。

冷静さをなくしたセシリアと、圧倒的に余裕な麗我。

千冬には、もう勝負が見えていた。

「……」

「ハーーーーッハッハッハッ！まあ、セシリアの今の実力じゃそうで
もしないと戦いにならないからな。」

「いや、笑ってる場合じゃないですよ織斑先生！麗我はあの条件で
本当に勝つつもりなんですか!？」

「ああ。」

千冬の言葉に、山田先生すら固まった。

「あの……セシリアさんは、イギリスの代表候補生ですよ……?」

「代表候補生？ハッ、氷雪は相手を殺す気でやれば例えブリュンヒ
ルデ相手でも対等に戦える奴だぞ？そんな奴がたかが代表候補生ご

ときとたたかったらそれこそオーバーキルだ。だから、これくらいがちょうどいいんだよ」

千冬の言葉に、再び固まる3人……

「ああ、そうだった。冰雪から奴の機体データを貰ったんだっただが見るか？」

ズシャアッ！

「なんでそんな大切な物を忘れてるんですか織斑先生！」

「まあそういうな織斑。あの戦いについて私も我を忘れて魅入ってた、という事だ。……山田先生、データを」

「あつ、はつ、はい！」

カタカタカタカタ……

「はい、出ました。……って、何ですかこの機体……？」

「驚いたか？」

「ふざけないで下さい！こんな機体で戦える訳……」

「まあ、その種あかしはこの試合を見ていたらわかるだろう。」

千冬のその言葉と同時に、3人揃って戦いを食い入るように見つめ始めた。

「27分。まさかここまでかわし続ける事が出来るなんて、賞賛に値しますわね」

「お褒めに預かり光栄の極みです、お嬢様」

「ッ……その達者な口を、早く閉じなさいッ！」

再びピットを展開し、セシリアは麗我を狙う。

しかし麗我は、このピットの特徴を見抜いていた。

（このピットは、俺の死角を常に狙ってくる。ならば――偽の死角をあえて見せ、そこに攻撃を誘導すればいい）

それは、一歩間違ったら確実に攻撃が当たる回避方法。

それを27分間も普通に行っている事から、麗我とセシリアの戦闘経験の差が丸わかりになる。

しかし、まさか攻撃を誘導されているとはセシリアは考えてもいないだろう。

本来死角という物は、無意識的に出来る物。

それを、意識的に作っているのだ。

それを、セシリアのような実戦経験の少ない者に見切れという方が酷な話だろう。

（しかし、これ以上の隠し玉はなさそうだな）

そう思い、麗我は両手の短剣を捨て、新たな剣を掴む。

それは――一言で言うと、禍々しい剣であった。

全体的に黒ずんだ刀身に、それから生えた無数の棘――それに、その剣自体からも禍々しいオーラが湧き出していた。

（まあ多分使う事がないだろうけど……）

そう思いつつも、その剣にエネルギーを供給する。

（じゃ、終わらせるか）

瞬時加速を発動。セシリアに肉薄する。

――もらった。

セシリアの間合いに入った麗我は、右手の剣を振り下ろそうとする。ライフルの砲口は間に合わない。確実に一撃が入るタイミングだった。

「……かかりましたわ」

にやり、と。セシリアが笑うのが見えた。

(……ま、ずい……!……!)

麗我は本能的に危険を感じて瞬時加速『イグニッション・ブースト』を行おうとする。

しかし、それよりも先に、セシリアの腰部から広がるスカート上のアーマーだったものが麗我に狙いをつける方が早かった。

「おあいにく様、ブルー・ティアーズは6機あってよ!」

なんとか瞬時加速『イグニッション・ブースト』が発動するが、一発のミサイルが直撃した。

「馬鹿者め。油断するからだ」

千冬意外の者が爆発の黒煙に埋まった画面を真剣な表情で注視する。

「早く終わらせろ、馬鹿者め」

その言葉に応えるかのように、赤い外套に身を包んだ機体が、空高く飛び上がるのが見えた。

「それがお前の本気か? セシリア・オルコット」

「そうですよ。さあ、灰となるがいいですわ!」

「そうか、なら……」

――俺も本気で相手をしよう。そして、麗我は弓を持った。

セシリアはそれをいぶかしんだ。

（あれ？あんな装備、さつきまであのISには・・・）

「いくぞセシリア・オルコット。この一撃、かわせるものならかわしてみるがいい」

そして剣を弓につがえ、

・・・赤原を往け、緋の獵犬・・・

「フルンディング
赤原獵犬！！」

・・・そして、勝負は一瞬で決着した。セシリアには、いや千冬にさえ事前に理解していなければ、理解出来なかったであろう。その一瞬で、バイオルフが用いた魔剣の名を冠する矢は全てのブル

Ⅰ・ティアーズを破壊し、

セシリアのシールドエネルギーを食らいつくしていた。

『試合終了。勝者 - 氷雪麗我』

そのアナウンスと共に、セシリアの意識は闇の中に沈んでいった。

「………」

「……ふん。相変わらずとんでもない武器だな、赤原獵犬『フルンテイング』」

千冬意外は何も話せないようだった。「あの……織斑先生、どういう事でしょうか？」

かろつじて復活した真耶が、あの弓が出てきたあたりで浮上した疑問をぶつける。

「あの麗我君のIS……『初期装備』も『後付装備』もないんですけど……どうして、あの弓やフルンテイング、でしたっけ？を使えたんですか？」

その質問に千冬はにやり、と笑う。

「……そうだな。織斑、篠ノ之も話を聞け。今からあのISの説明をしてやる」

その言葉に、一夏と箒はあわてて千冬の方を向く。

「よし、始めよう。山田先生、あなたは『赤い錬鉄』というISの名前を聞いた事は？」

「はい、ありますけど……あれって都市伝説なのでは？」

「その都市伝説がさっきのISだ」

その言葉に、また3人揃って息を飲む。

「……でも、あの機体は確か、無数の剣を使っていた、という話を聞いた事があります。でも、あの機体には剣はおるか装備一つありませんでした。あれは一体……？」

「ふむ。では山田先生、あの機体データをもう一回復唱して貰えますか？」

「あつはい。えっと機動力・シールドの出力は従来の出力を大きく超えています。両方ともに現在存在するISの中では最高でしょう。しかし反面、シールドエネルギーは現在のISの基準値を大きく下回ります。そして装備は……って、何ですかこれ!？」

「どうやら気づいたようだな」

千冬は笑いをかみ殺している。

「『拡張領域』^{パズロット}がそ、測定不能って……どうして後付装備^{イコライザ}をつけないんですか!？」

「なあ、あの、意味が……」

「うるさい少しだまっておけ」

一夏の疑問を無視して話は続く。

「あのIS……『アンリミテッド・ブレイド・ワーカー』はな、どんな後付装備も拒絶するんだ」

「でもあの中華風の短剣や弓は……」

そこで真耶は何かに気づいたようにハツとした顔を上げる。

「まさか……その名前が示しているのが本当だとするのなら……」

「そうだ。冰雪は、あの剣を《造って》戦っている。その武器は、どれもが世界で最高クラスの破壊力を持つ。例えば、山田先生、さつき冰雪が使った矢を覚えていますか？」

「は、はい。確か、フルンティングといったような気がしました」
あの禍々しいオーラと破壊力。それを脳内で再生し、真耶は冷や汗をかく。

「そう、あの剣は《フルンティング赤原獵犬》。北欧神話でバイオルフが使った剣の名を冠する武器だ。その効果は、エネルギーを込めれば込めるほど、威力とスピードが上がる。あの時間だと、音速の6〜7倍くらいだろうな。また、視界に入った敵と認識している者をどこまでも追いかける最高の追尾性能を持つ。あのブルー・ティアーズを全て破壊したのはこの効果による物だ」

「……」

声一つ出ない。

それはそうだろう。

そんな物に狙われたら、例えば世界のどこにいても貫かれるに決まっているのだから。

「一夏。氷雪と戦って来い」

不意に、千冬が声をかけた。

「えっ、でも……」

「お前の性格はわかっている。……戦ってみたいんだろう？アイツと」

返ってきたのは無言の肯定。

「そうか、なら……行ってこい」

そして、一夏とIS『白式』は、アリーナへと向かった。

第4話 代表決定戦の終結（後書き）

次の話を書いたら主人公機のデータを載せます。
もし良ければ感想やご指摘を！その感想が筆者の力になります。

第5話 力の差（前書き）

はあはあはあはあ……一日に二話は流石に無茶だ……

第5話 力の差

「やっときたか、一夏」

一夏がついた時、セシリアを保健室へ運び終わったと思われる麗我がISを装備して待っていた。

……おそろく瞬間加速イグニッション・ブーストでも連発したのだろう。エネルギーが目に見えて減っている。

「どうせお前の事だから手加減はいらないのだろう？」

「当たり前だ」

「なら、せいぜい遅れるな！いくぞ一夏。エネルギーの貯蔵は十分か？」

「それはこっちの台詞だ！」

そして、2つのISは同時に互いに向かって突撃した。

奇しくも麗我は双剣、一夏は《雪片二型》という近接武器。

一秒後、二人の武器が鏝迫り合いの形となって激突した。

「一夏君の勝率はどの位でしょうね」

「ま、はつきりいつて一%未満だろうな」

画面を見ながら二人の教師が話し合う。

「にしても、さっきの《赤原獵犬》フルンディングでしたっけ？ 凄い破壊力でしたね」

「あれでもまだ手加減していたようですがね」

「……は？」

「本気でエネルギーを溜めると、音速の十倍にはなるだろう」

「なんか、聞けば聞くほど凄いISですね。あの博士も、とんでもない機体を作ったものです」

「……何を勘違いしているのですか、山田先生？」

「……はい？」

「篠ノ之博士は、あの機体の製造には一切関わっていませんよ」

「……はい？」

真耶の戸惑った声は、空気に流れていった。

ガキン、ガキン！

「くっ……そ……っ……」

「どうした。そんな物が一夏？」

試合は、一方的なワンサイドゲームになりつつあった。

ただでさえIS稼働時間がほぼ0の一夏に対して麗我の稼働時間は700時間オーバー。

普通に勝負になっている方がおかしい。

それでも勝負になっているのは――

（手を抜かれている）

一夏はそう結論づけた。

「一夏……もし隠し玉があるのなら早くだした方がいい。もうこのISのエネルギーが殆どない。だから、はやく何かしないと、瞬殺

するぞ?」

(くそつ、やっぱり使わずに勝てる相手じゃない)

そう結論づけ、一夏は《零落白夜》を発動した。

刀から光が漏れだし、最高クラスの攻撃力を持った太刀となる。

(先手必勝だ)

「おおおつ!」

イグニッション・ブースト

一夏は叫びながら瞬時加速を発動。麗我の双剣と鏢迫り合いになる。僅か3秒後。

双剣は、まるで存在していなかったかのようにかき消えた。

(チツ、こりゃあ

分が悪い!)

麗我はそう結論づけざるをえなかった。

麗我の武器は、あくまでもエネルギーに一時的な形を与えて作っている、言わば使い捨てだ。

それと、相手のシールドエネルギーを0にする雪片二型とぶつかったらどうなるか。

即ち、消え去るのみ。

(まあ、それならそれで戦い形はいくらでもあるがな!)

そして、再び二人の獲物が激突する。

そして、今回も消滅――

しなかった。

「そんな……馬鹿な……」

何故なら。その手に握られていた武器は、

「……雪片……」

一夏の手握られているはずの雪片二型だったのだから。

「つくづくあのISって反則ですよ、織斑先生」

「どうしたんですか、山田先生？」

「あのIS、雪片まで作っちゃいましたよ」

「ああ、それがあのISの能力だからな」

「どういうことですか？」

「まあ、それは冰雪自身から説明してくれるだろう」

その会話を聞いている者は、彼女達以外には誰もいない。

「そういえば篠ノ之さんは？」

「ああ、篠ノ之ならどこかにいきましたよ」

「……………」

「寂しいですね」

「そうですね」

「麗我……なんでお前がその……雪片二型を持っている！」

そして、麗我と一夏は互いに同じ武器で鏢迫り合っていた。

奇しくも双方とも《零落白夜》を発動している。「ふっ、どうして

だろうな」

しかし、双方互角……という訳ではなかった。

麗我の雪片のみ、ひびが割れ、脆くなっている。

「でも、その剣は……本物には、及ば、ないっ！」

言葉と同時に麗我の方の雪片が破壊され霧散する。

「チッ、やっぱりまだ基本骨子の想定が甘いな」

そしてもう一回同じ事が起きる。

今度は骨子の想定も良かったのか、なかなか壊れない。

「……本当にどうということだ。麗我、どうしてお前がその剣を使える！」

「まあ、戦いながら種あかしをしてやろう」

そして麗我は雪片を霧散させ、代わりに弓を作り出し、距離をとる。

「俺のISの能力は《投影》っていう」

矢を放つ。

それは5本、だが確実に家電粒子砲並みの、いや超える破壊力。

それを一夏は、

「くっ……」

イグニッション・ブースト

瞬時加速でかわす。

「その効果は、一度見た武器、特に剣刀類なら、ほぼ完全な形で複製できるといふもの」

イグニッション・ブースト

しかし、一夏が瞬時加速で移動した所を読まれており、さらに矢が襲いかかる。

「くそっ」

そして、それが5回程繰り返された時。「そろそろ十分だな……」

ブローケン・ファンタズム

壊れた幻想」

瞬間。

フィールド全体にまんべんなく敷き詰められた矢が、一斉に爆発した。

「何っ!？」

白式のオートガードがなんとか一夏の身をまもるが、それでもシールドエネルギーは減少する。

- - バリアー貫通、ダメージ46。シールドエネルギー残量、52
1。実体ダメージ、レベル低。

(おかしい)

一夏は直感的にそう思った。

(あれだけの爆発を食らって、これだけのダメージというのはどう考えても低すぎる。そう、例えば)

時間稼ぎ、という結論に至った所でギクリと上空を見上げる。
その時には、もう麗我は準備に入っていた。

- - 我が骨子は捻れ狂う - -

必要なのは突破力。圧倒的な貫通力。

そして、麗我が選んだのはこれだった。

「《偽・螺旋剣（カラドボルグ？）！！」

瞬間、圧倒的な暴力が一夏を襲った。

一瞬の反応で零落白夜で受け止めるが、それも一瞬であり、すぐに押される。「く……そっ……」
勝てない。

この攻撃には勝てない。

圧倒的な暴力に飲み込まれ、無様に敗北する。
そう確信した、その時だった。

『がつ、頑張れ、一夏っ！』

スピーカーから、簞の声が聞こえた。

（まだ負けられない）

その言葉が、一夏の気持ちを変えた。

少しづつ、だが確実に、偽・螺旋剣（カラドボルグ？）の攻撃を消していく。

（あと少しだ！もってくれ、白式！）

白式のエネルギーも残り少し。この攻撃を潰したら、勝てる。

そう確信した、次の瞬間だった。

「ブロックン・ファンタズム
《壊れた幻想》」

その矢が、一瞬で煙幕へと変わった。

「何っ!？」

そして一夏には数秒間の致命的な隙ができる。

・ ・ ・そして、その瞬間から麗我は攻撃を開始していた。

・ ・ ・鶴翼、欠落ヲ知ラズ・ ・ ・

(しんぎ、むけつにしてばんじゃく)

手に持つ双剣を投擲する。

・ ・ ・心技、泰山ニ至リ・ ・ ・

(ちから、やまをぬき)

そして煙幕がはれた瞬間、投擲された4つの短剣が孤を描いて一夏に襲いかかる。

「くそっ」

なんとか体を捻ってかわす。しかし、

- - 心技、黄河ヲ渡ル - -

(つるぎ、みずをわかっ)

さらに二本の剣が投擲される。

(チッ、これ以上は流石に……!)

一度かわしたはずの剣がまた戻ってくる。

そんな中で、まだかわし続けている一夏は相当の物だろう。

- - 唯名、別天二納メ - -

(せいめい、りきゆうにとどめ)

しかし、無慈悲にもさらに二本が追加される。

(もう無理だ、これ以上はっ!)

そして、かわそうとした一夏は、

ブロックン・ファンタズム

「壊れた幻想」

爆発に巻き込まれ、

「チェックメイトだ、一夏。両雄、共ニ命ヲ別ツ（われら、ともに
てんをいだかず）」

そして、巨大な二つの中華刀にたたき切られた。

――バリアー貫通。ダメージ1000オーバー。戦闘続行不可。

そして、一夏の意識は闇に飲まれた。

第5話 力の差（後書き）

こんな駄文を読んで下さってる皆様に、精一杯の感謝を。

ご感想、ご指摘、お待ちしております。

主人公設定（前書き）

主人公の基本的な設定です。

もし字が間違っていたら教えて下さい m (_) m

主人公設定

氷雪 麗我

15歳

身長… 173

体重… 56

学歴… 大学レベル（実際は小学校卒業のみ）

好きな物… 自分の機体、仲間の笑顔

嫌いな物… 戦い、納豆

瞳の色… 金

髪の色… 赤銅

趣味… 人をいじること（主に箒、シャル）、料理、人助け、株の売買。特に料理と株は凄い。

料理はイギリスで執事のバイトをしたという過去があり、執事スキルランクA+である。

その才能はその家の執事長をして「天才」といわしめる程の物。株はスキル『黄金律』Bを保有している恩恵。総資産はX億円。

性格…とにかく優しい性格。どんな戦いでも説得を諦めない。また、戦いという行為をきらってはいるが、仲間を守る為なら容赦なく敵を殺せるという覚悟の持ち主でもある。

小学校卒業から3年間、世界を回っており、その中で巨額の懸賞金がかけられ、その為に数多の研究所、組織を潰してきたという過去を持つ。麗我曰わく、「来なきや何もしなかったのに」。

また、何でも出来るため、よくセシリアやシャルの1日専属執事になったりもする。

2011年5月5日、追記

実はとある事故で両親を亡くしており、衛宮切嗣の養子となっている（籍は入れてはいない為名字は氷雪のまま）

イリヤの義弟、士郎の義兄。

麗我は衛宮切嗣のような『正義の味方』は目指してはいないが、『99、999を切り捨てても大切な1を守る』という考え方をしている。

その為士郎とは仲が悪いわけではないのだがよく口論になり、拳げ句の果てには喧嘩にもなったりする（ちなみに戦績は麗我の全勝）また、遠野家の志貴君とは仲がとても良く、お互いに技を教え合ったり、一緒に遊んだりするほどの仲である。

ただ、出会う度に殺し合いをするのが玉に瑕と言った所か。

IS…アンリミテッド・ブレイド・ワーカー

とてつもなく性能がビークーなIS。千冬曰わく、「麗我の実力でようやく操縦出来る領域。私を含め他の奴には制御すら出来ない」とのこと。

作中でも書いてある通り起動力・シールド出力は現行ISの中ではトップ。

しかし反面、シールドエネルギーは殆どなく、白式の5分の3くらいである。

初期装備、後付装備イコライザともになし。

また、拡張領域は測定不能（ようするに無限）なのだが全ての後付イコライザ装備を拒否するため、麗我以外の操縦者には使えない理由の一つとなっている。

『投影』とは一度見た武器、特に剣刀類であるのならば完璧に複製する事の出来る能力。

拡張領域バースロットが無限なのは、そこに造った武器を挿入するため。

以下は、麗我が今までに使った武器である。

千将莫耶

中華風の双剣。

双方がともに引き合うという性質を持ち、それと複数を造れるという投影の性質を利用した『鶴翼三連』という技を使用する事もある。また、二つ揃えて持つ事で、シールドエネルギーが僅かに上昇するという効果を持つ。

偽・螺旋剣（カラドボルグ？）

刀身が捻れた剣であり矢であるもの。麗我の造れる剣の中で最大級の貫通能力を誇るモノ。

真名解放するとマツハ2になる。

フルンディング
赤原獵犬

黒い刀身に棘の生えた形の剣であり矢であるもの。

真名解放すると視認している敵をどこまでも追う矢になる。

エネルギーを貯める時間によって速さと破壊力がかわり、約30秒でマツハ10になる。

逃げれるわけねー。

ブローケン・ファンタズム

壊れた幻想…造った武器を破壊してその内包したエネルギーを爆発させて攻撃する、いわゆる爆弾。その武器に込められているエネルギーによって破壊力が変化する（本気のカラドボルグなら周囲25メートルが焦土に。一夏が無傷なのは零落白夜の効果と麗我の手加減によるもの）なお、一度これをした武器は修復がほぼ不可能だが、一夏は武器を『造って』いるため同じ武器で複数回の使用が可能。

ワンオフ・アピリティー…???

オマケ（型月をしっておられる方は読まなくても結構です）
真名解放：武器の真の名前を解放しながら放つ事で武器の真の力を
放つ事が出来る。なお、これは現時点では主人公機のみである。

主人公設定（後書き）

突然で申し訳ありませんが『レーヴァテイン』のよい漢字名と能力を募集します！！

条件は以下の通りとさせていただきます。

- 一、強力な炎の剣であること。
- 二、一応元ネタに従って！

三、ランクはA+とさせて頂きます。その範囲の攻撃力で！（騎兵の手綱以上約束された勝利の剣未満）

2月25日までとさせて頂きます。

面倒だと思われませんが何卒よろしくお願いしますm（ ）m

（募集理由……生徒会長）

第6話 執事と恋心（前書き）

PV35000突破！ユニーク5000突破！お気に入り件数70件！！

皆様、こんな文才無しの駄文を読んで下さり、ありがとうございます御座います。

毎度変わらず駄文ですが、楽しんで頂けたら幸いです。

第6話 執事と恋心

(う……ここ……は……?)

目を覚ましたセシリアが居たのは、保健室だった。

時計を見ると、麗我との戦いから2時間半もたっている。

(ああ……そうでした……わたくしは……)

負けた。

その事實は彼女が思う以上に素直に受け入れられた。

勿論、悔しくないかと問えば悔しいと答えるだろう。

でも、それが何故か自然に受け入れられた。

(……そういえば、あの方は……?)

「お、起きたかセシリア」

そしてセシリアが見たのは、炒飯とショートケーキとポットを持って保健室のドアを開けた麗我だった。

……何故か執事服とエプロンを身につけた。

(……え?え?どういう事です!?)

セシリアは困惑していた。

まあ、無理もない。

自分を圧倒的な実力で叩き潰した相手が目の前で執事にクラスチェンジして自分の為に食事の用意を行っているのだ。動揺するな、という方が無理だろう。

「とりあえず座ってるよ。腹も減ってるだろ？」

その言葉で、セシリアは初めて自身の空腹に気づく。

（くっ……屈辱ですわ）

「せつ、責任とって貰いますわよ！？」

「何のだよ。さ、とりあえず食えって、な？」

そう言われ、セシリアは渋々炒飯を口にする

（まあ、高校生にわたくしの望むレベルの食事を要求するのが無理な話ですけど）

そうして、咀嚼した瞬間、

- - 全てが、変わった。

炒飯は焼きかげんが完璧で味のレベルもセシリアが普段食べている物に勝っている。

おそらく、食材もセシリアが普段食べている物のレベルを上回る物だろう。

ケーキも絶品だ。スポンジは柔らかく、クリームは至高の領域。素晴らしい、と思ってしまった。

「紅茶はどうだ？一応ポットに入れて持って来たんだけど」

その言葉を聞いて、断れる理由は彼女にはなかった。

「ええ、頂きますわ」

それから30分、セシリアは食事を楽しみ続けた。

「貴方って、本当に神秘的な方ですわね……」

「そうか？」

食べ終わった後。麗我とセシリアは保健室のベッドに座り込んで話していた。

「私は貴方ほどおかしな人を見た事はありませんもの」

「ああ、まあそうだろうな」

その麗我の普通さに、セシリアはおかしい、と思った。

（普通、この年の人間はここまで大人びていませんわ。なのに、この方は……）

異常なまでに大人びている。

いや、達観している、といった方がいいかもしれない。

（ここまでになるなんて……この方は、一体どんな過去を辿ってきましたの……？）

そして、セシリアは。

「あつ、あの」

「どうした？」

「貴方の過去を……教えて頂けませんか？」

一握りの勇気を出した。

「俺の過去か……話しても楽しい事なんて何もないぞ？」

「ええ、構いません。だから、早く」

「全く、奇特な奴もいたもんだ……良いぜ、わかった。どこから話

せばいい？」

「貴方が旅に出た所からですわ」

「よりによってあそこかよ……セシリア、一度だけ言っとく」
そうして、麗我は顔をセシリアの方へ向ける。

（えっ？えっ？なんですか？）

顔を真つ赤にするセシリア。

しかし、麗我はその事にきずいた様子もなく、

「とりあえず俺がお前の部屋に行こうぜ。……隣の奴の来客もいる
みたいだしな」

ギクリという音が、保健室のドアの前から聞こえた気がした。

（side：篇）

えっ、えっ、どっ、どうして気づかれたんだ？ちゃんと気配は消し
ていたのに……

私は動揺しつつも麗我達が来る気配がしたので急いで身を隠す。
そして近くのクラスに隠れて麗我達が離れるのを待つ。

5分はしただろうか。

（一夏……大丈夫だろうか）

そう思い、軽くドキドキしながら保健室のドアを開ける。

（良かった……一夏はまだ寝てた……って何を考えているんだ私は
！）

こんな事を考えるなんて私も修行が足りないな……
そう思いつつも一夏のベッドにつく。

（ええっと、まずは……この濡れたタオルを……ってそれは熱がある時だけだ！）

何を考えているんだ私は！気を抜きすぎにもほどがある！

やはり、修行が足りないな…

でも考えても、やることなんて見つからない。

どうしよう……

……あれ？

体が……

それを最後にして、私の意識は闇に飲まれた。

（side 幕 end）

「ふう、ここにしようか」（え？え？えええっ！？）

結局、朴念仁な麗我が選んだのは自分の部屋だった。

（お、男の人の部屋って……一体どんな物なんだろう）

そして麗我が鍵を開けると――

――そこには、何も無かった。一応、人が暮らせる程度の物はある。
タンス、電球、ベッド。しかし、それらは最初にあった物ばかりで
あり、彼が持ち込んだ（……）物が何一つとして存在しなかつた。

「なんて……悲しい部屋なんですの」

「ん？何か言ったか？」

「いつ、いえ！何でもありませんわ？」

「ま、いいや。何もない所だが入ってくれ」

わかりましたわ、とセシリアは上の空で返す。

（一体この方の過去に何が……？）

「おい、早く入ってくれ」

「わ、わかってますわよ！」

セシリアは結局台所に案内され、椅子（元々あったもの）に座りながら紅茶を飲む。

「あ、何か食べるか？」

「……いりませんわ。早く、貴方の過去を話してもらえませんか？」

例え今新しいISをやるといわれても、セシリアは同じ事を言っただろう。

それほど麗我の過去は今の彼女にとって必要だった。「まったく、つくづくお前ももの好きだな……」

そうして、麗我は語り始めた。

己の過去を。

そんな事が許されるのか。

セシリアは、そうとしか思えなかった。

（ただ、ISを使えるというだけで、賞金をかけられ、多くの人に狙われ……）

許せない。

守りたい。

（でも、わたくしには……）

力がない。

（悔しい……ですわ……）

何も出来ないという事実には、セシリアはただ打ちひしがれていた。

「ん……どうして泣いてるんだ、セシリア？」

「え……？」

セシリアが頬を拭くと、彼女自身気がつかないうちに頬が濡れている事にきがつく。

（ああ……どうしてでしょう……）

「なっ、目にゴミが入っただけですわ！それよりも、どうして貴方は……貴方はそうやって笑っていられますの？」

そうやって、彼女のこころを揺るがすのか。

「んなこと言われても……昔からだぞ、この笑いは。でも、なんというか……嬉しいから、かな？」

「嬉しい？」

「ああ。みんなが笑っているということは、そこが平和だってことだ。……そうじゃなきゃ、みんな泣いてばかりだから……」

そう答えた麗我の瞳にまた一瞬だけ悲しみの色が移るのをセシリアは見逃さなかった。

（氷雪、麗我……）

「さ、湿っぽい話は終わりだ。お疲れ様。帰っていいぞ」
そう言われたセシリアの胸に、一筋の棘が突き刺さった。

「あつ、あの……」

「どうした？」

「もう少しだけ、ここにも宜しいですか？」

こんなことを言い出すなんて、彼女自身気がふれているのかもしれない。

だが。

彼女は出会ってしまった。氷雪麗我と。理想の、強い瞳と意思を持つ男と。

「ああ、いいぜ。好きなだけいてくれ。でも夕飯の時間までには戻ってくれよ」

「わかりましたわ」

そうして、セシリアは自身の頭を麗我の肩に乗せる。

麗我が動揺したようだが、それを無視して乗せ続ける。

（――知りたい。麗我の、事を）

その部屋にはただただ風の音だけが響いていた。

その間に、一夏のベッドに簞が寝ているのに気づいて、一夏が動揺するのはまた別のお話。

翌日、朝のSHR。

「では、一年一組代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいい感じですね!」

周りの女子と正反対の暗い顔をしている一夏を見て、笑いかみ殺している麗我がいるのだった。

第6話 執事と恋心（後書き）

今回、はじめての第視点で書いてみたのですが……如何でしたか？

もし良ければ感想とご指摘をお願いしますm（　　）m

第7話 特訓とセカンド幼なじみ（前書き）

今回は難産な上に駄文度数3割増しです……

申し訳ありませんm（
（
）m

第7話 特訓とセカンド幼なじみ

「先生、質問です」

「はい、織斑くん」

「俺は昨日の試合とは微塵も関係がないのに、なんでクラス代表に選ばれてるんでしょうか？」

「それは――」

「それは俺とセシリアが辞退したからだよ」

「そうですわ」

まるで予定調和のように言う二人。昨日これについて何か話していたのだろうか。

「一夏。俺はな、とても感動してるんだ」

「昨日一ダメージも与えられなかった俺にか？」

「ああ。だって考えてもみるよ。昨日初めてISを起動した奴が俺に本気を出させたんだぜ？そんなの、期待するに決まっているじゃないか」

「なる程。………本音は？」

「単に面倒だから。後、お前の慌てる顔が見たかった」

「この外道がつ」

「五月蠅いぞ」

バシンバシン！

………今日も出席簿は絶好調のようだ。

「諦める、織斑。敗者はただ従うのみだ」

「……………」

もはやご愁傷様としか言いようがない。

「クラス代表は織斑一夏。異存はないな」

はい、一夏以外のクラス全員が元気に返事を返す。

そうして、本人の同意が全くないまま、一年一組のクラス代表は一夏に決定したのだった。

「ではこれより、ISの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット、氷雪。試しに飛んでみせろ」

4月も下旬に差し掛かった頃、麗我と一夏は今日もこうして鬼教官の授業を受けていた。

「早くしろ。熟練したIS操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」
せかされて、各自が己の意識を集中させる。

ISは一度フィッティングしたら、ずっと操縦者の体にアクセサリ
の形状で待機している。セシリアは左耳のイヤークラス、一夏は
右腕のガンドレット、麗我に至ってはもはや服である真紅の外套だ。

…… 来たる猛暑に麗我が怯えているのは余談である。

「集中しろ」

（はいはい、わかってるって姉御）

バシン！

「集中しろ」

「はい」

人間、だれしも学ぶものである。

（わかりましたよ、っと）

そして、麗我はダラリとしながら両手に何かを持つ動作をする。

「投影：（トレース）… 開始：（オン）…」そして、一瞬でISが
装備された。

見ると、セシリアと一夏もIS『ブルー・ティアーズ』と『白式』
を装備していた。

……余談だが、『赤原獵犬』で完全に破壊したはずのビットは、もう完全に修復が終わっていた。流石に仕事が速い。

また、麗我の装備は何もなかった。恐らくは最初に持っているはずの干将莫耶もすでに破棄したらしい。

「よし、飛べ」

言われて、セシリアの行動は早かった。一夏よりも先に急上昇し、遙か上まで上昇する。

しかし……

「やっぱりISの基本性能差か？これは」

セシリアより後に出たはずの麗我は既にセシリアの遙か上に到達していた。

「何をしている。『U・B・W』はともかく、スペック上の出力では白式のほうがブルー・ティアーズより上だぞ」

見ると、早速一夏は鬼教官からお仕置きの言葉を承っている。

ちなみに急上昇・急下降は『自分の前方に角錐を展開するイメージ』で行うらしいのだが、一夏はまだ感覚が掴めてないようだ。

「一夏、イメージは所詮イメージだ。自分の一番いいイメージを探すのが一番なんだよ」

「麗我さんの言う通りですわ」

セシリアも同意する。

……しかし、いつの間にか『麗我』と読んでいる事に気がつかない麗我も結局の所鈍感なのである。

「そう言われてもなあ。大体、まだ空を飛ぶ感覚自体があやふやなんだよ。どうやって浮いてるんだ、これ」

「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干涉の話になりますもの」

「……ごめん。やっぱりしてくれなくていい」

一夏は麗我に目で助けを求めるが、その目はこう語っていた。

『世の中には、知らなくていい事もあるんだぜ』

（ああ、そうだな）

また一つ大人の階段を上った一夏であった。

「一夏っ！何をやっている！早く降りてこい！」

いきなり通信回線から怒鳴り声が響くので下を見ると箒が真耶のインカムを奪っていた。

「ちなみに、これでも機能制限がかかっているんでしてよ。元々ISは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位地を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

「詳しいんだな、セシリア」

麗我は素直に驚く。

余談だが、麗我ISのハイパーセンサーは他のISとは格が3段は違う。

何せ、制限がかかった状態で4キロ先のアリが歩いている所まで見えるのだから。

もしも、制限が無かったら。

麗我はそんな事を考えていると、一夏の色んな事を考えているような表情に気づく。

……恐らく、箒の説明と比べているのだろっ。ちなみに箒の説明は『ぐっ、とする感じだ』

『どんつ、とする感覚だ』

『ずかーん、とする具合だ』

と、素晴らしい説明をしてくれた。恐らく、この説明で理解出来るのは筭だけだろう。

（筭ちゃん、説明下手だからな……）

「織斑、オルコット、氷雪。急降下と完全停止をやってみせろ。目標は地表から10センチだ」

「了解しました。ではお二人さん、お先に」
言って、すぐさまセシリアは地表に向かう。

しかし、やはり地表につくのは麗我の方が早かった。

「ふう……で織斑教諭、一つ質問何ですが」

「どうした」

「さっきの『U・B・W』って何ですか？」

「お前のISの頭文字をとった」

「はあ、そうですか……」

まるでいまさっきやった、『地表1センチ未満完全停止』をなんとも感じていないような会話である。

「はあ……麗我さん凄すぎですわ」

「いやいや、セシリアも成功するだけで十分に凄いぞ？」

そして、セシリアも難なくクリアした。

で、一夏は。

ギョーンッ……ズドンッ！

ものの見事に墜落していた。

「馬鹿者。誰が地上に墜落しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

「……すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

「いや、それは無理があると思うよ篝ちゃん」

あれは普通教えたとはいわないだろう。

「な、何！？麗我、それはどういうことだ」

「言葉道理の意味だよ篝ちゃん。流石にあの『ぐっ』とか『どんっ』とかじゃわからないよ」

隣の一夏もそうだとばかりにブンブンと首を振っている。

「大体な一夏、お前というやつは昔から……」

「駄目だよ篝ちゃん。そんなに怒ってばっかじゃ他の女の子に一夏をとられちゃうよ？」

「そっ……それは……」

「ほら、あれを見なよ」

麗我が指差した先には

「大丈夫ですか一夏さん？お怪我はなくて？」

「あ、ああ。大丈夫だけど……」

「そう。それは何よりですわ」

仲睦まじく（篝視点）談笑している二人の姿が。

「……ISを装備していて怪我などするわけがないだろう……」

「あら、篠ノ之さん。他人を気遣うのは当然のこと。それがISを装備していても、ですわ」

「お前が言うか。この猫かぶりめ」

「鬼の皮をかぶっているよりマシですわ」

バチバチと二人の前で火花を散らす。それを促した張本人は、（うん。やっぱり篝ちゃんを一夏のことδειいじると面白いことになるなあ）

一人、笑いをこらえるのに必死であった。

「おい、馬鹿者ども。邪魔だ。端っこでやっている。……織斑、氷

雪。武装を展開しろ」

「は、はあ」

「嫌です」

バシンッ！

「返事はいいだ織斑。……後氷雪、私に逆らうなと聞かなかったか？」

「申し訳ありませんでした」

麗我は即座に土下座する。

「でも織斑教諭、出すのは干将莫耶だけで良いですか？」

「どういう意味だ？」

「出来るだけ、隠し玉は見せたくはないんですよ」

「ふむ……わかった。では二人ともはじめろ」

言われて、一夏は横を向き、正面に人がいないことを確認してから右腕を左腕で握る。

対して麗我は、リラックスした表情で目を閉じる。

幾秒かしただろうか。

一夏の手には《雪片二型》が握られていた。

（よしっ、必ず出せるようになったぞ）

「遅い。……隣を見てみる。化物がいるぞ」

「はあ……」

そうして隣を見た一夏は、

「なっ……」

絶句する。

それは回りの女子達や真耶も同じだった。

何故なら、

「投影……（トレース）……開始^{オン}……」
カランカラン……

麗我の横に、山と積もられた中華刀があったからだった。

「おい、もういいぞ氷雪」

「わかりました織斑教諭」

あの後、女子達が中華刀の数を計ったら、約50本だったらしい。

「ちよつと、氷雪くんすごくくない？」

「うんうん。ミステリアスな感じで」

「あの中華刀、いくつあるのかしら……」

等と女子達の間で会話が繰り広げられていた。

なお、この後セシリアもあつたのだが、それはまた別のお話。

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ？」

と言われた一夏は、ちらつと箒を見る。しかし、フンと顔を逸らされた。

セシリアも、もういなかった。

（……わかったよ。一人でやれて言うんだろ。まあ、実際……）
「なんだよ水くさいな一夏。俺が手伝わないとでも思ったのか？」

「……………心の友よ！」

とまあ、二人で穴を埋め始めたのだが。

「いいか一夏、とりあえず土持つてくるぞ」

「わかってるよ」

「で、土……どこだ？」

グラウンドを埋めるのにはまだまだまだ時間がかかりそうだ。

そして、その夜。

「ふうん、ここがそうなんだ……」

IS学園の正面ゲート前に、少々怪しい少女が立っていた。

見ると、ボストンバックを背負っているので、この学園の転入生である事が推測出来る。

「えーと、受付ってどこにあるんだっけ」

上着のポケットから取り出された紙からは、彼女の雑であり活発な性格をよく表現していた。

「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれどこにあんのよ」

……どうやら、彼女は少々方向音痴の類であるようだ。

「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ」

そういういつも、彼女は行き先を指して歩いている。よく言えば『実践主義』、悪く言えば『よく考えない』のである。

……少しくらいは立ち止まって考えた方がいいと思うのだが。

そついう『とりあえずやってみる』主義の少女の名前は鳳鈴音、これでも中国の代表候補生であった。

で、そのまま突き進んだ結果。

「ここどこなのよ……」

完膚なきまでに迷っていた。

学園内の敷地をひたすら頑張って歩いているが、時刻はもう午後8時を過ぎており、当然生徒は寮に戻っている時間であった。

（あーもー、面倒くさいな。空飛んで探そうかな……）

と「ちよつとまで」と言いたくなるような結論に至った瞬間、
「だから……でだな……」

と、鈴音には聞き覚えのある声が。

「この声……まさか」

と鈴音はドキドキする胸を抑えながらアリーナ・ゲートに向かうと、
「だから、そのイメージがわからないんだよ」

彼女の予想した声が。

（・・あたしってわかるかな。わかるよね。一年ちよつと会わなかっただけだし）

彼女はそう自分に言い聞かせつつ、けれど自分だとわからなかったらどうしようという不安に思考が乱れる。

（・・大丈夫、大丈夫。アイツなら絶対気づいてくれる）

と、その少年に声をかけようとした瞬間、

「一夏、いつになったらイメージがつかめるのだ」

「あのなあ、お前の説明が独特すぎんだよ。なんだよ、『くいつて感じ』って」

「……くいつて感じた。いいか一夏、」

と、見知らぬ少女が目の中の少年に密着する。

「お、おい、箒……？」

「いいか一夏、これからわかるまで密着して教えてやる」

「い、いや、その……当たって……」

「我慢しろ。……私だって、恥ずかしいんだぞ……」

と、密着しながら仲睦まじく（鈴音視点）話している少年と少女。

さっきまでの胸の高鳴りは嘘のように消え、変わりにドス黒い感情と苛立ちが流れ込んでいる。

（なんなのアイツ……一夏とくつついていいのはこの私だけなんだから）

それからすぐ、総合事務受付は見つかり、鈴音はすぐに手続きをします。

「ええと、それじゃあ手続きはこれで終わりです。IS学園によろ

こそ、鳳鈴音さん」

愛想のいい事務員の声も彼女の耳には全く入っていない。彼女の頭を占めていたのは先程見た少年と少女がくつついていた事だけだった。

（大体一夏も一夏よ。なんか、満更でもなさそうだったし……）

と、鈴音は見た者がドン引きするか土下座しそうになるドス黒い才一ラを出しながら事務員に聞いた。

「織斑一夏って、何組ですか？」

「あ、ああ、噂の子の片割れ？一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。」

と、冷や汗を流しながら答える事務員。

……まさかこんな子が転入して来るなんて、夢にも思わなかっただろう。

「それだけですか？」

「いつ、いえ、あと確かあの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり、織斑先生の弟さんなだけはあるわね」

そして、鈴音の目が一瞬だけキラン、と輝いた。

「2組のクラス代表って、もう決まっていますか？」

「え、ええ」

「名前は？」

「え？ええと……聞いてどうなさるおつもり？」

もはや敬語である。

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲って……」

（一夏、さっきの女子の話、くーわしく聞かせてもらっわよ！）と、少年……一夏の知らない所で、新たな少女が決意を新たにするのだった。

第7話 特訓とセカンド幼なじみ（後書き）

何か文句や感想があったら送って下さい……

もう駄目だorz

第8話 執事と出会い（前書き）

少々無理矢理感がありますが……

会長の登場です。

ああ……文才が欲しい……

第8話 執事と出会い

「織斑くん、クラス代表決定おめでとー！」
「おめでとー！」

今は夕食後の休み時間。一年一組の女子達は一夏の代表就任パーティーを開いていた。

ちなみにその主役と脇役は、

「……………」

「よしっ、今日は騒ぐぜお嬢様方！」

「イエーッ！」

「……………（もうどうにでもなれ）」

「具体的には一夏の恥ずかしい過去をばらしたりとか！」

「イエーッ！」

「ちよっとまで、それは可笑しいだろ！」

「安心しろ一夏……………一割冗談だ」

「残りの9割はっ！？」

「まあ、そんなどうでもよい話はおいとして」

「俺にとつて一番大切な話だったんだがな……………」

「今日は無礼講だっ！飲めや騒げやお嬢様方！」

と、完全力オス空間が出来上がっていた。

ちなみに麗我は厨房を借りてひたすら料理を作っている。

「この料理、本当に麗我くんが作ったの」

「ああ、そうだが」

「すっごーい！」

「料理の出来る男性って憧れるわね……………」

「負けた……………女としてのプライドがっ……………」

とは女子の談。

「ねえねえ、どうしてこんなに料理が上手くなったの？」

「昔、色々あってな……………」

麗我は遠い目をして言う。

以下、麗我の過去回想シーン。

「おい、この料理を作ったのは」

「私です、旦那様」

「麗我か……お前は料理を何だと思っている」

「はあ……食べるための物、でしょうか」

「……（ため息）、おい、セバス」

「何でしょうか、旦那様」

「麗我に料理という物を教育してやれ」

「わかりましてございます」

「旦那様、そつ、それだけは、どうか……」

「話は以上だ。行け」

「はっ」

「旦那様あああああ」

回想終了。

「……………」

「ああっ、冰雪くんが真っ白にっ」

「どうしたの冰雪くん」

「いや……何でも……ないよ……」

「そんな天を仰ぎながら言われてもっ」

と、過去のトラウマをえぐり返された麗我であった。

それからしばらくした後。

「どうもー、新聞部副部長二年、薫子です。このクラス代表の織斑一夏君と最強の腕を持つと噂の氷雪麗我君にインタビューをに来ましたー」

と、やたらハイテンションな先輩が現れた！

「さ、一夏君、コメントを」

「えっ、あの……何で俺なんですか？」

「決まってるじゃん！君がクラス代表だからだよ！」

と、いつの間にか取り出したボイスレコーダーを突きつけながら言う薫子。

「さ、早く。早く答えないと全部捏造しちゃうよ？」

「俺に選択権はないんですね」

「ない」

ざめざめと泣き始める一夏。

「さ、早くしないと本気で捏造しちゃうよ？」

「わ、わかりましたよ。その……どこまでいけるかわかりませんが、頑張ります」

「うーん、面白くないな……ねえ、俺の刀が火を吹くぜ、とかは言わないの？」

「言いませんよ」

真顔で返す一夏。

元々彼の武装である《雪片二型》は軽く発光するので、これ以上何かあったらたまらないのである。

「ま、軽く捏造しとくからいいとして」

ズルッとこける一夏。

「氷雪くん、コメントを」

「そうですね……こう答えるのが好みですか？」

と、軽く姿勢を正す麗我。

「私の最も得意なのは弓でね……気をつけたほうがいい。最も、気がついた時には撃ち抜かれているかもしれないがね」

「いいねいいね！その捏造のしがいのあるコメント！」

と言うが早いのか、セシリアの方に移動し、

「ああ、セシリアちゃんもコメントちょうだい」

「コホン。ではまず、どうしてわたくしがクラス代表を辞退したかという、それはつまり……」

「ああ、長くなりそうだからいいや。無駄に長いのは読者嫌がるし。写真だけちょうだい」

「さ、最後まで聞きなさい！」

「いいよ、適当に捏造しておくから。よし、織斑君に惚れたからってことにしよう」

「な、何を馬鹿なことを」

「それとも氷雪君？あのミステリアスな感じに惚れた？」

「なっ、な、ななっ……？」

急に頬を赤く染め、チラチラと麗我の方を見るセシリア。

しかし、当の本人は、

「氷雪くん、こっちに一品お願い」

「あ、こっちにもよろしく」

「かしこまりました、お嬢様っ！」

と、他の女子のオーダーにひっきりなしで全く気づいていなかった。
「なるほどね」

ニヤニヤしながらセシリアを見る薫子。

「な、何を馬鹿なことをっ」

「はいはい、じゃあとりあえずセシリアちゃんと一夏並んで。せつかくの専用機持ちだからね！。いいのもらっよ」

「ひ、人の話を聞きなさいっ！」

「あ、氷雪君は今忙しそうだからこれ終わった後でね。はいこれアドレス」

「あ、ご親切にどうも」
と、麗我は薫子のアドレスを受け取る。

――その瞬間、薫子の表情が『計画通り』とばかりに歪んだのを、麗我は決して見逃さなかった。『……何が目的ですか』

「ん、何のこと？」

「……いえ、何でもありません」

これ以上の益はないと判断し、麗我は厨房に戻る。

「それじゃあ撮るよー。35×51÷24は？」

「え？えつと……2？」

「残念。74・375でしたー」

と、他のクラス全員が写真に入っているも頭には入らず、麗我はさっきの会話を反芻していた。

そして、10時。

宴が終わり、麗我は薫子にメールをうつと、『生徒会室に来て』と返ってきたので、生徒会室に向かう。

（あの会話から見ると……何かある）

そして、生徒会室につき、ドアを開けると、

「ありがとー、麗我くん。ここまで来てくれて」

とのたまう薫子と、

「ふうん、あなたが、あの『赤い錬鉄』か……」

と言う、水色の髪を持った女子だった。

「どうでもいいですが、とりあえずその『赤い錬鉄』っての、止め

てもらえますかね……苦手なんです、その名前」

「ふうん……わかった。じゃあ、とりあえず自己紹介しとくね、氷雪麗我くん」

と、急に佇まいを整え、

「私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」と、宣言するように言い放った。

(side 篇)

……全くもって面白くない！

なんだあれは。どうしてみんな一夏と一緒に写りたがるのだ。

一夏も一夏だ。なんか、まんざらでもなさそうだし……

「今日は楽しかっただろう。良かったな」

やはりといえいいのか攻撃的な口調になってしまう……

「どこがだよ。疲れただけで、楽しいものか。それに……」

「それに？」

「……今日、お前としたIS訓練の方が楽しかった」

「な……っ」

頬が真っ赤になるのが自分でもわかる。

(私と一緒にの方が……楽しい……)

「どうせ胸が当たっていたからだろう。破廉恥な奴め」

飛び上がりそうになる感情を抑えてなんとか言葉を返す。

「なっ……ち、違うぞ」

そう答える一夏の頬も真っ赤だ。まあ、許してやろう。

「じ、じゃあ、着替えるから向こうを向いていてくれ……」

「なあ、箒。どうしてわざわざ俺がいる時に着替えるんだ？見られ

たくなならない時にでも着替えたらいじゃないか」

「そつ、そんなことはどうでもいいだろう！早く向こうを向け！」

「はいはい、わかったよ」

と、後ろを向かせる。

全く……そんな事を言ったら、恥ずかしいじゃないか……

わざと音を出して着替える。

あの朴念仁に気づかせる為には、こうでもしないとならんのだ。

「い、いいぞ」

自分の着替えた姿を一夏に見せる。

今日は帯を変えてみた。わざわざ新しいのに変えたのだから、ちょっとは変わってる、と思うのだが……

「あれ？帯が新しいやつだな」

やった！気づいた！

「よ、よく見ているな」

内心の嬉しさを押し隠す。やばい。暴走してしまいそうだ。

「いや、色も模様も違うから、そりゃ気づくだろう」

私を毎日見てる……

まずい。頭が沸騰しそうだ。

「そ、そうか。私を毎日見ている……か。そうかそうか」

必死に緩みそうになる頬を必死で元に戻そうとする。

でも……なかなか元に戻らない。

「い、一夏……」

「お、どうした？」

この時の私は、どうかしていた。

後で考えても恥のあまり倒れそうになる。

だが……

「い、一緒に……寝ないか？」

言ってしまった。

「……………は？」

「ち、違うのだ！今日はちょっと寒いから、一緒に布団で寝ようっ

て意味で、決してアレな意味じゃ……」

「あ、ああ。」

「それに、最近、ちょっとな……」

ライバルが増えた。

不安、心配、様々な物が私の中で渦巻く。

「ま、いいぜ。お前なら大丈夫だろ」

………は？

「い、いいのか？」

「別に大丈夫だろ。お前だから」

「ほ、本当に、いいんだな？」

「ああ。何度も言ってるだろ。早く入れよ」

そう言われ、踊り出しそうな体を制御して一夏の布団の中に入る。

（あったかい……一夏の匂いが……する）

「なあ、一夏……」

「ん、どした？」

「私のことを、見てくれてると言った時……嬉しかったぞ」

ああ、まぶたが重い。

もつと言いたい事はいっぱいあるのに……

「おい、箒？」

この暖かいぬくもりに抱かれながら、私は意識を手放した。

（side 箒 end）

「で、この学園最強が、俺ごときに何か用ですか？」

「あら、知ってた？」

「あら、知ってた？」

「当たり前ですよ。結構有名ですよ」

一見、簡単な言葉の応酬に見える。

しかし、麗我は

（油断は出来ない。出来れば使いたくはないけど）

と、リラックスして、両手に剣を持った姿勢をとる。

すると楯無は、

「とりあえず、警戒は解いていいわ。まだ戦う気はないし」

「まだ（・・・）ですか」

「ええ。だから今はそのISの発動準備を解いてくれない？」と言われた麗我は、体制を単にリラックスした体制に戻す。

「……これでいいですか？」

「いいけど……まさか一回で止めてくれるとは思ってなかった」

「敵意が感じられませんでしたから」

「ま、これで話が始められるわね」

「…何が目的ですか」

「目的？どういうこと？」

「わざわざ『赤い錬鉄』の名前を出して来たんですから、何か目的があるのでしょうか？」

過去、麗我が世界を回っていた時。

生活費を稼ぐのに、色々な依頼を受けてきたことがあった。

その時に使っていた偽名が『赤い錬鉄』であり、これが異名の元となったのだ。

「目的？別にないけど」

「……は？」

「いや、目的なんて何もなくて、只楽しいオ・ハ・ナ・シをしたいだけなんだけど」

「あなたがそう言うとか何かエロく感じられるから不思議ですね」

「そう？」

「そうですよ」

ハッハッハッ、と二人して笑う。

どうやら、麗我の中の警戒心が無くなったようだ。

「じゃ、何について話します？」

「うーん、そうねえ。あなた何か得意料理はある？」

「そうですね……」

と、この後30分間麗我の個人情報について話し続けた。

「ほうほう、なる程」

……薫子のことを忘れながら。

そして30分後。

「そろそろ時間ね」

「そうですね」

すっかり仲良くなっていた。

「んじゃま、私はこれで」

「つて、いたんですか!？」

「貸し一つね、薫子ちゃん」

「わかってるよ、たっちゃん」

と帰っていく薫子。恐らくは明日には麗我の大部分の個人情報がばらまかれているだろう。

「プライバシーの権利は」

「ないわね」

「……………」

「ま、そんなどうでもいい話はともかく」

「俺にとって一番大切な話だったんですけど!」

「私にとってはどうでもいいわ」

「……さい……ですか……」

「うん。で、麗我君をここに呼んだ本当の目的は――」

――戦線布告、かな」

「戦線布告？」

「うん。だってあなた『赤い錬鉄』でしょ？もしかしたら私より強いかもしれないじゃない。そうしたら生徒会長変わらなくちゃならなくなるもの」

「俺はそんな物になりたくはないんですが」

「でも、決着はつけないといけないもの。そうね……今の行事、クラス対抗戦が終わってからでいいかしら？」

「ここで嫌と言っても無理なんでしょうね……」

「うん」

即答される。

「……わかりました」

「うん。物わりのいい子はおねーさん好きよ」

「……そうですか」

「うん。じゃあまたね」

そうして麗我は生徒会室のドアを閉めた。

この出会いは偶然だったのか？
否。

これは、一つの運命（Fate）だった。

第8話 執事と出会い（後書き）

筭のは自作です。

後悔も反省もしていないっ！

第9話 再会（前書き）

今回も駄文です……

皆様の反応が恐い（ガクガクブルブル）

第9話 再会

「……なんでお前らは顔を合わせずに朝食を食べてるんだ？」

「……………」

まるで「何かありました！」と言わんばかりの二人。

前話、彼らは同じベッドで寝て過ごした。ここまではいい。

しかし、箒も一夏もこの事実に未だに絶えられず、何も言えない沈黙状態が続いている、と言うわけだ。

（うつ……恥ずかしい。まさか気に当てられたとはいえ本当に同じ布団で寝てしまうとは……だいたい一夏も一夏だ！私を襲つても……って、何を考えてるんだ私は！）

（ああ……結局一緒に寝ちまった……というか箒の匂いが来て眠るところじゃ……って、何考えてるんだ俺は。にしても理性が勝つて良かった……）

「何だお前ら。一緒に寝たのか？」

「な、何を言っている！そんなはしたないこと、するわけがないだろう！」

「あ、当たり前だろ。そんなアレなこと、するわけがないだろ」

「顔を真つ赤にしながら言っても全く説得力ないぞ、お二人さん」

ニヤニヤ笑いながら言う麗我。

「……」

どうやら彼らもはめられた事に気づき、更に顔を赤く染める。

それを更にニヤニヤしながら見る麗我。

「全く、本当にお似合いだな、お二人さん」

「ば、ばばば馬鹿を言っな！」

「謙遜するなっつて、箒ちゃん。それで、どっちから誘ったの？」

「そ、そんなはしたないこと私がするわけないだろう！馬鹿を言っな！」

「なる程、箒ちゃんか。大胆だね」

その言葉を聞いて更に顔を赤くする箒。

簡単な話術とはいえ、今の麗我が使うと悪魔に見えてくる。

「……にしても、男冥利に尽きるな、一夏」

「なんでだよ」

「だって嬉しかったんだろ、この」

「……まあ、嬉しくないと言ったら嘘になるけど」

「！」

この言葉を聞いて、箒の顔が更に赤くなる。

もうトマトの赤さを超えているだろう。

（計画通り）

……もうコイツは悪魔なんかじゃ割に合わないかもしれない。

「さ、早く食べて教室に行こうぜ。早くしないと姉御にどやされちまう」

「そ、そうだな」

「あ、ああ」

そうして（助かった）と思いながら食事を再会する二人。

（ああ、面白いネタが手に入った）

……コイツはもう魔王といっても過言ではないのだろうか。

「織斑くん、氷雪くん、おはよー。ねえ、転校生の話聞いた？」

「「転校生？」」

麗我と一夏が八毛る。

今はまだ4月であり、『転入』というよりは『入学』の方が近い。
だが『転入』である。

これがどういうことを意味するのか。

「そう。何でも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

「中国か……」

「あれ？氷雪くん、どうしたの？」

「いや、何でもないよ」

必死に作り笑いでごまかす麗我。

「ふーん。じゃいつか」

幸いにも彼女は麗我の心境には気づかなかったようだ。

（しかし、中国か……）

麗我は内心溜め息をつく。この学園に『転入』という時点で、麗我は自分と同じ類の者が、代表候補生クラスの者であるとはわかって
いた。しかし……

（よりにもよって中国か）

麗我は昔中国の研究所をいくつか潰しており、そのため中国との仲
が非常に悪い。

ネット上の噂では『中国は未だに赤い鍊鉄に賞金をかけている』と
いう話もある程だ。

「どんなやつなんだろうな……」

「む……気になるのか？」

「ん？ああ、少しだけ」

「……まあいい。許す」

「ん……？なんで許すんだ？」

今日も一夏の朴念仁度数は絶好調のようだ。

『なあ、なんで許すんだ？』

一夏から問いかけられた麗我は、とりあえずこれに答えることを優

先ず。

（これは部屋で考えよう。誰もいない部屋だし）

『麗我？』

『ああはいはい、聞いてるぞ、朴念仁』

『誰が朴念仁だ』

『お前だよ。今の箒ちゃんは一夏と昨日一緒に寝たがら夢見ごっこなんだ。だから許して貰えたんだよ』

『……………？』

『全く理解出来てないな……………はあ。箒ちゃんが可哀想だ』

……………まあ、それを言ったらセシリアはどうなるのやら。

『……………まあいいや。ありがとう麗我』

と返事を返した一夏は、セシリアに呼び止められた。恐らくは一夏のコーチのことだろう。

（にしても中国か……………）

再び麗我はこの件について考え始める。

（中国には色々なことをしたからな……………もし俺がここにいたとわかつたら、殺し屋でも雇ってきかねない。それに……………）

「一夏さん？そろそろ実戦的な訓練をしたくありませんか？」

「ああ……………。まあ。クラス対抗戦も近いしな」

「なら、この私セシリア・オルコットがそのお相手を務めさせて頂きますわ。麗我さんは色々と忙しそうですから」

（……………万が一他の生徒を狙ってきたら、俺も覚悟を決めないといけない）

覚悟。

麗我の内にある覚悟は、則ち『殺す』覚悟である。

（まあ、そうならないことを祈るけど。

……………出来れば戦いたくないし）

「まあ、やれるだけやってみるか」

「やれるだけでは困るのです！一夏さんにはぜひとも優勝して頂きますと！」

「そつだぞ。男たるものそんな弱気でどうする。狙うは優勝のみだ」
「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

……麗我の内心をよそにどんどん話は進んでいく。

実は、やる気を出させる為に、一位クラスには優勝商品として学食デザートの半年フリーパスが配られることになっている。

……勝てばクラスみんなが幸せだが、負けると一夏一人が不幸になると思うのは、多分気のせいではないだろう。
食べ物の恨みは本当に恐ろしいのだ。

「織斑くん、頑張つてね！」

「フリーパスの為にもね！」

「いや、フリーパスの為に！」

……もはやクラス全員が阿修羅と化している。

もし一夏が負けたら、一夏は何をされるかわからないだろう。

「なあ、お前ら……目が怖いぞ」

「うつん、気のせいだよ」「絶対に気のせいだって」

……………。

「それに、今のところ専用機を持つてるクラス代表って、ウチと4組だけだから、楽勝だよ」

「その情報、古いよ」

（ええと、窓とドアにトラップを……ん？この声は……）

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれているのは――

「鈴……？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は戦線布告に来たってわけ」

数年前、麗我の友人であり、数少ない幼なじみでもある一人の少女だった。

第9話 再会（後書き）

すみませんがまた宝具の効果募集を行わせて頂きます。

申し訳ありませんm（――）m

さぞ面倒くさい事でしようが、この駄作者の為、どうか一つお願い
しますm（――）m

募集宝具

ハルペー

グラム

募集要項

前回と同じです。ただし投影品のためハルペーはランクB+、グラムはA+とさせて頂きます。

また、グラムの方はある程度は伝説から乖離（竜殺しの部分）してしまっても構いません。

2月の28日までとさせて頂きます。よろしく願いますm（――）m

第10話 交渉と模擬戦、女の戦い（前書き）

すみませんが今テスト期間という物に入っしまい投稿スピードが遅れるかもしれません。

もし何時も通り投稿していたら、『ああ、この駄作者テスト諦めたんだな』

と思って頂けたら、と思います。

第10話 交渉と模擬戦、女の戦い

「お前……鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、鳳鈴音。今日は戦線布告に来たってわけ」

「鈴ちゃんが……代表候補生……？」

麗我は驚きを隠せない。

（でも、鈴ちゃんなら……俺がここにすることを黙ってくれるかもしれない）

でも、それでもこういうことを考えるのは、麗我らしいと言えるのだろうか。

出来るだけ戦いたくない。

そのためなら、どんな裏工作でもしてみせよう。

それが、こと戦いにおける麗我の思考回路だった。

（兎に角、何とか後で二人で話せる場を作らないと）

「あの鈴、ちよっと」

「何をしている。早く教室に戻れ」

「ち、千冬さん……」

「早く行け。邪魔だ」

そう言われ走り去っていく鈴音。

（ちっ、どうすればアイツと話せるんだ……）

機会の減少。

会う機会をどう作ればいいか麗我は途方にくれた。

『おい、麗我^{ボソッ}』

かに思えた。

『あ、姉御！？』

『織斑先生、だ。……まあいい。この際は後で許してやる』
結局は殴られるのである。

『まあ、いい。後でお前と鈴音の話せる時間を作ってやる』

『え、本当！？』

『貸し一つだな、麗我』

（やった！これで鈴ちゃんに対して裏工作が出来る！）

こうして、千冬の職権乱用の力によって、麗我は鈴音と話（裏工作）せる時間を得た。

そして放課後。

「で……何よ、話って」

「わざわざありがとう、鈴ちゃん。実は……ちょっとお願いがあつて」

とある一室で鈴音と麗我が話していた。

「どうせアンタのことだからそのお願いって『本国には知らせるな』とかそんな当たりでしょ？」

「察しがいいね、鈴ちゃん」

いかにIS学園が各国から独立した存在とは言え、ISを持たない単なる暗殺者が来る可能性は否定出来ない。

だが、その送って来る相手（中国）がその送る相手（麗我）の居場所を知らなければ。

自ずと暗殺者が送られて来ることもないだろう。

「まあ、いいけど……幼なじみを売るのも気が引けるし」
「本当！？ありが」

「ただし！条件が一つだけあるわ！」

「……条件？」

麗我は考える。

今自分が持っている物。

一、ベッド等の家具（最初からあった物）

二、この部屋（最初からあった物）

三、預金通帳

「……いくらが所望ですか」

「どうしてそこで泣きながら預金通帳の残額を確認し始めるのよアンタは」

「だって……いくらぼられるかわからないし……」

「アンタは私を何だと思ってるのよ」

「The embodiment of scarlet devil」

「どこの串刺し公の末裔をなのってる吸血鬼少女よ」

「あれでも500歳だけだな」

「……話がそれたわ。いい？私が対価として求めるのはお金じゃない」

「じゃあ何だ？他には俺の部屋には何もないぞ？」

「馬鹿ねアンタは。アンタにはその……」

と言いつつ、鈴音は麗我を指差す。

「類い希な執事スキルがあるじゃない」

「……………はあ？」

「何よその目は。まるで私が馬鹿みたいじゃない」

「いや、だつて予想外すぎるし……」

それはそうだろう。どこのだれが対価に執事スキルを必要とするのだ。

「いや、アンタ、料理つて得意でしょ？」

「ああ。少なくとも苦手ではないな」

「でしょ？だから少し教えて欲しいな、なんて」
要するに、鈴音はこう言いたいのだ。

好きな人（一夏）の為に料理を作つてあげたい。

けど、今の實力では満足して貰えるかわからない。
だから――

（まあ、これくらいの条件ならいいか。見てて面白そうだし）

「わかった。いいぜ。交渉成立だな」

「……本当に？」

「ああ。とりあえず時間はまた後で考えよう」

「……やった！」

そう言つて、小走りで走り去っていく鈴音。

それを見送る麗我の顔は、何故か――

悲しく笑っていた。

「では参るぞ、一夏！」

（……ん？）

帰宅途中。麗我はそんな声を聞いた。

（……これは……箒ちゃんか……？）

そして打ち鳴らされる剣戟の音。

（ちよっくら見てみるか）

こうして音源である第三アリーナに向かう。

するとそこには、

「頑張つて下さい、一夏さん！」

と何故かISを装着したセシリアの姿が。

「どうしたんだ、セシリア？」

「あら麗我さん。実は、今実戦経験を積ませようと模擬戦を行つてるところですよ」

「へえ……模擬戦か……」

見ると、一夏の攻撃を箒が受け流して、

「しま……っ」

「甘いぞ、一夏」

出来た隙に箒が左の斬撃を当てた所だった。

そして一夏のシールドエネルギーが無くなり、ISが解除される。

「まだまだ甘いな、一夏」

「くそっ、失敗した……」

「では、次は私が」

「あ、ちよつといいか、セシリア？」

「何ですか、麗我さん？」

「次、俺に変わってくれないか？」

「え、ええ。別に構いませんけど……」

「ありがとう、セシリア」

何故麗我が変わったのか。

それは――

（俺の方が、多分いい経験になるだろう）

という、確信にもた自信からだった。

「……^{トレース}投影……^{オン}開始……」

そして展開されるIS。

「一夏、早く準備しろ」

「お、次は麗我か。ちょうどいい。こないだの雪辱、変えさせて貰うぜ！」

「ふっ、やれるものならやってみるがいい！」

そして、麗我が投影したのは、刀と見るには刀身が長すぎるの長刀。

佐々木小次郎が振るったといわれる、《備前長船長光》、通称『物干し竿』だった。

そして、

（憑依経験……完了）

佐々木小次郎がどんな相手と戦い、その時どんな剣を使ったのか。

その経験を憑依する。

「いくぜ麗我！」

「こい、一夏！」

そして、激突する。

この戦いは、かなり遅くまで続いた。

そして夜。

「くっそー……結局1ダメージも与えられなかった」

と呟いている一夏と、

「気にするな、経験の差だ。また一緒に特訓だ」

と、珍しく慰めている筈と、

「まあ、実力だよ実力」

と、軽い口調で一夏に語りかける麗我と、

（はあ……やっぱり麗我さんは私の騎士^{ナイト}ですわ）

と、口には出さずに麗我を熱い瞳で見つめているセシリアが、4人でアリーナで片付けをしていた。

「にしても麗我って凄いやな。この前は双剣に《雪片》、今回はあの長刀を完全に使いこなしてたな」

「ああ。それに、わたくしと戦った時は剣を結局使いませんでしたわね。弓を使われましたから」

「しかもあの新聞部には『一番得意なのは弓』と言っていたな。どうゆうことだ？」

「まあ待て、落ち着け。順に話してやるから」
そう言いつつも片付けを続ける麗我。

「まずは箒ちゃんの質問の弓だけど……これは完全に実力。ひたすら鍛えた」

「どこでだ？」

「それは内緒。まあ、見える範囲の動体を撃ち抜ける自信はある」
「……」

「おいおい、これくらいで驚いてたら身が持たないぜ？」
軽く言う麗我に対して他3人は絶句している。

当然だろう。そんな弓の才能を持つ者がいるとしても、世界に10人いるかどうかであろうから。

「次に、剣だが……俺がまともに使えるのはあの双剣 - 千将莫耶だけ。後は『俺は』全然使えない」

「でも……」

「『俺は』と、言っただけで、一夏。このISの数少ない能力の一つに『経験憑依』という物がある」

「『経験憑依？』」

「ああ。武器、特に剣刀の類であるのなら一度でも見た武器は造り出せる、と言っただけ、一夏」

「そういえば……」

一夏は戦いの時、あの飛来する剣を捌きながら聞いていたのを思い出す。

「その時に、このISは一瞬でこの剣の歴史を見せてくれるんだ」

「歴史？そんなもの」

「落ち着け、セシリア」

「必要ない、と言おうとしたセシリアは麗我の言うことに従う。

「歴史というのは、この剣がどう振るわれたのか、どのようにして作られたのか。こういったことだ。つまり、俺がこの剣を振るっているのではなく、剣が俺を振るわせている（……………）

・…んだ」

「……………つまり、それは」

「気づいたようだなセシリア」

麗我がニヤリと、まるでイタズラがバレた子供のように笑う。

「「どうゆうことだ、セシリア？」」

「つまり、麗我さんは一度でも見た武器、特に剣刀の類なら、完全に使いこなせる、という訳ですわ」

「実際は100%使える訳ではないがな。まあ、ワンオフ・アピリティーを使っくらは出来るさ」

「……………」

「バタリ。」

「箒！？おい、箒！」

「気絶してるな……………」

箒は剣士だ。

それも、全国優勝する程の実力者。

おそらくは自分の剣に自信を持っているだろう。

しかし、その剣が一瞬で使われると言われたら？

断言しよう。それは剣士への冒瀆だと。

なので、剣士である筈が倒れるのもしょうがない、というものである。

「なるほど。あの時、麗我さんがあれほどまでに自信ありげだった理由がやつとわかりましたわ」

「へえ。やっぱ代表候補生なだけあってセシリアは頭いいんだな」

「と、当然ですわ!」

そっぴいっつも、セシリアの顔は嬉しそうだ。

「えっと……つまり……どうゆうこと?」

「お前は案外鈍いのな」

「俺はそこまで鈍くはないぞ」

一夏が鈍くなかったら、この世のほぼ全ての男が鈍いということにはならないだろう。

「一夏——!」

「あ、鈴だ」

「んじゃ、俺はこのへんで。筈ちゃん運んでこうか?」

「ああ、たの……ってさっきの話は?」

「宿題だ。考えとけ」

「えっ、そんな」

「言い訳は聞かんぞ。行こうぜセシリア」

「わかりましたわ、一夏さん」

そういつて歩き出していく二人。

「はいこれ、ぬるいお茶」

「おう、サンキュー」

（どこの爺だよ）

こっ心の中で突っ込みながら、麗我は筈を抱きながらセシリアと一緒に歩いていった。

ちなみにお姫様だつこである。

「……………」

「ん、どうしたセシリア?」

「いえ、なんでもないですわ、どうかお気になさらず
(羨ましいですわ、篠ノ之さん……)」

と思いながら頬を赤くして言うセシリア。

しかし、当の本人は、

「そうか。じゃあ行くぞ」

で終わってしまうのは流石唐変木といった所か。

ちなみに、返っている途中、

「うわ、篠ノ之さん、お姫様だっこされてる！」

「うわゝ、いいな」

「氷雪くん、私も」

と大騒ぎとなり、セシリアがISを装備してブルー・ティアーズで
狙い撃ち、千冬に大目玉を食らったとか。

その夜。

「参ったな……」

麗我は一人教室で愚痴っていた。

それは、今日、箒に自分の弓をどこで教わったかということに答え
られなかったことだった。

「やっぱり、いつかは教えないといけなかったのかな……」

それは、麗我の剣術にしても同様。

いや、果たしてこれが剣術なのかどうかも怪しい。

「箒ちゃんには聞かれなくて良かったな……この剣が、俺独自の物
だったってことに」

これは、戦場で生き残る為に鍛えた、戦場の剣。

今まで、運が良かったのかはわからないが麗我が殺した人数は一人
もない。

だが。

「この剣が……敵を殺す（・・・）為の物なのは、覆しようもない事実なんだよな……」

- - それは。

才能のない物の為の剣。

必死に、愚直にも鍛え続けた剣。

敵を切り、殺す為の - - 剣。

「でも、俺は」

戦いたくなんかない。

でも、今までは単に運が良かったに過ぎない。

IS戦なら、絶対防御が発動して何とか殺さずにすむかもしれない。
でも、それは。

「今まで使った武器だからこそだからな……」

彼が造るのは無限の剣。

その中には - - 触れている物のシールドエネルギーと絶対防御をかき消す物も存在する。

もし、これから先。

彼は、仲間を守る為に - -

敵を、殺せるだろうか。

「当たり前、だな。俺の仲間に出す奴は、例え神であろうと」
残りの言葉は聞こえなかった。

しかし、彼は再び信念を心に刻み。
そのままその夜はふけていった。

side・幕

全くもって気に入らんっ！

なんなんだ、コイツは！

「というわけだから、部屋代わって」

「ふざけるな！なぜ私がそのようなことをしなければならない！？」
寮の部屋で今は午後8時。せっかく今日も一夏と二人っきりの夜を
過ごそうと思っていたのに……

「いや、篠ノ之さんも男と同室なんて嫌でしょ？気を遣うし。のん
びり出来ないし。その辺、あたしは平気だから代わってあげようか
なって思ってたさ」

嘘をつけ。お前も一夏以外の男だったら嫌だろうに。

「べ、別に嫌ではない！むしろ……」

「むしろ？」

い、一夏！そんな目で私を見るな！恥ずかしいだろ！

「……ゲフン。それにだ。これは私達の問題だ。部外者は口を突っ
込むな。むしろとつとと帰れ」

「大丈夫。私も幼なじみだから」

「だから、それが一体何の理由になるというのだ！」

これだ。幼なじみだから同居？ふざけるな！なんで私が部屋を変わ
らなければいけない！

折角一夏と同じ部屋なのだ。このままずっと一緒にいたい。
その、何が悪い！

「まあとにかく、今日からあたしもここで暮らすから」

「二人部屋だ。大人しく帰れ」

「じゃどいてよ。あたしが一夏と同じ部屋になるんだから」

いかん。これではまた同じ展開になるだけだ。

「どうしてもというならとりあえず織斑先生を連れてこい」

「ところでさ、一夏、約束覚えてる？」

「む、無視するな！とりあえず人の話を聞け！」

「やだよ。面倒くさい。あたしは今一夏と話してるの。外野は黙ってて」

な、んだと……？

これだけ好き放題言つて人のことを外野呼ばわり？

「ええい、こうなったら力づくで……」

ベッドの横に立てかけてある竹刀を持ち、振り下ろす。

バシンッ！

やったか！？

「鈴、大丈夫か！？」

「大丈夫に決まってるじゃん。今のあたしは――代表候補生なんだから」

何っ！？私の剣を止めただと！？

「ていうか、今の生身の人間なら本気で危ないよ？」

「う……」

くそ……これでは何も言えない……

「あのさ、鈴」

「何、一夏？」

「約束つて……何だっけ？」

「は？」

「だから、本当に覚えてないんだって。ごめん
バアンッ！

「あ、あの、だな、鈴……」

「最つつつ低！女の子との約束を覚えてないなんて、男の風上にもおけないやつ！馬に蹴られて死ね！」

そこからあの忌々しい奴――確か、鈴音だったか――は、泣きながら帰っていった。

「ていうか……馬に蹴られて死ねたのは、確か恋路を邪魔した時じゃなかったっけ」

「一夏」

「お、おう。なんだ筈」

「どうして、あのとき部屋を交換してくれと私に頼まなかったんだ？」

私は、けっこう酷い女だ。

好きな男の前で、どなってしかいられない。
でも、どうして……

一夏は、何も言わなかったんだろう。

「うーん、どうしてかな。色々理由はあるけど、やっぱり一番の理由は……お前と一緒にの方が、落ち着くから、かな。」

「……………え？」

「だから、お前と一緒にの方が、正直リラックス出来るんだよ。」

「本当か？」

「おう」

「本当に本当か？」

「ああ。だってアイツと一緒にの部屋になると騒がしくなりそうだし、私と一緒にの方が、いい。」

一夏……

私は、ずっとお前と一緒にの部屋でいたい……

「さ、とりあえず寝ようぜ。まだ9時前だけど」

「い、一夏………今日も……駄目か？」

「今日もかよ。ったく……ほら。入れよ」

「あ、ああ………」

まさか本当に了解が得られるとは思わなかった。

「じ、じゃあ………入るぞ」

「おう」

二度目の一夏の布団は、前よりも暖かく感じられた。

そのぬくもりに身を委ねると、今まで中であつたわがたまりが全て消えていく。

そして、私は惜しいと思いつつ。

このぬくもりに絶えきれず、意識を手放した。

- 翌日、生徒玄関前に大きく張り出された紙があつた。

表題は、『クラス対抗戦日程表』。

その中に、一つの完結な文があつた。

一回戦

一組、織斑一夏対二組、鳳鈴音

日程 - -

第10話 交渉と模擬戦、女の戦い（後書き）

作者はアニメを見ていないので、日程表が間違っていたら連絡下さい。

後、この後二話閑話を入れさせて頂きます。

誠に勝手ですが御理解を頂けたら、と思います。

閑話 1 買い物と尾行と乙女の心（前書き）

閑話 1 です。

時期は前話とクラス対抗戦の間くらいかな……

閑話1 買い物と尾行と乙女の心

ある日。

ちよつとした用事ができた箒は、いつ一夏に話そうか悩んでいた。

（急にこんなこと言い出したら引かれるだろうか……いや、でも）

「お、どうした箒？何かあるのか、そんなもじもじして」

「ひゃあっ！」

箒は驚いてふり向くと、そこには

「よ。ま、部屋同じだから後で話せば良かったかもな」

考えていた対象である彼女の思い人が。

「……ふう、全く。心臓に悪い」

「ああ、悪い悪い。でも、何か考えごととしてたようだけど、大丈夫か？」

（どうしよう、このまま言ってしまうおうか……ええい、ままよ！）

「一夏！」

「お、おう。何だ箒」

「今週の土日は開いているか？」

「ああ、別に問題はないと思うが……どうした？急に」

「ちよつと買い物に行こうと思ってな……一緒に来てもらえるか？」

「ああ、わかった。別にいいぜ」

「……本当か？」

「ああ。……ってどうしてお前に嘘をつく必要があるんだよ」

（やった！）

と箒は緩む頬を戻そうとするが、緩む頬を抑えられない。

（しょうがないか……だって、これはデー……って何を考えているんだ私は！）

実際はただ買い物と一緒に行くだけでデートではないのだが、それはこれ。恋する十代乙女の妄・特権という物だろう。

「じ、じゃあ、１１時に、校門前、いや、どこにしようか」

「商店街の前とかはどうだ？あそこ、けっこういい場所だと思うぞ」

「そ、そうだな。お前が言うのなら、そうしよう」

「じゃあ、遅れるなよ」

「あ、当たり前だ！」

こうして、二人は別れた。この話を周りで聞いている者はいなかった。

「ほうほう、面白そうな話を聞いたな」

……ただ一人、最も厄介な者を覗いて。

そして、時がたち約束の日。

「一夏！次はあそこだ。行くぞ」

「お、おい、箒！その、当たってるって！」

「う、うるさい！気にするな！（こっちだって、恥ずかしいんだぞ……）」

「お、おう……（意識しまいとすると、余計に意識しちまうんだよな……）」

と、どこから見てもバカップルにしか見えない一夏と箒が歩いていた。

……腕を組んで。

しかも箒がわざと一夏に胸を押しつけるようにして歩いているので、余計に見えるのである。
そして。

「ふむふむ。気になるから尾行してついてきて良かった。うん、
夏、御馳走様」

と、周りを寄せつけない赤い外套を身につけた少年――麗我が10
0メートル後方から尾行していた、

「一夏！次はここだ！」

「わかったから、そんなに急ぐな。転ぶぞ？」

今一夏と箒が入ろうとしているのは女性用の服専門店だった。

（にしても、ここは少々場違いだな）

一夏が思うのも無理はない。

当たりには女性ばかりであり、男の影は全くない。

完全に場違いだった。

（出来れば早く出たいけどな）

「どうされましたか、お客様？」

「あ、いえ、別に何でもないです」

「一夏。来てくれ。どちらが似合うだろうか」

「ああ、わかったよ。すみません、これで」

「はい、かしこまりました。それでは、また。」

――織斑一夏さん

「何っ!？」

「どうしたのだ、一夏」

「いや、何でもない。早く行こうぜ」

店員の女性の姿は、まさに蜃気楼のように消えていた。これに気づいた者は、誰一人としていなかった。

「来るのが早くな、《亡国企業》」

ただ一人、麗我を除いては。

「なあ、一夏。どちらの方が似合うと思う？」

箒が一夏に二つの服を差し出す。

「うーむ……そうだな。その赤いのを着てもらえるか？」

「これか？どうしてだ？」

「それが、お前に一番合うと思うからだよ」

「！」

箒の顔がトマトよりも赤くなる。

「そ、そうか。それでは仕方がないな。店員、これをくれ」

「はい、かしこまりました」

「って、試着しなくていいのかよ」

「何を言っている？お前が私に一番似合うと言った物が私に合って無いわけがないではないか」

そう言って、可愛らしく頬を膨らませながら一夏の方を見る箒。

（やばい、可愛い……）

それを見て、赤面する一夏。

その一夏を見て、急に照れはじめたのか無口になる箒。

「あ、あの、代金……」

板挟みになっている店員がとても可哀想であった。

「そろそろ、昼食にするか」

「そうだな」

午後12時を過ぎた当たり。

お腹も空いてきた一夏と箒は、どこかで昼食をとることにした。

（……本当は手作りの弁当を食べて欲しかったのだから……）

「どうした、箒？」

「な、何でもない！行くぞ一夏！」

「お、おい引つ張るなよ」

と、二人は歩き出した。

「……よし、先回りしよう」

その後ろで、麗我も行動を開始した。

「ここにしよう」

「そうだな」

そして二人が選んだのは、オープンテラス式のカフェテラス。

本編で、シャルとラウラが強盗を倒した場所だ。

「じゃ、入るぞ」

カランカラン

「いらつしゃいませ。何名様でしょうか」

ボタン

「どうした筈？」

「何か……今ここにはいないはずの誰かがここにいた」

「気のせいだろ」

「じゃあお前が先に入れ。私が言いたい事がわかるはずだ」

「わかったよ……全く」

カランカラン

「そんなことあるわ」

「いらつしゃいませ。2名様でしょうか」

ボタン

「な？」

「ああ……とんでもない幻覚だな……」

そして立ち止まる二人。

「……よし、行くか」

「そうだな。3度目の正直という言葉もあるしな」

カランカラン

「いらつしゃいませ。お似合いのカップルですね。テーブル席に」

案内致します」

「ああ、頼む。それと……」「何でここにいるんだ、麗我!？」

「おかしいことを。私の名前はセバスですが」

「嘘をつけ嘘を!その赤い外套が何よりの証拠だ!」

「お客様、こちらに」

「麗我……後で何があったか話してもらうからな」

そして、自称セバスは一夏と筈を席に案内する。

「ご注文がありましたら、そのベルでお知らせ下さい」

「ああ」

「わかった」

「では、ごゆっくり桃色空間を満喫して下さいませ」

「おい!ちよつとまで!そこの似非……」

そして歩いていくセバス、いや

「店長。助かりました」

「いいのいいの。こっちも人手不足だったから」

麗我がいた。

時刻は、数分前にさかのぼる。

「一夏達は多分ここに来るはず……」そう考え、後で一夏達が来ることになる店の裏口に向かう。

「お？麗我君じゃん。どうしたの？」

「出来れば少しの時間だけ働きたいのですが……」

「了解。じゃ今すぐ執事服を着てね」

「わかりました」

そして、今に至る。

（にしても予想が当たってよかったな。正直ある程度勘だったけど）
物凄い直感である。

チリンチリーン

「あ、注文とつてきます」

「頼んだわよー」

今の方向から見るとさっきのベルの音は一夏だろう。

（よし。いじりつくそう）

注文をとりに行く麗我の姿が、悪魔にしか見えないのは気のせいだろう。

「ご注文をどうぞ」

「い、一夏……言っていないぞ」

「筭の方こそ、先いけよ」「……」

「のろけてないで早く注文をどうぞ、お客様」

「き、今日のお勧めは何ですか？」

「一夏が空気を打ち破るように言う。」

「蟹のクリームグラタンで御座います」

「じゃ、それ二つください」

「かしこまりました。ご注文は以上でよろしいですか？」

二人が頷く。

「ご注文を確認します。蟹のクリームグラタン一つ、カップル用のドリンク一つ、見る方が引く極甘空間でよろしいですね？」

「全然よろしねえっ！」

「ご安心を。ドリンクは私の奢りとさせて頂きます」

「話を聞けよ！」

「では、しばしの間お待ち下さい」

「俺の話を聞いてくれえええ……」

一夏の悲痛な声がかフェテラスに轟いた。

「ご注文は以上でよろしいですか？」

「……」

「では、しゅっくりどうぞ」

「……………」

麗我が歩き去った後も、一夏と箒は何も言えなかった。それもまあ当たり前だろう。彼らの前には、例のドリンクが置いてあるのだから。

グラスの大きさは普通の物の二倍くらいだろうか。しかし、このドリンクが異彩を放っているのは、これが理由ではなかった。

そのグラスにはストローが二つ刺さっており、ご丁寧に中ではハート形に絡まっている。

（れ、麗我！こんなもの、私にどうしろと言うのだ！い、いや、でも一夏とこんな事をしてみたいという思いもあるし）

（麗我……後で覚えてるよ。にしてもこれ、どうしよう……箒も緊張して何も話さないし……）

と、二人の心境は渦巻いている。

例えるのならば急に爆弾が飛んできたような感じだ。しかも、予想外の方向から。

（……ええい、女は度胸だ！）

と、箒が先に口をつけた。

「ええっ！？ほ、箒！？」

少しずつ、だが確実に減っていくドリンク。

「……一夏も飲んでくれ」

「え？でもそれって」

「いいから飲んでくれ。早くこれを片付けよう」

関節キス、の部分箒により隠され、一夏も後がなくなる。

（ええい、いっちなまえ！）

と、一夏も口をつける。

それを確認して、箒も口をつける。

先ほどの早さの倍で無くなっていくドリンク。

しかし……

「ねえねえ、あの人達カップルよね！」

「キヤア！凄いわ。二人だけの空間が造られてるわ！」

「F a t e的に言うのなら、固有結界『極甘庭園』だな。庭園ではないが」

……残念ながら、周りの人の視線は無くせなかった。

そして。

「計画通り」

皿を洗いながら、麗我がキラのような笑みを浮かべていた。

「今日はありがとうございました」

「いえ、こちらのほうこそ助かったわ。にしても、どうして急にバイトなんか？」

「一つは単に弄りたかっただけです」

「あの子たちを？」

「そうですよ」

「悪い子ね」二人して笑う。

今は夕方。麗我のバイトも終了し、店長と話している所だった。

「もう一つは、ただのお節介ですかね」

「お節介？」

「ええ。あいつら、あれでまだ付き合っていないんですよ」

「あんなに桃色空間を作っていたのに？」

「はい。だから、お節介なんですよ。あいつらにくっついて欲しいっていう」

（箒ちゃん、かなりツンデレだからな）

「なる程ね」

麗我の心中を知ってか知らずか、店長は頷いた。

「だからですよ」

「なる程ね」

そして、このまま二人は話し続けた。

side 箒

「すまないな。その……買い物に突き合わせて」

「ん、気にするなよ。俺とお前の仲だろ？」

な、仲って……

にしても、気にしていない、と言っていたが、本当はどうなのだろうか。

私はといえば、一夏のことなど考えずに振り回していたわけだし……
そ、それに、あの昼食だ！……まあ、私は嬉しかったのだが。

しかし、一夏はどうなのだろう……

「なあ、一夏……」

聞かねばなるまい。

もし、答えを聞いた後に泣き出してしまったとしても。

「お前は今日、私なんかといて、楽しかったか……？」
沈黙が走る。

やっぱり、私なんかといても楽しいわけ

「あんな、箒」

ギュッと一夏に……って私、今抱きしめられているのか？

「い、い、いちか……？」

「箒。お願いだから自分のことを《なんか》なんていうな。お前は十分魅力的だし――」

わ、私のことを魅力的だと！？夢でも見てるのか私は！？

「――それに、今日は俺の知らなかった箒がみれて、

とても、楽しかった」

「い、い、いちかあつ！」

一夏に手を回し、力を強める。

「あれ？箒、お前――」

わかってる。自分が泣いていることなど。

でも、後ほんの少し。

出来れば、このままにしてくれ。

そうすれば、また元に戻るから。

side 箒 end

結局、彼らは5分間はそのままだった。

「ありがとう、一夏。もう大丈夫だ。だから、その。腕を……」
「ごによごによと話す筈。」

（つて、気がついたら抱きしめちゃってた！）

ここまでして無自覚というのだから、流石無自覚女殺しというべきだろう。

「す、すまん。今腕を離す」

「べ、別に私はこのままでも……い、いや何でもない！」
そして、離される腕。

それを、筈は名残惜しそうに見つめていた。

「さ、帰ろうぜ」

「う、うむ。そうだな」

そして、彼らは歩き出した。

どちらからともなく、手を繋いで。

「ところで、一夏」

「どうした、筈？」

「麗我の奴……どうする？」

「んなもん、決まってるだろ」

「ははっ、そうだよな、一夏」

「「一発キツいのお見舞いする」」

その日の夜。

麗我の部屋で、半殺しになっていた麗我が一夏と箒に土下座していたとか。

閑話 1 買い物と尾行と乙女の心（後書き）

駄目だ……文才が欲しい……

次は料理ネタをします。もし良ければ見て下さい。

後、レーヴァテインの効果募集に応募して下さい皆様。本当にありがとうございます。

作者は感謝感激淹のようです。

もし良ければ感想とハルペー・グラムの効果の方もよろしく願いますm（――）m

というか、良ければ考えたオリジナル宝具も送ってきて下さい。

長いあとがきでしたが読んで頂いてありがとうございました。

閑話 2 恋する乙女と料理教室（前書き）

何とか今回も投稿できました……

テスト？ ナニソレ、オイシイノ？

閑話 2 恋する乙女と料理教室

ある日、箒は思った。

（一夏と付き合った時、はたして今の料理の腕で満足して貰えるのか）
と。

同じ日、セシリアは思った。

（わたくしの料理を麗我さんは満足してくれるのでしょうか）
と。

それを、青い髪を持つ猫のような雰囲気を持った女子生徒は見て、
こう思った。

（これは面白い事になりそうね）
と。

「ねえ、お二人さん。ちょっといいかしら？」

そして、その女子生徒 - 更識楯無は、二人に声をかけた。

「む、なんだ？」

「なんですの？あなた」

「ああ、そういえば自己紹介がまだだったわね。私は更識楯無。あ
なた達生徒の長よ」

「で、その生徒の長がわたくしに何の用ですの？」

「む、そうだ。その通りだ」

「じゃあ、単刀直入に言うわね。実は私、あなた達の悩みを知っちやってるんだ」

「「悩み？」」

「そう。えーっと……」

料理が満足して貰えるか、だったかしら」

「「！」」

途端に赤面する筈とセシリア。

「そ、それをどこで知った！返答次第によつては……」

「そ、そうですね！それを、どこで知りましたの！」

「歩いてたらちよつと、ね。あなた達口が軽いのよ。普通に廊下で言っっちゃってたわよ？」

「「！」」

何も言えず、ただ口をぱくぱくと動かすしかない二人。

「そんな二人に、ちよつと手助けを、ね」

「手助け？どういうことだ」

「続きは生徒会室に来てくれたら話すわ。どう？来る？」

「一も二も無く、二人は頷いた。」

「「で、さっきの話はどういうことだ（ですの）」」

「言葉通りだよ？二人は料理の腕が大丈夫か不安、そこで私が教えてあげたりするわけ」

「あなたの腕が信用できないのだが」

「あら、それは心外。でも、あなた達も料理の感想とか聞いて欲しいでしょ？」

と楯無が言つと、途端に話せなくなる筈とセシリア。

「……まさか、好きな人以外には食べて欲しくない、とか考えてる？」

ボンツ、と二人の顔がトマトに勝るとも劣らないくらい赤くなる。

「どうやら図星のようね」

「……………」

「ま、いいわ。とりあえず来たい人は今週の日曜日学園の家庭科室に来てね。時間は……えっと、いつにしようか」

「11時」

今まで赤くなつていて何も言えなかった筈が急に口を開いた。

「11時では……駄目だろうか」

「ふうん……どうして？」

と楯無に聞かれ、筈の頬が更に赤くなる。

（うつ……一夏に食べて欲しい、なんて言えないしな……）

「ま、いいわ。来たい人は11時集合。筈ちゃんは来るのよね？」

「あ、当たり前だ！つて、どうして私の名前を……？」

「そこらへんは今どうでもいいでしょ？で、セシリアちゃんは？」

「では……私も行かせて頂きますわ」

「じゃ、約束忘れないようにね」

「わかつている」

「勿論ですわ」

そして、二人は生徒会室を出て行き、後には軍師が敵を罠にかけたような笑みを浮かべた楯無だけが残された。

そして、約束の日。

「じゃ、今から私主催で簡単な料理教室をはじめるわよ！」

「よ、よろしく願います」

「よろしく願いさせて頂きますわ」

と、料理教室が始まっていた。

「えーっと、セシリアちゃん、一つ質問んだけど……」

と、楯無はセシリアの荷物の中の一つを指差して言った。

「その色々な種類のビンは何？何か、とても危険な物が入ってそう
な気がするんだけど」

「特別に仕入れた調味料が入っているのですわ
と言うセシリア。」

そのビンの一つに『 CH_2ClCOOH 』と書かれていたのは気の
せいだと思いたい。

「じゃあ、とりあえず今日作って貰うのは……肉じゃがよ」

「肉じゃが？何ですの、それは」

「あそこに二人分の試食が置いてあるわ。後、食べ終わったら簡単な
作り方を教えるから」

日本の食事に疎いセシリアのことと考えられているようだ。

「で、では、いただきます……」

「で、では遠慮なく」

「しっかりと味わって食べてね」

少女食事中

(しばらくお待ち下さい)

「で、どうだった？」

「……………おいしかったです（わ）」

「あら、そう？それは良かった。じゃ、肉じゃがの簡単な作り方を教えるわね」

そして、開始される楯無の料理教室。

それを、二人は一字一句聞き漏らすまい、と熱心に聞いていた。

「じゃあ、実践タイムね。肉じゃがを作ってもらっわ」

「「わかりました（わ）」！」

そして、始まる二人の料理。

「あら、箒ちゃん、料理上手いのね」

「え、ええ、まあ……」

（一夏に喜んで貰えるように頑張ったからな）

「一夏くんに喜んで貰えるように、なんて思ってる？」

「な、な、何を……」

「あら、もしかして凶星？」

ボンツ、と箒の顔が沸騰する。

「ま、あなたに教える事はない、って言っていないかもしれないわね」

「ご謙遜を。あなた程の料理の腕の持ち主は初めて見ました」

「あら、そう？」

と、箒と楯無が笑いながら話していた、

その時、事件（？）は始まった。

「あの、会長」

「どうしたの？セシリアちゃん」

「接着剤は……ありますか？」

「接着剤？」

二人の声が重なる。

まさか接着剤を料理に入れようとする人物はいないだろう。

しかし、セシリアの返した答えは彼女達二人の予想を斜め45度向いていた。

「い、いえ、実は……鍋が……」

「鍋が？」

そして、セシリアの見せた鍋は。

底が、なかった。

「……………え？」

「お前、何をしたのだ」

「い、いえ、実は……持ってきた材料を入れたらこうなっちゃいました……どうすればいいでしょう？」

そして、箒と楯無はセシリアが入れた調味料を確認すると、

『食塩』

『砂糖』

『しょうゆ』

『硫酸』

『硝酸カリウム』

『クロロ酢酸』

「って、後半の材料おかしいだろ」

「にしても、これはちよつと、ね……」

二人して息を吐く。

「え？ど、どこおかしいんですの？」

気づいていないのはセシリアだけだった。

丁度その頃。

「にしても、たっちゃん先輩から呼ばれてはみたけど……家庭科室か」

「で、なんで俺も連れてくんだ」

「しょうがないだろ！たっちゃん先輩からお前も連れて来いって指示がきたんだから」

と、哀れな二匹のモルモットが家庭科室へ向かって歩いていった。

「二人とも完成した？」

「ええ、問題ありません（わ）」「」

と、二人ともどこか自信のありそうな表情で答える。

「へえ……あ、そろそろ時間ね」

「時間？」「」

と、二人がそれを楯無に聞こうとした瞬間
ガラガラガラッ

「たっちゃん先輩、呼ばれたから来たんですけど……って、何を
しているんだお前ら」

「……箒？なんでエプロンなんかつけてるんだ？」

と、朴念仁二人組がドアを開けて姿を表した。

side 箒

まで。

これは一体どうなっているのだ。

「あの、楯無先輩」

「ん、どうしたの箒ちゃん？」

「これは一体どうなっているんですか」

何で一夏がここを知ってるのだ！

「え、だって私が呼んだから」

「やっぱりですか……」

うん。

諦めよう。

「やっぱり、本人に感想言っただけでしょ？あなた、そういうこ
と奥出そうだし」

「そ、そんなことは……あつたりしますけど」

「だから呼んでみた、ってわけ」

「私達の承諾は」

「ない」

だろうな。

この人はそういう常識に捕らわれないような人だ。

「じゃ、試食タイムといきましょうか。一夏くんは箒ちゃんのを。

麗我くんは……その……」

「まって下さい。どうして俺の方を憐れみの目線で見えるんですか」

「セシリアちゃんのを食べてね」

ごまかしたな。

そして、私の作った肉じゃがに口をつける一夏。

「……………（食事中）」

「い、一夏？その……味は……どう、だ？」

もし、おいしくない、なんて言われてしまったら。

私は意識を保てるだろうか。

「……………箒」

「な、なんだ？」

そして一夏は、私に皿を向け……って、え？

「凄くおいしかった。おかわりあるか？」

と、いつもの笑顔でいつてくれた。

「おかわりは、ない。その代わり」

駄目だ、凄く恥ずかしい。

「お前に食事を毎日つくってやるっ」

言ってしまった……

「……………本当か？」

「ああ、本当だ」

「そっか。じゃあ、

よろしく頼むわ」

ポタッ。

一滴の雫が、私の瞳から流れた。

「ああ、まかせておけ……とっておきを作ってやる」

「お二人さん、お二人さん」

なんだ！今大事な所なのに

「あっち、見たほうが面白いわよ？」

そうして、見た先では。

麗我が目を真つ白にして仰向けに倒れている所だった。

「……駄目ね。息をしてない。心臓は……厳しいわね」

麗我よ……一体何を食べたんだ……

「麗我の奴に一体なにが起きたんだ？」

「じいちゃん……死んだはずのじいちゃんが見えるよ……」

これはかなりマズいのではないか。

「お、おい……麗我……？」

「え？この川を渡ってこい？うん、わかったよじいちゃん……はっ！？」

気がついた！

「麗我さん！大丈夫でしょ！？」

「……気がついたらお花畑で川があつてその向こうで死んだじいちゃんの手を振ってた」

「それって……死にかけてた？」

「臨死体験ね」

どんな破壊力だ、どんな。

「一口でこれなのだから全部食べたらどうなるのだろうな……」

「ほぼ確実に死ねるな」

麗我よ……何でお前は生きていられるのだ……？

「……とりあえず、しばらくセシリアちゃんは料理禁止ね」

「そ、そんな！どうしてですよ！」

先輩の判断に異の意志を示す者は誰もいなかった。

side end

閑話 2 恋する乙女と料理教室（後書き）

次回は本編の一夏 vs 鈴音あたりから始めます！

オリ寶貝、感想などありましたらどしどしお願いします！！

第11話 クラス対抗戦（リーグマッチ）（前書き）

半分くらいタイトル詐欺です。

次こそっ！まともなバトルシーンに入りますので！

第11話 クラス対抗戦（リーグマッチ）

「……で、今日はクラス対抗戦で鈴ちゃんとお前が戦うわけなんだけどな、一夏」

「ああ。わかってる」

「――謝ったのか？」

「いや、謝れてない……」

ふう、と息を吐く麗我。

この戦いの前に一夏が鈴音を『貧乳』と呼んでしまい、さらに二人の関係が悪くなったのだ。

正直な所、因果応報としか言えないのは気のせいだろうか。

「いいか、一夏。とりあえず、思いつきり戦え。謝るのはそれからいい。これは、個人的な私闘ではなく、クラスでの闘いなんだからさ」

そついう麗我の瞳は、まるで一夏を諭すような目だった。

その目をみた後、一夏は更に力強く頷いた。

試合当日、第2アリーナ第1試合。それが、一夏と鈴音の闘いの場所だった。

噂の新生同士の闘いともあって、アリーナは全席満員。それどころか、立ち見をしている生徒までいるほどだ。

（……つと、よそ見をしている場合じゃなかった）

そう思い、一夏は前方を強く睨む。

『目の前に、倒すべき敵がいるのなら、決して容赦するな。慢心もするな。一撃で息の根を止めろ』

麗我の物騒な言葉を思い出し、不謹慎にも一夏は笑いそうになる。

（まあ、そんな余裕はないのだけれど）

その前方では、鈴音とそのIS、『甲龍』が試合開始の時を静かに待っていた。

『それでは両者、規定の位置まで移動して下さい』

アナウンスに促され、二人は規定場所まで移動する。その距離は5メートル。白式でも十分先制攻撃を狙える位置だ。

「一夏。今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを上げてあげるわよ」

「雀の涙くらいだろ。いらないよ、そんなもん」

と、二人は開放回線オープン・チャンネルで話す。

「一応言っておくけど、ISの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

それは事実だった。恐らくは代表候補生クラスの者はそれくらいの事はやってのけるのだろう。

- - だが。

（多分実戦の経験値なら俺の方が上だ）

それでもなお、一夏が『勝てる』と思っているのは、毎日行った麗我との実戦形式の訓練に他ならなかった。1日1戦、別の武器で戦闘を行う。ある時は剣、ある時は槍、ある時は斧、ある時は刀。それを麗我の『憑依経験』を用いて戦うのだ。

つまり、歴史的な英雄と模擬戦をするのとなんら変わらない戦いを

するのだ。

経験が積まれるのもそりゃそうかというものである。

（いくら代表候補生とはいえ、俺ほどボコボコにやられた奴はそうはいないはずだ）

一夏は毎日、色々な武器でひたすら負け続けたことを思い出して苦笑する。

（とはいえ相手は格上。それを倒す為には）

『それでは両者、試合を開始して下さい』

（まずは相手の裏をかく事っ！）

「……え!？」

一夏はいきなり瞬時加速し、鈴音の後ろに入り、零落白夜を発動。

「く……っ」とつさに鈴音が両腕の青竜刀で防ごうとするが、

「はあっ!」

とつさのガードなど白式の瞬時加速に間に合うわけもなく、零落白夜状態の《雪片二型》の一撃が甲龍に叩き込まれた。

「凄いですね、一夏くん！いきなりシールドエネルギーを大幅に減らしましたよ!」

「あれは単に向こうが油断しただけです。本番はこれからですよ、山田先生」

「にしても、あれが本当にISを持って1ヶ月たつかどうかの人の操縦とは思えませんわね……」

（一夏……）

4人の思いとは関係なく、試合は続く。

「やってくれるじゃない……けど！」

ばかっ　と鈴音の肩アーマーがスライドした瞬間、一夏胸に一つの思いが湧き上がった。

（あれはマズい）

それは、戦闘中の未来予測にも直感に等しい直感であつた。
だが。

その中心の球体が光った瞬間、一夏は何も対抗出来ずに『殴り』飛ばされた。

「な……につ……？」

「今のはジャブだからね」

そしてそのまま一夏は瞬時加速を使用することも出来ずに地表に打ちつけられた。

「なんだあれは……？」

「『衝撃砲』ですね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じるそれ自体を砲弾化して撃ち出す……」

箒は、セシリアの親切な説明も全く聞いていなかった。ただただ、

一夏の事だけを見ていた。

一夏が傷つけられるたび、箒の胸はずきりと痛んだ。出来れば、一

夏に戦ってほしくないと願っていた。

- - だけど。

(一夏……頑張れっ……)

箒は今自分の無力さに歯を食いしばることしか出来なかった。

(このままじゃ拉致があかない)

今までの戦闘を経て、一夏が思ったのはこれだけだった。

「よくかわすじゃない。衝撃砲《龍砲》は砲身も砲弾も見えないのが特徴なのに」

そして、鈴音のこの言葉がこの原因だった。

しかもこの衝撃砲は、砲身斜角がほぼ制限なしで撃てるようになっており、一夏は全く近寄れずにじわじわとなぶり殺しにされているのが現状だった。

(ハイパーセンサーに空間の歪みを測定させているけど意味はない。撃たれた後にわかっていているような物だ。なら、方法は2つしかない) 一つは、相手の撃ってくる場所を陽動する。

もう一つは - -

(今の俺にはそんな器用なことなんか出来ない。そうすると - - 相手が撃ってくる前に倒せばいい)

撃たれる前に倒す。

そして、それができる攻撃力も白式は保持している。

(タイミングは……次、だ)

「ほらほら、どうしたの一夏！」

鈴音の衝撃砲を撃ち終わった瞬間、

「いくぞ！」

一夏は瞬時加速。一瞬とはいえ見えなくなることによって鈴音にも隙が出来る。

「くっ……でもっ！」

それでも代表候補生。隙を見せたのは一瞬で一夏を狙い衝撃砲を放つ。

――しかし、それでも白式を落とすには決定的に威力が足りない。

（これで……終わりだっ！）

零落白夜の光を纏いし《雪片二型》が甲龍に吸い込まれ、直撃し

――瞬間。

ズドオオオオン……！！

刃が当たる直前、突然大きな2つの衝撃がアリーナ全体に伝わった。鈴音の衝撃砲とは範囲も威力も桁違いだ。

しかも、ステージ中央からはもくもくと煙があがっている。どうやら、さっきのさ『それら』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波のようだ。

「な、なんだ？何が起こって……」

「ねえその人。一つ質問なんだけど」

煙の向こうから、声が上がった。

「ここに、『レイガ・ヒョウセツ』ってガキはいるかい？」

それは、明らかに異質なISを纏った女だった。

「おおっと、気をつけな。私はあんたらに敵意はないが――」――所属不明のISと断定。警告。ロックされています。

「こちらはどうかわからないからね！」

女の声が響きわたった瞬間、熱線が走った。

「危ねえっ！」

間一髪、一夏は鈴音の体を抱きかかえてさらい、瞬時加速。間一髪直撃は免れることに成功。

「じゃあ私はここで高見の見物といきますかねえ」

一夏は、女の話など聞いておらず、ただただ『フルスキン全身装甲』のISだけを、《雪片二型》を構え、

「鈴、いくぞ」

「わかったわ。あちらさんは来ないみたいだし。あたしが衝撃砲で援護するから突っ込みなさいよ。武器、それしかないでしょ？」

「その通りだ。じゃ、」

瞬時加速。

「いくぞ！」

言うが早いか、一夏は『全身装甲』のISに斬りかかった。

「もしもし！？

織斑くん聞いてます！？鳳さんも！聞いてますー！？」

端から見るとただの危ない人にしか見えなくらい真耶は焦っていた。

……ちなみに、ISのプライベート・チャネルは声に出す必要は全くない。

「本人達がやると言っているのだから、やらせてもいいだろう。」

……しかし、なんだあのISは。麗我、知っているか？」

「俺は知りません。……けど、このISは知っている。そんな気がします」

「……って、いつの間に来たんですか氷雪くん！」

「今さつきです」

「しゃあしゃあと言う麗我。」

「先生！わたくしにIS使用許可を！すぐに出撃出来ます！」

「そうしたい所だが……これを見る」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示される情報を切りかえる。その数値はこの第2アリーナのステータスチェックだった。

「遮断シールドがレベル4に設定……？しかも、扉が全部ロックされて――あのISのしわざですよ！？」

「どちらかの、だがな。これでは避難することも救援に行くことも出来ないな」

「で、でしたら！緊急事態として政府に助成を――」

「やっている。現在も3年の精鋭がシステムクラックを実行中だ。遮断シールドを解除出来れば、すぐに部隊を突入させる」

まるで合わせ鏡のようなセシリアと千冬。

「あの、織斑教諭。一つ、頼みがあるんですが」

そこに、割って入ったのは麗我だった。

「なんだ氷雪」

「俺がこの遮断シールドを《破戒》します。その代わり俺が倒れるまで救援は出さないで貰えますか？」

「な、何を言っておられるんですか、麗我さん」

「ふむ……何故だ」

「あれは、多分《亡国企業》の一員です」

「――」

周りの中でただ1人、千冬の表情が変わる。

「……わかった。だが、後で事情は話してもらっぞ」

「わかってます、織斑教諭」

「ちよつと、麗我さん！」

回りの声を振り切り、麗我は第2アリーナへと向かった。

第11話 クラス対抗戦（リーグマッチ）（後書き）

なかなか一巻が終わらない、という現実には涙が出そうな駄作者です。

早くシャルとラウラを書きたいなあ（遠い目）

第12話 脇役の戦い（前書き）

バトルシーンが楽しいです。

最初のはかなりのご都合主義と受け取って下さいm
――
m

第12話 脇役の戦い

第2アリーナの前。

麗我はISを装着し、ある歪な短剣を持っていた。

「さあ、いくぞ……《破戒すべき全ての符》ルールブレイカー!!!」

瞬間、防壁が何も無かったかのように消え去った。

破戒すべき全ての符。

ギリシャ神話の魔女メディアの象徴ともされる、裏切りの短剣。

その効果の一つに、『あらゆる事象が始まりの状態に戻す』というものがある。

今、麗我はこれを使い、防壁を発動させる前の状態、つまり『無かったこと』にした。

『織斑教諭』

アリーナの中に入った後、麗我はプライベートチャンネルで千冬に話しかける。

『どうした』

『今、防壁を破戒しました。後つけで悪いのですが元の防壁を張つてもらえますか?』

『ふむ……高いぞ?』

『わかってます。無理は承知の上です』

『わかった。今すぐにやらせる』

そして展開される新たな防壁。

（これで観客の安全は守られた。……でもアレ使った方が良かったかも）

そして麗我はアリーナへと向かった。

己が《敵》を打ち倒す為に。

「来たね。レイガ・ヒョウセツ」

「遅れてすまない、《亡国企業》」

「まあいいさ。いい見せ物も隣でやってるしな」

そう言われ麗我が横を見ると、

「うおおおっ！」

「くらっときなさい！」

『……………』

一夏と鈴音が全身装甲のISと戦っている所だった。

「では、早めに終わらせて頂こうか。隣の救援に入らなければなら
ないのでね」

「ほざくなよ、ガキが！」

1秒。

赤い外套を背負いしISと、《亡国企業》の尖兵が、真っ向からぶ
つかりあった。

「ガキが！とつとくたばんな！」

手に持つ釘のような形をした剣で突撃。

それを麗我は、

「ふっ。やれるものならやってみるがいい」

両手の干将莫耶で迎撃。

先手を取ったのは《亡国企業》だった。

「はっ！」

突き、なぎ、斬り。様々な種類の攻撃を使い、バランスよく斬りか
かる。

しかし、

「甘いのだよ」

全てさばかれる。

突きは剣の腹で当て、なぎは柳のようにかわされ、斬りかかった時は剣に当てられる。

そして生じる一瞬の隙。

そして――

「甘いと言っている」

それを見逃すほど麗我は甘くはない。

横なぎに放った干将の一撃が直撃。《亡国企業》のISSのシールドエネルギーを僅かに減らす。

「チイツ！やるじゃねえか！」

距離をとり、新たな攻撃を仕掛けようとする《亡国企業》。だが。

「予想通りだ。単純だな」

彼女が目にするのは弓を構える麗我の姿。

「な、につ……！？」

そして発射される数多の流星。

その数は……百をゆうに超えている。

「チイツ！きりがねえ！」

彼女は手に持つ釘剣で捌く。

しかし――捌くきれない。

当然だ。

飛来するのは全てが名剣、魔剣と呼ばれる物。

それを、たかが一本の剣で捌ききれるものか。

「くそお……っ！こんなガキにいつ！」

キンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキンキン

捌く。

ひたすら捌く。

[illegible]

「ふっ、どうした。この程度かね？」

ここに至り戦局は――麗我の圧倒的有利に転がり込んだ。

一撃必殺の間合い。だが、一夏の斬撃はかすることすらしない。もうこれで4度目のチャンスだった。

「狙ってるっつーの！」

普通ならかわせるはずのない速度と角度での攻撃。普通の敵なら既に戦闘不能に陥っているはずだ。

「なんて素早さなのよ……っ、コイツ!」

その装甲の厚さとは裏腹に全身に付いたスラスターの出力が尋常ではなく、零距离から離脱するのに1秒とかからない。

しかも、どれほど鈴音が注意を引こうが白式の攻撃には反応して離

脱する。

まるで、理屈ではなく脅威度で攻撃を見ているかのように。

「鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「180つとところね」

やはり、厳しい事になっている。

「にしてもアレ、反則もいいとこね、麗我のやつ」

「……ん？」

一夏が麗我の方を向くと、

「どうした。まだまだ序の口だぞ？」

「くそお……舐めるなあっ！」

麗我が有り得ない速度で敵ISに矢を打ち込んでいる所だった。

「…確かに反則だな」

「打ち込んでいる物が見えないもんね……にしても、あの麗我と戦っているIS、なんで姿が見えないようにしているのかしら？」

「さあな……」

《亡国企業》のISは、黒い霧みたいな物を纏っており、その正確な姿が見えない。

「……にしても鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」

「何かって何よ？コマとか言うんじゃないでしょうね？」

「それは見たまんまだろうが。あー、なんていうかな、昔自動車メーカーが作った人形ロボットいたろ？」

「いたっけ？」

勿論、ア　モノ事である。

「いや、なんつうか……あれって本当に人が乗っているのか？なんか、動きがロボットじみてるような気がするんだけど」

「は？人が乗らなきゃISは動かな……」

そこまでいった瞬間、鈴音の言葉が止まる。

「……そういえばアレ、さっきからあたしたちが会話してるときっ

頭を狙う剣が来る。

はじく。

心臓を狙う剣が来る。

はじく。

腕や足を狙う剣が来る。

――そこまで手が回らず、直撃してシールドエネルギーを削られる。
この繰り返し。

周りにははじいた剣が山のように積もっている。

（マズい、マズいマズいマズい！何か手を打たないと――）

「――《壊れた幻想》」
ブロックン・ファンタズム

麗我がその呪文を口にした瞬間、

彼女の周りの剣が全て爆発した。

（な……馬鹿なっ！剣を遠隔操作して爆発させるだっ！？）

この爆発によってさらにシールドエネルギーが減少する。

同時に。

ゾクリ

「――――！？」

得体の知れない悪寒が、彼女の全身を襲った。

（い、一体、これは――）

「《グングニル大神宣言》」

――瞬間。

彼女が見た物は、爆発で生じた煙を突き破り、飛来する一本の槍だった。

（この悪寒の正体が、たった一本の槍だと……！？）

疑わしく思いつつも、さつきと同じ要領で飛来する槍をはじく。

そして、既に麗我は彼女に何も攻撃せず、ただ見ているだけだった。
(全く、なめられたものだ)

そして彼女は、自分が得意とする近接戦闘を仕掛けようと動きはじめ

- ドスツ、と鈍い音がした。

(……え?)

彼女が確認すると、音源は、

彼女の背中だった。

「ば、馬鹿な……一度はじいたはずな……のに」

その背中には、先ほどはじいた槍が突き刺さっていた。

「ふむ、最後だ。1つだけ答えを教えてやろう。今さつき私が放った槍は《大神宣言》^{ゲンゲニル}という槍だ。その効果はまさしく因果逆転、当たるという結果を出してから貫くという過程を経る槍。かわすにはよほどの幸運がないと無理らしいが……どうやら、それも足りなかったようだな」

(ハッ、そんなものかわせるはずないじゃないか)

そして、彼女は最後に同僚の忠告を思い出して苦笑する。

(ハッ、何が赤い錬鉄はほうっておけ、だ……弱くてほうっておくのかと思っちゃまったじゃねえか……)

彼女は倒れた。

ほんの僅かに、シールドエネルギーを残して。

第12話 脇役の戦い（後書き）

次の次には絶対に一巻の内容を終わらせます！

……確実に一話閑話が入るのだけど……

もしシャルとラウラの出番を待っている人、こんな駄作者でごめんなさいm(_____)m

第13話 決着と（前書き）

決着という割には短いです……

筆者の文才がないからです。申し訳ありません。

第13話 決着と

『一夏あつ!』

突如、一夏の耳にキーンとハウリングのする声が響く。

その声は……簞の物だった。

『死ぬなあつ!絶対に、死なないでくれ……』

大声がまた一夏の耳に響く。

「……………」

敵ISは発信者である簞に興味を持ったらしく、一夏達からセンサーレンズをそらし、簞の方を見ている。

「鈴!やれ!」

「わ、わかったわよ!」

両腕を下げ、肩を押し出すような格好で衝撃砲を構える鈴。最大出力砲撃を行うため、補佐用の力場展開翼が後部に広がった。そして一夏は、その射線上に躍り出る。

「ち、ちよつと馬鹿!何してんのよ!?!どきなさいよ!」

「いいから撃て!」

「ああもうつ……!どうなっても知らないわよ!」

高エネルギー反応を背中に受け、一夏は『瞬時加速』を発動。

ドンッ!と一夏は背中に衝撃砲の巨大なエネルギーがぶつかるのを感じ、加速した。

(俺は、千冬姉を、鈴を、関わる人全てを、そして何より、簞を - 守る!)

必殺の一撃が、敵ISの右腕を切り飛ばした。

しかし、一夏は左の拳をモロにくらう。そして接触面から熱源反応

「『一夏っ!』」

「ふむ、これで十分か、一夏?」

その瞬間。

鈴音と箒の叫びと、麗我の疲れきった声が響き、そして――4本の捻れた剣が敵ISを貫ぬく。

遮断シールドは先ほどの零落白夜を纏った一撃で破壊され、シールドバリアーがない状態で4本の魔剣の狙撃が着弾。普通ならひとたまりもないだろう。

「さすが麗我。お前ならやってくれると思ったよ」

「全く、お前は人使いが荒いな。ま、とりあえず貸し、だな」

「ふう、なんにしてもこれで終わ――」

それが『普通』なら、だが。

――敵ISの再起動を確認！警告！ロックされています！

「――!?」

片方だけ残った右腕。それを、さらに最大出力形態にさせたISが2人を狙い――

――次の瞬間、迫り来るビーム。一夏は、ためらいなく光の中へと飛び込む。

「はっ。全くお前は……よく無茶をするな」

何故なら。

後ろに、彼の最も信頼できる親友がいるから。

そして。

その親友から一本の赤い魔槍が放たれる。その魔槍は全てのビームを食らいつくし。ビームの発射口に突き刺さり、破壊した。

そして一夏の『雪片二型』は、敵ISの装甲を切り裂いた。

そして暗転。

「鈴ちゃん、一夏を頼む」

「え？わ、わかったわよ！」

麗我は鈴音に一夏を渡し、再び夫婦剣を投影。

「さて『亡国企業』。先程はよく耐えきったと言いたところだが

……出来れば投降してほしい」

「なんだい？私に貸しても作るところってハラかい？」

「いや、出来れば君自ら投降してほしい」

「ふうん……どうしてだい？」

「己が意志で投降しないと、脱走や裏切りの危険性が出てくるだろう？」

出来るだけ殺したくはない。

麗我の理想にのつとつた交渉だった。

「仮に私が投降したら、どうなるかい？」

「拘束などは全くせず、上品の礼をして君を迎えよう。……勿論、

ISだけは一時的に預からせてもらうが」

「ふうん……だが断るね」

しかし、彼女の理念には真っ向から激突した。

彼女の理念はまさに『悪党』。

好きに暴れ、好きに生き、好きに楽しむ。

捕まったら死ぬまで。

とにかく『自由』を愛する彼女の理念は、軟禁ということを嫌った。

「そうか……残念だ。ならばここで、無力化させてもらおう」

そして、敵に二度もチャンスを与える程、麗我也甘くはなかった。

千将莫耶を手に、『亡国企業』のISに近づいていく。

「やはり、あんたは強い……だがここは、引かせてもらうよ」

「させるとおもうかね？」

「ああ。アンタのその甘さが命取りだよ」

そのISはいつの間にか黒い霧を解除しており、その本体が明らかになっていた。

何故か紫色の長い髪のような装甲を持ち、装備のような物を一切見せないそのISは――何故か両目を眼帯のような物で覆っていた。
「アンタは私に時間を与えすぎたんだよ」
そしてその眼帯を外した

瞬間。全てが凝固した。

「何っ!？」

「嘘!？甲龍が……動かない!？」

その目から送られてきたのは――異常なまでの悪性情報。
ハッキング

「じゃあね。楽しかったよ。赤い錬鉄」

そして目の前のISの前に、不可思議な陣――まさに魔法陣――が形成される。

「最後に私の名前を教えてやるよ。私の名前はスプリング。脳に刻み込んで記憶しな」

「くっ……」

「それじゃあね。《騎兵の（ベルレ）》」
そして。

そのISは1つの彗星と化して無事にアリーナを抜け、後には麗我と鈴音だけが残された。

「う……？」

全身の痛みに呼び起こされ、一夏は目を覚ました。

どうやらそこは保健室のようであり、カーテンで仕切られていた。

（ええと、確か。俺の攻撃は直撃して、それから……）

「気がついたか」

シャツとカーテンが引かれる。それで見えた者は千冬と――

「……なんで土下座しているんだ、麗我？」

「勝手にでしゃばった挙げ句に一夏を気絶させてしまい申し訳ありませんでした千冬様。だから……師匠だけは……どうか……」

「まだあるだろう」

「はい……敵を調子に乗って倒さなかったばかりでなく逃がしてしまふことになったのは私の責任であります。だから……師匠だけは……」

どうやら麗我は師匠に対するとてつもなく強いトラウマがあるようだ。

「あの……千冬姉……麗我は？」

「気にするな。ただ土下座させているだけだ」

「はあ……」

と言われ、一夏は土下座し千冬に頭を踏まれている麗我の事を無視することに決める。

ちなみに千冬はスカートである。

「体に致命的な外傷はないが、全身に激痛が走るだろう。数日は地獄だろうが、我慢しろ」

「はあ……」

一夏の頭はまだぼうつとしていたが、それでもまだ伝えるべきことが残っていた。

「千冬姉」

「ん、なんだ？」

「いや、その……心配かけて、ごめん」

一夏の言葉にきよとした後、千冬は小さな笑みを浮かべた。

「心配などしてないさ。お前はそう簡単には死なない。なにせ、私の弟だからな」

その笑みには、信頼、慈愛、心配などの全てが込められた笑みだった。

「では、私は後片付けがあるので先に戻る。お前も、少し休んだら部屋に戻っていいぞ」

「じゃ、ありがとうございます、織斑教諭」

「お前は手伝え」

「拒否権は？」

「ない」

「報酬は？」

「ない。体罰のかわりだ」

無情な一言を頂き、麗我は千冬に引っ張られていった。

……………この魂に憐れみを。

「あー、ゴホンゴホン！」

そして、千冬と捕虜一号の代わりに入ってきたのは箒だった。

「よう箒」

「う、うむ」

ポニーテールの乙女は、腕組みをしてふんと息を漏らす。

「あ、あのだなっ。今日の戦いだがつ」

「ん？そついえば自愛はどうなったんだ？やっぱり無効試合か？」

「あ、ああ。それは当然だ。あんなことが起きてはな」

そして箒は、目に涙を浮かべながら、

「お、お前は何を考えてるんだ！」

この言葉を口にした。

(side 幕)

「へっ？」

へっ、ではない！どうしてコイツは気がつかない！

「勝てたからいいようなものの……あのような事故、先生方に任せ
ておけばいいだろう！過剰な自信は身を滅ぼすということを知らん
のか！」

ポタリ、と。

私の目から一滴の雫が流れ落ちる。

「あ、勝ったのか俺」

「あんなものは勝ったとは言わん！」

止めようとしても、涙は止まるところを知らない。

「もしかして……心配してくれていたのか？」

「心配なんかするわけがないだろう……この唐変木の心配かけ症が」

「涙を流しながら言っても、通じねえよ……心配してくれてありが
とな、幕」

ああ、私は駄目だ。

この一言で、なんでも許してしまいそうな気になってしまっ

「ふ、ふん。許してなんぞやるものか」

「あれ？心配してないの否定が無かったぞ？」

し、しまった！このことをすっかり忘れていた！

「と、とにかくだ！これで訓練のありがたみもわかったことだろう。
これからも続けていくぞ。わかったな？」

「あー、わかったわかった」

「わかればいい。……では、私は先に戻る」
「つて、こうではない！」

「……。一夏」

「ん？」

「その、だな。戦っているお前は……か、かか、かつ
言え！ 勇気を出すのだ、私！」

「格好よかった……ぞ」

ああ、見るな、今の私の顔を見ないでくれ、一夏……

「……そっか。ありがとな、箒」

駄目だ！ もう耐えられない！

「で、ではな！」

そして私は、逃げるような早足で保健室をでるのであった。

(side 箒 end)

そのすぐ後に、一夏も倒れるのであった。

第13話 決着と（後書き）

没ネタ

「……そっか。ありがとな、箒」

駄目だ、もう理性が抑えきれない！

「い、一夏……」

「な、なんだ箒？」

そして私は一夏を押し倒し……

何だこりゃ。

次には一巻終わらせるよー。嘘じゃないよー。信じてよー。

第14話 寮部屋と報酬（前書き）

初めて以来最長です。

明日もテスト……orz

第14話 寮部屋と報酬

「……………」

一夏は唐突に人の気配を感じ、目を開けた。
すると――

「一夏……………」

「鈴？」

「っ！？」

何故か鼻先3センチの場所に鈴の顔が。

「……………何してんの、お前」

「おっ、お、おっ、起きてたの！？」

「お前の声で起きたんだよ。で、どうした？何をそんなに焦ってるんだ？」

「あ、焦ってなんかないわよ！勝手なこと言わないでよ、馬鹿！」
言い過ぎて自爆している。

それでも一夏が気がつかないのは、流石朴念仁と呼ぶべきだろう。

「あー、そういえば試合、無効だったな」

「まあ、そりゃそうでしょうね……………」

ちなみに、第2アリーナは襲撃者であるスプリングのせいで大破し、今は使えなくなっている。

この事も、無効試合となった原因の1つだ。

「あ」

「な、なに？」

「勝負の決着ってどうする？次の再試合って決まってるんだよね？」

「そのことなら、別にもういいわよ」

「え？なんで？」

「い、いいったらいいのよ！」

乙女心とはかくも複雑で繊細な代物である。

まあ、一夏はそんな事は気づいてはいないようだが。

「鈴」

「なによ」

「- - それでも。」

「その、なんだ……悪かったよ、色々と。すまん」

例え経緯がどうであれ、結果がどうであれ、払うべきけじめはきちんとつける。

それが、織斑一夏という男だった。

「ま、まあ……あたしもムキになってたし……。いいわよ、もう」
そしてその正直さに鈴音も折れ、謝り返す。

親しき仲にも礼儀あり。

この言葉は、言うのは容易いが実行するのは困難だ。

それを簡単に実行してしまうことに織斑一夏という男の人間性が出ているのであろう。

「あ、思い出した。あの約束」

「へ、ほ、本当？」

「ああ。確か、『料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』だっけ。で、どうよ？上達したか？」

「え、あ、う……」

予想だにしなかった質問を受け赤面する鈴音に対し、一夏は自分が何を言ったのか全く気づいていない。

……この朴念仁までもが、一夏の人間性だとは思いたくはない。

学園の地下50メートル。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

「ほら、とつとと自分で歩け」

「それは俺の襟を引っ張りながら引きずっている人間の台詞じゃないよ姉御！」

……いつもなら、だが。

「織斑先生？と……氷雪君？どうしてここに？」

「コイツの事は気にするな山田先生。熊の置物とでも思っていればいい」

「……俺は既に物扱いですか」

「黙れIS学園のブラ……便利屋」

「たいして変わってないんだけどね！誤魔化すのならもう少しまともな――」

『ちよつと、いいですか？』

瞬間。

真耶から発せられた怒りを伴う声に、麗我だけでなく千冬までもが冷や汗を流した。

おそらく、一般人なら気絶しているだろう。

今の声は、それほどの黒々しい暗黒オーラを纏っていた。

『今は少し大切な話の最中なので、後にしてもらえますか？』

見た目は綺麗な笑顔。

しかし、その目は笑ってではなく、後ろには――

「「申し訳ありませんでした！」」

「はい。じゃあ、続きを話しますね」

麗我曰わく、阿修羅が見えたとか何とか。

「あのISの解析結果が出ましたよ」

「どちらのだ？」

「『全身装甲』の方です」

「ああ。どうだった？」

「はい。あれは――無人機です」

世界中で開発が進むISの、そのまだ完成していない技術。リモート・コントロール・スタンド・アローン遠隔操作と独立稼動。そのどちらか、あるいは両方が使われていた。その
事実、すぐさまIS学園関係者全員に箱口令が敷かれるほどのものだった。

「どのような方法で動いていたかは」

ブルブルブルブルブル

「不明です。織斑くんの最大の――って織斑先生、携帯着信がかかってますよ？」

「ああ、すまない。少し待ってくれ」

ピッ

「はい、もしも」

「やつほー、ちーちゃん。元気ー？って聞かなくても元気だよねー。ごめんねー。でも用事があるのでかけちゃったぜ。イエー！」

『申し訳ありませんチフユ。タバネが覗き見の上にこんな事をしてしまつて……後でしつつかりと言いつけておきますので！』

「全く、私のISは頭堅いなあ。いつからこんなに頭が堅くなったんだい？」

『最初からです！……ああもうタバネ！そこに正座しなさい！』

「……切つていいか？」

「ああ駄目だよ、そんな事言っちゃ。ああ、でもそんなちーちゃんもイイ！」

『本当にすみませんチフユ。では、レイガに変わって頂けますか？』

「別にいいが……2つほど質問だ」

「あのー、氷雪君？」

「どうしました山田先生？」

「全く話の流れがわからないんですけど……」

「奇遇ですね。俺もです」

そばで聞いているだけの2人は全く話についてきていなかった。

そんな2人を置き去りにして、

「まず1つ……覗き見とは何のことだ」

「全く。堅いんだから、ちーちゃんは」

「黙れ。……まあ、ある程度答えは予測できるが」

「じゃあ話してみて。正解だったらちーちゃんには私からの愛をプレゼント！」

話は続く。

「ああ。お前のことだからここの監視カメラ……いや、管制システム乗っ取ったのだろう？」

「さっすがちーちゃん。その通り。この稀代の天才である私にとつてはこの程度の防壁を無効化することなんて赤子の手を捻るよりも簡単なことなのだ！アーッハッハッハッハッハッハッハッハッ！む、むせた！」

簡単そうに言っているがそんなに簡単なことではない。

ここはIS学園。

世界中のISの候補生が多く集まり、そのデータも大量に集められている。

それを守るため、そのセキュリティは常に世界最高クラスの物を採用している。

それをいとも簡単に破ったことから、千冬の電話の相手が異常かわかるだろう。

『私は騎士道に反するので反対したのですが……』

「いや、お前は悪くないよ、『キング・オブ・ナイト（騎士王）』」

『セイバー（・・・）でいいですよ、チフユ』

「で、だ。2つ目。……なんで私にかけてきた？お前、麗我の携帯番号知ってるだろう」

「えー？そんなの決まってるじゃーん」

『単に貴女と話したかったから、らしいですよ、チフユ』
単なる気まぐれであつた。

「麗我」

「え？何って姉御！携帯を投げるなよ！」

「五月蠅い。頼むからそいつの相手を変わってくれ」

今の千冬の姿はまさに精根尽き果てたという感じが、
よっぽど疲れたのだろう。

「はい、もしも」

「ひっさしぶりーれいくん！うんうん、これだけで私のテンションはマックスパワー！最高にハイって奴だ！ハッハッハ」

『お久しぶりです、レイガ』

「ああ、久しぶりだな、タバ姉、セイバー」

まるで旧友に会ったかのように、麗我は話す。

懐かしげな色を感じさせるほどに。

『アーチャーの声がしない……となると、まだ『セカンド・シフト二次移行』はして
いないようですね』

「へえ……そんなこともわかるのか」

「あ、あの、織斑先生？」

「なんだ。私は今疲れてるんだ」

「電話の相手って……誰ですか？」

「……篠ノ之束だ」

「はいはい、しのの……って、えーっ！」

「耳元で叫ぶな、五月蠅い」

真耶の驚きももつともだ。

ISを開発した稀代の天才にして、現在亡命中の篠ノ之束。

どうしてこんな有名人がこんな所に電話なんか、とも思っだろう。

そんな2人をよそに、

「で、要件はなんですか？」

「もう。冷たいなあれいくんは。いつからそんな極悪非情な人間になったんだい？私は悲しいよ。うるうるうる」

『いや、依頼を申し込もうかと』

「依頼？」

『はい』

話は続いていた。

「じゃあ少し真面目に話すと、今日IS学園に正体不明のISが2機現れたって話じゃん」

「ああ」「そのうち影で覆われている方のデータはまた後でちーちゃんのパソコンに送るとして」

「つて、見てたんですか俺らの戦い」

「うん」

（それが電子の世界の出来事である限り、この人に不可能の文字はないな）

その事を新たに心に刻んだ麗我だった。

「私としては、あの装甲の奴が気に入らないんだよね」

「なるほど……タバ姉らしいや」

「よくわかってるじゃない、れいくん」

「ああ、まあな。完璧で十全なんだろうタバ姉は。だから、作るものも完璧において十全でなければ意味がない（……………）

……………」

「大正解！さっすがれいくん！よくわかってるー」
2人して笑う。

それは、単なる笑いなのか。

あるいは――創造者に喧嘩を売った不屈き者への、『鎮魂歌^{レクイエム}』か。

「で、依頼は？」

「何々、単純にして明解。ちょっとその研究所をこの地球上から抹消してほしいだけだよ」

まるで、「コンビニでアイス買ってきて」とでも言うように言う束。

「ああ、わかった」

それを同じノリで受ける麗我も麗我だが。

『ありがとうございます、レイガ』

「気にすることはないよ、セイバー。……で、報酬の代わりとしてはなんだけど、1つ姉御に説得して欲しいものがあるんだ」

「なんだい？私を雇おうつてのかい？私は高いぜ？」

「いや、冗談じゃなく。実は……」

そうして、麗我がこのことを話し終わった直後。

「別にいいけど……これ私得だよ？いいの？」

「まあな。俺はあの2人にくつついて欲しいだけだから」

（そうした方が見てて楽しいし）

「ふむふむ。じゃあ交渉成立だね」

『ありがとうございます、レイガ』

「気にすることじゃないよ、セイバー」

「じゃあ、ちーちゃんに変わってくれる？」

「了解」

（少女（？）説得中）

十分後

「わ、わかった……条件を呑む……」

ボロボロの千冬とオロオロしている真耶と

（計画通り）

魔王の笑みを浮かべた麗我が残された。

(side 幕)

全く、何なのだあいつは！

全然、帰ってこないではないか！

それに、せっかく一夏の為に作った料理が冷めてしまう……

ガチャ

来た！

「遅い！何をしていたのだ、まったく……。私は空腹を我慢して待っていたのだぞ」

「待っていたって……え、なに？まだ晩飯くってないのか？」

「当たり前だ。なんでお前の為に作った料理を私が先に食べるのだ。」

「だから、待っていたと言っている」

「じゃあまあ、すぐ食堂に行こうぜ。時間ギリギリだしな」

「ま、待て！」

なんでお前の為に料理を作ったのに食堂なんかでご飯を食べねばならぬのだ！

「き、今日は、その、だな。ええと……」

でも、直接言うとなると恥ずかし……っ！

「ん？テールブルに何かあるな。……おお！チャーハンじゃないか！どうしたんだ、これ！」

やった！珍しく気づいた！

「わ、私がだな。その……お前のために……っ、作った」

「え？そうなのか？」

「前言っただろう！これから毎日、お前に食事を作つてやると！」

「え？あれ昼だけじゃなかったのか？」

「ここ、今回は特別だ。その……お前が頑張ったから、な？」

顔を真っ赤にしつつも上目使いで一夏を見る。すると一夏は、顔を

真っ赤にさせながら、

「と、とにかく食べようぜ」

逃げた。だがまあいい。ちょっとしか仕返した。

「手を洗うのが先だ。それに、うがいもだ」

これは大切だ。一回だけだからといって疎かにしてよいものではない。

そもそも手洗いとは――

「じゃあ、いただきます」

「う、うむ。遠慮なく食べるがいい」

もぐもぐもぐ……

「……………」

「どうだ、一夏？」

ふつ。今回の自信作なのだ。きっと誉めてくれるだろう。

「……味がしない」

「な、なにっ！？貸してみろ！」

一夏の手からレンゲを奪い取り、ぱくりと一口。そんなはずは――

「……味がしない」

「な？珍しいミスだな」

そんな！完璧だったはずなのに！

「あれ？箸、お前――」

――泣いてるのか？

え？

そんなはずは……

自分の頬をさすると、確かに涙の後がある。

「は、はははは……」

「ほ、箸……？」

「無様だよな、私は。せっかく自信をもって出した料理に調味料が入っていないなんて。こんな女と一緒に部屋なんて、嫌だろう？」

「そ、そんなこと……」

「あのー、篠ノ之さんと織斑くん、いますかー？」

「こんな時に山田先生とは。一体なんのようだろうか。」

「どうかしたんですか、先生」

「あ、はい。お引越しです」

「はい？」

「えっと、お引越しするのは篠ノ之さんです。部屋の調整がついたので、同居しなくてすみますよ」

「まあ、そんなとこだろう。それに、私がいても一夏の邪魔に」

「ふざけんなよ、箒……！」

「キヤツ！お、織斑くん？」

何故こんなに大きな声を出すのだろう。もう決まった事なのに。

「お前が、俺の邪魔になってるなんて、そんな悲しい事を言つなよ。邪魔になんかなくてないし、それに一人部屋になるくらいなら、お前と一緒にの方がいい」

「ほ、本当か……？」

「篠ノ之さんはどうなんですか？」

私？そんな物は昔から決まっている。

「私も……出来ればこのままのほうがいい……です」

まあ、期待は全くしてないが。

「うーむ、困りましたね……と言いたい所ですが、氷雪くん？」

「はい、山田先生」

……どうして、ここで麗我が出てくるのだろうか。

「お前らのお引越しはなかったことになったから。んじゃ」

……は？

「すまん麗我。一から話してくれ」

「はあ……わかったよ一夏。ようするに、俺はまあ色々な事がありながら、姉御に1つの契約を取り付けることに成功した」

……契約？

「麗我。なんだそれは」

「まあ落ち着きなつて箒ちゃん」

落ち着いてなどいられるか！

「ようするに、『二人が二人とも同じ部屋のママがいい』と言ったときのみこのままの部屋にするという契約だ」

「つまりそれって……」

「ああ。お前らは一緒の部屋だ。良かったな。新婚夫婦」
な、な、なっ……！？

「じゃ、俺は帰るから」

「私もそうします。それでは……」

2人が帰った後も私の心臓の鼓動は遅くならない。

新婚夫婦……それはつまり、そう見えるという事だよな？

「あ、あの、さ。とりあえず食べようぜ」

「あ、ああ。そうだな……」

そこから寝るまでの記憶が何1つとして残っていない。

気がついたら私は一夏のベッドと一緒に寝ていた。

こ、これは……あれを言うチャンスだ！

「い、一夏。ら、来月の学年別個人トーナメントだが……わ、私が優勝したら……」

「したら？」

ああ。頬が真っ赤になっている。

「っ、付き合ってもらっ！」

だ、駄目だ！ 恥ずかしすぎる！

「……はい？」

「で、ではな！ お休み！」

恥ずかしさに負け、寝たふりを試みる。しばらくすると隣からスヤスヤと健康的な寝息が聞こえてきた。

全く、コイツは……私があんなに頑張ったのに……

まあでも、今日は、

「ありがとう、一夏」

そして、私の唇と一夏の頬が、

触れた。

(side 篇 end)

時間は少しさかのぼる。

「本当に報酬あんなので良かったんですか？氷雪くん」

「ええ」

寮の麗我の部屋の前。麗我と真耶は今日の出来事について話していた。

「今の俺の望みは、あの2人がくつつくこと。それだけです」

「氷雪くんって優しいんですね」

「俺は女の子には優しいんです」

「フェミニストなんですね」

「そうとも言います」

フフフ、と笑い合う。

「では、これで」

「はい、お疲れ様でした」

そして真耶が去り、麗我は部屋の窓から星を見る。

(俺が優しいか……本当なのかな……自分の為に、数多の研究所を潰してきた俺が……)

月は何も言わず、ただ光るだけだった。

第14話 寮部屋と報酬（後書き）

というわけで、この2人には同じ部屋でいてもらいます！

まあ、『一夏と篤絶対主義』を掲げている小説なので、当たり前っちゃ当たり前かな……

そして、無事に1巻終わった……

次は、麗我vs楯無の予定です。

レーヴァテインの真名と効果どれにしよう（まだ決めてない

閑話3 学園最強対赤い錬鉄（前書き）

テスト終了しましたー！

これからも相変わらず駄文ですがよろしくお願いします。

閑話 3 学園最強対赤い錬鉄

クラス対抗戦の翌日の夜。

麗我は楯無に呼び出され、第3アリーナに来ていた。

「ようこそ。歓迎するわ、『赤い錬鉄』」

「その異名は嫌いだって言っただはすなんですけどね……」

「気分だろう、更識」

と、楯無の隣の千冬が言う。

「気分ですか……にしても姉御、どうしてここに？」

「気分だ……と言いたい所だな」

「なるほど。生徒会長の引き継ぎの確認ですか」

「よくわかったな」

知つての通り、IS学園の会長は最強でなければならない。

しかし、もしこんな夜に負けてしまったら、二番目に負けた者が生徒会長となってしまう。

そのための配慮という訳だ。

「まあ、固いことは無しにして、楽しましょ。楽しいわよ？」

「楽しいかどうかはわかりませんが、その意見は賛成です」

そして、2人ともISを装着。

「やれやれ、私が審判か……まあいい。試合を開始しろ」

「先手はあげるわ、麗我くん」

「そうですか……まあ、もうすぐ試合は終わる（……………）
……んですけどね」

瞬間、横から飛来した干将と莫耶が楯無を貫い――

「全く、危ないわね」

はずだった。

後ろからの槍での突き。一撃必殺の力が乗ったそれを、麗我はかろうじて投影した干将莫耶で受け流す。

その後急いで後ろに瞬時加速。

「流石赤い錬鉄。あの一撃で決めるつもりだったのに」

「それはこっちの台詞ですよ……なんですか、折角勝ったと思ったのに」

見ると、先ほど貫いたはずの楯無だった物は消え、薄く水蒸気が出ている。

「水……なるほど。ロシア製の第3世代型ISですか」

「よくご存知ね。その通り、このISはロシアの第3世代型の《霧纏の淑女》ミステリアス・レイディっていうの」

「淑女ですか……なんだか貴女にお似合いですね」

「おだてても何も出ないわよ？」

「本当のことを言っただけですが？」

「あらそう？嬉しいわ」

2人は共に笑い、

次の瞬間。2人は互いを目指して加速した。

（今瞬時加速してもまた幻影でかわされる可能性があるし、何より……この人の真の実力を見てみたい！）

先手を取ったのは楯無だった。

一瞬で飛来する3つの突き。その間は少しの隙があるが、隙といつても少数点2位レベルの物。常人は愚か、達人であつてもそれを見切るのは難しい。

それを麗我は、

「はっ！」

頭を狙った一撃を干将でいなし、心臓を狙った一撃を莫耶で弾き、もう一度狙った頭への一撃を干将の刀身で防ぐ。

「やるわね……これならどう？」

さらに速度を増した5つの突き。

その速度はまさに流星。タイムラグは殆どなく、一瞬で麗我に襲い来る。

「なかなか……キツいな、これは……！」

楯無が狙うのは頭に2つ、心臓に3つの突き。

麗我は1つ目の頭への攻撃を干将で弾き、2つ目の心臓への攻撃を干将で弾き、3つ目を干将、4つ目を莫耶で弾き、最後の5つ目、頭への攻撃を姿勢をずらしてよける。

「……嘘!？」

「さあ、攻守交代だな」

そして繰り出されるこの戦い二度目の麗我の攻撃。

右手の莫耶と干将を上手くマッチさせ、確実にシールドエネルギーを削っていく。

(……確かに凄いけど……隙が丸見えよ、麗我くん)

干将での突きをかわして、麗我に出来た隙を槍で突く。

- - 瞬間、楯無の背筋が、ゾワリとした。

(何?これ……)

しかし、行動を止められず、突き- -

まるでその隙など無かったかのようにかわされる。

(嘘!？確かに隙だった筈)

「確かに素晴らしい突きだったな」

そして楯無に出来る致命的な隙。

回避行動もとれず、干将による一撃をまともに食らう。

「く……っ!？」

「隙が多いぞ、会長」

麗我により繰り出される干将莫耶での剣戟。

幾つかは槍で弾くが、完全に弾く事は出来ず、かなりの攻撃を食らってしまう。

（これはマズい！）

干将の攻撃を避け、莫耶での突きを下に動いて避ける。
そして後ろへ移動。

先ほどの剣戟で、楯無のシールドエネルギーの4割近くが削り取られていた。

「やるわね……流石、赤い錬鉄といった所かしら」

「お褒めに預かり恐悦至極、といった所かな」

「にしても、凄い度胸ね……まさか、さっきの隙を自分で作っていたなんて」

「非才の身だ。勝つにはそれしか無かったんだよ」

「なら、どこまで続けられるか……」

楯無が速度を上げ、麗我に突撃。

対する麗我は、干将莫耶を構え、迎撃の姿勢に入った。

「試してみようかしら！」

そして、激突。

頭に二撃、心臓に一撃の突き。麗我は、

「はあっ！」

頭への一撃を莫耶でいなし、続く心臓への攻撃を干将で弾き、最後の一撃を莫耶で受け止める。

「さあ、次よ」

即座に放たれる突きの嵐。

一瞬でも判断を失敗すれば死んでしまう。

しかし、麗我はひたすらに防いでいた。

「まだまだ続くわよ」

「く……っ」

頭への攻撃を避け、心臓への二撃を莫耶で弾き、干将で受け止める。すると、干将が砕けた。

「チィッ」

即座に干将を投影し、頭への一撃をいなす。

（くそ、これじゃ……キリがねえ！）

「どうしたの？『赤い錬鉄』」

「その名前で俺を呼ぶなと言ったはずだが！？」

麗我は頭への一撃を避け、莫耶での攻撃を叩き込む。

「あら、それはごめんなさい」

それをひらりと避け、再度突く。

「ふむ……これではキリがないな」

麗我はその言葉と同時に、持っていた干将莫耶を投げつけた。

「えっ！？」

予想外の行動に戸惑う楯無だが、そこは学園最強、瞬間的な反応でそれを避ける。

「《壊れた幻想》
ブローケン・ファンタズム」

だが、麗我の方が一枚上手だった。

爆発をモロに食らい、楯無のシールドエネルギーがさらに減少する。

（麗我くんは……どこなの！？）

爆発による煙が晴れると、麗我は後方に引いていた。

「にしても、麗我くん。この部屋暑くない？」

「確かに暑いが……今関係はくないか？」

「まあ、人の話は最後まで聞くものよ。今この部屋は、湿度が高いでしょう？」

「……何が言いたい？」

「つまり……こういう事よ」

瞬間、麗我の周りの空間が……

「何っ！？《壊れた（ブローケン）》」

「遅いわ」
爆発した。

「……これで……倒せたかしら」

ISから伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが一斉に熱に転換し、対象物を爆破する能力『清き熱情』クリア・パッション。

この一撃で、確かに仕留めた――

「ふう。凄い技を持つんだな」
はずだった。

「……そういう麗我くんも、何故倒れてないのかしら？」

「ああ、簡単だ。俺の両手の干将莫耶を爆発させてあの爆発と相殺させただけだ」

そう言われ、楯無は戦慄する。

（いくらそうした方がダメージが少ないとわかっていてもあの一瞬で躊躇なく自分の武器を爆発させるなんて……あの冷静な判断力、流石赤い錬鉄といった所かしら）

いくらダメージは減衰されようと、爆発のダメージと自ら爆発させたダメージで予定ほどではないけれど、確実に麗我のシールドエネルギーは大幅に減っている。

「でも、まだまだあの技は使えるわよ？」

「わかってる。なら……使う前に倒せばいいだけだろう？」

「この距離で？」

今楯無と麗我の間には15メートル程の距離がある。例え近づいてきてもその前に倒せる自信が彼女にはあった。

「ああ」

そして、麗我は手に持った剣を構える。

（あんな剣、さっき持っていたかしら？）

楯無が思った通り、麗我の持つ剣は違っていた。

柄はまさに杖、というような風貌であり、刀身の半分は杖だ。

それに対し、剣の方は赤い、炎のように赤い刀身を持っていた。

「いくぞ。《約束された（レーヴァ）》」

（これはマズいわ！）

楯無は反射的に『清き熱情』クリア・パッションを発動させようとした。

だが。

「《終焉の焰》ティン」それよりも早く、圧倒的な劫火が楯無を襲った。

「ふう……終わったかな」

麗我はその剣を構えながら楯無の方を向いた。

「は……っ」

彼女のISは戦闘可能ではあったものの、コアが半壊状態で、彼女自信も決して浅いとはいえない火傷を負っていた。

「なによ……今の。反則じゃない」

「ま、確かに反則スレスレだな、これは」

と、麗我は《約束された終焉の焰》レーヴァティンを振りながら言う。

「この剣の能力を教えようか？」

「ええ、頼むわ」

「レーヴァティン。北欧神話の巨人スルトが持ったとされるこの剣の能力は、その業火で有視界の質量的存在を天文学的熱量で即時蒸発させる事だ」

「何よそれ……赤い錬鉄はそんな物まで持っていたの……！？」

「正確には贗作、だがな」

「そう……解説ありがとう。そして何故か私のシールドエネルギーはまだ少し残ってるんだけど？」

「ああ。少し手加減した」

「……どういう事？」

「なあに。本気をだすとこの剣は少々威力が高すぎてね……君もまだ死にたくはあるまい？」

「そう言われ、楯無の背筋がゾクリとした。」

もし、これが模擬戦ではなく実戦だったら。

もし、目の前の相手が本気だったら。

「確かに凄いわ……でもね」

楯無は麗我に向かって突撃し、

「まだ私は負けてないのよ？」

麗我を手の槍で突いた――

「《害なす焰の魔杖》レイヴァーティン」

はず、だった。

いつの間にか麗我は後ろにおり、楯無のISには焰がとりついていった。

そして――

「シールドエネルギーが減少している……どういうこと？」

「それがこの剣――いや、杖の方の真の力だ」

楯無は、自身のISに杖で殴りつけた跡があり、そこにまるで蛇のように焰がとりついていくことに気づく。

「この剣の杖で殴りつけた部分には焰がとりつき、シールドエネルギーを減少させていく」

「何よそれ……やっぱり反則じゃない」

「ま、そうとも言う」

「はあ……にしてもこれで生徒会長もお役御免か……」

長いようで短かったわね、と呟く。

「時期生徒会長になったら色々な面倒な仕事が色々あるわ。頑張っ
ってね」

「は？俺生徒会長になる気は全く無いんですけど」

「……は？」

いつの間にか麗我の口調が変わっていることにも気づかず、楯無はその言葉だけを絞り出した。

「いや、本当に俺は生徒会長になる気は無いんですけど」
そんなもの

（ここでなんとかしないとまた面倒くさいのに巻き込まれちゃう！）
麗我の直感がそう告げていた。

「え……でも、この試合に勝っちゃうと、自動的に生徒会長になっちゃうわよ？」

「なら、勝たなければいい（……………）、そうですね？」

「え、ええ」

（どうということ？何をするつもり！？）

「何、簡単な事ですよ」

そう言つて、麗我は全身装甲のISに使った槍を投影し……

「結構痛いけど……しょうがない。背に腹は変えられないし」

自身に向かって突き刺した。

「試合終了……勝者、更識楯無」

千冬の冷静な声が第3アリーナに轟いた。

そして……
ドサッ

自動的にI Sが解除され、麗我は下に落ちた。

……何故か、腹から血を流して。

「ちよつと、麗我くん！？しっかりしなさい！」

「ああ、大丈夫だよ、たっちゃん先輩。この程度、いつものこと（……）だから」

「いつものこと、って……」

「麗我、いるか？」

「ありがとう、姉御」

千冬から包帯をもらい、それで止血する。

「ねえ麗我くん。あなた、どうして最初にあの槍を出さなかったの？あれを出せば、一瞬で決着が」

「最初に言ったでしょう、たっちゃん先輩。俺は、生徒会長（そんな物）になる気はないと」

「確かに言ってたけど……なら何故戦ったの？最初にわざと食らえば――」

「学園最強の力を見たかったんですよ」

「……どうして？」

「いや、学園最強がどの位の強さかわかったという方が、後々有利かな、なんて」

「……まさか、最初からこうやって負ける気だった？」

「あれを使うとは夢にも思いませんでしたが、最後に自分の手でトドメを刺すつもりではいましたね」

そう言われ、楯無は絶句する。

今こうして自分が勝利していることが、麗我の計画通りだということに。

まるで、釈迦と孫悟空の戦いのようなだということに。

「麗我、お前らしいな」

「そう言ってくれるとうれしいよ、姉御」

「どうして……」

「ん？」

「どうして……私に勝とうとしなかったの？」

「だから、それは……」

「それ以外にも理由はあるはずよ、違う？」

「それは……」

「殺したくなかったから、だろ？麗我」

「ちょ、姉御？」

「いいから黙っておけ。……更識。麗我はあの剣を開放した。何故かわかるか？」

「さあ……何故？」

「あいつは、あいつはやれば勝てる、ということを証明したかったんだろう」

「……何故、そんなことを？」「さあな……おそらく仲間に手を出したら許さない、ってところだろう」

「……は？」

（そんなことは絶対にしない。私が生徒会長である限り）

「それ以上はわからん。聞きたければあいつに直接聞くことだ」

そう言い残し、千冬は出て行った。

「ねえ麗我くん。今の……本当？」

「残念ながら本当だ」

「どうしてそんなことを？私はそんなことを」

「さあな。俺にもわからん。でも、この学園内に俺の仲間を傷つける奴がいなくても限らない、そうだろう？」

「確かに……」

IS学園には色々な生徒がいる。

その中に、《赤い錬鉄》を恨んでいる生徒がいなくても限らない。

「その為に私と戦ったの？」

「まあ、半分はそうだな」

（……半分？）

「じゃあ、残りの半分は？」

「お前と一緒にいたかったから、かな？」

（えっ！？）

心なしか楯無の頬が紅潮する。

「いや、あの時以来、話せる機会なんて無かったし……」

「なんだ、それだけ」

楯無はガクリと肩を落とす。

（……ってあれ？どうして私、こんなにガツカリしてるんだろう）

「ああ、たっちゃん先輩、一つ、聞いていいか？」

「何？デートのお誘い？」

「いや、俺の中ではほぼ決定事項なんだけど……たっちゃん先輩。俺の仲間にならないか？」

「……へ？」

ドクン、と胸が高鳴る。

「……どうということ？」

それを極力抑えて楯無は返す。

「いや、こんなに強い人がいたら一夏達の訓練とかが楽になるし、それにこんな美人なお姉さんが近くにいたら嬉しいなって」

「× ！？」

（え、え、ええええっ？）

楯無は焦っていた。

それはもう、とんでもなく。

（わ、私が近くにいたら嬉しい！？）

ドクンドクンと心臓の鼓動は止まることを知らないかのように激しくなっている。

（ま、待て。落ち着きなさい、私）

「麗我くん、どうということ？」

「いや、たんに仲間になってくれたら嬉しいなって」

この言葉は朴念仁である麗我から見たら何の気もなしに言った言葉だろう。

だが。

（ああ、私。この人のことが）

一人の少女を墮とすのには十分だった。

「いいわ。仲間になってあげる。その代わり、一つお願いしたいことがあるんだけど」

「なんだ？」

「実は……」

後日。

生徒会副会長に氷雪麗我が就任したという紙が生徒会室前に張り出された。

閑話3 学園最強対赤い錬鉄（後書き）

次回から2巻の内容に入ります。

出来れば感想やご意見をお願いします。
皆様の言葉と作者の中のプロットと作者の勉強時間でこの小説はできています。

第15話 転入生と個人の事情（前書き）

遅ればせながら感謝を。

約束された終焉の焰

名前の方はRyuunaFreeziaさん、能力の方は二代目ブリュンヒルデ（早い話が不戦勝者）のアイデアを使わせていただきました！

害なす焰の魔杖

名前、能力共にRyuunaFreeziaさんのアイデアを使わせていただきました！

本当にありがとうございます！オリ宝具のアイデアは24時間募集中なので、よろしくお願いします。

……あと感想やご意見も！

第15話 転入生と個人の事情

月曜日の朝。クラス中の女子がわいわいと賑やかに談笑をしているなか、

「なあ、一夏」

「なんだよ」

「お前、箒ちゃんとどこまでいったんだよ」

「ぶっ!？」

「な、なな何を言っている麗我!」

と、麗我は一夏と箒を弄って遊んでいた。

……人を弄って遊ぶ、というのもどうかと思うが。

「そういえば、織斑君と氷雪君のISスーツってどこのなの?見たことない型だったけど」

「(助かった)あー、特注品だって。男のスーツがないから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、もとはイングリッド社のストリートアームモデルって聞いている」

「氷雪君は?」

「えーと、俺のはな。どこの社の物でもないんだ。このISを装着した時に勝手に着ている感じがな」

「ISスーツは……」

「で、一夏。助かったと思ってたみたいだがそうは問屋がおりさんぞ?」

麗我は真耶のありがたいお話を無視することに決める。

……一夏達を勝手に連れ込んで。

「げっ」

「麗我……頼むから引いてくれないか?」

「断る。幼なじみの恋愛成就が今の俺の望みだ!」

「そ、そういうお前こそ青い髪の上級生を部屋に入れてるじゃないか!」

「うつ」

まるで痛い所をつかれたかのように麗我の勢いが落ちる。

実は、会長戦の後、ほぼ毎日楯無が麗我の部屋をピッキングして不法侵入……入っている。

確か一夏達に気づかれてもおかしくはないだろう。

「あ、あれは向こうが勝手に……」

「聞き捨てならない話を聞かせて頂きましたわ」

麗我は、後ろを振り向けなかった。

何故なら。

「……少しお話を聞かせていただきましょうか、麗我さん」

後ろに阿修羅を従えた（ように見える）セシリアが仁王立ちをしていたからだ。

「ま、待て、セシリア。頼むから少しだけ待ってくれ。こいつから話を」

「諸君、おはよう」

「お、おはようございます！」

それまでざわざわとしていた教室が一瞬で規律をとった軍隊整列（勿論例え）に変わる。

（我らが一年一組の鬼教師、織斑千冬の登場だ）

「お前の考えていることなどお見通しだ、氷雪」

バシッ！

「大変申し訳ありませんでした」

「わかればいい」

……本日も出席簿アタックの調子は絶好調のようだ。

「今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用するの授業なので各人気を引き締めるように。各人のISスーツが届くまでは学校指定のものを使うので忘れないように。忘れた者は代わりに学研指定の水着で訓練を受けてもらう。それでもないものは、まあ下着で構わんだろう」

いや違うだろう！と男子二人と多くの女子が心の中で突っ込んだ。

「では山田先生、ホームルームを」

「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬は即座に真耶にバトンタッチする。

（なんか山田先生……子犬みたいだな）

「ええとですね、今日は転校生を紹介します！しかも2名です！」

「え……」

「は？」

「ええええっ！？」×3

（なんで分散させねえんだよ……この先生は能無しばかりか！？）

「だから、わかっていると云っている」

バシンッ！

「……麗しい織斑教諭を除いて」

「山田先生は？」

バシンッ！

「すみませんでした」

「わかればいい」

そんなコントを繰り返しているうちに、

「失礼します」

「……」

クラスに入ってきたふたりの転校生を見て、そのざわめきがぴたりと止まる。

何故なら。

そのうちのひとりが――男子なのだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いと思いますが、みなさんよろしくお願いします」
転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。
あっけにとられたのはクラス全員だった。

「お、男だと……？」

クラス全員の思いを麗我がつぶやいた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて」

「きゃ」

「……はい？」

「きゃあああああー！ーっ！」

まさに水に小石を投げ入れたかのようにクラスの中心を起点にその歓喜の叫びはあっという間に伝播する。

「男子！3人目の男子！」

「しかもうちのクラス！」

「美形！守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かった〜！」

一瞬でこの反応。よほど男に飢えているのだろうか。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

大変面倒そうに千冬がぼやく。仕事ではなく、よほどこういった十代女子の反応が鬱陶しいのだろう。

（まあ、学生時代も師匠みたいな人しかつるんでなかったからなあ）

「み、みなさんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから〜！」
そう真耶に告げられ、改めてクラス全員がもう一人に注目する。

（あれは……確か、『黒ウサギ隊』の……？）

眼帯をつけた目がクラス全体を見渡し、

麗我を見つけた瞬間、まるで彼以外見えていないかのように走った。その手には軍用のサバイバルナイフ。

「……っ!？」

麗我はとっさの判断で鞆に手を伸ばし、護身用に用意してある二本のナイフを構える。

「……見つけたぞ、『赤い錬鉄』……!」

「まあまあ。話しあおう。ほら、クラス全員がこっちを見てるぜ?」

「そんなことはどうでもいい。今の私の力……試させていただく!」

「だから待って、ラウ」

「だから待てんと言っている!」

転校生の少女はナイフを逆手に持ち、切りかかる。

麗我はそれを右手のナイフで弾き、カウンターの左手のナイフで横なぎに切る。

しかし、少女も少し違った。

「甘い」

大きくジャンプしてそのままかかとおとし。誰もが決まるかと思った。

「お前もな」

「まだまだだな、ラウラ」

千冬と麗我を除いて。

麗我は即座に剣を捨て、逆立ちの姿勢になる。

「《陸奥圓明流》……孤月」

そしてそのまま後ろ向きの姿勢で転校生の少女に蹴りを放った。

「う……っ!？」

なんとか首を横にずらすことで回避する少女。

だが。

「甘いつて言っただろ?……んじゃ、言うことを聞かなかったお仕置きだ」

瞬間、少女の後頭部に大きな衝撃が走った。

「……………」

意識を失うほどの痛みでは無かったが、戦意を失う程度の蹴りではあった。

「《孤月》の裏だ……お仕置きにはちょうどいいかな？」

「ちょうどいいかな……ではないだろう」

バシンッ！

「痛……あれは不可抗力でしょう織斑教諭！？正当防衛が成り立ちますよ！」

「だが、ここまで暴れる必要は無かったはずだ……違うか？」

「う……………」

確かに、もっと静かに手っ取り早く終わらせる技もあった。だが。

（たった1ヶ月とはいえ、《戦闘技術》の師匠だからな……そりゃ、どの位成長したのか気になるってもんでしょ）

麗我はこういう男だった。

「じゃあ、挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

麗我は席に座り、ラウラは教壇に戻る。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ。国籍はドイツ、見ての通り軍人だ。

特技はサバイバルナイフの扱い方、といった所だろうか。色々迷惑をかけるだろうが、この一年間、よろしく頼む」

「か……………」

「む？どうかしたか？昔、麗我に習った通りにしたのだが……………」

「かゝわゝいゝいゝ！」

シャルルに勝るとも劣らないくらい、教室が沸いた。

「かわいいー！」

「お人形さんみたい！」

「もち帰って一日中愛でたいくらい！」

それはまた教室の中心から全体に伝播していった。

「……………」
茫然自失としている千冬を除いて。

第15話 転入生と個人の事情（後書き）

side 第

危なかった……週5回添いねしてもらってるなんて麗我に知れば、
どうなることか……

これは、私と一夏だけのささやかな秘密だから、な……

side 第 end

第16話 模擬戦（前）（前書き）

皆様、昨日（一昨日？）の地震の方、大丈夫でしたでしょうか？

まずは、この地震で亡くなられた方に対する黙祷を捧げたいと思います。

つきあっていただき、ありがとうございました。

皆様が無事であることを、心よりお祈りしております。

第16話 模擬戦（前）

「全く、どうしてあんなこと言われなくちゃならないんだよ……」

「まあ、しょうがないだろ」

「なんでだよ」

「お前が姉御の弟だから」

「それだけで……？」

「ああ」

「限目の休み時間。一夏は軽く愚痴っていた。

何故なら。

「全く、初対面の女子に『お前を認めないなんて言われたら凹むだろ』」

席につく前に、ラウラが一夏だけ聞こえるように、

『私は、お前のことを認めない』

と言ったのだ。

普通なら、愚痴りたくもなるだろう。

だが。

「その程度ならまだマシだろ」

「この程度って……お前はどうかんだよ？」

「ん？俺か？師匠に修行の一環と称して苛められたり、金貢がされたり、料理の味が少し落ちただけで全身の関節を外されたりしたな」

「なんか……ごめん」

愚痴る相手を間違えていた。

（それに、旅の中ではもっと酷い事もあったんだぜ。まだ、話せないけどな）

例えば。

見知らぬ少女が近づいてきて話を聞いたらいきなりナイフで刺されたり。

例えば。

戦場で背中を預けて戦っていた時、その背中を預けていた戦友からいきなり裏切られたり。

例えば。

知らない村に入って宿をとったら食事に毒が混ぜられていたり。

（ま、こんなこと話しても意味ないけどな）

という過去を持つ麗我にこの程度のことを相談したのが間違いだろう。

「……クスクス。2人とも、面白いね」

いつの間にか着替え終わったシャルルが2人を見て笑っていた。

「どうした、デユノア。そんなに笑って」

「だって、2人とも本当に面白いんだもん。あと2人とも、僕のこととはシャルルでいいよ」

「じゃあ俺も麗我でいいぜ」

「俺も一夏でいいよ」

「ふふつ、よろしく2人とも。……所で時間大丈夫なの？」

「……あ」

鴉が一匹、馬鹿にしたような声で泣いていた。

「てめえのせいで遅れそうじゃねえか馬鹿一夏！」

「人のせいにするな阿呆麗我！」

「ぷっ……あははっ！」

そして今、3人はグラウンドを目指して走っていた。

「ヤバイヤバイヤバイヤバイ……もし姉御の授業に遅れたら……」

「「シヤレにならん」」

「……織斑先生の授業ってそんなに厳しいの……？」

その厳しさもとい恐ろしさを知らないシャルルの質問に麗我と一夏が無言になる。

「ど、どうしたの2人とも……？」

「話は後だ！とにかく走るんだ！じゃないと姉御に」

「もう遅い」

「ばしーん！」

本日3発目の出席簿アタックが麗我の頭にたたき込まれた。

「遅れてしまい申し訳ありませんでした織斑教諭」

「わかつたらとつとと列に並べ！」

この怒号に従い、3人はおとなしく一組整列の一番端に加わる。

「ずいぶんとゆっくりでしたわね」

「まあ、男の事情があったんだよ」

何の因果か麗我は隣に座っているセシリアに状況を説明する。

「スーツを着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

「あれは一般的に女子専用だろ？男の俺達が着るには難しいんだって」

「まあ、確かにそうでしょうけど……麗我さんはさぞかし女性の方との縁が多いようですから？そうでないと女性から襲いかかられたりしませんよね」

冷徹な嫌味の嵐が麗我にたたき込まれる。

「そうか？姉御はよく襲いかかってくるけどな」

当の本人には全くきいていないようだったが。

「何？麗我がまたやったの？」

「お、おい鈴！お前いつの間にそんな所にいるんだよ！」

「後ろは2組の列なんだから、当然じゃない！」

と、2組の最前列の鈴が話に加わる。

「一夏さん、今日きた転校生の女子にはたかれましたの」

「はあ!?一夏、アンタなんでそうバカなの!?!」

「……安心しろ。バカは私の目の前にもいる」

ギギギギッ……と壊れたロボットののように2人が振り向くと、そこには後ろに蚩尤（中国の武神）を従えた（あくまで例え）千冬が立っていた。

（キリエ・エレイソン）

バシーン!

蒼天の下で麗我の祈りと共に出席簿アタックの快音が轟いた。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい!」

一組と二組の合同実習なので人数はいつもの倍であり、出てくる返事も妙に気合いが入っている。

「くっつ……何かというすぐにポンポンと人の頭を……」

「……一夏のせい一夏のせい一夏のせい……」

と、2人は邪悪なオーラを身に纏っている。何故か鈴音は不穏当かつ不当な主張までしている。

「さて、今日は戦闘を実演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。――凰!オルコット!」

「な、なぜわたくしまで!?!」

完全なとばっちりである。

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出る」「だからってどうしてわたくしが……」

「一夏のせいなのになんでアタシが……」

「一夏……お前も大変だな」

「ああ……ありがとう麗我。お前は最高の親友だよ……」

と、麗我が一夏を励ましているすみでは、

「お前から少しはやる気を出せ……アイツらにいい所を見せたく無いのか？」

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！専用機持ちの！」

2人の恋する乙女が燃え上がっていた。

「慌てるなバカども。対戦相手は――」

キィイーン……。

突如、空気を裂く音がした。

それはだんだん麗我に近づいていき――

「ああああーっ！ど、どいてくださいっ！」

「なんでこうなるんだよーっ！」

文句の声を上げるが既に遅し。謎の飛行物体Aの突進が直撃し、麗我は数メートル吹っ飛ばされた。

……ように見えた（……………）。

「流石だな、麗我。やはり戦闘技術は衰えていないということか」

「何々？ラウラちゃんどういうこと？」

「何、簡単な事だ。衝撃の最も簡単な殺し方を知っているか？」

「えーっと……その方向に移動すること、かな？」

「正解だ。見込みがあるな」

「えへへへ……そ、そう？」

ラウラに誉められた女子が嬉しそうな顔をする。

「それと同じだ。麗我は今。突進を食らったとほぼ同時、食らう直前で吹っ飛ぶだろう方向に自ら飛んだのだ。『浮身』といった技だ

ったか」

「麗我くんすごい」

「柳に風、のれんに腕押し、ってやつね！」

と、女子達が盛り上がっている中、

当の本人は、

「いった……いくら衝撃は殺せたとはいえ、流石に生身でこれはキツいな」

むにゅ。

「う？」

「あ、あのう、冰雪くん……ひゃんっ！」

アレを触っていた。

（うわ、凄いでけえ……師匠は言うに及ばず、姉御よりでけえ……これ、下手をすると俺の知っている誰よりもでかいんじゃないか……！？）

「あ、あのですね、冰雪くん。そ、その、困りま」

（殺気！）

身の危険を察してとつさに真耶から手を放した麗我のわき、今さっきまで麗我の頭があった場所をレーザー光が貫いていった。

「ホホホホ……残念です。外してしまいましたわ」

ちなみに麗我はまだISを展開していない。

「殺す気か！？」

「殺しはしませんわ！ただちよつと罰を……」

とここまで言った瞬間、セシリアを巨大な爆発が襲った。

「駄目よ。麗我は私の婿なんだから」

「何をやっているんですか、たっちゃん先輩……」

「え？生徒会長権限で私の婿を助けに来ただけけど？」

と、学園最強（？）である生徒会長、更識楯無が戦闘訓練に乱入した。

第16話 模擬戦（前）（後書き）

ヤバイ、ダークネスになってきた……

PV21000突破、ユニーク28000突破、お気に入り登録
220件突破ありがとうございます！

身に余る光栄に感謝しかありません！

どうかこれからも《破戒の錬鉄者》をよろしくお願いします。

第17話 模擬戦（後）と悪夢のランチタイム（前書き）

どうも。やっとリアルの用事（部活の原稿）が終わったので投稿させていただきます。

今回はいつもより駄文度数3割増しです。

何かあったらご連絡下さい。訂正しますので。

第17話 模擬戦（後）と悪夢のランチタイム

「えーっと……俺の記憶に間違いがなければ…… たっちゃん先輩……ですよ……ね？」

「ええ。そうだけど？」

「どうして今ここにいますか？」

今は授業中。いくら楯無でも授業を受けているはずだ。

しかし、楯無は『予想通り』とでもいうような笑みで麗我を見、

「ちよつと女のカンで麗我のピンチを察知したから」

「はい」

「生徒会長権限を使ってきちゃった」

と、最強のカードをきった。

これに慌てるのは麗我である。

「織斑教諭！二年生がここにいていいんですか！」

最近毎日のように楯無が彼につきまとっており、そろそろ何とかしないと、思っている時にこれだ。

こうも言いたくなるだろう。

だが、

「諦めろ、氷雪。相手が更識である以上、何を言っても無駄だ」

と、麗我の一筋の希望は一瞬で消えた。

「ちよつと！会長！いつまで麗我さんの上に乗ってるつもりですか

！」

「え？セシリア、どういう……」

と言った所で、ようやく麗我は自分の状況に気がついた。

麗我……仰向けになっところがつている

楯無……麗我を庇うように麗我の上に覆い被さっている

「……た、たっちゃん先輩、は、早くどいてくだ」

「駄目よ。せつかくのチャンスだもの。堪能させてもらっわ」

と凄くいい笑顔で言われ、麗我は抵抗する意思を半ば放棄した。
そして。

「麗我さんからおどきなさい！この女狐がああああ！」

と、セシリアがブルー・ティアーズを操作し、楯無を狙い撃った。

「危ないわね」

と、楯無は麗我を連れて回避、安全な場所に移動し、麗我を下ろす。

「折角だから織斑先生、私が模擬戦の相手をしても？」

「……好きにしろ、更識」

半分諦めの入った千冬の声を聞いた後、楯無は麗我の方を向いて、

「じゃ、見ててね麗我！私、頑張るから！」

と、最高の笑顔を出した。

そして、

（ヤバイ…… たっちゃん先輩可愛い……）

これにドキツとしないほど、麗我は鈍感では無かった。

「じゃあ、二人ともかかってきなさい。麗我に攻撃した罪を加えて、3倍にして返してあげるわ」

「何をっ！鳳さん、いきますわよ！」

「わ、わかってるわよ！」

と、麗我を巡る乙女（と他一名）の戦いが始まった。

結果。

「そ、そんな……」

「っ、強すぎじゃない……」

と、シールドエネルギーが零になりISが解除されたセシリアと鈴音と、

「流石生徒会長だな、たつちゃん先輩」

「でしょう?」

無傷の楯無が立っていた。

「あ、ありえませんか……私のブルー・ティアーズと凰さんの衝撃砲を完全にかわしつつ、的確に攻撃を加えてくるなんて……」

「だから言っただじゃない。二人同時にかかってきなさいって」

と、『まだまだね』と書かれた扇子を広げながら言う楯無と、

「あれ?私の……出番……は?」

と呟くも誰にも聞かれ無かった真耶がいたとか。

(えーっと、どうしてこんな事になったんだろう……?)

と、クラスメイトの女子をISまで運びながら麗我はこんな事を考えていた。

真耶がドジをして麗我と一夏のISをしゃがませる事を忘れてしまったのだ。

そして、クラスメイトが麗我に要求した運び方は、

(どうして、お姫様だっこ、なんだよ……っ!)

「どうかしたの氷雪くん? 顔色悪いよ?」

「何でもありませんお嬢様」

(しかもどうして『執事モードで運んで』って言われるんだ……!)

と、その授業中、麗我はこのことをずっと考えながら過ごした。

そして昼休み。

麗我達は屋上にいた。

「天気がいいので屋上で食べよう、という話になったのである。」「ほら一夏、今日の昼だ」

「お、悪いな、いつも」

と、最近筈は毎日一夏に弁当を作ってきているので、この行為も手慣れていた。

そして。

「はい一夏。アンタの分」

と、少々イライラした感じの鈴音が一夏にタツパーを放る。

そのイライラした様子に全く気がついた様子のない一夏は、

「おお、酢豚だ！」

と無邪気に喜んでいる。

「麗我さん、わたくしもたまたま何の因果か早く目が覚めまして、こついうものを用意しましたの。よろしければおひとつどうぞ」

と、麗我にバスケットを開いてサンドイッチを差し出すセシリア。

「あ、いいよ。今日は俺も自分で作ってきたし」

と、やんわりと断る麗我。

セシリアの料理の攻撃力（殺傷力）を身をもって知っている麗我から見れば、二度と臨死体験をしたくない、という思いが込められていた。

（ここは何とかしてあの凶器をしまわせないと・・・）

「あ、セシリア。一つ貰ってもいいかしら？」

「ええ、どうぞ鳳さん」

麗我が考え事をしていたせいで、生まれた一瞬の隙。

その隙は・・・

「じゃ、いただきます」

「おい、鈴ちゃ」

パクツ - バタン。ガタガタガタ

新たなる犠牲者を生むには十分な時間だった。

「お、おい鈴!？」

「駄目だ、意識がない」

一瞬だけ隙を見せた事を麗我は一つの事を考えていた。

「ち、ちよつとどうしたんですの凰さん!？」

「……」

いや、セシリア以外の全員が同じ事を考えていた。

（（（どうやってあの生物兵器をセシリアにしまわせる、もしくは誰を生け贄にするか）））

あの温厚なシャルルすらそんな事を考えることから、セシリアの料理の攻撃力（殺傷力）が理解できるだろう。

「あ、あのな、セシリア？」

「何ですの？麗我さん」

「実は……そのサンドイッチをしまっってほしいんだが。俺はもういないし」

と正直に伝える麗我。

それを聞いた事でセシリアの目が涙目になる。

（ヤバイ！泣かした!?!）

と、動揺することで麗我に出来る隙。

その隙の中、セシリアと麗我を除いた3人が行動を開始していた。一夏が麗我を羽交い締めにし、箒が麗我の口を開けたまま固定し、シャルルがその中に残りのサンドイッチ（?）を無理やり入れる。

「お、お前 @ %￥!？」

「麗我さん、どうしたんですか？」

「ああ、大丈夫だよセシリア。お前の料理の味に感動しているだけだから」

こつもいけしゃあしゃあと嘘を言えるようになってしまった一夏。

やはり麗我の影響を少し受けてきているのだろうか？

「# \$!一夏、てめ」

「麗我……いつもの礼だ。……逝ってこい」

「てめえらあああああつ！」

「すまんな麗我。私はまだ死にたくない」

「ごめんね、麗我」

（くそ、意識が……）

こうして、麗我は意識を失った。

午後の授業において麗我がない理由を聞き、シャルルからその理由を聞いた千冬が大爆笑したとか。

第17話 模擬戦（後）と悪夢のランチタイム（後書き）

元々この模擬戦はプロットに入っていなかったんです。

それを、

楯無の出番がない　どうやって出そう　模擬戦に出しちゃえ

ってわけです。申し訳ありませんm（　　）m

第18話 乙女の願いとルームメイト（前書き）

主人公つええ。

第18話 乙女の願いとルームメイト

「……はっ!？」

「お、麗我、起きたか」

「お、一夏。ところで今何時だ？」

「もう5時だ。学校も終わったぞ」

……セシリアの料理にはどれだけの破壊力があつたのだろうか。

「お、まだ5時か。まだマシなほうだな」

「これでマシなのかよ……」

「一体麗我はどんな料理を食べたことがあるのだろうか。」

「そついえば一夏、箒ちゃんは？」

「ああ、先にアリーナに向かつてもらってるよ。俺がお前を見てるつて箒に言ったら、なんか変な顔をしたけど何でだろう?」

「この鈍感が」

お前が言うか。

「な、何でだよ麗我」

「ま、その理由は自分で考えろ。じゃあ俺達もアリーナに行こうぜ」
ガラガラガラッ

「麗我、話がある」と、ここへ入ってきたのはラウラだった。

「お、ラウ。どうした？」

「話がある。体育館の裏まで来てほしい」

「わかった」

ラウラの真剣な様子に、麗我は二つ返事で了承する。

「悪い一夏、急用が出来た。アリーナには先に行つててくれ」

「おい、麗我」

「じゃあラウ、行こうぜ」

「わかった」

言うが早いか、麗我はラウラを引き連れて保健室を出て行つてしまつた。

「……にしてもあいつ、どうしてあんな険しい顔してたんだろ」
狼狽している一夏をその場において。

「で、話ってなんだ？ラウ」

「単刀直入に言う。どうしてドイツを出て行ってしまったんだ？」

「はあ……最初の契約だっただろ、ラウ。1ヶ月だけ俺はドイツでお前達『黒ウサギ隊』の模擬戦の相手をする。そのかわりにドイツ軍は色々な物を手配する。その契約通りのはずだが？」

「だがお前には、こんな場所は似合わない。お願いだ！ドイツに戻ってきてくれ……」

麗我の諭すような声とは真逆にラウラの声は悲痛な感じが見てとれる。

だが、麗我は、

「無理だ。俺は、あのニュースを見た瞬間から日本に帰ると決意したんだから」

その誘いを拒否した。

「あのニュースとは、織斑一夏がISを起動出来るようになった、というものか？」

「ああ。一夏には俺みたいになつて欲しくはないからな」
自分みたいには絶対にしない。

そのためには、俺の身くらいはやろう。

それは、氷雪麗我という少年の唯一無二の願い（誓い）だった。

「だが、どうしても、と言うならラウ。2つチャンスをやる」

「……2つ？」

「ああ。1つは、来月行われる学年別トーナメントで優勝するか俺

を倒すこと。もう1つは――」

「……ここでお前を倒すこと、か？」

「そういうこと」

これが、今の麗我に出せた最大の譲歩だった。

「にしてもラウ、やっぱり洞察力鋭いな」

「な、何を言う！こんな時に集中力を乱させるな！」

「はっはっは。顔を真っ赤にしたまま言っても説得力ないぞ？」

「――！」

いじられたことに気づいたラウラが顔をさらに朱に染める。

「くっ……麗我……貴様……」

「さあ、来いよ、ラウ」

そして、ラウラが突撃。華麗な足はらいを仕掛ける。

しかし、麗我は軽くジャンプしてかわし、ラウラの頭を掴み、更に足を曲げラウラの後頭部に膝を押しつける。

「！まず――」

地面に当たる直前にラウラは回避。麗我は地面に膝をぶつけることになる。

「はああああっ！」

そしてラウラの右ストレート。

これで決着はついた。

「く……」

「まだまだ。精進しろよラウ」

但し、ラウラの敗北で。

「馬鹿な……完全に当たっていたはず……」

「勝負は、やる前から決まっていたんだよラウ」

そして、今の状況は、一目にはクロスカウンターのようだった。

但し、ラウラの右ストレートは完全に回避され肩の所にあり、麗我のカウンターは届いてすらいらない。

- - それでも、ラウラは負けていた。

その理由は - -

「み、右腕が」

「極まっているだろ？これが、陸奥圓明流、《獅子吼》だよ、ラウ」
カウンターのフックの肘で、相手の伸びきった首を支点に腕関節を極めて折るカウンター用の技。

流石に折るまではいいはないが、ラウラの腕関節は完全に極まっていた。

「簡単に挑発に乗って俺の予想通り動いたのがお前の敗因だ、ラウ」
「何……？」

「《巖嵐》をかわした所までは良かったが、その後激情にまかせて普通の右ストレートを撃つからな。まあ、あの挑発を仕掛けておいたから負けるわけが無かったんだけど」

「まさか、最初からこれを狙って……？」

「まさか。でも……」

と麗我はいっぺん口を閉じ、

「ある程度他の作戦は考えていたけど……こういう決着になって良かったよ」

「それは……どうしてだ？」

「決まってるだろ。お前みたいな可愛い女の子に傷でもついたら困るじゃないか」

「か、可愛い……？わ、私がか？」

「当たり前だろ。ラウ以外に誰がいるんだよ」

「………」フラッシュ……ドサッ

「おい、ラウ？……駄目だ、気絶してる。しょうがない、保健室に運ぼう」

そう決め、ラウラを持って保健室に向かい始めた。

……何故かお姫様だっこと。

「ふう。よし、部屋に戻るか」

ラウラを運び終わった麗我は、そのまま自室に戻ることにした。

（今日くらい、俺なしでも十分だろう）

と、自室のドアを開けた。

「あ、おかえり麗我」

バタン

（まあ落ち着け俺。何か幻覚を見たに違いない。うん、きっとそう
だ）

ガチャ

「おかえり麗我」

バタン

「な、何が起きてるんだ……まあいい、きっと幻覚だ！そうに違
いない！」

ガチャ

「おかえり麗我」

「ああ、ただいま……それと、どうしてここにいるんだ、シャルル
！？」

「え？山田先生が部屋が開いていないから、ってここにしろって朝
言ってたはずだけど？」

「……………」

朝のラウラの奇襲で疲れ、少々話を聞いていなかったのがここでき
いたようだ。

「というわけで、これからしばらくよろしく、麗我」
「ああ、よろしく、シャルル……」
麗我の苦労はこれからも続きそうだ。

side 篇

「ふう……ご馳走さま、篇」

「うむ。気にいってもらえて何よりだ」

と夕食が終わり、私は一息ついているところだ。

そつえば、あの時。一夏は麗我の看病にいったが、私が倒れた時もおなじようにしてくれるだろうか……？

「なあ、一夏」

「ん、どうした？」

「お前は私が倒れても、麗我と同じように看病してくれるか？」

「そんなもの、当たり前だろ。お前は俺の大切な……」

た、大切な！？

「……友達なんだからさ」

ガクリとする。

まあ、一夏の鈍感さには毎度のごとく呆れるが、まあこんなものだろう。

こんな一夏を好きになってしまったのだから。

さて。では今日も一夏に添いねしてもらおうとしよう。

side 篇 end

第18話 乙女の願いとルームメイト（後書き）

何とか今回も更新出来ました……

感想、質問など、24時間お待ちしております!!

閑話 4 師匠と異世界からの客人（前書き）

今回はサザンクロス様のIS〈インフィニット・ストラトス〉不
屈の翼 より、あるキャラクターが出演しております！

サザンクロス様、本当にありがとうございました！

閑話 4 師匠と異世界からの客人

麗我とシャルルが相部屋になった次の日。

「……ん？なんか騒ぎがおきてるな」

IS学園の正面ゲート前で、多くの生徒達が輪を作っていた。

「一体、何があったんだろう」

「いつてみようよ麗我」

「ああ、そうだな」

麗我はとりあえずシャルルの言葉に従い、その輪の中に入り込む。すると、先に潜り込んでいた一夏と箒に会った。

「おい一夏、箒ちゃん。これは一体どういう事だ？」

「さ、さあ」

「すまない。私にもよくわからない」

と、やっと輪の先頭にでる事ができ、状況を確認すると――

「……なんだ、こりゃ」

1人の女性とIS学園の教師5人がISを装着して相対している所だった。

「ねえねえ、あの人、なんでこんなことになってるの？」

「さあ……不法侵入って聞いたけど」

と、周りから声が聞こえてくる。

（ふうん……不法侵入か……ここにそんなことするなんて、一体どこの馬鹿なのか）

と思いながら、麗我は侵入したと見られる女性の顔を確認する。

その女性は、外見からはいたって普通そうな体格をし、胴着を着ていて、美しい赤髪をロングに伸ばした、いたって美しい女性だった。

（ま、ずい。あれは……）

「シャルル、いくぞ」

「え？どこに？」

「決まってるだろ！職員室だ！この戦闘を止めさせるんだよ！」

「ああ、そうか。今のままじゃあの女性が殺されちゃうもんね」

「……違う、逆だ」

「……え？」

シャルルの返事も聞かずに麗我は職員室に向かって全力疾走を開始した。

「ちっ、誰だあの侵入者は」

「何なんだあいつは……」

「IS5機で脅しても聞かないのか……」

IS学園の職員室は阿鼻叫喚の嵐となっていた。

朝いきなりの侵入者、それも正門からのとあって、その対応に困っていたのだ。

「はあ、はあ……やつと着いた」

と、ここでやっと麗我が到着し、遅れてシャルルが職員室に姿を表す。

「何だ氷雪、私達は今忙しいんだ。何かあるなら後で……」

「そんなことはどうだっていい！早く先生とISを戻せ！！大変な事になるぞ！」

「ねえ麗我、どうしたの？何かあの女性の顔を見た時から変だよ？」
シャルルの言葉も届く気配がない。

「今、来てる女性は……」

「それがどうした。私は今忙し」

「俺の……師匠なんだ」

「「はあ？」」

「さ、初めましょ。早く来なさいよ。木偶の棒が」

（おいおい、あの女性、大丈夫なのかよ……）

一夏は本気で心配がった。

「おい、大丈夫なのか？あんた」

「ん？あんた麗我の友達？」

「え？あんた麗我を知ってるのか？」

「ええ。まあ知ってるってより……まあいいわ。少し待ってなさい」

「はあ……」

（麗我の知り合いには録な奴がないな）

それを本気で意識した麗我だった。

「嘘……？」

声の聞こえた方を向くと、楯無が女性を見て啞然としている所だった。

「どうしたんですか？楯無先輩」

「あ、一夏くん。いや、どうしてあの人がこんな所に……って思っただけ。何でもないわ」

「そういえば、麗我もあの人を見た瞬間どこかに行っただけ……何かあるんですか？」

「麗我が？関係があるとすれば……いや、今は前の試合を見ましよう」

一夏が前を見ると、痺れを切らしたISS機が、女性に向かって突進していく所だった。

「さて……ギリシャ軍とどちらが強いか……試させて貰うわ」

そう言いながら、女性もISSに向かって走り出した。

「だから、危険なんですよ！早くあの戦闘を止めさせないと、ISS学園のISSが5機なくなる事になります！」

「まさか、そんな事……」

「有り得る訳が無いだろう」

シャルルと千冬が笑っている中、麗我は真剣に彼らを説得している。
「はあ……この事だけは言いたくは無かったんだけど……2人とも、ギリシャ軍の話、聞いているか？」

「ああ……確か1月あたりにギリシャ軍の全ISSがコアを除いて全て攻めてきた生身の女性に破壊された、って話だろう？流石に表沙汰にはなっていないがな。それとこれが何か関係があるのか？」

「それが、今不法侵入沙汰になってる女性」

「へ？」

2人の声がシンクロした。

「馬鹿な……有り得ないだろ」

一夏は、この言葉しか絞り出せなかった。

いや、観客全員が戸惑っていた。

「嘘でしょ……？」

「何？この光景」

「有り得ないわ……」

周りからもこれらの言葉が出ている。

「流石ね……青い閃光」
シャイニング・ブル

「あら、久しぶりね、楯無ちゃん。元気してた？」

「ええ。私は元気でした。あなたも……お変わりなさそうですね、陸奥謙信さん」

「ええ。いたって元気よ」

と、5機のISが残骸となった校庭で、2人は話し始めた。

最初に攻め始めたのは、ISの一機だった。

マシンガンを使いこなし、侵入者である謙信を追いつめ

ていなかった。

「ほらほら、全く当たってないわよー」

全ての魂を完全に見切り、ISに肉迫する。

こうなるとマシンガンは無用の長物となり、近接用の刀を抜く。

が。

「遅いわね……これじゃあ家の先祖が戦ったっていう
雑賀孫市の方がよっぽど凄い人ね。なんせ――」

拳を打鉄を装備している教師の胸あたりに押しつけ――

「私の先祖に火縄銃で弾丸を当てたんだから」

その瞬間、その教師が文字通り落下した。

そして、シールドエネルギーは大幅に削られていた。

だが、それだけでは落下した理由にはならない。

落下した理由は……

「あらあら、やっぱり第2世代かしらね？」絶対防御を突破し、I
S操縦者に直接ダメージを与えたからに過ぎない。

そして、何故彼女が空中に浮いているのかという……

「昔、麗我にこのサンダル投影させておいて良かったわ」

ヘルメスのサンダル。

空中を歩ける（……）サンダルのおかげで空を自由に歩い
ているのだった。

「で、次は？」

落下した打鉄――いや、残骸を見て、傍観に徹していた他の4機も
ようやく動き出した。

全員が上手く互いをカバーしあい、連携して攻撃を仕掛ける。
が。

「ふむ……まあ、骨董品じゃこの程度かしら」

その全てを回避し、

「《陸奥圓明流》、浮嶽」

拳を頭に乗せ、頭ごと拳を突き上げ、打鉄の装甲を全て叩き割り、

「陸奥圓明流《斧鉞》」

3機目の打鉄に向かって右でかかと落としを仕掛ける。

（ふっ、ただのかかと落としじゃない）

とそれを打鉄の操縦者は受け止めた。
が。

「う、そ……そんな」

「甘いね。本当に。欠伸がでちゃいそう」

ほんの一瞬遅れて飛んできた左のかかと落としては回避出来ず、頭頂部にその衝撃がモロに入る。
そして。

「陸奥圓明流《虎砲》」

気絶したISの操縦者を無視し、ISの装甲を叩き割った。

「さあて、次は……？」

上手く武装を使い分け、謙信を近づかないようにするラファール・リヴァイブ。

しかし。

「ほらほら、頑張りなさい 後5、いや3メートルになっちゃったわよ」

この怪物相手には何の意味も無かった。

（この……化物め！）

「あら残念、届いちゃったわね」

「く……そおおおお！」

ヤケクソになったラファール・リヴァイブの操縦者が楯殺し（シールド・ピアーズ）を装備。

しかし、装備する一瞬の隙に。

「陸奥圓明流《裏蛇破山・朔光》」

楯殺しを放とうとする拳部分を殴り、その勢いを利用してリヴァイブの間合いに入り、鳩尾に肘を入れた。

衝撃で吹き飛びリヴァイブ。

操縦者は、痛みで気絶していた。

「さあ……最後ね」

もうヤケクソな最後の打鉄の操縦者は、謙信に刀を振るった。
が。

「遅いのよ……」

目にも止まらぬ速さで放たれた蹴りが打鉄の装甲を完膚なきまでに

破壊した。

「馬鹿な……ウチの教職員が、全滅、だと……？」

「だから言っただけでしょう！」

職員室。報告を受けて驚く千冬とシャルルと、

「だから警告したのに……はあ、また無駄な残骸が……」
嘆いている麗我がいた。

「仕方ない……夕暮、来てくれ」

「はい」

と、いつの間にか麗我の目の前には1人の美少女がいた。それも、
見事な赤髪を持った。

「お、太陽、久しぶり」

「お前も元気そうだな、麗我」

「あれ？2人は知り合いなの？」

と、事情を知らないシャルルが麗我に質問する。

「ああ……彼女は夕暮太陽。ちよつと今回は無理をいって来て貰った客人だ」

「ああ。よろしく頼むシャルロ……シャルル」

「じゃあ、早速悪いがちよつと師匠と死合ってくれないか？」

「別にいいぞ。私の『虚刀流』、どこまで通じるか楽しみだ」

と言うが早いか、太陽は校庭に向かって走り出した。

「早く行くぞ！」

少し遅れ、麗我達も校庭に向かって走り出した。

「へえ……やっと少しは出来そうな奴が表れたわね……って太陽ちやんじゃない」

「お久しぶりです、師匠さん」

「いやねえ。謙信さんでいいわよ」

「では謙信さん、と。じゃあ早速」

「ええ」

「「死合いと……いきますか！」」

朝のHR前。

全校生徒の観戦している中、2つの赤が戦闘を開始した。

「ほらほらほらあ！どうしたの太陽ちゃん、その程度！？」

「く……っ」

戦いは、謙信が押していた。

が、太陽も負けずに好機をうかがっている。

「はあっ！」

謙信の右回し蹴り。それを短く屈んでかわし、太陽は肉迫し、正拳でのラッシュを仕掛ける。

……が。

（殆どダメージが入っていない……っ！）

「《浮身》よ。柳に風、ダメージは殆どないわ」

完全にダメージを殺されていた。

（なら……っ）

「虚刀流・『百合』」

腰を使った回し蹴りを放ち、

「虚刀流・『すみれ董』」

謙信を投げた。

ドシンッ！

地面に謙信は直撃する。
が。

「く……っ」

「惜しいわね。服が無ければもつと突き上げられたんだけど」
何故か膝をついたのは太陽の方だった。

「陸奥圓明流《指穿》……ですか師匠」

「ええ、その通りよ麗我」

「どういうこと？どうして投げた太陽さんが逆にダメージを受けてるの？」

「まあ、落ち着けシャルル」

麗我はとりあえずシャルルを落ち着かせる。

「陸奥圓明流《指穿》は、指を極限まで鍛え上げ、相手の急所目掛けて穿つ技なんだ。まだ太陽が裸じゃ無かったぶん効果は薄いけど……それでもかなりのダメージを負ったはずだ」

麗我の言葉通り、太陽はかなり苦しそうに見える。

「それじゃ、あなたにこれ以上怪我をさせるのも悪いし、最後に互いの最強の技を使って終わる？太陽ちゃん」

「ええ、そうですね」

そして。

「陸奥圓明流《奥義》、《無空波》」

謙信は左拳で千年の奥義を放ち、

「『きょうかすいげつ鏡花水月』」

太陽は虚刀流一の奥義であり最速の奥義を放った。

「……………ガハッ」

「お疲れ様。楽しかったわ、太陽ちゃん」

先に倒れたのは太陽だった。

「ふう。久し振りに『奥義』を放っちゃったわ。あなたの本気、見せて貰ったわ」

と謙信血を吐きながら言った。

「まさか負けるとはな……………」

「まあ、あなたがその虚刀流を本気で極めてたら危なかったわね。

ま、。麗我とタメはれるだけの力はあるけど……………対人戦の経験がなさ過ぎるのも問題よ。でも、本当に楽しかったわ。また戦いましうね」

「ああ」

そして、謙信と太陽は帰って行った。

そして、今日もまた何時も通りの授業が始まる。

閑話 4 師匠と異世界からの客人（後書き）

え？太陽こんなに弱くない？違うよ？謙信が強すぎるだけなんだよ？

第19話 師匠の話と一触即発（前書き）

謙信のイメージには蒼崎家のマジックガンナー青子さんをイメージして下さい。

第19話 師匠の話と一触即発

「にしてもこの前は災難だった……」

麗我の師匠である謙信が突然の来訪をしてから4日後。麗我達はアリーナで一夏の特訓に付き合っていた。

「にしても麗我、お前の師匠は、何故IS学園に突然来たのだ？」

「そうですね。それに、ギリシャ軍とか言っていました。何か関係があるのですか？」

「まあ待て。最初から説明する」

と言って、麗我は今シャルルに銃を貸してもらい、試し撃ちをしている一夏以外に座るように指示する。

「よし、一夏以外全員座ったな」

「つておかしいだろ。どうして俺だけ座れないんだ」

「いいから銃を撃つとけ」

と一夏を軽くあしらひ、他の全員が座ったのを確認した後、説明を始めた。

「まず、IS学園に来た理由は……ぶっちゃけたただの暇つぶしだ」ズルリ、と全員がずっこけた。

「あはは、そんなに面白いか？」

「麗我……流石に今のは冗談だろう？」

「いやいや、マジ。本気と書いて」

との言葉に、一夏を含め全員が呆けた表情をする。

「じゃあ、師匠の人物紹介からいきますか。師匠の名前はみんな聞

いた通り陸奥謙信。俺も扱う陸奥圓明流の継承者だ」

「だろうな……」

「確かに……」

あの麗我を知っていきそうな表情。

それから麗我の師匠だということが理解出来た。

「にしても…… ISを装備せずにISを破壊するなんて……」

「ああ。昔タバ姉も言ってたよ。こんな真似が出来るのは謙ちゃんだけだつてな」

麗我はあの怒った口調ながらも獰猛な笑みを浮かべた束を思い浮かべ苦笑する。

「で、ギリシャ軍と言っていたが、師匠はギリシャ軍に喧嘩を売ったんだ。結果は師匠の1人勝ち。ギリシャ軍の基地には残骸となつたISと無傷の師匠が残されたとか」

「……そこに行つた理由は？」

「恐らく、ただの暇つぶし」

ガラガラガツシャーン！

麗我以外の全員が派手に転倒した。

「おいおい、みんな大丈夫か？」

「『大丈夫か？』じゃないだろ……」 「ギリシャに喧嘩を売つた理由が、ただの暇つぶしなのか……？」

「ああ。あの人、かなりの暇人だから……俺が師事してた時も酷かつたな……」

以下、麗我の回想。

「麗我ー！どう？少しは強くなつたかしら？」

「全然ですよ……ろくに技も身につかないし……」

「よし！じゃあ実戦ね！」

「ええええええっ！」

「じゃあいくわよ！大丈夫、死にはしないなら……多分^{ボソッ}」

「多分？今多分っていいましたよね！？」

「じゃあいくわよー」

「ギヤアアアアアッ！」

「麗我！おい！どうしたんだ！」

「ああ、一夏……何でもないよ……」

「血の涙を流しながら言う言葉じゃ無いと思うんだけど……」

（しばらくお待ち下さい）

「ふう。やっと落ち着いた」

「そういえば麗我。お前はいつその師匠に師事していたんだ？」

「小学生のころ」

「「「「ええええええっ！！？」」「」「」」

「おいおい、そんなにおかしいことか？」

「おかしすぎますわよ……」

「あの師匠にか？」

「ああ。1年から6年の夏、冬、春休みを使って。特に6年の秋は授業にも出てなかっただろ？」

「ああ、そういえば……」

「そうだったかもしれないわね……」

「まあ、まともに技を教えてもらったのは4年の冬休みからだけだな」

「それまでは？」

「ひたすら虐……体を鍛えてた」
「虐め！？虐めって言ったよね！？」
「まあ、半分くらい虐めだったからな……」
と、麗我は修行時代を思い浮かべて苦笑する。
「凄い師匠なのだ……良くも悪くも」
「あの人は完全に人外だよ……」
と、会話していた所で、

「『黒い雨』」
シュヴァルツェア・レーゲン

「確か、ドイツの第3世代型……」
「まだ、本国でトライアル中のはずなのに……」
という声が、突然響いた。

全員がその方向を向くと、
「麗我……何故、こんな所に」
「よう。ラウ」

と、ラウラが入って来た所だった。

「……！！」「……」

他の全員が警戒態勢に入る。

「織斑一夏、貴様も専用機持ちらしいな。ならば話が早い。私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「お前に無くても私にはある」

この言葉を聞いた瞬間、麗我と一夏は全て理解した。

一夏はIS第2回世界大会『モンド・グロツ』の決勝戦当日に謎の組織――亡国企業に誘拐された。

その決勝戦は一夏を助けにいった千冬の不戦敗となり、大会2連覇を果たせなかった。

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の偉業をなしえただろうことは容易に想像出来る。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めな

い」

という事だ。

「まあ、落ち着けよう。こんな密集空間でやり合う気か？」

「ああ」

「全く、どうしてこんな弟子に育ったのやら……」

と、麗我は頭を抱える。

「いいから戦え」

「また今度な」

「ふん、ならば――戦わざるを得ないようにしてやる！」

と、言うが早いかいつの間にかISを戦闘状態にシフトしていたラウラの左肩の大型実弾砲が火を噴き、

「だから落ち着けて。こんな所で争っても意味なんかないだろ？」

一夏目掛けて放たれたそれは、いつの間にか出現していた薄桃色の花弁に受け止められ、

「ば、馬鹿な……」

それに一片の傷を付けることなく消滅した。

「少なくともこんな密集空間でやり合うよりも本戦か人のいない空間で戦った方がいいだろ？ドイツのお前はもう少しそういうところ慮してたはずなんだけどな」

「く……っ、麗我、貸しだからな」

「へいへい」

と会話をしつつ、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていった。

「ふう。一夏、何もないな」

「なんで断定型なんだよ……まあ、確かに傷一つないけどさ」
と無難な会話中に、

「今日はもうあがらない？4時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「おう、そうだな」

ということ、その日の訓練はお開きになった。

「うーむ、どうしてシャルルは俺と一緒に着替えてくれないのか…
…男同士だろうに」

千冬に今日ラウラが一夏に攻撃しようとしていたことを報告した後、
麗我は自室に戻る。

「ただいまー。って、シャルルはどこいった？」

と思ったが、シャワールームから響く水音に気がつく。

（なる程。シャワー中か。……そういえば、確かボディーソープが
切れたと言ってたような……よし、届けにいくか）

と決め、麗我は洗面所へと入る。

ガチャ

（はて？ガチャ？）

一瞬だけ戸惑うも、シャルルがシャワールームのドアを開けたとい
うことに気づく。

「お、ちようどいい。これ、替え……」

「れ、れい……が……？」

麗我がシャワールームから出てきた者の姿を確認すると、それは、
金髪碧眼の美しい全裸の女子だった。

第19話 師匠の話と一触即発（後書き）

麗我もそつだが覗きは犯罪行為ではないのか。

謙信はまたたまーに出てきます。

第20話 仲間の定義（前書き）

……今回みじかつ！

いない。ただでさえ資本力で負けている国が、最初のアドバンテージを取れないと不味いんだ。だから」

「お前に白式のデータを取ってこい、って言うのか……？」

「うん。後、もしあれば赤い錬鉄も、だけどね」

ブチッ！

麗我の中で、何か切れてはいけない物が切れる音がした。

「ふざけんな……」

ドゴオン！

麗我の拳が床を殴り、壮大な音が響き渡る。

「れ、麗我？」

「シャルル、一つ伝言を頼まれてくれないか？」

「伝言？」

「ああ。姉御に、今からの無断外出と明日休む事を詫びといてくれ」

「ちよ、今からどこに行く気なのさ！」

「デユノア社を叩き潰してくる」

「え！？」

シャルルの驚く声を背に、麗我はISを装着、飛んでいこうとする。

「ちよつと待ってよ！どうしてそんな」

「許せねえからだ」

「え？」

「お前は俺の仲間だ。そうだろ？」

「え？ああ、うん」

シャルルは麗我の質問に動揺しながらも肯定の意志を示す。

「その仲間が、だ。そんな、奴隷か玩具みたいな扱いをされててみる。許せる訳がないだろ！」

「え？そんな理由で？」

「当たり前だろ。シャルル、俺は仲間を必ず守る。例え、お前と町一つを選べと言われでも必ずお前を選ぶ。それに、俺は仲間を絶対に裏切らない。俺の命は、お前らの為に使うから」

と、麗我はシャルルを諭すように言う。

「だから、今からデユノア社を叩き潰して、お前の親父に謝らせる」
「え！？そんな、麗我はどうなるのさ」

「俺のことはいい。お前が今そういう状況にいるということが問題なんだ」

「え！？そんな、駄目だよ！」

「何？他にも何かされたのか！？」

「そうじゃないよ！麗我、自分のことなんて考えてないじゃないか！麗我が捕まるなんて、そんなの嫌だよ！」

「そうか……でも、俺は行く。その社長を半殺しにして、お前の前に土下座させて謝らせなきゃ気がすまねえ」

「でも……駄目だよ。僕の為に、そんな……」

「そうか……」

と、麗我はISを解除する。

「えへへ。僕、麗我に話しちゃったから、フランスに帰ったら代表候補生の資格を剥奪された後に牢屋に入れられちゃうから、今デユノア社を潰してくれても意味はないんだよ。僕には、帰る場所がないんだ……」

「シャルル……それなら、ここにいろ」

「……え？」

「帰る所がないのなら作ればいい。幸いにもここには各国の権限も届かないし、何より俺がいる。それに、居場所が無いって言うなら俺がお前の居場所になってやる。フランスを敵に回しても、必ずお前を守ってやる。これじゃ不足か？」

「麗我……どうしてそんなにしてくれるのさ。僕なんかにパシンッ！」

「……え？」

「シャルル……自分『なんか』なんて言うな。お前は俺の大切な友達だ。友達を守るのに理由なんかいらねえ。そうだろう？」

「う……れ、いがあああっ！」

シャルルは泣きながら麗我に抱きついた。

これに動揺するのは麗我である。

（お、おい、この状況、俺はどうすれば、どうすれば……っ」

『どうしたの？何か困ったことでもあったの？』

（おおっ！俺の中の天使！）

『おいおい、俺の存在を忘れてないか？』

（俺の中の悪魔……頼む！まず悪魔からこの状況を打破する方法を教えてください！）

『今この状況でシャルルを引き離すのは逆効果だ。今はこのまま抱き寄せて頭を撫でてやるのが一番だ』

（なるほど。じゃあ天使）

『勢いのままベッドに行って……ヤツちやいなYO！』

（我が骨子は捻れ狂う……偽・螺旋剣（カラドボルグ？）！）

『ギヤアアアアアッ！』

『おい天使、しっかりしろ！』

（悪魔、ありがとう。この方法でいってみる）

『お、おう。頑張れよ』

そして麗我はそのままシャルルを抱き寄せ、彼女が泣き止むまですと抱きしめて頭を撫で続けていた。

sideシャルル

「麗我……」

夜。麗我が完全に寝静まったのを確認してから麗我のベッドに入る。ありがとう、麗我。

こんな僕に、居場所を用意してくれて。

「こんな、なんて……言うなよ……」

え！？

「クー……………」

何だ、ただの寝言か。

でも、今の状況を見られたら……

……………

うん、気にしないようにしよう。

でも、麗我の寝顔って、なんか可愛いな。

何時もの凛々しい顔、謝っている時の顔、そして今の寝顔。いつたい、どれが本当の麗我なんだろう……

あれ？意識が……

sideシャルル end

第20話 仲間の定義（後書き）

女子が男子のベッドに潜り込むのはいいのに男子が女子のベッドに潜り込むのはアウトなのはどっしてでしょうか？

第21話 寝言とロシアンルーレット（前編）（前書き）

春休みの宿題って……一体何の為にあるんでしょうね。

第21話 寝言とロシアンルーレット（前編）

「ふ、あああつ」

翌日、麗我は何時も通りの時間に起きた。

（昨日はシャルルに色々言ったような……ん？）

そして、隣を見ると、

「うつん……れ、麗我あ……」

何故かシャルルがいた。

（まで。落ち着け。これは孔明の罠だ！）

とか何とか思っていて、隣で寝ている女の子が着崩れたパジャマを着て自分の名前を呼んでいるのだ。

麗我の意識がぶっ飛ぶのは時間の問題だった。

（ヤバイ……こんな時、どうすれば……っ）

『馬鹿だなあ俺。こういう時にはこれしか無いだろう？』

（おおっ！俺の中の悪魔！何かいい案でもあるのか！？）

『ああ。……いいか俺、ここで急に起こすのは逆効果だ。ここはもう少しした後、シャルルが自分から起きるのを待つか、静かに揺すって起こした方がいい』

（なるほど。確かにそれはとてもいい案だ）

『何を言っているんだよ僕！悪魔の戯言に騙されたら駄目だよ！』

（どうした天使。前の件でお前の信用はがた落ちなんだが）

『何を言っているんだ！今は一つでも選択肢は多い方がいいだろう！？』

（……まあ、確かに）

『まず、シャルルの耳に息を吹きかけるんだ』

（いきなり『ちよつと待て』と言いたくなるような案だが続きを頼む）

『その後、起きたシャルルの唇を奪ってベッドに押し倒』

ゲンゲニル

（大神宣誓）

『うわあああああーっ！』

『ああ、天使がっ』

（ありがとう悪魔。お前の案でいっってみる）

『お、おう。頑張れよ』

以上、麗我の第1239回脳内会議終了。

（にしても……どうしたものか）

今とれる最善の手はシャルルを揺すって起こす事だとわかっていても、中々行動に移すことが出来ずにいる。

おまけに、

「れ、麗我あ……駄目だよ、僕達まだ……」

（なんて夢を見てんだよ、コイツは！）

起こす対象が見てる夢にも若干の問題があった。

（今このまま何の行動をとらないよりも……ええい、男は度胸だあっ！）

「シャルル、朝だぞ、起きろ」

「うっん……あれ、麗我？」

予想よりも眠りが浅かったらしく、予想よりも早くシャルルの目は覚めた。

「あれ？麗我、どうしてそんなに顔を真っ赤にしてるの？」

「お前の……」

「僕の？」

「お前の寝言が問題なんだよ」

「僕の寝言？」

疑問に思ったシャルルは、自身の夢の内容を思い出そうとする。

少女奇想中（しばらくお待ち下さい）

「あ、あうあう……」

自身の夢を完全に思い出したシャルルは、麗我を超えトマトに勝るとも劣らないくらい顔を真っ赤にしていた。

「な、わかつたろ？」

「れ、麗我のえっち……」

「何故にっ!？」

麗我がとても哀れであった。

所変わって学食。

「よう、今日もお熱いね。このバカップルが」

「……………（顔が真っ赤になりすぎて何も言えなくなっている）」

と、麗我は今日は更に勢いを増して一夏と箒をいじっていた。

何故か。その原因は、『学年別トーナメントで優勝した者は、織斑一夏か氷雪麗我と付き合える』という噂が流れたからであった。

こ、この噂は一体どういう事だっ！

『学年別トーナメントで優勝した者は織斑一夏か氷雪麗我と付き合える』

あれは私の部屋で、しかも寝る前にボソツと言った程度のことだぞ！
どうして学年中に広まってるんだ！しかも麗我まで巻き込んでしま
ってるし……
くそっ、こうなったら……

side 箒 end

「で、どうして腕を組んで学食まで来たんだ、バカップル」

「し、仕方ないではないか！珍しく、食材が切れていて……」

「答えになってないしバカップルって否定してなかったぞ」

「……」

箒の頬が一瞬で紅潮する。

「ごちそうさま」

麗我の表情が一瞬で驚喜の表情に変わる。

「いや、箒から腕を組んできて……」

一夏の空気を読まないこの言葉に、麗我は更にニヤリとし、箒は更
に頬を紅潮させ、一夏の方を睨みつける。

正直、可愛いと思うられているのは私だけだろうか？

「にしても一夏は嬉しくはなかったのか？」

「俺は……正直戸惑ったけど嬉しくはあったな、うん」

「……」

箒の表情が一転して笑みに変わる。

（ごちそうさま、二人とも）
それを悪魔の笑みで見ている麗我がいた。

昼休み。

「はあ、今日もお腹すいたな」

「そうだな」

麗我達一行は今日は屋上で弁当を食べることにした。

「……で、なんでいるんですか たっちゃん先輩」

「あは」

……途中でついて来た生徒会御一行と一緒に。

「そんなかたーいこと言わないの、れーい」

「のほほんさんはそれでいいかもしれませんけど……みんなはどうなんだ？」

「俺は別にいいぞ」

「私も別に構わない。……一夏、今日の分だ」

「お、サンキュ。俺も作ってきたんだが、食べるか？」

「そ、そうか。なら有り難ういただこう」「私も別に構いませんわ」

「私もいいわ。……一夏、私の分は？」

「悪い、用意してない」

「僕も別にいいよ」

「ああ、そうですか」

まあ、これなら問題ないな、と麗我は勝手に自己完結する。

「セシリア、まさか、弁当を作ってきたなんてないよな？」

「勿論、作ってきましたわ」

セシリアのこの言葉で生徒会御一行以外（楯無以外）のメンバー全

「今回は、塩おにぎりを作ってきましたの。残念ながら、具を作る時間が無かったので……」

「……塩？」

「ええ」

「具は？」

「ありませんわ」

「そう言えば、飲み物ないな」

「じゃんけんで決めない？」

「そうですね」

「じゃんけんぽん」

グー
……
麗我

パー……そのほか全員

「悪いわね、麗我」

「将来の嫁である私からも？」

「誰が将来の嫁ですか」

「ただいまー。買ってきー」

屋上に戻った麗我が見たのは、倒れて動かない
本音と近くに書いてあったメッセージだった。
『犯人はにぎりめ……』

第21話 寝言とロシアンルーレット（前編）（後書き）

のほほん先輩……いきなり当たりを引いてしまったのか……っ

第21話 寝言とロシアンルーレット（後編）（前書き）

ちなみに寝言は全く関係ありません。

感想、ご意見などなど、お待ちしております。

第21話 寝言とロシアンルーレット（後編）

「ちょっと悪い。一夏の分だけ購買に無かったからちよつと外まで行つて買つてくる」

「麗我！飲み物なんてどうでもいいから早く座れよ！」

「いや、飲み物は必要だろ？俺は一度任された仕事を途中で抜け出すなんてことが出来ないんだ」

「俺がいらないって言つてゐるんだからいいって。だから早く戻つてこい」

「麗我……その袋の中に、人数分あると思つんだけど」

「いや、買つてきてないんだ！」

嘘をついてでも逃げようとする麗我の口に、

「ほら、麗我。あーんぱくつ

「……！？」

シャルルの手からセシリアが持ってきたおにぎりが入られる。ぱくぱくもぐもぐ……

「なんだ、普通の味じゃないか」

「……ちつ、外れか」「運がいいな」

「当たりを引きなさいよ」

「おい待て。どういう意味だお前ら」

セシリアのおにぎりを食べた後の一夏達のコメントで、麗我は何かあることを理解する。

（でも俺が食べたおにぎりは具は何も入ってな……まさか！？）

「セシリア、これ全部具なしの塩おにぎりだろ？」

「ええ。でも殆どは私のメイドが作ってくれたので私が自分で作ったのは4個だけですわ」

この瞬間、セシリアの弁当箱はロシアンルーレットになった。「つか、セシリアのおにぎりは握っただけで兵器になるのか……お前

「どうやって握ったんだ？」

麗我は最初の方は小声で、質問の部分だけ強調する。

「ええと……まず軍手をはめて」「まて。そこからおかしい」

「その軍手に色々な物を塗りつけて」

「その『色々な』は聞きたくないな……」

「最後に真心を込めて握りましたわ！」

「最後だけいやに普通なのが腹立たしいな……」

「どうやらセシリアはおにぎりの握り方を根本的に間違えているようだ。」

しかし、この兵器をこのままにしておくのも不味い。

よって、彼らを選んだのは――

「……」「……」「じゃんけん、ぽん」「……」「……」

じゃんけんで順番をきめ、一人一人順番に食べていくことだった。

「まずは私だね」

最初に選ぶのは楯無だった。

残っているおにぎりの数は7個。確率を考えると7分の3の確率になる。

（まあ、死ぬわけじゃ無いだろうし……これでいいや）

と、その内の一つを掴み、無造作に口に入れた。

「ふむふむ、偉いふつグハアッ」

「たっちゃん先輩！？」

「駄目だ、意識が……」

「ちょ、大丈夫なの！？口に入れただけで意識を失うなんて……」

「不味いな、瞳孔が開いている」

「早く保健室に！」

「ああ、そうだな」

こうして麗我は楯無をお姫さま抱っこし、保健室に運んで行った。

……実はその時虚がその光景を隠し撮っており、後で楯無がそれを見て飛び上がって喜んでいたのは余談である。

そして麗我が戻ってから。

「次は僕が行くよ」

2番目に選ぶ事になったのはシャルルだった。

（絶対に選びたくはないけど……もし選んじやったら麗我にお姫さま抱っこ……うう、どっちでもいいや！）

覚悟を決めたシャルルは適当におにぎりをとる。

確率は3分の1。かなり低い確率だ。

「（もぐもぐ）……うん、なんともないよ」

「そうか。良かったな」

（うう……何か、チャンスを失った気がする……）

恋する乙女は色々と大変なようだ。

「次は私だな」

3番目は箒だった。

（一夏にお姫さま抱っこして貰えるかもしれないがあれを食べたくはないし……うう、女は度胸だ！）

ぱくっ

「（もぐもぐ）……うむ、私もハズレのようだ」

「そうか。良かったな箒。それにしても……」

「どうした一夏？」

「お前がおにぎりを食べてる姿が、何か綺麗だな」

（き、綺麗……！）

「どうしたんだ、箒？」

「い、いや、何でもない……」

箒が頬を真っ赤に染めて一夏と逆の方向を向くのを、

（うわ、本日二度目。もうお腹いっぱいだよ）

と、ニヤニヤ笑いをした麗我と、

（何よアイツ、私にも何かいいなさいよ！）

と、殺気を撒き散らした鈴が見守って（？）いた。

「次は私ね！」

と、箒の次の順番である鈴がおにぎりを手にとる。

（ま、大丈夫でしょ。もし倒れても一夏がお姫さま抱っこしてくれるはずだし）

ぱくっ

「きゃああああああああっ！」

食べた瞬間悲鳴を上げた。

「ちょ、鈴！大丈夫か！」

「駄目だ。意識がない――一夏！」

「ど、どうした麗我」

「鈴を保健室に連れて行ってくれ」
だったもの

「まだ鈴は生きてるぞ……」

「（ゲシッ）早く行ってこい」

「グフッ……わかった」

こうして一夏は鈴を普通に保健室に連れて行つた。

（良かった……当たりを引かなくて）
と、箒が思ったとか。

そして。

「ほら、次は麗我の番だ」

「頑張つてね、麗我」

「どうして皆さんが応援しているのかわかりませんが……頑張つて下さいね、麗我さん」

ついに最後から2番目である麗我の番となった。
ちなみにその前に食べた虚は無事であった。

「……なあ、俺逃げていいか？」

「」「駄目だ（です）（よ）」「」

「……………」

「麗我、血の涙を流して悔やんでも駄目だよ」

「ああ、わかつてる」

と、ここで麗我は決意し（本当は諦め）、おにぎりを手にとった。

「あ、手がすべ」

「らないように僕が食べさせてあげるね」

と、シャルルが麗我のおにぎりを取り上げる。

「シャルル！お前！」

「麗我……僕だって怖かったんだよ。自分だけ逃げちゃ駄目だよ」

「なら私が頭を固定しよう」

「なっ！箒！」

「悪く思わないでくれ麗我……シャルルから妙に怖いオーラが出ているのだ……それこそ、『まさか断ろうなんて思っていないよね？』みたいな」

「くそう……」

もはや万事休すであつた。

「ほら、麗我。あーん」

（くそう……ここまでか……）
ぱくっ

「……………あれ？何ともないぞ」

どうやら麗我が食べた物はハズレだったようた。
ということとは……

「さらばだっ！」

最後に残った物はセシリア製の食物兵器であり、順番が最後である一夏が食べる事が決定し、逃走しようとする。
が、

「一夏……まさか逃げられるなんて思ってたないよな？」

それよりも遥かに早く麗我が一夏を羽交い締めに使っていた。

「なっ！離せ麗我！」

「悪く思わないでくれ一夏……これは運命だったんだ」

「こんな運命があるかああああっ！」

「どうとでも言え。――箒ちゃん」

「ああ、わかっている」

と箒が食物兵器を持って、一夏へと向かう。

「止める箒！お願いだ！」

「い、一夏……あーん」

「駄目だ、話を聞いていねえ……！」

顔を真っ赤に染めた箒にはもはや誰の声も届いていなかった。そして。

「や、止める……やめてくギャアアアアアッ！」

また一つ、尊い花が散っていった。

命という、尊い花が。

第21話 寝言とロシアンルーレット（後編）（後書き）

没ネタ

「一夏……」

チュッ

「……へ？」

「□……うつしだ……」

ドサッ

「く、□うつしってグフッ」

ドサッ

たった一つのおにぎりで二つの花が散っていった。
命という、尊い花が。

なんだこりゃ。

にしても鈴が空気＋こんな役柄に……哀れ

第23話 保健室での密会と雑務という名の悪魔（前書き）

最近短いな……

もう少し書いたらまた閑話を入れる予定です。

その時はもう少し長くなるかも……

第23話 保健室での密会と雑務という名の悪魔

side 篇

一夏……早く目を覚ましてくれ……

「う……こ、こは……？」

「一夏！ やつと気がついたか！」

「ほ、箒？ お前、起きるまでそばに居てくれたのか？」

「当たり前だ。千冬さんに事情を説明したら、『お前ならまあいいだろう』と特別に許してもらったのだ」

「そうか……ってことは午後の授業は！？」

「受けてない。ずっとそばにいた」

「そうか……ありがとな、箒」

ありがとな……

やばい。落ち着け私。

「ま、まあ気にするな。お前と私の仲だからな」

「そうか。後、そういえばどうしてお前は俺におにぎりを食べさせる時に顔を真っ赤にして俺の話を聞いてなかったんだ？」 うっ。

そういえば、聞いていなかったような気が……

どうやって誤魔化そう……

「俺に食べさせるのが恥ずかしかったからだろ？」

「そ、そうだ！」

良かった。勝手に自爆してくれた……

「後、どうしてお前はここに残ってくれたんだ？」

「そ、それは……」

ど、どうするべきか……

ええい、この朴念仁め！

「お前と、一緒にいたかったから、だ……」

ああ、顔が真っ赤になっていくのが自分でもわかる……

「へ？ 俺と？」

駄目だ！もう一夏と顔を合わせてもらえない！

「おい、第！」

私は後ろからかかってくる言葉を振り切り逃げ出した。

side 第 end

知っているだろうか？

IS学園の生徒会には、良くも悪くも色々面倒な仕事がある。

デスクワークや部活系統などなど、その仕事は千変万化多種多様、本当に多くの仕事が存在する。

よって、それが意味することは……

「……………（ぐつたり）」

「れーい、まだ来てから一時間位しかたつてないよー」

氷雪麗我という、一人の人間の限界だった。

「ねえのほほんさん」

「なーにー？」

「逃げてもいいかな？」

「駄目ですよ麗我さん」

「うっ、虚さん、お願いだから見逃して下さい！」

「駄目ですよ、貴方はとても有能だ。貴方一人で私達の仕事が2倍にはかどってます。こんなにいるいい機会を逃す手などあり得ません！」

「うおっ、虚さんが燃えている！」

具体的にいうと目の中に炎があるように見え、バックには太陽が輝いている。

「見て下さい、麗我さん！東方は赤く燃えている！」

「ネタ違います！つてより戻って来て下さい！」

という会話をしつつ。

放課後、麗我は生徒会副会長の仕事を手伝うべく、生徒会室でデスクワークをしていた。

そして、その書類の量が

「尋常じゃないくらい有りますね……どうしてこんなに溜まってるんですか？」

「あの方が、最近ちつとも働かないからです……全く。私達が出る分だけはこなしているのですが……」

それを聞いて、麗我は全てを理解した。

この頃、楯無はよく麗我の部屋に不法侵入している。

例えば、ドアを開けた瞬間、メイド服で

「お帰りなさいませご主人様。夕食になさいますかお風呂になさいますかそれともわ・た・しになさいますか？」

や、裸エプロンで

「お帰りなさいませ旦那様。私？私？それとも私？」

などの行為や、ベッドに入ってから5分後に、パジャマで、

「ご主人様。おいしいつけ通りに伽に参りました」

「呼んでないし来るな」

などの麗我の厳しい突っ込みが入るような行為をシャルルと麗我が同室になるまで毎日送っていたのだ。

そりゃ生徒会の仕事なんて殆どやってないだろうというものである。

「……にしても、どんだけあるんですか、」

「これでも随分減った方です。特に……」サラサラサラサラスパビシユスパサラサラカキキドビシユ

「……あの方が本気で仕事をして下さっていますから」

「確かに」

黒神さん家の生徒会長並みの速度で楯無は仕事を行っていた。その理由が、「麗我に格好いい所を見せるのよ！」という、かなりいうよりも完全に利己的な理由であつたがそれでも事実、上のような

効果音が出る位のスピードで仕事を行っていた。

「じゃ、俺も頑張りますか。たっちゃん先輩も頑張ってますし、副会長が会長に負けるわけにもいきませんから」

「じゃ、頑張つてね 麗我」

「わかってますよ、会長！」

こうして、本気を出した麗我と「頑張つて麗我に褒めてもらおう」という利己的オーラー○○パーセントの楯無は、ジオン軍の赤い彗星も真つ青な速度で仕事を再開した。

一時間後。

「お、終わった……疲れた」

「お疲れ様、麗我」

溜まっていた仕事も一段落し、今日はそろそろ終わりにしようという雰囲気になった。

「あ、ちよつと待っていて貰えますか？」

「ええ、いいわよ」

と、麗我は一度自分の部屋に戻り、紅茶のポットと作り終わっていたお菓子をとり出す。

（たっちゃん先輩、喜んでくれるかな）

そう思いながら、生徒会室の扉を開け、

「はい、みなさんお疲れ様でした。これ、良かったら食べて下さい」と、全員にそのお菓子が入った箱を渡す。

「これは何？」「開けてみて下さい」

と、全員が開けると、

「うわぁ……すごい」

「確かに……これは物凄いですね」

「れーい、ほんとーに高校生？」

「はは、まあ一応」

中には、プリンが入っていた。

それもただのプリンではない。

麗我が自分で直接卵農家まで行って買ってきた卵を麗我特製の調味料と麗我の感覚で調理し、麗我自作の

オーブンレンジで焼き上げた後、麗我自作の冷蔵庫でしっかりと冷やした最高傑作である。

イギリスの執事時代にも、多くの王族の舌を満足させてきた絶品、麗我の得意料理の十指に入るだろう。

「とりあえず食べてみて下さい。味に自信はありますが……」

「あるのね」

「まあ、少しは」

とそんな冗談を交えつつ、楽しく休憩をとっていた麗我達だが、（……何か、嫌な予感がする）

と、麗我は何かの予兆を感じとっていた。

丁度その頃。

「はっ！ふたりがかりで来たらどうだ？1足す1は所詮2にしかならん。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」
「……今なんて言った？あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴って下さい』って聞こえたんだけど？」

「場にいない人間の侮辱までしるとは、同じ欧州連合の候補生として恥ずかしい限りですね。その軽口、二度と叩けぬようにここで叩

いておいておきましょう」

「下らん。貴様らの特技は口だけか？口だけの能無しには興味がない。……とっととこい」

「上等！」「」

と、セシリアと鈴チーム対ラウラの戦いが始まるうとしている所だった。

第23話 保健室での密会と雑務という名の悪魔（後書き）

たっちゃん先輩……あんた何してるんですか（汗）

後麗我。お前の執事スキルを俺に3割寄越せ。お願いだから。

第24話 突発的な戦いと心の迷い（前書き）

なんとか書けました……

不調ですorz

第24話 突発的な戦いと心の迷い

「……何かあるな」

麗我は、第3アリーナに向かっていているうちに、何かが起こっていることに気がついた。

そこに近づくにつれ慌ただしい様子が伝わって来るので、騒ぎが起こつていると判断出来たのだ。

「麗我！」

「シャルル、どうした？」

「何かあったみたいだね」

「そうだな」

「観客席で先に様子を見ていく？」

「そうだな。そっちの方が早い」

と、シャルルの提案に従い、観客席に入る。

その瞬間、

ドゴォンッ！

「「！？」」

突然の爆発に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出して来る。

「鈴！セシリア！」

特殊なエネルギーシールドで隔離されたステージから観客席側に爆発が及ぶ事は無いが、同時に麗我達の声も届かない。

その2人は苦い表情のまま、爆発の中心部へと視線を向ける。そこにいたのは漆黒のIS『シュヴァルツエア・レーゲン』を駆るラウラの姿だった。

鈴とセシリアのISがかなりのダメージを受けているのに対し、ラウラも無傷とまではいかないが、それでも2人と比較するとかかなり軽微な損傷に見える。「どうした？その程度か？」

「「まだまだ（ですわ）！」」

とセシリアと鈴がラウラに向かって行こうとする。

「まずい！――投影・開始――」
トレス・オン

と、観客席で麗我もISを展開、千将莫耶でシールドを斬りつける。
……が。

「くそっ……これじゃ無理なのか……どうすれば……っ」

そうこうしているうちに、セシリアと鈴はラウラに倒され、今は一方的な暴虐が始まっていた。

（どうすればこれを破れる！？）

「麗我、雪片は！？」

「それだ！」

シャルルの声で麗我は雪片を投影、零落白夜を発動させ、アリーナを覆うエネルギーシールドをこじ開ける。

「ラウ……さあ、お仕置きだ。きついのでいくから、歯を食いしばれ」
そして、麗我对ラウラのIS戦が幕を上げた。

「はああああっ！」

撃つ。

撃つ。

撃つ。撃つ。撃つ。

が、

「どうしたラウ、遅いぞ」

イグニッション・ブースト
瞬時加速を上手く使われ、全てよけられる。

「くう……っ」

とっさにラウラは右手を突き出しアクチオザンザラAIICを発動。これで、麗我の動

きは止まる――

「悪いが、このISにはそういうのに耐性があるんだ。残念だな、ラウ」

――筈なのに。

何故か、彼女の目の前のISは止まらない。

少し動きが鈍くなる程度で、それ以外は普通に動く。

（な、何故だ！？）

「戦場に迷いは不要だ、減点だなラウ」

一瞬、たった一瞬迷っているうちに、麗我は瞬時加速を発動させ、近接戦闘の間合いに入っていた。

「ならっ！」

ラウラは一瞬で思考を切り替え、両手首のパーツからプラズマ刃を展開させ、近接戦闘が開始される。

「流石だなラウ、伊達に年月は経っていないというわけか」

「はああああっ！」

斬る。

突く。

斬る。

「ち……いつ」

だが、戦いの年月が違った。

がら空きと思われた胴にプラズマ刃を放つ。右手の莫耶で止められ、左手の干将を振り下ろされる。それをもう片方のプラズマ刃を掲げて防ぐ。

そして、迫り来るは莫耶の心臓を狙った一撃。上にブーストして避け、肩の大型カノンを放つ。

それを3連続の瞬時加速で、避ける、後ろに回り込む、近づくとされ、再び近接戦闘の間合いに入る。

「甘いぞラウ」

「前の私とは違う!」
と、計6つのワイヤーブレードを展開、プラズマ刃とのコンビネーションで迎え撃つ。

・・・それでもなお、麗我を仕留めるには足りなかった。

右手のプラズマ刃をさばかれた後、麗我は新しい剣を投影した。

それは、両手で持つ為の西洋風の剣であり、刀身は銀、全く飾り気の無い剣だった。

グラム
「大樹にささりし太陽の剣」

そして、真の能力が解放された。

グラム。

太陽剣とも言われ、シグルドが持ち竜を殺したともいわれる魔剣。

「馬鹿、な」

ラウラが驚いている。

何故なら。

「とりあえず落ち着けよ、ラウ。もう武装は無いんだから、さ」

ワイヤーブレード、プラズマ刃、大型カノン……現在、ラウラに装備されている全ての装備が切り裂かれていた。

「この剣の真の力は・・・」

「やれやれ、これだからガキの相手は」

「姉御!？」

ここで、予想だにしない人物が姿を表した。

その姿は普段のスーツ姿。ISもISスーツも装着していない筈なのに、IS用の近接ブレードを手にとっていた。

「織斑先生だ。……にしても、派手にやったものだな氷雪」

「ち、ちよつとやりすぎちゃいました」

「何だ？お前の師匠を呼んで欲しいのか？確か彼女は――」

「すみませんでしただからどうかそれだけは」

と、一瞬でISを待機状態に戻して頭を下げた。

「全く……いいか、模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナまで破壊する事態になられば教師として黙認しかねる。この戦いの決着は、いやリベンジは学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃるなら」

と言うが早いかラウラはの装着状態を解除し、素直に頷いた。

「氷雪、デュノア。お前たちもそれでいいな？」

「わかりましたよ姉御」

ドガッ！

「わかりました織斑教諭」

「僕もそれで構いません」

頭を剣の腹で殴られ頭を抑えている麗我と、それを慰めながらシャルルは返事を返す。

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

「……………」

「……………」

シャリシャリシャリシャリ

「ほら、林檎の皮を剥いておいたが食べるか？」

「いただきますわ」

「遠慮なくもらうわ」

「俺のもあるか？」

「ない」

「酷くないか!？」

「安心しろ。隣で篝ちゃんが一生懸命に皮を剥いてくれてるだろう？」

「うおつ、篝!いつの間に!」

「さつき、麗我達と一緒に入って来たのだ」

場所は保健室。第3アリーナでの時間から一時間が経過していた。ラウラとの相手の後でボロボロになった2人を連れてきたのだが……
「邪魔しないでよ」

「このままいけば確実にわたくしたちが勝っていましたわね」
これである。

まあ、この後麗我がにつこりとした笑顔で「そうか。それなら今から俺と特訓しようか」との言葉に、何も言えなくなったのだが。
と、その時。

ドドドドドドドッ

何か人が物凄く大量に走って来たかと思うと、

「「「お、織斑君!」」」

「「「ひ、氷雪君!」」」

「「「私とペアを組んで!」」」

と、保健室のドアを開けた女子達がいっせいに言った。

「ち、ちよつと待て。全く話が読めないんだが」

「これだよ、これ」

と、女子の中の一人が差し出した紙には、

「今月開催される学年別トーナメントはより実戦的な模擬戦闘を行うため、二人組での参加を必須とする……って、はい？」

「だからお願い!私と組んで!」

「織斑君、私と!」

「デュノア君、私と!」

と、女子達の声は収まる所を知らないばかりに大きくなっている。

「ま、まあ待て。俺はシャルルと組むって決めてるから」と、とつさに麗我が返す。

これに戸惑うのは、

「れ、麗我!？」

「おい、麗我! お前俺にどうしろって言っただよ!？」

シャルルと一夏の2人である。

「シャルル、俺とじゃ嫌か？」

「い、嫌なわけないよ!」

まずシャルルが陥落し、

「一夏……自分でなんとかしろ」

「麗我、謀ったなああああ!？」

一夏の声を背に麗我はシャルルを連れて保健室の外に出た。

side 箒

「まあ、冰雪君とデュノア君じゃしょうがないよね」

「男同士、っていうのも美味しいし!」

「という訳で、織斑君、私と組んで!」

「いや私と!」

「私とよ!」

保健室は私の予想を越えた人数が集まっていた。

まあ、それも仕方あるまい。

一夏と組むことが出来るのなら、それくらいするだろう。

その中で、私と組むことなど有り得ない。

私だって、組みた――

「悪い。俺、箒と組むから」

――え？

「そ、そうなの」

「まあ、ルームメイトだからしょうがないよね」と、次々出て行く。

その中で、私は啞然としていた。数分くらいただろうか。

「というわけで、勝手に組む事になっちまった。悪いな」

「わ、悪いなんてあるか！」

悪いどころか、とてもいい。

踊り出してしまいそうだ。

しかし――

「どうして？」

「ん？」

どうして――夏は――

「――私と、組んでくれるんだ？」

「へ？そんなもの決まってるだろ。お前が大切な――」

た、大切な！？

「――ルームメイトだからだろ。お前となら、いい戦いが出来ると思うし」

この後、持っていた竹刀で切りかかってしまったのは天罰だろう。私は悪くない。そう思いたい。

side 幕 end

「はあ……」

夜。夕食も終わり、麗我は窓からで星を見ていた。
そのせいだろうか。

「麗我……」

「お、シャルルか。気づかないなんてな」

いつの間にか、シャルルが彼の近くにすることに気がつかないということは。

いや、多分、それは別の事何だろう。

それは、おそらく――

「何を考えてたの？ いや、おかしいよね。第3アリーナでの時も、判断が遅かった」

「なんだ、気づいてたのか」

「伊達にルームメイトはやってないよ」

「そうだな」

麗我は悲しそうに笑う。

「ねえ、何があつたの？ 教えてよ」

「何もないよ。ただ……」

「ただ？」

「ラウが……あんなことするなんて、な」

――そう、全ては。

「俺の弟子が、あんなことをするなんて……どうして、どうしてだっ！」

パリンッ！

麗我の全力の一撃を受けた窓はそれに耐えきれずに割れる。

そして、

「麗我、手が怪我して」

「そんなことはどうでもいいんだよ。なんでラウが……」

麗我の手も、割れたガラスに当たり怪我をする。

「麗我……」

突如、シャルルが麗我を後ろから抱きしめた。

「!!!?」

「麗我、どうして抱えこんでるの?」

「俺は、そんなつもりじゃ」

「抱え込んでるよ。……麗我、何かあるのなら僕に話してよ。ルー
ムメイトなんだから」

「シャルル……」

そして、彼は話した。

昔、ラウラに教えていた時の事を。

sideシャルル

「2年前位に、な。ドイツについた時、不法侵入だったんだ。それを、気づかれて戦闘になったんだ」

「IS戦?」

「ああ。幸いに、っていうか周りに人がいなかったから、な。そういうわけで、上手く無傷で勝った。……ここまではいいんだ」

いや、良くはないと思う。

普通に軍属の兵士に無傷で勝つとか、色々問題ばかりだと思うんだけど。

「その後に、ドイツ軍から依頼があったんだ。1ヶ月間、兵士を鍛えてくれと。その代わりに、欲しい物を補給すると。また、俺も金銭的に危ない状況で、食料もなかった。という訳で受けたんだ」

「凄いいんだね、麗我って」

「ああ、まあな。……それで俺が軍事コーチとして配属されたのが、
ラウ達がいる『黒ウサギ隊』だったんだ」

「ふうん……」

そうだったんだ。

「ラウ、最初は物凄く荒れてたんだ。姉御の後の軍事コーチってこともあり、最初の一週間は特に酷かった。もう、殺気を垂れ流して、夜も気が気じゃなかったよ」

「うわぁ……」

麗我、良く生きてられたね……「で一週間した後位から、ラウの態度が変わっていったんだ」

「そりゃあね……どうせひたすら倒したんでしょ？」

「ああ」

それは尊敬という物ではないだろうか。

「後、まあ3週間、全員に色々と技術を叩き込んで、俺はお役御免になったんだ。ラウ、最後は見違える程柔らかくなったのに……どうして、また……」

「麗我……それは、きっと麗我のせいじゃないよ」

「……え？」

「きっと、彼女にも何か事情があるんだよ。だから、今はまた戦う時を待とうよ」

「……そうだな」

麗我はまた悲しそうに笑い、僕の頭を撫で、

「ありがとな、シャルル。おかげで気が少し晴れた」
と言ってくれた。

（でも、無理は駄目だよ、麗我）

僕は言葉には出せなかった。

そんな僕らを、月は明るく照らしていた。

sideシャルル end

第24話 突発的な戦いと心の迷い（後書き）

次に2話閑話を入れさせていただきます。

誠に勝手ですがご理解の方をいただければと。

閑話 5 研究所と依頼と赤い錬鉄（前書き）

閑話です。

時期は学年別トーナメントの前あたりです。

バトルシーンは疲れますね。

けど楽しいですね。

閑話 5 研究所と依頼と赤い錬鉄

とある研究所。

自立型ISをIS学園に攻め込ませ、一夏の零落白夜によってそのISを破壊された研究所。

その研究所が――

「ば、馬鹿な」

「第2、第3防衛ライン突破されました！」

「馬鹿な！？傭兵とはいえ仮にも数千人数位の軍だぞ！？」

「しかし、止まりません！」

「ありえん……たかが、1人の、それも……武器を持っているとは思えない輩につ！」

その研究所の所長らしき人が怒鳴る。

しかし、ある部下のたった一言でその表情は一転した。

「あの赤い外套……おそらく、『赤い錬鉄』かと」

怒りを伴った表情から、純粋な恐怖に。

第4防衛ラインで麗我は暴れまわっていた。

彼の前方の敵に正拳突き。銃弾など、彼に当たるはずがない。

右一体の相手に回し蹴りを叩き込み、その奥の相手にも肘、裏拳で2人の敵を気絶させる。

「くそおおおお！」

銃弾の連射。しかし、麗我は走って全てをよけ、落ちている銃弾を

敵兵士の指を狙って投げつける。

銃弾並みの速さで移動したそれは、狙い変わらず兵士の持つ銃だけを弾き飛ばし、麗我の膝を頭に食らい気絶する。

陸奥圓明流《電》。いくら落ちている銃弾とはいえ、銃から撃たれたそれと変わらない速度をもったそれは敵兵士にとって十分すぎる脅威となる。

「出来れば、引いてくれないかな。俺は、この研究所をつぶしたいだ――」

「死ねええええええ！」

「――って、言っても聞いてくれないか」

しかし、それでも麗我は相手への説得を止めなかった。

これは、人から見れば甘いと言われる物だろう。

が、彼はそれでも戦いたくはなかった。

「じゃ、気絶位はしてもらおうか」

と、麗我は駆ける。

《電》を使って銃を落とさせつつ、拳や蹴り、肘や膝を叩き込む。

目に映る敵全てを気絶させつつ、ついに麗我は第4防衛ラインを突破した。

「あ、ありえん」

「第4防衛ライン……突破されました」

ギリギリギリギリ

「し、所長？」

「……無人機を出せ」

「はい？」

「無人機を出せ！早く！」
部屋に、所長の怒号が響き渡った。

ピュンツ！

「！！？」

突如、降りしきるビームの嵐。

それをバックステップして避け、

「――投影、開始――」
トレース・オン

麗我はISを装着する。

そして、目の前から見えてきたのは――

「――無人機、か」

『その通りだよ、『赤い錬鉄』！』

と、突如として研究所のスピーカーから声が響く。

「ふむ。ということは貴方がこの研究所の所長か」

『その通りだよ』『赤い錬鉄』。にしても不可解だ。何故我々の邪魔をする？我々は貴様に対して何も干渉は』

「私は今IS学園の生徒なのだよ」

『おお、これは失礼。貴様が今あの学園に所属しているとは。だが、それだけで我々に喧嘩を売るのは？』

「いや、違うよ。ここは篠ノ之束からの依頼でね。位置や地図も、あの人から教えてもらった」

『何！？篠ノ之束だと！？』

「そういう訳で、ここから出て行って欲しいのだが」

『はっ、何故我々が出て行かねばならぬ！出て行くのは貴様だ！』

「交渉は決裂、だな」

心底残念そうに麗我は言う。

『さあ、行くのだ無人機達よ！』

その言葉を合図に、5機の無人ISが出現する。

そして。

「いくぞ」

この言葉を合図に、麗我と5機の無人機は行動を開始した。

撃たれるビームを麗我はひたすら避ける。

『ふははははっ！どうした『赤い錬鉄』、貴様の力はその程度か！
？』

そう言われても、構わずに避ける。

今の状況は5対1。片方に攻撃しに行くと、他から攻撃を食らってしまう。

だが。

「――ロールアウト工程完了、全投影、待機（パレット、クリア）」

既に、麗我は布石を打っていた。

「さあ、かわすがいい！フリーズアウト停止解凍、ソードパレルフルオープン全投影連続層射！！」

その言葉と同時に、空中から3〜40本の魔剣が射出される。

当然のようによける無人IS。

しかし、この攻撃は――

「よし、上手くいったな。いくぞ」

ただ、敵を分断するためだけの物だった。

「その心臓、コア貫いうける」

投影するのは赤き魔槍。かの大英雄、クー・フリーンが振るいし魔槍。

「刺し穿つ（ゲイ）――」

そして、その魔槍は、

「――死棘の槍^{ホルグ}」

5機の内1機のコアを的確に刺し貫き、破壊した。

『ば、馬鹿な』

「次っ！」

今、麗我から一番遠い敵までの距離は約20メートル。

その内の15メートルを瞬間加速で確実に詰め、

「突き穿つ（ゲイ）」

上にその勢いのまま飛び上がり、

「死翔の槍^{ホルグ}！」

右手一本で持った槍を、勢いにのせ全力で投げつけた。

マッハ2で飛来した槍は、まばたきほどの余裕もなく、無人機のコアを吹き飛ばした。

『くっ……ま、まだだ！まだ後3機ある！』

と、残りの3機も絶妙なコンビネーションで麗我を追い詰めようとする。

が、

「甘いぞ、《鶴翼、欠落ヲ知ラス（しんぎ、むけつにしてはんじやく）》」

新たに投影した干将莫耶をその内の1機に投げつける。

『ふははははっ、血迷ったか、赤い錬鉄！その程度の攻撃など、この無人機に当たるはずが』

「《心技、泰山二至り（ちから、やまをぬき）》」

そして新たな組の干将莫耶が追加される。

『何っ！？』

「《心技、黄河ヲ渡ル（つるぎ、みずをわかっ）》」

『ば、馬鹿な！？一度飛んでいった剣が――も、戻って行くだ！？』

所長は知るよしもない。

麗我の手から放たれた双剣《干将莫耶》は互いに引きつけ合うという性質を持つ。

つまり、それを麗我のＩＳで複数を用い応用すれば、はじかれた剣も飛んでいった剣も戻って来るといふ事象が起こる。

それはまさしく剣の牢獄。ほぼ完全に捕らわれた無人機など、

「《唯名、別天二納メ（せいめい、りきゆうにとどき）》」
もう、逃げ場などあるはずもない。

「か、回避しろ！」

最も戦闘に疎い研究所の職員は知るよしも無かったが。

そして8本の剣がほぼ同時に着弾し、

「……終わりだ。《両雄、共二命ヲ別ツ（われら、ともにてんをいだかず）》」

2本の巨大な中華刀によって叩ききられた。

本気の一撃は、絶対防御を貫通し、無人機を4つの屑鉄へと化した。

「な、なんだ、こいつは」

「さて、後2機か。《工程完了、全投影、待機（ロールアウト、パレット・クリア）》

『し、仕留めろおおおおお！』

と、所長の哀れな声が響く。
が、

「《停止解凍、全投影連続層射（フリーズアウト、ソードバレルフルオープン）》」

それよりも遥かに早く、魔剣と名剣による雨が敵無人機に向かって降り注いだ。

今回の一撃は前の一撃とは比べ物にならないほどの密度と厚さを持ち、残りの無人機を容赦なく屑鉄へと化した。

「無人機、全滅です……」

「ば、馬鹿な……」

「馬鹿な事じゃないさ」

「……!!?」

職員達が後ろを振り向くと、

「詰み（チェックメイト）、だな」

ISを解除し、多くの銃弾をポケットに入れ、銃弾を1つ右手に持ちその指先を職員達に向けている麗我の姿があった。

「……どうやら、我々の負けのようだな」

「し、所長!？」

「そう、貴方達の負けだ」

諦めにも似た所長の声とそれに驚く所員、さらに事実を冷静に突きつける麗我へと続く。

「それなら、今すぐ出ていってもらおうか。データは全て置いていってもらうが、異存は？」

「我々は敗者だ。あるわけもあるまい」

「所長……」

「貴様あ……」

「よせ、お前に勝てる相手ではない!」

「黙ってて下さい所長!突然表れて出ていけなんて、私には許せません!」

所員の一人が所長の静止を振り切り、

「死ねええええ!」

と、ナイフを持って突撃する。
が、

「悪いな。お前に恨みは無いんだけど」

と、所員のナイフが届く前に右回し蹴りを叩きこんだ。
崩れ落ちる所員。

「他に来る者は？誰も殺したくはないから、出来れば指示に従って欲しいんだけど」

「……」

一人、また一人と部屋を出て行く。

最後に残ったのは、倒れた所員と所長だけだった。

「1つ、篠ノ之束からの伝言を預かっている」

「……聞こうか」

「『作りが甘いんだよ。完璧で十全な束さんにはあんな不出来な物は許せないんだよ』……と」

「……そうか」

と一言だけ呟き、所長は気絶した所員を背負い、研究所を去っていた。

研究所の所員が全員立ち去った後。麗我は伝声管を使い、研究所全体で倒れている兵士全てに対して、次のような事を言った。

『全員に通達する。現在倒れている全員に通達する。今この研究所は我が支配下に落ちた！また、今から私はこの研究所をこの地図から消滅させる程の大規模破壊攻撃を行う！今から30分猶予をやる。その間に、全員逃げるがいい！』

届くと同時に、通路から走り出す音が聞こえた。

30分後。

最後の脱出者を確認した麗我は、ISを上空100メートルに移動させ、

「よし。遠慮なく破壊するか」
と、巨大な矢を構えた。

いや、それは本当は矢などではない。

三国志至上、最強と謳われた武將、呂布奉先が愛用した武器。

そして、それを構え、

「《全工程投影完了、^{セット}軍神五兵》」
射った。

全力をもって射出したそれは、研究所をただの更地へと化させた。

「終わったか」

それを確認し、麗我は電話をかける。

その相手は、

「おっ、れいくん。終わった？」

依頼者である篠ノ之束。

「ああ、終わったよ、タバ姉。後、1つお願いがあるんだけど……」

「何何？束さんに不可能などない！」

「実は……」

と、麗我は『お願い』を話す。

それを、束は2つ返事で了承した。

それを確認した麗我は電話を切り、IS学園へと帰っていった。

閑話 5 研究所と依頼と赤い錬鉄（後書き）

次の閑話は、『セシリアのパーフェクトお料理教室』となっております！

次回もお読みいただけると嬉しいです。

セシリアのパーフェクトお料理教室（OP）（前書き）

ネタで書きました。

エイプリルフールのネタだと思って頂ければ、と思います。

注

原曲

チルノのパーフェクトさんすうきょうじつ

セシリアのパーフェクトお料理教室（OP）

麗我「キラキラ、被害者の涙」

一夏「輝く、星のように」

麗我「毒薬、死亡フラグなんとかしないと」

みんな「天才？秀才？そんなの関係ねえ！（死、亡）」

バーカ×6

（ちよつと、違いますわ、バカじゃありませんことよ！）

バーカ×6

（バカって言う方がバカなのですわ！）

バーカ×6

（キヤアアアッ、麗我さん！？どうしたのですか！？）

バーカバーカ、バーカバーカ

（ちよつ、おま、死ぬ、え、まっぎゃあああああッ！）

フオウ

昼休み、悪夢の料理、始めに3人食べました

何何と、2人来て、1人だけ食べました

最後には、4人食べて、結局生き残りは合計何人だ？

答えは答えは0人0人何故なら何故ならそれは、

全員あつちに逝きました

一口？意味などないぜ生存フラグ？へし折られるわ

遺書を書いたらみんなで

1

2

ぎゃあああああッ！

くるくる時計の針あれあれ？回ってるのは俺？

だって、私達人間なのに

塩酸とか硫酸とか耐えられない

次々、問題出る

まだまだ死亡者出る

凍る空気の中、ひんやりした空気も
時間も気にせず

ゆっくり逝っていったね

バーカ×6

（だから馬鹿じゃないって言うてるではありませんか！）

バーカ×6

（あれ？一夏さん？一夏さん！？）

バーカ×6

（あれ？鈴さん？鈴さん！？）

バーカバーカバーカバーカ

え？ちょ、おま、やめ、ぎゃあああああっ！

セシリアのパーフェクトお料理教室（OP）（後書き）

この曲に対する感想、突っ込み等も欲しいです。
いやマジで。

閑話 6 麗我のちゃんとしたお料理教室（前書き）

今回は閑話です。

この後学年別リーグマッチに入る予定です。

閑話 6 麗我のちゃんとしたお料理教室

ある休日。

唐突に、麗我はセシリアに言った。

「今日、料理教室をするぞ」と。

「はい？」

「いや、だから今日、料理教室をすると言った」

「どうしてですか？」

「それはだな……お前の料理がもう少し上手くなってくれろと食べる俺達としても嬉しいからだよ」

麗我は嘘は言っていない。

但し、本音はこうだった。

『もうあの食物兵器を口にしたいくはない』

「はあ、わかりましたわ」

「む、麗我、どうしたんだ？」

「麗我、どうしたのよ？」

と、話を聞きつけて箒と鈴音が近づいて来る。

「お、二人とも……丁度いいな。俺も誘おうと思ってたんだよ」

「む、何をだ？」

「何、簡単な料理教室だよ」

この後二人が二つ返事で同意したのは言うまでもない。

と、いうわけでIS学園家庭科室。

副会長という職権を乱用し、麗我はこの部屋を使う権利を得た。

「な、なあ麗我」

「どうしたんだい箒ちゃん？」

「この部屋をどうやって」

『世の中にはね、知らない方が幸せなことだってあるんだよ？』

「わ、わかった」

箒の質問を暗黒オーラで封殺する麗我。

背後には堕天使すら見える。

「じゃあ、みんなまずは適当に料理を作ってくれないかな？お題は、とりあえず何でもいいよ」

「わかりましたわ」

「わかった」

「わかったわ」

「よし、じゃあ調理開始！」

この言葉と同時に、麗我以外の全員は調理に取りかかった。

「まずは箒ちゃんだが……うん、一夏が羨ましい」

「な、何を言っているんだ麗我」

「だって、本当に上手なんだもん。今は何を作ってるんだ？」

「さ、鯖の味噌煮だ」

「それなら水とみりんと酒の量はもちつと多め、しょうゆと砂糖の量はもちつと少な目にした方がいい味が出る」

「そ、そうか」

流石は麗我。あいてを褒めつつもきちんとしたアドバイスをする。執事スキルはここでも役にたつのだ。

そして、次は鈴音の所に赴く。

「な、何よ。文句でもあるの？」

鈴音が作っていたのは、いつものように酢豚だった。

「……鈴ちゃん、そればつかだな」

「う、うるさいわね！これをもっと美味しくしたいのよ！」
「なるほどな」

と、麗我は鈴音の酢豚を見比べる。

確かに、しっかりと作られており、見た目以上に美味いだろう。が、麗我はその弱点を見切っていた。

「鈴ちゃん、もう少し鍋で焼いた方がいいよ」

「ほ、本当？」

「ああ。俺は料理だけは嘘をつかない男だ」

と、鈴音にアドバイスをし、

（さあ、最後だ）

と、金髪の邪神の所に向かった。

「あ、麗我さん」

「何を……作ってるんだ？セシリア」

「馬鹿な事を。ハンバーグに決まってるではありませんか」

「そうか。じゃあ聞こう。どうしてそのフライパンが溶けて（……るんだ？」

麗我は、背中に流れる冷たい汗を意識せずにはいられなかった。

セシリアの所につくと、そこでは

「お前本当に料理をしてるのか？」

という状況だった。

幸い、気づかれていない様子だったので麗我は少し独り言を聞いてみることにする。

すると、次のようなことだった。

「ええっと、ココアの粉末をコーンポタージュで溶かして」

（いきなり料理じゃねえ！）

「みかんともずく、どちらを入れた方がよろしいでしょうか」

（ハンバーグだよな？ハンバーグだよな！？）

すでにハンバーグという概念が崩壊しかけている麗我。

だが、この程度はまだ序の口だった。

「ふうむ。まだパンチが足りませんわね」

（これで！？）

「では、そろそろこれを入れていきましょうか」

と、ポリエチレン製の瓶を取り出すセシリア。

（ああ、こりやもう駄目だ）

そして冒頭に向かう。

だが、既に麗我の精神はまるでK・Oされたボクサーのように擦り切れかけていた。

（とりあえず、今のセシリアには近寄らない方にしよう）

と、麗我は試食者（という名の生贄）を呼びに寮に向かった。

この時、麗我にはセシリアの姿がマッドサイエンティストに見えたとか。

寮。

「一夏」

「お、どうした麗我？」

と、麗我は一夏を呼びにきた。

「いや、ちよつとつきあつて欲しいんだ」

「おう、いいぞ」

この言葉を右斜め135度で捉えた聞き耳をしていた女子達は鼻血を吹いて崩れ落ちた。

「れ、麗我！男同士なんて不潔だよ！」

こつそりと聞いていたシャルルも鼻血をたらしながら麗我に反発する。

「お、シャルル。お前も来るか？」

「え？ど、どういうことなの？麗我？麗我！？」

「夢が崩れ落ちる音を聞いたよ……」

「？どうしてだ？」

と、家庭科室。審査員用の机に座らされたシャルルと一夏。

その中でシャルルは愚痴を言っていた。

まあ、何故怒ってるか気づかない麗我也麗我なのだが。

「じゃあ、3人とも料理を」

と、料理教室に参加した全員が料理を運んで来る。
「じゃあ、試食タイムの始まりだ！」

side 篇

だ、大丈夫なはずだ、問題ないはずだ！
ちゃんと火加減は守ったし、麗我のアドバイス通りにした。
そのおかげで、いつもよりいい味が出ていた。
だから、一夏に「不味い」なんて言われたいはずだ！
そうこうしている間も、一夏は私の作った食事を食べている。
そして、食事が終わり。

「...篇」

「ど、どうしたのだ、一夏」
「何時もより美味しかった」
その言葉で、地面に膝をつく。
良かった……

「ほ、篇！？」

「いや、心配ない。大丈夫だ」
あの一夏の一言が欲しいから、私は料理を頑張っているのだろ
う。

礼を言うのはこちらの方だ。ありがとう、一夏。

side 篇 end

side 鈴音

全くもって面白くないわ！

なんであいつばかり褒められるのよ！不公平よ！

まあ、今回は麗我のアドバイスで何時もより美味しくなったと思うけど……

にしてもあいつ、本当に料理が上手いわね。

あれだけのアドバイスで料理の味がこんなにも変わるなんて、思ってもいなかったわ。

流石は元執事ね。

「鈴」

「な、何！？一夏」

い、いつの間に食べ終えたのかしら！？

いくら何でも早すぎるわ！

「いや、それは鈴ちゃんを考え事してたからだとグハアッ」

うるさい麗我を蹴り飛ばして一夏の言葉を待つ。

「酢豚、美味しかった。ありがとな」

「そ、それは当然でしょ！」

と意地になってしまう私。

まあ、これでいいのかもしれない。

一夏に気持ちを伝えて嫌われる位なら、今のままの方がいい。

side 鈴音 end

「さて、頑張れ」

「麗我、お前あれの処理をさせるためだけに俺達を呼んだらろ」

「さあ、何のことだか」

と、一夏の追求を飄々と受け流す麗我。

そう。今一夏とシャルルの目の前にあるのは、セシリア製の食物兵器だった。

「麗我、あんまりじゃない？」

「さあ、何の事かな、デユノア君」

「！」

麗我の一言にシャルルが固まる。

つまり、麗我は暗黙にこう言っているのだ。

（もし食べなければ、お前が女の子だということをバラす）

（ひ、酷くない！？麗我！！）

（はっ、何とでも言え。俺は死にたくない。死にたくないんだ……！！）

（僕だって死にたくないよ！！）

と、アイコンタクトで会話を交わす2人。

麗我の後ろに黒いオーラが見えるのは、決して幻覚などではない。

「くそっ！食べるよ、食べればいいんだろっ！」

と、一夏がそれを箸で持ち、

パクッ……パタッ

と、音も無く倒れた。

「い、一夏！？」

「駄目だな、何時ものことだが意識がない」

（何時ものことって……）

「箒ちゃん、一夏を部屋で看病してやってくれ」

「わかった」

と、一夏を背負い家庭科室を出て行く筈。

「ま、待ちなさいよ！」

と、その後を追って鈴音も出て行く。

「ねえ、麗我」

「どうした？」

「もし僕が倒れたら、看病してくれる？」

「当たり前だろ」

「良かった」

と、シャルルも覚悟を決め、セシリア製の料理を口にし――

彼らが目を覚ましたのは、3日後だった。

閑話 6 麗我のちゃんとしたお料理教室（後書き）

すみません。

二つ、募集を行わせていただきます。

一

セシリアに作らせたい料理を送ってきて下さい。

レシピはあっても無くても結構です。

ネットで探しますので

（料理下手）

二

セシリアの料理に混ぜる有毒物質の名前、出来れば組成式のようなものもお願いします。

作者は文系なので有毒物質の名前がわかりません。

この二つ、出来ればよろしく願います。

第25話 戦いの前の静けさ（前書き）

とても短いです。

次はバトルです！

第25話 戦いの前の静けさ

「はあ……俺、勝てるかな」

「大丈夫だ一夏。自信を持て。あれだけ麗我達と特訓したのだ。負けるはずがない」

「そうだよな」

時期も6月の下旬となり、ついに学年別リーグマッチが始まろうとしていた。

「ありがとう、箒。自信が出た」

「ふ、ふん！別にお前の為などではない。私のチームメイトだからだ」

「それでも言って起きたいんだよ。ありがとな」
「っ！」

一夏が礼を言うたびに箒の顔が赤くなっていく。それを見て、周りの女子は思った。

『別の所でやってこい、このバカップルが』
と。

だが、そんなこととは露知らず。

「一夏」

「ああ」

電光掲示板に一夏と箒の名前が表示される。

その対戦相手は、

「いきなりか」

「まあ、順番が早いぶん手っ取り早い。倒すぞ」

「ああ、分かっている一夏」

ラウラ・ボーデウィツヒ。

一夏達は初戦にしていきなり因縁の相手と戦うことになった。

「その事務員さん」

「あら、何かしら？」

「ちよっとお茶でも飲んで一息つきませんか？」

「あら、いいわね。お相手するわ」

同時刻。

麗我は、周囲を見回っている内に、事務員と出会い、お茶を勧めた。その事務員もそれを了承し、麗我と共に休憩しに行くことにした。

「にしても事務員さん」

「あら、何かしら？」

「とても綺麗ですね」

「いやだわ、照れちゃうじゃない」

……まるでナンパのように見えてしまうのは目がおかしいからではない。

「ええ。本当に。貴女みたいな事務員は今までに見たことがない（・・・・・）ですよ」

「……何が言いたいの？」

「まあまあ。お、つきました」

麗我が事務員を連れて入った部屋は倉庫だった。

色々な物が乱雑に置かれた倉庫。

その中に、一際だけ、綺麗に整頓された空間があった。

見ると、その空間の中心には真っ白い綺麗なテーブルが置いてあり、その上には紅茶らしきもののポットが置いてある。

「さ、かけて下さい。事務員さん、いや《亡国企業》ファンタム・タスクのエージェン
ト、スプリングさん？」

「！」

とっさに事務員――スプリングは身構えるも、

「遅いですよ」

と首筋にサバイバルナイフを突きつけられる。

「なるほどね。ここにのこのことやってきてしまった時点で、私に選択肢は無かったってわけだ」

「ま、その通りです。さ、掛けて下さい。大丈夫です、椅子に毒なんか塗ってないですよ」

「仲間には呼ばないのかい？」

「呼ばないも何も、これは俺の独断ですから。何なら言質でもとりますか？」

「……わかったよ」

と、スプリングは席につく。

「まあまあ、紅茶でも飲んでリラックスして下さい。スコーンもありますよ？」

「毒は？」

「入れてあるわけじゃないでしょう。この俺、『赤い錬鉄』の名においてそんな無粋な物を入れていないと誓います」

「……わかったよ」

と、スプリングはポットの中の紅茶を適当に入れ、

「……美味しい」

と、その味に感動した。

「俺が入れましょう。そんな入れ方じゃあ本当の味は出ない」

と、麗我がスプリングの紅茶を注ぎ、スプリングはその味を堪能した。

「お菓子もありますけど、どうしますか？」

「じゃあ、いただきますかね」

と、10分間、スプリングは紅茶とお菓子を堪能し続けた。

10分後。

「で、何が目的なんだい？」

「単刀直入に言います。私は貴女を雇いたい」

と、麗我はこのお茶会に誘った理由を話した。

「私は亡国企業のエージェントだよ？」

「今は（・・・）でしょう？」

「どういことだい？」

スプリングの動揺を表すかのように、持っていた紅茶に振動が走る。

「貴女は、腕の立つ傭兵だ。違いますか？」

「・・・ハッ、良くわかったね、ガキの癖に」

紅茶を喉に流し込み、豪快にスプリングは笑う。

「昔、《亡国企業》^{ファントム・タスク}と戦った時に、貴女の姿は見えませんでしたから」

「なるほどね。で、報酬は？」

「貴女が今《亡国企業》から支払われている額の2割り増しでどうでしょう」

「……何でそんなに金を支払えるんだい？」

「さあ。御想像にお任せします」

麗我も椅子に座ったまま笑みを崩さない。

「へえ。でも、私を雇うには条件がある」

「条件？」

「ああ」

と、スプリングは笑みを浮かべ、

「私を倒すこと。今の雇い主は私が裏切ることを許さなくてね。私が完全に倒れないと許してくれないんだよ」

ISを起動させ、浮かび上がった。

「いいだろう。貴女を倒そう」

と麗我もISを起動。

ここに、二つの戦いが始まった。

第25話 戦いの前の静けさ（後書き）

有毒物質、料理のネタ、まだまだ募集中です！

第26話 倉庫での激闘（前編）（前書き）

W A R N I N G
W A R N I N G

今回は7巻に出て来た新キャラクターが出てきております。

「ネタバレは嫌だ」と言われる方や「まだ7巻を読んでない」という方、「こんなの嫁じゃねえ」と言われる方は7巻を読んでからお読み頂けると嬉しいです。

「ネタバレになるが大丈夫か？大丈夫だ、問題ない」と言われる方や、「7巻を読んでないが大丈夫か？大丈夫だ、問題ない」と言われる方、「嫁でない」と言われる方はそのままお願いします。

警告はしました。文句は受け付けません。

第26話 倉庫での激闘（前編）

麗我とスプリング。相対した彼らは、これ以上話すことはないと言も話さず、

両者、同時に動いた。

（もう、忙しい、のに）

更識^{かんざし}簪は、倉庫近くの道を歩いていた。

すると、突然爆発音が広がり、それが気になって仕方ないのだ。

（私の、《打鉄式》も、まだ完成には、程遠いのに……）

それでも、好奇心を抑えきれず、倉庫の中を覗いてしまう。すると、

「くそっ、やっぱアンタのISは反則だな！なんだいその能力は。全くどこから剣が出て来るかわかりやしない」

「反則なのはそちらも同じだろう。なんだその《速さ》は。普通に移動しているだけに瞬時加速並みじゃないか」

「はっ！当たり前だろう。このISは《騎乗兵^{ライダー}》、戦場を舞う一陣の疾風ってわけよ！」

（何、これ……？）

今まで簪が見たこともないような、《本気》の戦いが繰り広げられていた。

簪もIS学園の生徒だ。

模擬戦ならもうかなりの数を見てきただろう。

だが。

（何なの？この戦い……今までの戦いとは、何かが、違う……）
互いに命を懸けた《本当》の戦いは、まだ見たことが無かった。
すると。

長い紫の髪を垂らしたISの操縦者が、こちらを向き、
ニヤリと笑った気がした。

（ま、ずい……でも……足が……）

「はあっ！」

騎乗兵と呼ばれたISが、簪に向けて持っていた杭を投げた。

「ふん。どこに向かって投げている、スプリング」

「なら見てみなよ。私が投げた方向をさ！」

怪訝になった麗我が簪の方を向くが、もう遅かった。

杭は簪まで後5メートルという所まで迫っており、簪も恐怖で体が
凍りつき、動くことが出来なくなっていた。

「くそがああああっ！」

とっさに麗我は瞬時加速し、簪の所に行こうとして、

グサツ、と。

杭が、何かを刺し貫いたような音が聞こえた。

side 簪

（私……死んじゃった、のかな……）

「大丈夫か？おい、大丈夫なのか！？」

（に、しては、うるさい）

と、私が目を開けると、

「良かった。死んでなかったらしいな」

赤い外套のようなISを装着した少年が、とっさに私を庇ってあの杭を代わりに受けていた。

絶対防御は発動しているらしいけれど、かなりのシールドエネルギーが削られていることくらいは、私にだって、わかる……でも……

どうして……

「どうして、私なんかを、かばったの……？」

ポン、と頭を小突かれる。

「名前は知らないけど、お前にも言つとく。俺は、自分『なんか』つてつける奴はだいつきらいだ」

「……へ……？」

「……つまり、どういう……こと……？」

「『なんか』つていうのは、自分に自信がない証拠だ。そうだろう？」

「え……」

ギクツとする。

確かに、私は、自分に自信がない……

私の、姉のせい……

「自分に自信を持たなくちゃ駄目だ。お前は、美人だし綺麗だ」

え？わ、たし……褒められてる……？

「それに、お前が自信を持たなくちゃ、お前に期待してくれてる人はどうなるんだ？」

「え……？」

そんなこと……考えてもみなかった……

「だからまず、『なんか』なんて言うのは止めてくれ。それでもつて、さつき助けた礼としてはなんなんだけど、この戦いを見てくれないか？」

え……？

いきなり……どういうこと……？

「いや、色々と先生や上司に言い訳するのが面倒でさ……頼む。俺にはお前が必要なんだ」

「……わかった。見てる。だから、その前にあなたの名前を教えて」
え……？」

今、自然と言葉が出てきた……

どういうこと……？」

すると少年は、驚いたような表情をしながら、

「わかった。俺の名前は氷雪麗我。ここの副生徒会長をやってる。
よろしくな」

え……？」

じ、じゃあさっきの『上司』って……

「じゃ、俺はアイツを倒して来るから、安全だと思う所で見ててくれ」

そう言ったと同時に出てってしまった。

麗我、か……

side 簪 end

「よう。用事はすんだかい？」

「ああ。無駄な時間をかけたな、スプリング」
こうして、再び始まる戦い。

（す、ごい……）

簪は、それを見てこうとしか思えなかった。

圧倒的な速さで動きながら杭を投げつけたり近接攻撃を仕掛ける《
ライダー
騎乗兵》。

それら全てを軽く受け流し、カウンターを仕掛けたり弓で狙い撃つ麗我。

（でも、私の、せいで……）

シールドエネルギーの残量は圧倒的に《騎乗兵》ライダーが上だ。

でも今の簪には、見てることしか出来ない。

それが今の彼女には、とても悔しいことに感じられた。

「どうした？防戦一方じゃあないか！」

「ハッ、今のうちに言っているがいい！」

麗我は右から飛んでくる杭を弾き返す。

が、既に右にスプリングの姿は無く。

「ほらほらあ！」

と、後ろには杭――に見える短剣で斬りつけるスプリングの姿があった。

とつさに振り向いて干将莫耶で受け止めるも、カウンターの一撃を繰り出せない。

（予想以上に強い……っ！）

前回の戦いではスプリングに慢心があったから麗我の得意な領域で戦う事が出来た。

だが、今回は、

（奴には一片たりとも慢心はない……っ！）

前回の敗戦でスプリングには理解出来たのだろう。

《赤い錬鉄》には本気でいかなば勝てない、と。

だから、彼女の本来の戦い方に戻した。

ヒットアンドアウェイ
それが一撃離脱戦法。

恐らくスプリングのISの移動測定は、麗我の《アンリミテッド・ブレイド・ワーカー》を凌駕しているだろう。

また、今は何とか凌いでいるがいつかは攻撃を食らってしまうだろう。

「なんとか……しないと……っ！」

「はっ、次はここだぜ！」

いつの間にか目の前にいたスプリング。

麗我は干将莫耶でひたすら攻撃をいなし、弾き返す。

（チャンスは今しかない！）

と考えた麗我は干将莫耶を破棄し、新たな武器を手につけた。

それは、アルスター神話の太陽神、ルーが持ったと言われる槍。

その槍をスプリングに向け、

「轟く五星^{ブリュナク}」

麗我は、槍の真の力を解放した。

第26話 倉庫での激闘（前編）（後書き）

簪！簪！（簪！簪！）

可愛い簪！（可愛い簪！）

簪「え……こ、困る……」

麗我「自信を持てよ。お前は美人なんだから」

簪「……キユウ……」

ボタン

麗我「か、簪！？簪いー！」

っていうのも面白いですね（笑）

次回もその次もバトルです。

……春休みの宿題終わってない（汗）

第27話 倉庫での激闘（後編）（前書き）

一言だけ言わせて下さい。

今回の話、駄文にも程があるorz

ご都合主義満載+簪が上手く書けない+絶不調

はあ。反応が恐い。

第27話 倉庫での激闘（後編）

轟く五星での一撃は、スプリングの身体を掠らせるに留まった。

（チイツ！他の武器を使うべきだったかつ！）

（まさかコイツでよけられない攻撃があるとわね……流石は『赤い錬鉄』といったところかね）

そのままスプリングは後ろに《瞬時加速》し、

「さあ、私の本気、しかと受けな！いくぜ、《

（ゴルゴンの末妹）》！

『わかっています、マスター』

スプリングのISが話したかと思うと、

「うつ！！？か、体が」

「動かないだろう？これが、このIS」

（ゴルゴンの末妹）《ワンオフ・アビリティー
の単一仕様能力、《石化の魔眼

》だよ」

「石化……！？」

「ああ。まあ、本当に石化するわけじゃないがな。単にそっちの機体に自動で悪性情報を仕掛け続けるだけのチャチな能力さ。まあ、並みの機体ならこれだけで制御不能に陥るんだけど……ここまで動けるISは初めて見たよ」

「そりゃ……どうも……っ」

麗我は憎まれ口を返す。

が、

（くそっ……全スペックが2段階下がってやがる……おまけに、あの単一仕様能力の対策に、常にシステムの3割をしかなきゃならねえ……どうする！どうすればいい！）

心の中は、憎まれ口を本気で返せるほど冷静ではなかった。

「じゃあな、『赤い錬鉄』。楽しかったけど、ここらで終わりだ。長引かせると後が恐いんでな」

と、スプリングは最大の技の発動体勢に入る。

ここに至って、麗我は絶体絶命のピンチとなった。

side 簪

何？あれ……

私は、目の前の状況が信じられなかった。

急に麗我の動きが悪くなったかと思うと、あの《騎乗兵》^{ライダー}って呼ばれてたISの操縦者が何を考えたのかわからないけれど自分の首に杭を刺して、それで何故か変な幾何学模様の魔法陣みたいなのが出た……

一体、あれは何なの……？

でも、私でも確実にわかることが一つだけ、ある……

それは……

「この一撃を食らったらおしまいだよ」

何か、はわからないけれど、あれを食らったら、勝負は決する……

「さあ、覚悟はいいかい？」

「ああ。貴様を倒す覚悟ならとうの昔についている」

でも、当の麗我は双剣じゃなくて刀を一本もつだけ……

あんな刀で、勝てるわけがないのに……

「ぬかしときな。いくよ！《騎兵の（ベルレ）》」

そして、あの《騎乗兵》^{ライダー}の操縦者が、彼女のISを魔法陣に突っ込ませ、

「《手綱！》^{フォーン}」

その後、一瞬で勝負は決した。

「馬鹿……な」

「残念だったな」

私が見たのは、ISのシールドエネルギーが0になりISが解除され、気絶した《騎乗兵^{ライダー}》の操縦者と、既にISを解除して、こちらに笑いかけてくる麗我の姿だった。

side end

「《騎兵の（ベルレ）》……《手綱^{フォーン}》！」

麗我の目の前に死の具現が迫っていた。

その攻撃は、かつてIS学園の第三アリーナを余剰な風圧だけで半壊状態にした攻撃。

まともに食らえば絶対防御をも通り抜け麗我の体に大ダメージを与えるだろう。

だが。

（この剣を使おう）

麗我は、あくまでも冷静だった。

そして、麗我が投影したのは一振りの日本刀。普通の日本刀なら《^{ベルレフォーン}騎兵の手綱》による攻撃を食らえば、確実に折れてしまうだろう。

だが、その日本刀はただの日本刀ではなかった。

かの立花道雪が持ったといわれる名刀であり、雷を切り裂いたとも

言われる刀。

その真名を、《騎兵の手綱》^{ベルレフオーン}が直撃する前に、麗我は唱えていた。

「《雷切》^{ライキリ}」

そして、勝負は決着した。

「ば、馬鹿な……あんな日本刀で、受け止められるわけがないじゃないか」

「ああ。ただの日本刀ならな」

「どういうことだ」

「あの刀は《雷切》^{ライキリ}。かの立花道雪が持ち、雷を切ったとされる名刀だ」

「はっ……そんなの、迷信だろ……？ 雷なんか、切れるわけがない（……………）じゃないか」

雷の秒速は光と同じ約30万キロメートル。

いかな名将であろうとも、刀を振り抜く間もなく雷の直撃を食らってしまうだろう。

――《雷切》^{ライキリ}以外の刀なら。

「あの刀はな、振り切る事で自分に向けられた攻撃を全て無かったこと（……………）に出来る刀だ。タイミングは難しいがな」

「なるほど。そういうことか」

スプリングには、自身が負けた理由がわかったのだろう。

「その刀……《雷切》^{ライキリ}を振り切って、私の《騎兵の手綱》^{ベルレフオーン}を無かったことにしたんだな。そして、《騎兵の手綱》^{ベルレフオーン}が無効化されたこと

を知らない私を、返す刀で叩き斬ったってわけか」

「そういうこと。まあ、危なかったけど」

いつの間にか麗我はISを解除し、スプリングに向かい合っていた。

「ふう。私の完敗だよ」

「ギリギリですよ」

「はっ。そう言ってくれると嬉しいねえ」

とスプリングは朗らかに笑う。

何かを吹っ切ったかのように。「もう一度言います。私は、貴方を雇いたい。この依頼、受けて下さいますか？」

「いいぜ。雇われてやるよ。金額は『ファントム・タスク亡国企業』の時の2割でいい」

「えっ!？」

「何を驚いてるんだい？私はアンタに2度も負けたんだ。アンタには、私を殺す権利がある。それなのに、こんな敗者を雇いたいなんて言われたら、私はこうせざるをえないんだよ」

「お人好しですね」

「よく言われるよ」

ハッハッハ、と豪快に笑う。

そして、

ボタン、とスプリングが気絶し、麗我の勝利が決定した。

ちょうどその頃。

「箒。そっちはどうだ？」

「ああ、大丈夫だ。作戦通りこちらの相手は既に倒した」

一夏達がラウラ達に対してとった作戦は、先にもう片方の敵を倒して2対1で戦うというものであった。

その作戦は見事に機能し、現在ラウラのパートナーであった女子が地上で悔しそうに膝をついている。

「愚かな……2対1なら勝てるとでも思ったか」

「ああ」

「ならその思い上がり、消し飛ばしてやろう！」

と、ラウラが一夏に向かって瞬時加速する。

「いくぞ第！この1ヶ月の特訓の成果、見せてやろうぜ！」

「ああ一夏！」

そして、一夏達の本当の戦いが幕をあげた。

第27話 倉庫での激闘（後編）（後書き）

雷切の設定はこうしました。

だって、雷なんて、切れるわけないでしょう！？ねえ！

次回もバトルが続きます。

良ければ見てって下さいm（――）m

第28話 アリーナでの激闘（前編）（前書き）

とても短いです。

……ごめんなさい

第28話 アリーナでの激闘（前編）

「大丈夫か」

「え、う……うん……」

差し出した麗我の手を簪は素直にとった。

「あ、あの……」

「どうした？」

「た、助けてくれて……あり、がとう……」

「気にするなよ。それよりも、名前は？」

「更識……簪……」

「なるほど。簪が……え？更……識……？ってことは……まさか……」

……

「あなたの上司……更識、楯無の、妹……」

「な、何iiiiiiii!？」

麗我は驚きとその他諸々による悲鳴をあげた。

「さあ、作戦Gでいこうぜ、箒」

「了解した、一夏」

「何を考えているかは知らんが……無駄だ」

一夏は一度別の方向で飛翔し、箒が突撃する。

「……ほう、貴様が相手か」

「ああ」

対するラウラもワイヤーブレードとプラズマ刃を展開して迎撃する。

「くっ……」

「どうした、そんなものか」

いくら箒が全国大会で優勝したという実力があっても、手数が違いすぎた。

片や刀一本。

片やワイヤーブレード六つとプラズマ刃2つ。

絶対的な手数の差により、箒は追い詰められていく。と、その時。

一夏が、何も音をたてずに瞬時加速で斬りかかった。

（馬鹿が）

いくら奇襲とは言えども、落ち着いて対応すれば何も恐いことはない。

そう思い、ラウラは4つのワイヤーブレードを一夏への迎撃に向かわせる。

ここで、いくつか思い出して欲しい。

先程まで、ギリギリとはいえ箒は八つの刃を防いでいた。が、今はその刃が四つに減った。

また、一夏達はラウラの刃の限界数を『知っていた』。

それが生み出した結果は、

「はあっ！」

箒は、四つの刃をいとも簡単に弾き返し、ラウラに切りかかった。

「な、何いっ!？」

ラウラは驚くも冷静に対応策を考えようとする。

が、残る刃を箒への迎撃に回すと一夏の斬撃が直撃し、下手に肩のレールカノンを撃つと、その衝撃に巻き込まれるということに気づく。

「ちいっ！」

それでも斬撃を食らうよりましだと、ラウラはレールカノンを放ち

――

――それを箒に回避されたラウラは、今度こそ行動を何も起こせなかった。

そして、箒の渾身の一撃がラウラに吸い込まれた。

「すごいです！織斑君達、ラウラさんに一撃いれましたよ！」

「まあ、私の弟だからな」

そう言いつつも、千冬は表情は嬉しそうだ。

「織斑先生、本当に織斑くんのが好きですね」

「……山田先生、後と一緒にISの模擬戦をやりましょう」

「す、すみませんでした！」

「私は弟の事でいじられるのが嫌いだと言った筈ですよ、山田先生」
そこで会話をきり、千冬は試合の観戦に戻る。

（にしても、まだアイツは力を暴力と一緒にしているのか。だが、

――それでは一夏には、かなわないだろう――

そして、また試合が動いた。

「くそっ、やってくれたな……！」

と、ラウラは牽制にレールカノンを放つ。

それを避けた筈に瞬時加速し、六本のワイヤーブレードを上手く使い攻撃する。

が、今の状況は二対一。

今度は下から一夏が突撃する。

しかし、ラウラはそれを必ず応戦しなくてはならない。

何故なら、白式の単一仕様能力によるものである。
ワンオフ・アビリティ

白式の単一仕様能力である《零落白夜》は、食らうと必ず絶対防御が発動する、食らえば恐ろしい能力である。

それを発動するためにはシールドエネルギーが減少するが、万が一にも食らってはいけない技である。

それを利用し、麗我は一夏と筈にある話をした。

「お前ら、テ スの王 様って漫画読んだ事あるか？」

「名前だけは……」

「私もだ」

「まあいい。じゃあラケットのうつ、面の部分をガットと言っ。こ
こまではまずいいか？」

「ああ……」

「その中にうつた球を相手が打ち返すと必ずラケットに穴が空く、
つまりガットを断ち切る球がある。これはどうだ？」

「さ、最強じゃないか！」

「そうだな。じゃあ、それを無効化する球があったとする。ただし、それは物凄く腕に負担がかかる。後の方になって、相手は普通の球を打ちだした。でも、こっちはその球をうたなくつやならないんだ。何故かわかるか？」

「それは……万が一にでも打たれたら負けるから、だろ？」「その通りだ一夏。つまり、俺の言いたいことは、切り札は見せておくだけでも効果を十分に発揮する、ってことさ……」

つまり、一夏は《零落白夜》を使わなくてもいいが、それを必ずラウラは何らかの手段で対応しなければならない。

そこに、ついている隙がある。

そこで、麗我は一夏に『絶対に零落白夜を使わない』ように指示をした。

また、1ヶ月の間に、銃弾を回避するコツを叩き込んだ。

つまり、麗我は一夏達に剣でひたすら地味に削るように言ったのだ。そうして、その指示は的中することになる。

ラウラの遠距離攻撃は一夏達に全て避けられ、近接攻撃も二人という手数の差で押し切られはじめた。

第28話 アリーナでの激闘（前編）（後書き）

元ネタ

真田 一郎『風陰林火山雷』

動くこと雷てい（字忘れたorz）のごとし

手塚 光『手塚フロントム』

ごめんなさい。必ず後で後編を書きますので！！

第29話 アリーナでの激闘（後編）（前書き）

……色々と苦労しました。

結構、英語表記のやつに力を入れたり、戦闘描写をよくしようと頑張りました。

その結果がこのザマです。笑いたければ笑うがいい！アーツハツハツハツ（自虐）

第29話 アリーナでの激闘（後編）

一夏達がラウラに対して有利に立ち回っていた頃。

「……どうしたの……？」

「……何か、嫌な予感がする」

麗我は、明確に何かが起こる気配を感じ取っていた。

「すまん、簪。ちょっと今からアリーナまで飛ばすから、お前とはここで一旦お別れだな」

「……私も、一緒に、行きたい……駄目？」

「うっ」

簪の見捨てられた子犬のような目に、麗我の精神は耐えきれなかった。

「……わかった。じゃあ、これで行くぞ！」

「……え？きやあっ！」

麗我は、簪をお姫様抱っこで抱え、一夏とラウラが戦っているアリーナに向かって全力疾走し始めた。

side 簪

何で、あんなこと言っちゃったんだろう……

いくら衝動的とはいえ、あんな『連れてって』なんて……私、一体どうしちゃったんだろう……

「簪、大丈夫か？」

「うん……大丈夫……麗我の方こそ……重くない……？」

私なんてお荷物を持つよりも、1人で行く方が早いはずなのに……
どうして麗我は、私と一緒に連れて行ってくれるんだろう……

「へ？お前がか？全然重くないし、むしろ軽い方だ。お前、ちゃんと飯食ってるか？」

でも、返ってきたのは、予想もしない答え……

「え？ど、どういうこと……？」

「言葉通りだよ。本当にちゃんとご飯食べてるのか？食べてないならたまに作りに行かなきゃならないな……」

え、ええ……？

れ、麗我が……

私の為に……？

「そ、そんなに、食べてない……かも……」

え、わ、私……？

「そうか。でも、この話はまた後でな」

そう言ったかと思うと、麗我はさらに走るスピードをあげた。……

私、本当にどうしちゃったんだろう……

side end

「うおおおっ！」

一夏が突撃する。

いかに零落白夜は使われてはいないとはいえ、『使われて一撃を食らったら負ける』ということがあるため、ラウラはそれを受けなければならぬ。

だが、

「後ろがから空きだぞ」

後ろから箒の太刀が迫る。

とっさの判断でラウラはワイヤーブレードを向かわせるも、全て弾かれ、シールドエネルギーを削られる。

（くっ……これではA I Cは使えない……！）
アクチオザンシャ極ラ

ラウラがA I Cを使う時の致命的な欠点。

それは、『使用時は動きがとれない』ということだ。

確かに、レールカノン等の遠距離攻撃は放てるだろうが機体を移動させることが出来なくなってしまう。

また、既に一夏達にラウラの砲撃は見切られ、遠距離攻撃は意味が既に無くなっている。

第三に、一夏達の波状攻撃は、息をつかせぬ程の激しさを持っている。つまり、A I Cで片方の動きを止めても、もう片方の攻撃が直撃してしまう。

これが、麗我の幾つかの指示の一つである、『A I C封じ』だった。
「ちいいっ！」

ラウラは即座に箒に瞬時加速し、八つの刃による近接攻撃を仕掛ける。だが、

「うおおっ！」

それを一夏がみすみす見逃すわけがない。

「ちいいっ！ちょこまかと！」

即座に防御体制に入るラウラ。が、

「私のことを忘れてはいないだろうな？」

一夏への防御体制に入ったことにより出来てしまう僅か一瞬の隙。その僅か一瞬を、剣道の全中制覇者である箒が見逃すだろうか？
否。

「はあああっ！」

僅か一瞬のうちに、自分に向けられていた全てのワイヤーブレードを剣で弾き、ラウラに一撃を叩き込む。

（くっ……もう、もたない……！）

「終わりだっ！」

そして、一夏の《雪片二型》による斬撃がラウラに吸い込まれた。

（こんな……こんな所で負けるのか、私は……？ いや、違う！ 私は、必ずコイツを敗北させると決めたのだ！）

それは、ラウラが彼女自身の心に刻み込んだ《誓い》だったのだろ
う。

麗我の、仲間を守るという誓いと同じように。

（それに、コイツに勝てなければ、麗我をドイツに呼び戻すなんて
出来ない……）

彼女はまだ気づいていない。

それが、麗我を想うあまりの独占欲だということに。

（力が、欲しい）

『願うか……？ 汝、自らの変革を望むか……？ より強い力を欲する
か……？』

冷静に考えれば、ラウラにもわかったであろう。

そんな簡単に力は手に入らないと。

だが、今の彼女は、冷静では無かった。

これはまさに悪魔との契約。契約をしたが最後、魂を持って行かれ
てしまう、望んだ結末なんて永遠にこないモノ。
ハッピーエンド
だが、

（言うまでもない。力があるのなら、それを得られるのなら、私な
ど――空っぽの私など、何から何までくれてやる！）
そうであっても彼女は、

（だから、力を――比類無き最強を、唯一無二の絶対を私によこせ

！)

D a m a g e L e v e l D .
M i n d C o n d i t i o n U p l i f t .
C e r t i f i c a t i o n C l e a r .

《 V a l k y r i e T r a c e S y s t e m 》 b o o t .

この契約にのるしかなかったのだろう。

変化は突然だった。

「あああああつ!!!」

ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を發したと同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれ、二人の体がぶっ飛ばされた。

「い、一体何が起こつたのだ……。――!?!」

「な、何?!?!」

一夏と箒は――いや、恐らく会場にいた全員が目を疑つただろう。

何故なら、彼らの視線の先では、ラウラが――いや、彼女のISが変化していた。

いや、それは変化などという枠に収まりきる物では断じてなかった。その装甲はぐにやりと溶け、どろどろの物になって、ラウラを包み込んでいく。

そして――シュヴァルツェア・レーゲン『だったもの』は、全く別の形へと変化していた。

それは、前回の『全身装甲』のISに似た『何か』。しかし、前回の襲撃者とは似ても似つかない姿を持っていた。

ボディラインはラウラをそのまま表面化した少女のそれであり、最小限のアーマーが腕と肩につけられている。そして頭部はフルフェイスのアーマーに覆われ、目の箇所は装甲の下にあるラインアイ・センサーが赤い光を漏らしていた。そして、その手に持っていたのは、

「《雪片》……」

織斑千冬がかつて乗った『暮桜』。その唯一絶対の武器に酷似していた。

そして、一夏の方を見たかと思うと、

「……」

瞬時加速を用い、一夏に接近する。

そして、黒いISから放たれる必殺の一撃。何よりも見慣れた千冬の太刀筋で放たれた一撃をなんとか一夏は弾き、

「……それが、今の彼の限界だった。

神速の速度で放たれた二撃目に一夏は反応すらできず崩れ落ちる。

「一夏っ……」

そして、筈の一瞬の動揺を、黒いISは見逃してはくれなかった。動揺により一瞬生じた隙。その一瞬で黒いISは筈のシールドエネルギーを零にしていた。

「くそ……まだだ」

ぎりぎりでシールドエネルギーが残った一夏が、瞬時加速を使い黒いISに近づく。

だが、そこは同時に黒いISの間合いでもあり、

「……」

「嘘だろ……」

一夏のシールドエネルギーが、一瞬にして吹き飛ばされ、ISが解

除される。

だが。

「うおおおっ！」

それでも一夏は、諦めてはいなかった。

拳を握り、黒いISに特攻する。

しかし、その体は箒によって引き離された。

「馬鹿者！何をしている！死ぬ気か！？」

「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！どけよ箒！

邪魔をするなら」

バシーンッ！

「ほ、箒？」

「馬鹿者……毎回毎回、無茶をして……少しは心配をする者の気持ちも考えてくれ……お前がいなくなったら、私はどうやって生きていけというんだ……」

「ほ、箒……」

箒の目から、雫が一滴、二滴とたれていく。

「悪かった、箒」

「……気にするな。それよりも、あれをどうするべきか……」

二人のISは完全に沈黙し反応を示さない。対して黒いISは未だに無傷。

完全に万策つきた状況だった。

……が、一つ思い出して欲しい。

主人公は遅れてやってくる物だということを。
そして、

『……投影、開始（トレース、オン）……』

今回も、それは例外ではなかった。

アリーナを覆うバリアーが、何かによって破られる音がした。

瞬間、黒いISの前に現れる赤い外套を着ているように見えるIS。
それらが、互いの獲物を持って激突した。

黒いISによる剣戟を、赤い外套を着たISは白黒の双剣で対応する。

何合かした頃か、赤い外套を着たISが黒いISの一撃を右手の白い方の剣で受け止め、その勢いを利用して間合いに入り黒い剣でのカウンターを返す。

その一撃を、後ろ向きの瞬時加速という技で避けた黒いISと赤い外套を着たISは互いに構える。

「悪い、遅くなった」

そして、赤い外套を着たように見えるISの操縦者は、

「麗我……」

「来てくれたんだな……」

氷雪麗我。

あの『嫌な予感』を察知し、ギリギリのタイミングで駆けつける事に成功したのだった。

「さて……仲間を傷つけた罪、しっかりと払ってもらうぞ」

だが、彼はまだ気づいていなかった。

その『敵』が、かつての弟子であるということに。

第29話 アリーナでの激闘（後編）（後書き）

もうすぐPVが5000000を超えそうです。

自分で書いてて信じられません。本当に読者の皆様ありがとうございます。

そこで、何か特別閑話を入れることにしました！

具体的には、えーと、あれ、何にしよう。

というわけで、閑話の案を募集します！

デートとか、爆発とか、料理とか、きやああああ謙信無双とか、なんでもいいです
ので、案をお願いします。

勿論通常の感想も募集中です！！

50万PV突破特別閑話 彼とダウトと男の危機（前書き）

今回は、HAL-HAL様のES>インフィニット・ストラトスク
月明の守護者 から、あるキャラクターがゲスト出演しております！

HAL-HAL様、本当にありがとうございました！

ちなみに時期は学年別トーナメントが終わり、一段落したくらいです。

50万PV突破特別閑話 彼とダウトと男の危機

ある日。麗我達は麗我の部屋でダウトというゲームをしていた。

ルールについては省略させていただく。各自で調べてもらいたい。

「6、だ」

「7、ですわ」

「セシリア、ダウト」「」「」

「な、何故バレたのですか!？」

「声が震えてた」

「そ、そんな!」

と、セシリアが嘆いている。

ちなみに参加者は麗我、一夏、セシリア、鈴、ラウラとその日に遊びにきた奈々瀬ユウだ。

「む、何をやっているのだ」

「お、箒」

「何をやっているんだ?」

「あ、箒ちゃん、シャル、簪」

ここで、3人が姿を表す。

「何をやってるの?」

「ダウトっていうゲームだ。敗者は勝者の命令を必ず聞かなければならないっていうルールで……っと、俺か。ラストだな。1」

「ダウトだ麗我」

「残念一夏」

と、麗我が一番にあがり、その後鈴、ラウラ、ユウ、一夏となり、結果的に敗者はセシリアとなる。

「く……っ、わたくしに何を命令なさるので!？」

「一週間料理禁止な」

「ど、どうして皆様わたくしの料理を禁止なさるのですか!？」

[illegible]

と、心の中で全員が突っ込む。

が、麗我は本当のことを言うにいえず、適当にごまかしてしまう。そして、麗我がセシリアを宥めている間。「と、通常のダウトにこんなルールを入れてやってるんだ」

「なる程な……で、これは何だ？」

「さあ？ 確か、ユウが持ってきたお土産だったと思うけど……」

と、箒が指差したのはチョコレートのような物だった。

どうやら手作りの物らしく、可愛くラッピングされている。

「食べてもいいのか？」

「ああ、いいよ」

と、ユウの許可が出たので箒と簪がユウのお土産を口にする。

すると、彼らの目がとろんとし、何かすわったようになった。

まるで、酔っ払っているかのように。

「セシリア」

「何ですか篤さん。今忙しいのですけれど」

「私に変わって欲しいのだが」

「嫌ですよ。そんな――」

シュツ
ー
ド
サツ

「おや、セシリアが眠ってしまったようだな」

「セシリアアアア!？」

第のハンカチが中を舞ったかと思うと、突然セシリアが眠ってしまった。

まるで、何かされたかのように。

「大丈夫だ。セシリアの変わりに私が入ろう。それで問題はないだろっ。」

「いや、明らかに何かあると思うんだけど……」

この状況で何も問題がないと言える方がおかしいだろう。

「にしても、何かあるわよね。そのハンカチ、貸してもらってもいいかしら？」

「あっ」

簾の静止もむなしく、鈴音が問題のハンカチを拾い、匂いを嗅ぐとする。

「ふむ……確かこの匂いは、トリク」

シュツ……ドサツ

「寝ちゃったみたいだから、変わりに私が、入る……」

「鈴ちゃんん！？」

簾のハンカチが舞ったかと思うと、鈴音の意識が刈り取られた。

「え……駄目？」

「だ、駄目ってわけじゃないけど……」

簾の涙＋上目使いのコンボに、一瞬で麗我は陥落する。

「ねえラウラ、代わってくれるよね？」

「な、何故……わかった、代わる、からそれをしまってくれ！」

麗我達には見えてはいないがシャルはラウラを脅している。

ISを部分展開して、《楯殺し》を装備して。

「なら良かった。みんな、ダウトを続けよ」

「……わ、わかった……」

と、3人が諦めた声で答えた。

「（ユウ、お前なんてもの持ってきてるんだよ！あんなになった

あいつら見たことねえぞ！）3、だ」

「それ……ダウト……」

「ぐっ」

「（チョコレートボンボンを持って来ちゃったのが失敗かな……）5です」

「それダウトだよユウ君」

「ぐっ」

「（チョコレートボンボン！？あの酒入りのやつか！？）6、だ！」

「ダウトだぞ一夏」

「うわっ」

そして、箒達が勝ち、麗我達の敗北に終わった。

「じゃあ、命令は……《これから負けた順で3人、負ける度に服を一枚脱いでいくというルールに変更することを承諾する》、ということだ、いいな」

「ああ」

「うん……」 「別に問題はありません」

と、麗我達全員の承諾を得た箒達は、ニヤリと悪魔的な笑みを浮かべる。

まるで、『我が策は成った』とでもいうかのように。

「（くそっ、カードがない……）11、だ」

「それ……ダウト……」

「ぐっ」

「（くそっ、今度は僕がカードがないよ……11は持ってるのに！）13、です」

「それダウトだよユウ君」

「うっ」

「次は俺だな。2だ」

「これは本当だ」

「くそう……」

現在、完全に麗我達は追い詰められていた。

というよりも、完全にゲームを箒達に支配されている、と言った方が正しいだろう。

（くそっ……欲しい時に限ってカードがない。こちらがダウトをかけても大半が失敗するし……）

勿論、ダウトが成功する時もある。……が、その時は大抵場のカードが少ない。

まるで、麗我達のダウト宣言すら完全に読み切って利用しているかのように。

「これで最後……5……」

「ダウトだ簪」

「残念……合ってる」

と、カードを裏返して5である事を証明する簪。そして、

シュッ……ドサッ

麗我達の衣類が一枚地に落ちた。

「一夏、靴下まで衣類とするなど男として恥ずかしくはないのか」

「麗我……ずるい……」

「ユウ君も。少々卑怯じゃないかな？」

「何とでも言え。男としての対面をとれるためなら何でもするさ」

「麗我の言っ通りだ」

「僕も麗我に同意です」「……まあいい。続きを始めるぞ」

と、箒がまたカードを配り、次の試合が始まった。

ちなみに、どこからか噂が漏れ、現在麗我達男子が脱衣ダウトをしているということが、学校中に広がり始めた。

「（くそう、今度は3が……5なら2枚あるのに）3だ」

「麗我、ダウト……」

「くそっ」

「4……」

「（くそう、今度は5が……3なら2枚あるのに）……」
と、ここで3人の視線が合う。

どうやらそろそろ何とかしなければいけないということがわかってきたらしい。

『にしてもどうする！？これじゃジリ貧だ、何故かギャラリーも集まってきたし、これ以上は、流石にやれない！』

『確かに。でもどうするんだ麗我？』

『確かに……それが問題なんだ』

『僕なら今同じ型の代わりのランプを持ってるよ？これと今の手札を入れ替える、っていうのはどうかな？』

『それだ！』

と、作戦を決めた麗我達。

『……今だ！』

「あつ、三人とも、あれは何だ！？」

「何っ！？」

「え……？」

「えっ!？」

と、箒達三人が麗我の指差した別の方向を向いている間に、一夏とユウはユウが持っていた別のトランプにすり替え

「……ようとした手が、箒達三人の手によって叩かれた。

」「何っ!？」

「全く、その程度の作戦など、見抜いていないとでも思ったか」

「麗我って……本当に、甘いね……」

「駄目でしょ、三人とも。そんなことをしちゃ」

と、箒達三人は麗我達を咎めるわけでもなく、クスクスと笑うだけである。

「……正直、非常に怖い。

「お前達、そんなに服を脱ぎたくないのか？」

「当たり前だろ!! どうして友人が見ている前で服を脱がなくちゃならないんだ!」

「それなら……代替案もあるけど、聞く……?」

「ああ、是非とも教えてくれ」

「それはだな……これを着て一日過ごすことだ」

と、箒が取り出した衣装は、

「箒……IS学園の制服って」

「別に問題はないだろう?」

「ああ……これが、《女子用》の制服でなければな」

「箒ちゃん……これは一体何なの?」

「それは、私が、お願いした……」

「簪がか……ならば聞こう。簪、これはなんだ」

「昔のヒーローの、衣装……」

「何でこんなの持ってるんだよ……」

「箒、これは何ですか?」

「見なくてもわかるだろう？」

「ええ、わかりますが……どうして『メイド服』なんですか……」

「何か神の声がしたのだ。でどうする？これを着るか？」

「……今のままでいいです……！！」「……」

「そう、なら、続き……」

そしてゲームは続き、

シュツ……ドサツ

ついに麗我達は上半身裸になってしまった。

「さ、流石一夏。鍛え上げられてるな」

「麗我の体……傷だらけ……でも、凄く格好いい……」

「ユウ君の体もすごいね」

「……はは……ありがと」「……」

と、嬉しくもない謝辞を受け取る三人。

ちなみに、外野は、

『織斑君の体、かつこいい……』

『氷雪君の体も、傷だらけだけど、どこか貫禄があるって感じでイ
いわ！』

『ユウ君だったっけ……じゅるり。食べちゃいたいわ』

と、恐ろしい反応をしていた。「なあ三人とも。そろそろ満足した
だろ？そろそろ止めにしないか？」

「安心しろ麗我」

と、箒が優しい声音でいい、麗我達は安心してしまふ。
が、

「私達は、最後の一枚になってもこのゲームを終わらす気はないか
らな」

この言葉で、麗我達の希望が根本からへし折られそうになる。
……が。

「一体、何の騒ぎだ」

「姉御！」

救いは、外からやってきた。

学園中に広まった噂。それを千冬も聞きつけ、こうして麗我の部屋にやってきたのだった。

「助けて下さい！何でもしますから！だから助けて姉御！」

「麗我の言う通りだ！助けてくれ千冬姉！助けてくれないと俺は…

…俺は……っ」

「彼らの言うことと同じです。助けて下さい織斑先生。何でもしますから」

「待て。お願いだから事情を説明してくれ」

と、麗我達が事情を説明した後、出席簿アタックが全員の頭に落ちたのは言うまでもない。

そして、翌日。

「はあ……大変な目にあった」

「全くだ。……ん、あれ、何をしてるんだ？」

「ひゃあっ！お、織斑君！？」

「お、何をしてるんだ？」

「う、ううん……な、何でもないよ」

「そうか。それならいい。一夏、行こうぜ」

「お、おう」

と、彼らが彼ら自身の机につき、話し初めてから数秒後。

「私はこれをもらっわ」

「私はこれを」

「わかったわ。じゃあ、千円ずつね」

「「わかつてるわよ」」

「じゃ次は……と、もう来るわね。残りは放課後ね！」

彼女らが取引していた物。それは、麗我達男子の半裸写真だった。その事を、彼らはまだ知らない……

50万PV突破特別閑話 彼とダウトと男の危機（後書き）

謙信「私の出番はどうしたのよ」

ごめん謙信。無くなった。

いや、本当に悪かったと思ってる。だから、その関節から手を離して。お願いだから。

謙信「どうして私の出番が無くなったのよ」

いや、元々はユウと麗我の料理対決の予定だったんだよ。

それが、最近料理ネタ使いすぎじゃね？ってことで別のにしようって事でこの結果にな（バキッ）ぎゃああああっ！

謙信「まだまだあー！」

痛い、痛い、ギブ、ぎゃああああっ！

バタリ

謙信「ふう。ま、許してあげる。こんな駄作だけど、これからも読んでくれると嬉しいわ」

第30話 暴走と救済（前書き）

読者の皆様、一つ言っておきたいことがあります。

今回は、「どうしてこうなった」といったいくらかの駄文です。

それでもよろしければお進み下さい。

第30話 暴走と救済

「なあ、一夏」

「どうした」

「あれは一体なんだ？」

麗我の疑問に一夏は苦い顔をする。

「おい」

「……ラウラだ」

「何っ！？」

その驚きによって出来た隙を、黒いISは見逃さなかった。

即座に瞬間加速で麗我に突撃し、雪片に酷似した刀にて神速の横薙ぎを放つ。

それを干将で防ぎ、莫耶にてカウンターの突き。それを、黒いISは半身だけずらして回避し、突きを放つ。

それを干将で受け止めた時点で、麗我の中のイメージが瓦解し、干将が砕け散る。

「くそっ」

だが、麗我も新たに干将を再投影し、莫耶を上から全力で振り下ろす。

それを黒いISは刀で弾き返し、勢いを利用して踏み込む。

まさに、麗我が思っていた通りに。

「……いくぞ、ラウ。《ロールアウト工程完了、全投影、待機（バレット、クリア）》」一瞬で後退の瞬間加速をした麗我が、黒いISに狙いをつける。

が、黒いISは踏み込んだ反動で一瞬だけ隙が出来てしまう。

フリースアウト
ソッドバレルフルオープン
「《停止解凍、全投影連続層射》」

そして、黒いISが動き出すのと同時に黒いIS目掛けて27本の名剣魔剣が発射された。

とっさに黒いISは瞬時加速をつかって離れるものの、完全に避けることはできずに幾つかはくらってしまう。

が、麗我はさらに弓を構え、矢に使うためか捻れた剣を持ち、

刹那、黒いISを剣の雨が狂ったようになだれ込んだ。

「くそつ、俺は、麗我の手伝いもできずにただ突っ立ってるだけだよ……」

「一夏……」

一夏は悔しかった。

親友が戦っているのに何も出来ず見ていることが。

それが普通の敵ならばまだ良かったのだろう。が、敵は彼の姉の偽物、彼自身の手で倒したいものだ。

その悔しさといったら、考えられるものではないだろう。

しかし、

「一夏！大丈夫！？」

「シャルル！」

救いの手は、別の場所からやってきた。

（馬鹿な……この剣の中を、どうやって……っ）

麗我は焦っていた。

彼が弓で放っている剣の中で、黒いISが徐々に彼に近づいて来たことが予想外すぎたのだ。

（いくらなんでも、有り得ない！この中を突破するなんて……！）

そして、麗我は信じられないものを見る。

黒いISは、なんと弾いた剣で別の剣を弾き、またその剣で別の剣を弾くという、連鎖反応を起こしていたのだ。

（有り得ない……ヴァルキリーってのは、ここまでチートなのかよ！）

これ以上は効果はない、と思った麗我は、捻れた一本の剣を投影する。

「《I am the bone of my sword（我が骨子は捻れ狂う）》」

そして、黒いIS目掛けて、

「《偽・螺旋剣（カラドボルグ？）》」

空間すら挟み切る貫通力を持った矢が襲い掛かる。

が、黒いISは、左方向に3回連続で瞬時加速をしてその矢を回避する。

「くそ……これでも駄目なのかよ……！！」

が、一夏達にはわかってしまった。

麗我が、僅か一瞬だけ射るのをためらってしまったことに。

それはほんの一瞬で、麗我自身は普通に射ったつもりだろう。

が、無意識のうちに、射るのをためらってしまい、ほんの一瞬だけ矢から指を離すのが遅れたのだ。

「一夏、エネルギーの供給終わったよ」

「サンキューシャルル。じゃ、ちよつとあいつの手助けをしてくる」

「……絶対に死ぬなよ、一夏」

「わかってるよ。だからそんな涙目で睨まないでくれ。じゃ、ちよつといってくる」

こうして、一夏は再び飛んだ。
彼の友人を助ける為に。

「麗我、手助けに来た」

「一夏……どうやって」

「シャルルにエネルギーを供給してもらったんだ。まあ、これだけしかISは展開出来なかったけどな」

「一夏の言葉通り、彼のISは必要最低限の装備しか展開できていない。」

絶対防御さえ発動したいのか怪しい所だ。

「一夏、なんできた」

「なんでって、お前を」

「馬鹿野郎っ！そんな装備で来るなんて、死にに来てるようなものだろうが！早く箒ちゃん達の所に」

「馬鹿はお前だろうが」

戻れ、と言おうとした麗我を一夏の言葉が遮る。

「俺達は友達だろうが。その友達が苦しんでいる時に、どうして助けにはいつちや駄目なんだよ！俺はお前の友達じゃないのか？麗我！」

「大切な友達だ！だからこそ絶対にお前を死なせたくはないんだよ！例え、この身に替えてもな」

「だからだよ。お前は俺達に全然頼らない。だから少しは、頼ってくれよ。友達だろ？」

「……わかった。じゃあ、今考えた作戦を伝える。が、無理は絶対にするなよ！」

「わかってるよ」

こうして、一夏は麗我の作戦を聞いた後、一直線に黒いISに向かっていた。

麗我の作戦を成功させ、勝利するために。

「うおおおっ！」

一夏が激昂しながら黒いISに迫る。

そして、黒いISは一夏の方に意識が向く。

その一瞬。麗我は、黒いISに歪な

短剣を突き刺していた。

きしくもそれは前に麗我がアリーナの遮断シールドを消し去った物と同じものだった。

「《破戒すべき全ての符》ルールブレイカー」

そして、短剣の真の力が解放される。

ルールブレイカー。

裏切りの短剣。

その真の能力は、『ISとその使用者との繋がりを初期化する』という恐ろしい能力。

それが示す所は、

「全く、ラウは。起きたらお仕置きだな」

麗我の腕の中で、ラウラが幸せそうな顔で気絶していた。

第30話 暴走と救済（後書き）

やっぱり破戒すべき全ての符を救いの象徴として使いたかったんです。

こうすることはこの駄作の構成段階から決めてました。次かその次でやっと長かった2巻が終わります。

なんか、感慨深いです。

第31話 黒ウサギの憂鬱と決意（前書き）

……あれ？

今回メインキャラが殆ど登場しない上にオールラウラ称……

どうしてこうなった？

どうしてこうなった！！？

第31話 黒ウサギの憂鬱と決意

sideラウラ

初めて会った時のアイツは、どこか幼さの残った表情をしていた。

……初めて会ったというよりも、戦ったといった方が的確かもしれない。

運命の日。任務として呼び出された私に命じられたのは、不法侵入者の捕縛だった。

どうもその侵入者はISを所持しているらしく、確実に倒して連れてこいというものだった。

その時の私は、多分慢心していたのだろう。あの教官に教えられた私に、勝てる相手などいないと。

が、その予想はいとも簡単に崩壊することとなる。

私の攻撃は全て回避され、気がついた時には敵にダメージを全く与えられないまま私のISのシールドエネルギーは零になっていた。

そして、最も大切なことは、私と同じ年位の少年だったということだった。

そして、その少年はISを私の目の前で解除し、私に手を差し伸べた。

「大丈夫か？」

と言いながら。

私は正直、馬鹿だと思った。無防備に手を差し出すなど、死にたいのか、と思ったのだ。

そしてその時の私のとった行動は、今にして思えば馬鹿かと思うくらい素直な物だった。

すなわち、差し出された手をとるふりをして少年の関節をとりについたのだ。

しかしその関節技はいとも簡単に外され、逆に私の関節を極められ

た。

「お願いだからじっとしていてくれないか？出来るだけ傷つけないでほしいんだ。君のような可愛い子なら特にね」

目の前の少年から言われた言葉に、私は目が点になってしまった。初対面の少年に攻撃を仕掛けたのに当の本人は全く起こっておらず、なおかついきなり可愛いと言われたのだ。

そして、私は少年に関節を極められている事実も忘れて、ただただ口をパクパクとあけたりしめたりしているだけだった。

そして、二回目に出会った場所は、《黒ウサギ隊》のミーティングの場所だった。

そして、上官から説明された時、私は憤った。こんな少年が、教官の後釜に座るのかと。

が、次の彼の言葉で、私の憤りはさらに湧き上がることになる。

「俺は姉御 - 千冬さんほどにはISに精通してはいない。というよりも、あの人と正面から闘ったら確実に負けるだろう。 - なら、まともに闘わなければいいだけだろう？俺が教えるのは、弱い者が強い者に勝つための戦闘方法だ。とにかく叩き込んでいくから、よろしくな」

刹那、私は愛用のサバイバルナイフを構えて少年に突進していた。私にはこう聞こえてしまったのだ。

『まともに闘わなければ勝てる』

しかし、激昂にまかせただけのナイフが目の前の少年に当たるわけもなく、一瞬で視界がブラックアウトした。

その後も、ことあるごとに少年の命を狙った。訓練中、食事中、睡眠中……果てはシャワー中にまで狙ったこともある。

しかし、その攻撃は一度たりとも少年に当たすることは叶わず、全てナイフだけをたき落とされた。

そして、毎回笑顔でナイフを返しながらかう言うのだ。

「もうこんなことをするなよ」

と。

私にはわからなかった。

どうしてコイツは自分のことを殺そうとした相手に笑顔を向けるのかと。

そして、麗我がいた時、ある事件が起きた。

私が不覚にもとあるグループに捕まってしまったのだ。

そのグループは元ドイツ空軍の男兵士達で構成されたグループであり、私の命と引き換えに軍に戻すことを要求していた。

そして、ドイツ軍が反応を返す前に表れたのが、教官となった少年

- - 麗我だった。

「お前達……俺の仲間は何てことをしてくれてんだ！」

麗我は吠えた後、近くにいた男二人を私にも見えない早さで蹴り飛ばした。

そして、他の男達が警戒態勢に入る前に半分を鎮圧し、いつの間にか握っていたナイフで残りの兵士をなぎ倒した。

その中でも、麗我はただの一人の死者を出さなかった。

呆然としている私の前で、麗我は、

「助けることが出来て、本当に良かったよ、ラウ」

と、満面の笑みを浮かべた。

そして、それから私は麗我の事を襲えなくなってしまった。

どうしてなのかはわからない。

けど、これでいいかも、とも思っていた。

そして、麗我はある日の訓練の終わりに、こんな言葉を最後に付け加えた。

「また明日」という言葉を。

その翌日、麗我は訓練に来なかった。

上からは、「契約期間が終わったのだ」とだけ伝えられ、麗我がどこに行ったのかもわからなかった。
そして、私の心の一部が抜け落ちた。

それから、2年位後。

『赤い錬鉄』 - - 麗我が、IS学園に入学したことがわかった。
そして、その後上からIS学園への入学という指令が下された時、私は大いに喜んだ。
だが、その時は何故嬉しいのかわからなくて、私を苛立たせた。
しかし、今ならわかる。私は、麗我のことが - -

ふと、目が覚めた。

「う、あ……………」

ぼやっとした光が天井から降りているのがわかる。

「気がついたか」

この声は - - 判断する必要もない。教官だ。

「私……………は……………？」

「全身に無理な負荷がかかったことで筋肉疲労と打撲がある。しばらくは動けないだろう。無理をするな」

教官がはぐらかそうとしているのはわかる。恐らくは気を使ってくれているのだろう。

だが、それでも私は何があつたのか知りたかった。

「何が……………起きたのですか……………？」

全身を襲う痛みで顔を歪めてしまう。しかし、目だけは教官から外

さない。

もし外してしまったら、はぐらかされそうだから。

「ふう……一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」
そして、教官は語り始めた。

「そんな……物が……」

「ああ。巧妙に隠されてはいたがな」

それでもこれは、私にとつての天罰だと思った。

私が、力を欲しすぎた罰だと。

「ラウラ・ボーデウィツヒ！」

「は、はい」

「お前は誰だ？」

「私、は……」

昔は、答えることの出来なかった問い。

しかし、今なら――

「私は……氷雪麗我という一人の男子に恋をしている、ラウラ・ボーデウィツヒという一人の女です」

――私なりの解答が出来る。

「ふ……それならそれでいい。ただ、あいつは無自覚女殺しの上に朴念仁だからな。せいぜい頑張るんだな」

そして、教官は部屋を去っていった。

全くズルい人だ。言いたいことだけ言って、勝手に出て行くなど。
しかし、そんな事は百も承知だ。

必ずアイツを私の物にする。

私は、それを新たに心に刻み込んだ。

s i d e ラ ウ ラ e n d

第31話 黒ウサギの憂鬱と決意（後書き）

と、いう結果になりました。

次回はちゃんとしたのに戻す予定です。

第32話 シャルルの勇気と黒ウサギの行動（前書き）

何とかこれで2巻終了です……

長かったな（遠い目）

第32話 シャルルの勇気と黒ウサギの行動

「麗我、あの時使った武器は一体何なんだ？」

「ああ、ラウをISと分離させた武器のことか？」

「ああ」

一夏の言葉に麗我が苦い顔をする。

「すまんが、あれは企業秘密」

「私も知りたいぞ、麗我」

「僕も知りたいよ、麗我」

「うつ……どうしてもか？」

「ああ」

「うん」

麗我の顔が更に苦くなる。

「……わかったよ。あの武器は、《破戒すべき全ての符》ルールブレイカーっていう武器だ。その能力は、ISに関するありとあらゆるモノ一切を初期化する短剣のことだ」

「へ？つまりどういうことだ？」

「簡単に例を上げて説明しよう。今、白式はファーストシフト一次移行しているだろ？」

「ああ。それと何の関係があるんだ？」

「その時に、お前と白式はどこかで繋がったんだ。例え離れていようとも、お前は白式を装着出来る。ここまではいいか？」

「あ、あんまりついていけない……」

「私はなんとか」

「僕も大丈夫だよ」

「よし。じゃあ一夏を無視して話を続ける」

「俺は無視か……」

「だが、この《破戒すべき全ての符》ルールブレイカーは、その繋がりに一切を初期化、

つまり『なかったこと』に出来る。つまり――」

「ISと使用者を完全に分断する、ということだね」

「そういうことだ」

《剥離剤^{リムバー}》という物がある。

これは一度きりだがISと使用者を分断することが出来る。

が、その『見えない繋がり』までは分断することは出来ない為、原作で一夏は離れていても白式を装着することができた。

が、これは違う。

ISと使用者の『見えない繋がり』までも初期化――つまり、完全に断ち切る為、簡単にISを奪うことが出来る。

つまり。

もし《亡国企業》^{ファントム・タスク}が、この武器を持っていたら――

「この話は終わりだ。帰るぞ」

「お、おい麗我！」

と、驚く3人を無視して、麗我は部屋に向かって歩き始めた。

「イイイイイヤッホー――！大浴場だあああつ――！！！」

「れ、麗我！？どうしてそんなに暴走しているんだ！？」

「これが暴走せずにいられるかあああつ――！！ひっさびさの大浴場なんだぜ――！最高にハイってやつだ！」

「麗我……！どれだけ大浴場に入りたかつたんだよ……！」

発端は、真耶が彼らに伝えたほんの一言だった。

「今日から大浴場が使用できます」

これを聞いた麗我は、うずうずしながら部屋に戻り、大浴場に入った瞬間、こう暴走したというわけだ。

「はあ、極楽、極楽」

「どこの爺だよ」

と、ボケを交えつつ、風呂を楽しんでいた、その時だった。

「い、一夏……いるか……？」

「お、お邪魔します……」

恋する乙女二人が、大浴場に入ってきたのは。

side 篇

うつ、恥ずかしい……

全く、シャルルもとんでもないことを言ってくれるものだ……

「恥ずかしいなら一緒に入って」

など……

お前は男なのだから恥ずかしいも何もないではないか！

だがそう言ったら言ったで

「僕は女の子なんだよ」

とはなんだ！

聞いてないぞ！そんなこと！

まあ、私も一夏の艶姿が見たゴホン！何でもない。

にしても一夏の体は私の予想を超えて鍛えられているな……

「お、おい箒？何で俺の方を注視しているんだ！？」

はっ！し、しまった！

「な、何でもないぞ、一夏」

「そうか……」

良かった。つい我を忘れて見入ってしまう所だった。

「後……箒さん？何でこんな所にいるのですか！？」

「む、悪いか」

「いや……今は俺達の使用時間の筈なんだけど……」

「そ、そんなこと聞いてないぞ！べ、別にシャルルに誘われて来てしまったとかお前の艶姿が見たかったとかそんなやましいことは断じてない！」

「……シャルルが？あいつ男だろ？」

しまった！一夏はシャルルが女だということを知らないのだった！
どうやって誤魔化そうか……

「そ、そんなことは今はどうでもいいだろう！それよりもだ！今日は一夏に、礼を言いにきたのだ」

「礼……？なんのだ？」

「色々な、だ。今日、私を助けてくれたことも含まれている。ありがとな、一夏」

「いや、助けたのは麗我で、俺は何もしていないぞ」

「いや、それは違うぞ、一夏。お前はちゃんと私とシャルルを守ってくれた。それに、お前はいつだって、私を助けてくれた英雄だ」

「ほ、筈……？」

「一夏、私は、お前のことが……」

好き、だ」

この言葉を言つて数秒。私は自分の言つた事に対する恥ずかしさの余り大浴場から脱兎のごとく走り去っていった。

side 第 end

side シャルル

うう、恥ずかしいよ……

やっぱり、こんなとこ来なきゃ良かったかも……

でも、今の麗我の背中も格好いいし……

「……あの、シャルルさん？」

「どうしたの？」

「どうして俺の背中ばかり見てらっしゃるのですか？」

ど、どうしてわかるの！？

「れ、麗我のえっち……」

「何故にっ！？」

麗我の突っ込みが大浴場内に響く。

あ、一夏達が出てった。

「で、質問だ。どうしてここにいる？お前は女の子だろ！？」

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ……？」

「いやけっしてそういうわけじゃ無いんだけど……その……目のやり場に困るんだよ」

「どうして？」

「どうしてって……俺だって、健全な十五歳の男子だぞ？その、立派に女性への興味はあってだな……」

あ、麗我が動揺してる。

良かった。これだけでも仕掛けたかいがあった。

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。――迷惑なら上がるよ？」

「いや、上がるなら俺が上がる。レディーファーストだからな」

「待つて。できれば、話を聞いて欲しいんだ。とても大事なことから、麗我にも聞いて欲しい……」

僕の懇願が麗我にも届いたのか、麗我は出るのを止めて僕に背中を向けた。

……別に、麗我なら見てもいいのに。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前っていうと、学園に残るってやつか」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだつて居場所を見つけられていないし、それに……」

「それに？」

「麗我の、おかげだよ」

ぴちゃーん

「ひゃあっ！」

「し、シャルル！？大丈夫か！？」

「う、うん。少し驚いただけ。話を戻すね。僕は麗我に色々な物をもらったよ。数え切れないくらい、ね」

勇気や、僕のことを考えてくれた心優しい言葉。

それに、あの夜の出来事。

どれも、忘れるなんて出来ない大切な物だ。

「それに、ね。麗我がここにいろつて言ってくれたから、僕はここにいられるし、ここにいたいと思えるんだ」

「そうか。別に、何一つ特別なことをしたっていう認識は無かったんだけどな」

そんな冷静な口調を気取つても、心臓の鼓動は暴走してるよ？麗我。それに、僕は、麗我のその当たり前前の優しさに救われたんだ。

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ？」

「そう。僕のあり方。麗我が教えてくれたんだよ？」

「そ、そうか。悪いが記憶に無い……」

「そう。麗我、自分に関することは殆ど考えないから。まったく」
「う、ごめん」

「いいよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれから
シャルロットって呼んでくれる？ふたりきりの時だけでいいから」
「なるほど。それが本当の名前、か」

「そう、本当の名前。お母さんがくれた、本当の、ね」

「わかったよ、シャルロット。所で――そろそろ出ないか。のぼせてしまいそうだから」

麗我の言葉に苦笑し、僕は二人揃って大浴場を後にした。

sideシャルル改めシャルロット end

次の日。

「み、みなさん、おはようございます……」
教室に真耶が入ってくる。

しかし、麗我はシャルロットのことが気がかりだった。

朝の食堂で『先に行つてて』と言われたのだが、何かあったのか、
と思っっているのだ。

（にしても今日も真耶さんのテンションは低いな。今日の朝食で味噌汁に失敗しました、とか？）

「氷雪君、何を考えているかはわかりませんが、私を子供扱いしようにしているのはわかりますよ。先生、怒ります。はあ……」

（そんな調子だから子供に見られるんじゃないのかな？）

麗我の正しい解答に突っ込むやつは誰もいない。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生とい

うより、もう済んでいる、と言いますか……はあ……入って下さい」
「失礼します」

（へ？この声は確か……）

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願います」

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということではあ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

真耶の憂いはどうやら別にあつたらしい。
が、麗我の憂いは、

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、冰雪君、同室だから知らないってことは……」

（マズい！）麗我は慌てて窓から逃げようとする。
が、

「冰雪君、ちよつと話が」

「私が先よ！」

「いや私よ！」

逃げる寸前に女子に囲まれていた。

（これは……もう駄目だ）

麗我が諦めかけた、その時だった。

ヒュンッ！

「大丈夫か、麗我」

「ああ、ありがとな、ラウ」

ISを装着したラウラが麗我を上につ張り上げる。

「ああ、ISもう直ったんだ」

「ああ、やつと一次移行ファーストソフトが終わった」

「それは良かった……！？」

いきなり、ラウラが麗我の唇を奪った。

「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！」

「よ、嫁！？婿じゃなくて！？」

麗我の突っ込みをも振り切り、ラウラはクラスに対して宣言した。

その後、お仕置きと称してシャルロットは麗我にひたすら六十九口径パイルバンカー《灰色の鱗殻》、通称『楯殺し』を打ち込んだとか。

第32話 シャルルの勇気と黒ウサギの行動（後書き）

次もまた閑話です。

もし良ければ読んでいって下さい m (_ _) m

閑話 6 予想外と温泉と川遊び（前編）（前書き）

前中後で書いていきます。

今回は温泉も川遊びもありません。ただ遊びに行くだけの話です。それでは、お楽しみいただけたら幸いです。

閑話 6 予想外と温泉と川遊び（前編）

「一夏」

「どうした」

学年別トーナメント終わり、一段落した金曜日の放課後。

一夏は、自分に話しかけてきたラウラを見て驚いた。

（何故話しかけてきたんだ？）

「そう警戒するな。こちらに敵意はない」

ラウラのこの言葉を聞き、一夏は警戒をやめる。

「で、何の用だ？」

「いや、随分迷惑をかけたと思ってな。すまなかった」

「嫌、別にいいぞ。気にしてないし」

「そうか……だが、これを渡しておこう」

と、ラウラから手渡されたのは一組のチケットだった。

「温泉のチケットだ。気になる女子と一緒に向け」

「いいのか？こんなの」

見ると、そのチケットには「一泊二日」と書かれており、かなりのお値段であることがうかがえる。

「何、気にするな。どうせ貰い物だ。詫びのしるしと受け取ってもらえばいい」

「そうか、ならありがたくもらっとく。ありがとな」

一夏の言葉にラウラは手を降って答えた。

一夏が去って、ラウラはシーケレット・チャンネルをある人物に繋げる。

「渡したが……これでいいのか？」

「ああ、これでいい。ありがとなラウ」

「き、気にするな！それよりもだ、あの約束は本当だな！」

「え？ああ、『俺が出来る範囲内で何でも好きな願いを叶えてやる』ってやつか？別にいいぞ」

「そ、そうか。わかった。ではな」

そう言って、ラウラはシーケレット・チャンネルを閉じる。

その最後に、『計画通り』と声がしたとかしていなかったとか。

「なあ、箒」

「……………」

「……まあいい。とりあえず聞いてくれ。明日と明後日、空いてるか？」

「……空いてるが、それがどうした」

「いや、ラウラに一泊二日の温泉旅行のペアチケットを貰ったんだが、一緒に行くか？」

「な、なんだと！？」

「いいか、もう一度言うぞ。ラウラに温泉旅行のペアチケットを貰ったから、一緒に行くか？」

「い、行く！」

「そっか。じゃあ今から支度しとけよ。明日の朝出発するからな。」

にしても結構遠いんだな、この旅館」

（急いで準備をしなければ！えっと、何の服を着て行くのか……それに持って行く物……ああ、持って行きたい物が多すぎる！）

そして翌日。

「一夏、まだか？」

「う……悪い、箒」

「気にするな。そんなこともあるだろう」

「最後にコレを入れて……っと。よし。行ける」

「では行くぞ、一夏」

一夏と箒は支度を済ませ、寮を出て、駅に向かう。

旅館のある場所まではかなり遠く、最寄り駅まで電車で三時間かかり、そこから更に三十分歩くのだとか。

「にしても箒、今日は着物なんだな」

「そうだが、どうした？」

箒が今日着ているのは、白の綺麗な着物だった。

着物が箒の美しさを引き立て、上手く飾っている。

「今日のお前、なんといいかその、綺麗だ」

そして流石の鈍感でも、箒の綺麗さに気がついたようだ。

「そ、そうか。うむ。そうなのだな」

（やった！気合いを入れたかいがあった！）

そして、電車が来たらしく、二人一緒に電車に乗り込む。

その姿は、どう見ても初々しいカップルの姿に他ならなかった。

（にしても、どうすればいいんだろうな……）

電車の中、一夏が考えていたのは、学年別トーナメントが終わった後の箒の告白についてだった。

ちなみに一夏は無意識的に箒の手を握っている。それを意識した箒の顔が真っ赤になりながらも、喜んでるように見えるのは間違いないだろう。

それはさておき

閑話休題、一夏はどう箒に返事しようかと悩んでいた。

（箒が……俺のことを好きだなんて……全然気がつかなかった）

流石朴念仁オブ朴念仁。

あれだけアタックされているのに、全く気づかれて無かったのだ。

もう箒にはご愁傷様と言うしかないだろう。

（でも、どう返事をしようか……アイツは確かに大切なルームメイトだけど……ああ、どうすればいいんだ！）

そんな一夏の思いを乗せつつ、電車は進んでいくのだった。

そして、駅を出て、二人が見た風景は、

「すごいな……」

「ああ」

絶景、と言ってもいい風景だった。

大きな川が流れ、辺り一面は緑色。

鳥のさえずりが聞こえ、魚の跳ねる音が聞こえる。

「よし。行くぞ箒」

一夏は箒の手を握り、風景を見ながら歩き出す。

「あ、ああ（一夏に手を握られてる……！？）」

「お、どうした？」

「い、いや、何でもないぞ！」

「そっか」

箒の真つ赤に染まった顔を見ても何も感じないのは流石鈍感と言った所だろうか。

そして、箒は一夏の手を強く握り返し、二人は宿目指して歩き出した。

「ここ、だよな……？」

「ああ、その筈だが」

一夏達が到着した宿は、途轍もない風格を醸し出していた。

全部が木製なのか、古めかしいが、それでいて清掃はしっかりとなされており、どこか神々しい感じがある。

一夏は再度持ってきた地図で場所を確認し、ここが目的地であるという確証を得る。

「とりあえず……入ろう」

「ああ」

そして、一夏が中に入り、

「いらっしやいませ。二名様でよろしいですね？」

一瞬で出た。

「い、一夏……？」

「大丈夫、少しおかしい物が見えただけだ」

一夏は深呼吸し、再度中に入る。

「いらつしゃいませ。お連れの方はまだでしょうか？」

「……………」

「一夏、私も中に……」

「お連れの方ですね？ようこそ当旅館に。歓迎させていただきます」

二人は声も出ない。何故なら、

「それではお部屋にお連れします」

「……麗我？」

出迎えたのが、麗我だったからだ。

「それでは、ごゆるりとお過ごし下さい。夕食のお時間はとうなされますか？」

「……………」

「あの、お客様？」

「麗我、どうしてこんな所にいる？」

「ご冗談を。私の名前は麗我ではありません。ただのしがない使用人でございます」

「嘘をつけ嘘を」

二人の追求も使用人にはきいていないようだ。

「それで、夕食のお時間は？」

「とりあえず、IS学園の時間と同じ時間で」

「申し訳ありません。私にはわかりかねますので明確な時間を示していただけると嬉しいのですが」

「……かからなかったか」

「何のことでしょう？」

「一夏の探りにも麗我は無傷でやり過ぐす。

「じゃあ、七時で」

「かしこまりました。後、布団の数は一枚でよろしいですね？」

「いや、全然よろしくねえぞっ!？」

「それでは、ゆっくりと温泉を満喫して下さいませ。後、当旅館に本日は人が来ませんので、何をなさっても結構です。例えば、お連れの方が男温に入ったりなど、ね？」

ビクッ、と篝の肩が震える。

「後、露天風呂は混浴となっております。それでは、思う存分イチヤイチヤなさって下さい」

「おい麗我、ま――」

一夏の言葉を無視して、使用人、いや

「ふう……この旅館を買収したかいたが あった」

麗我は、部屋を出て一人息を吐いた。

閑話 6 予想外と温泉と川遊び（前編）（後書き）

次回はお風呂です。混浴です（ここ重要）

閑話 7 予想外と温泉と川遊び（中編）（前書き）

ちゃんと前中後で終わるかな……

お風呂、の話です。

次回は遅れる可能性大です。

閑話 7 予想外と温泉と川遊び（中編）

「じゃあ、風呂に行ってみるか？」

「そ、そうだな」

麗我が去ってから数分後。一夏達は、やっと行動を開始した。

「用意はいいか？」

「あ、ああ」

バスタオルや着替えを持ち、一夏と箒は大浴場に向かって歩いていく。

（本当は、手を繋ぎたいのだが……）

「ん？何か言ったか？」

「な、何でもない！」

そんな会話を挟みながら、二人は大浴場に辿り着く。

「じゃ、また後でな」

「あ、ああ……」

と、二人はそれぞれの更衣室へと入っていった。

「うわ、すげえ……」

服を脱ぎ終わった一夏は、大浴場に入りその大きさに驚いた。

シャワーが数十個単位で設置されており、その奥に広がる浴槽は、IS学園の大浴場の大きさをゆうに超えている。

その脇には水風呂やサウナ、ジャグジーや電気風呂が多種多様に用意されている。

余談だが、温泉好きの麗我が買収する前に一度ここに来て、『最高』

といわしめた程の風呂である。

「とりあえず体を洗うか……」と、一夏は体を洗い始める。
そして、十分後。

「ふう。やっと洗い終わった」

体を洗い終わった一夏は大浴場に飛び込む。

「すげえ……レベルが違う……」

浴槽の広さもさることながら、驚くべきはその気持ちよさ。

「ああ……遠かったけど来て良かったなあ……」

そして、ゆつくりと浴槽の中に腰を下ろしていく。

「はあ……極楽、極楽」

そして、十分位たった頃。

「そういえば、露天風呂があるって言ってたよな……」

（それに今日は来ているのは俺達だけって言ってたし……行ってみるか）

こう結論づけだ一夏は、露天風呂への扉を開けた。

「い、ー……夏？」

「へ？」

そして、一夏が見たのは、湯船に腰を下ろしている筈の姿だった。

side 筈

こ、これは……！！

私は、目の前に広がっている風呂の壮大さに驚きを隠せなかった。

これほどの風呂、初めて見た……

いかんいかん、とりあえず体を洗わねば。

そう考え、私は体を洗い始める。

にしても、また大きくなったのか……またあいつからの攻撃が増す……これのどこがいいのだ！重いし肩はこるし……お金はかかるし！

だが、一夏が胸が大きな女性が好きだと言っのなら、それでもいいかもしれん……

って！何を考えているのだ私は！

まあいい。どうせ誰もいないのだ。好きに考えよう。

そういえば、露天風呂があつたな……入ってみるか。

一夏が露天風呂に入って来たら……それはそれでいいな。

side 箒 end

（凄い、綺麗だ……）

一夏は、箒の綺麗さに見とれていた。

それはそうだろう。

黒く伸ばした髪は水滴が光を反射することで輝き、肌も輝いている。また、彼女の朱に染め、羞恥に顔を隠すことが彼女の魅力を際立たせている。

周りには森と川が広がり、隠れた名所となっているが、それすらも箒の綺麗さを際立たせているにすぎない。

そう思わせる程今の箒は魅力的だった。

「ど、どうした一夏？どうして私を見たまま動かないのか？」

一夏はハツと箒とは別の方向を見る。

「悪い、お前に見とれてた」

「そ、そうか。それならそうと早く言えばいいではないか」
咎めるような口調でも箒の顔は嬉しそうだ。

「じ、じゃあな。また後で！」

「お、おい一夏！どこへ行く気だ！」

「男湯に決まってるだろ！こんなの、耐えきれるか！」

一夏の言葉も最もだろう。

が、箒の言葉は一夏の予想を右斜め四十五度傾いていた。

「そ、その一緒に入らないか？わ、私は全く構わないが……」

「へ？」

「ふう、極楽だな」

「そうだろうそうだろう」

一夏は、結局箒の誘いを断りきれずに一緒に風呂に入ることにした。
（にしても、さっきは箒の綺麗さで気づかなかったが、この風景も
ものすごいな……）

季節は六月。緑が生い茂る時期だと言っばかりに辺り一面は緑色で
覆われている。

その中を川の流れる音が趣深く響き、壮大さを一層と表現している
ようだ。

「そういえば、さ」

思考を切り替え、一夏はずっと問いたかったことを箒に問う。

（多分ここでしか話せないからな……）

「む、どうかしたか？」

「あの告白、本当のことなのか？」
静寂が、場を満たした。

side 篇

「ああ、本当だ」

私は、塵も隠さず本当のことを話す。

今までに溜まり続けた思いを、全て一夏に伝えるように。

「私は、織斑一夏のこと、この世界で一番、大好きだ」

「……どうしてだ？」

どうして、だと？

「お前が、私を孤独から助けてくれたからだ」

あの時。

『男女』と虐められていた時。

それを助けてくれたのが、一夏だから。

「この先、どんなことがあっても、私はお前を思い続ける。どんな苦難があっても、私はお前を支え続ける。だから、私と――」

結婚、してくれ」

あれ？何か重要なプロセスが一つ抜けたような。

「ちよつと待ってくれ、箒。俺はまだ十六歳だ。結婚できる年じゃない」

し、ししまったあああつ！

『付き合う』というプロセスをすっかり忘れてしまっていたあああつ！

「ち、ちよつと待ってくれ、一夏」

「でも、流石にちよつと早すぎないか？」

「ち、違うんだ。本当は『付き合つて』と言いたかっただけなんだ」

「じゃあ、あれは？」

「あれは……ちよつと焦りすぎただけだ」

マズい、マズいマズいマズい！

あれ？

のぼせてきた。

「……箒？ほう……」

一夏のこの言葉をバックに、私は意識を失った。

side 箒 end

「……ここは？」

目を覚ました箒が見たのは、知らない天井だった。

（マズい、何か変な物を受信したかもしれん）

「大丈夫か、箒？」

「一夏？どうして私はここに……？」

「あの後、宿の女将さんと呼んでここまで運んで貰ったんだ。流石に俺が運ぶのは駄目そうだったからな」

「……そうか……」

箒の声は暗く沈んだ。

「どれ、熱は大丈夫か？」

ピタリ、と一夏のおでこが箒のとぶつかる。

「……！！？」

「お、熱はないようだな……って、箒？どうしたんだ？」

見ると、箒の顔は異常なまでに朱に染まっていた。

「な、なんでもない！」

「そうか。じゃ、話を変えるぞ」

箒の照れ隠しを額面通り受け取った一夏は流石朴念仁だと言えるだろう。

「料理は作りたてを食べさせたいらしいから、食事の時間が少し遅れるらしい。二時間位あるけど、どこにいく？」

時刻は既に午後七時をこえており、周りはすでに暗くなっていた。

「そうだな……では、あの川に行きたいぞ、一夏」

「わかった。じゃ、行こうぜ箒」

「ああ」

こうして、二人は近くの川に向かうことにした。

閑話 7 予想外と温泉と川遊び（中編）（後書き）

一夏が主人公してる……

この駄文の主人公は麗我なのに……

閑話 8 予想外と温泉と川遊び（後編）（前書き）

書いてて思った。

砂糖くらい甘いと。

閑話 8 予想外と温泉と川遊び（後編）

「すごい綺麗だな」

「そうだな」

一夏達は、空き時間を利用して川に来ていた。

「一夏、水着を持ってきたのだが、着るか？」

「お、ナイスだ箒！」

そして、二人は草むらで着替える。

数分後、IS学園指定の水着を着た二人は、揃って川に飛び込んだ。

「ああ……すげえ気持ちいい。来て良かったな」

「私には何もないのか、一夏？」

「ああ、水着を持ってきたくれてありがとな、箒」

「ま、まあな。こ、こういう事もあると思ってだな！」

あたふたする箒を見て、一夏が笑う。

それを見て、箒も笑う。

「さ、泳ごうぜ、箒」

「そうだな、一夏」

笑いに笑った後、二人は一緒に川で泳ぎ始める。

「綺麗だな……」

「そうだな……本当に綺麗だ」

明るかった空も暗くなり、空には月が静かに佇んでいる。

暗い中、風で葉が揺れる音だけが聞こえるのも、月の綺麗さに花を

持たせているような物だ。

そして、その中で、

「さあ、行くぞ一夏！」

「お、おい箒！押すなって！」

泳ぐ二人の姿は、とても優美な物だった。

「そういえば、一夏」

「どうした？」

「昨日、私をここに誘ってくれただろう？あの時私は、とても嬉しかったんだ。昨日など、殆ど眠れなかったのだぞ？」

「そうなのか？」

一夏の素直な疑問も最もである。

今日、箒は一夏よりも元気に歩き、殆ど一夏を引つ張っている状態だったのだ。

それは、まるで睡眠不足であることなど感じさせないくらいに。

「ああ。気づかなかったのか？」

「ああ……。昨日しっかりと寝ているのだとはっかかり思ってた……」

「ははっ、一夏、一つ勘違いをしているぞ？」

「何をだ？」

「決まっているだろう。好きな人と二人っきりなのだ。元気になる方がおかしいだろう」

その時、一夏は、一瞬箒の事を妖精だと錯覚した。

「……どうしたんだ、一夏？」

箒の言葉で一夏は我にかえる。（っ、つい見とれてた……）

「な、何でもない」

「そうか……ならいい。さ、スピードを上げるぞ、一夏！」

一夏の手を引つ張りながら泳ぐ速度を上げる箒。

一夏はただ、なすがままだった。

「そろそろ夕食だな」

「そうだな」

二時間後。既に川から出て浴衣に着替え終わった二人は大広間に向かうことにした。

「夕食は何だろうな？」

「さあな……やっぱり近くに川があるんだからそれに関連するのではないか？」

「確かに……でも、やっぱり嫌な予感しかしない……」

そして、大広間の扉を開けると、

「あれ、普通だ」

「そうだな……いや、本当に普通だ」

大広間に一つ大きい机が置いてあり、その両側に座布団が置いてあり、その他には何もなかった。

「さあ、お座りになって下さい」

「出たな麗我」

「だから私は麗我ではなく、ただの使用人の一人だと言っているではありませんか」

「くっ……ああ言えばこう言うっ！」

「さ、早くお座りに」

「くっ……」

悔しそうな顔をしながらも二人はおとなしく席につく。

「申し訳ありません。ただ今箸をきらせておりまして、一つしか箸を用意出来ません。御了承下さい」

「おい、絶対に嘘だろー!!」

（はい、嘘です、とは言えないからな……）

「いえいえ、本当のことです。ご理解の方をよろしくお願いします」

「一夏、座るぞ」

「くっ……」

筈の言葉で落ち着きを取り戻した一夏はおとなしく座りなおす。

（ふう……危なかった。まあ、なんとか計画通りだ。にしても二人

とも、いただきます)

そして、悪魔がここに降臨していた。

「それでは、お飲物を用意いたします。しばらくお待ち下さい」
そして、麗我は厨房の中へと入っていった。

そして、厨房から戻って来た麗我が持っていたのは、

「……………」

「では、料理が運ばれてくるまでしばらくお待ち下さい」

「おい使用人」

「なんででしょう？」

「「なんでお前がこれを持ってるんだ!？」」

以前、一夏と篤が二人っきりで出かけた時に、昼食時に麗我に出された容器であった。

馬鹿でかい容器に、なみなみと注がれたドリンク。そして、そこから伸びている二本のストロー。一番問題なのは、そのストローは容器の中でハート型に絡まっていることだ。

「では、ごゆるりとおすごし下さい」

「おい麗我」

「だから私はただの使用人だと」

「「なんでお前がこの容器を持っているんだ!？」」

「なんで、と申されましても……元からありましたか？」

(あの後あの店にバイトに行った時に店長に貰ったんだよね……どうせ使わないから、って言ってたっけ)

営業スマイルでいけしゃあしゃあと嘘を吐く麗我。

最早一夏達にはご愁傷様と言う他ない。

「それでは、料理が運ばれてくるまで……つと、運ばれて来ましたね。それでは、我が旅館の味、お楽しみ下さい」そして、麗我はそこそと厨房へと引つ込んでいった。

「……………」

（おい、こんな状況でどう食べばいいんだよ！にしても麗我……後で覚えとけよ）

（こ、こんなラッキゲフンな状況にしてくれるとは……にしても恥ずかしいものだな……）

と、二人とも一品目の鮎の塩焼きが運ばれてきても全く手をつけようとしないう。

（くうつ……いつてしまえ！）

五分が経過した後、やっと箸が鮎に手をつけた。

（っ！これは……素晴らしい！）

鮎自体の新鮮さに加えて塩加減の絶妙さが鮎の味を引き立てている。おそらく、今日釣ってきた魚をそのまま焼いたのだろう、鮮度が違う。

おそらく、魚料理を極めた者にしか出せない、至高の味……

「一夏、凄くおいしいぞ」

「そうか。でも俺は食べられ……」

一夏の口を、箸が差し出した箸が塞いだ。

「……………!？」

「どうだ、おいしいだろ！」

（味なんてわかんねえ……!）

関節キスというのに加えて箸の満面の笑みを見た一夏は固まってしまった。

「む、どうしたのだ、一夏？」

（止める、止める箸……!）

そんなことをしつつ夕食は進んでいった。

そして、食事が終わった二人が部屋を見ると布団が敷いてあった。
それはいい。

問題は、

「……麗我、クロス」

「い、一夏!？」

布団が一枚しか敷いていないということだった。

「麗我……帰ったらどうしてやるうか」

「い、一夏!？黒いオーラが漏れてるぞ!？」

「まあ、いいか。とりあえず寝ようぜ箒。俺は畳の上で寝るから」

「ど、どうして寝てくれないのだ!？」

「決まってるだろ!！俺がお前を襲うかもしれないんだぞ!！?」

「……別に、襲ってもらってもいいのだが……」

箒の言葉で二人とも真っ赤になり、二人とも無言になる。

三十分はしただろうか。

「……じゃ、一緒に寝るか」

「そうだな」

そう言って、二人一緒に布団に入る。

(うつ……箒のいい匂いがいつもよりくる……)

「どうした?一夏」

「な、何でもない!」

(うつ……早く寝よ……)

そして、その夜はふけていった。

side 篇

寝た、か。

隣で寝ている一夏を見ながら、私は笑顔を浮かべる。

今日は、楽しかったぞ、一夏。

そ、それにだ！恥ずかしかったんだぞ！

平静を装ってはいたものの、川でお前の手を引っ張ったのも、今日の関節キスも……な。

ただ、今日一緒に泳いだのは楽しかったし、今日食べた物は味が感じられなかったぞ。

まあ、食べた物以上にお前に食べさせたこととお前に食べさせられたことが嬉しかったのだが……

そ、それは別としてもだ。今日は本当にありがとうな、一夏。

「気にするなよ、篇」

へ！？

「……………zzz」

なんだ、ただの寝言か。

良かった。

また一緒にここに来ような、一夏。

その時は恋人同士になっていたら最高なのだな。

お休み、一夏。

そして私は顔を真っ赤にさせながら一夏の唇と私の唇をくっつけた。

side 篇 end

次の日の朝。

「麗我」

「だから私は麗我ではないと」

「赤い外套がはみ出してるぞ」

「!？」

麗我は自分の背中を見て何も出てないのを見る。

（やべえ……はめられた……）

「「覚悟はいいか？麗我」」

（ばいばい、この世界）

翌日。

麗我が四肢をへし折られて川に浮かんでいたのが発見された。彼は、「次はもう見つからないようにしよう」と言ったとか。

閑話 8 予想外と温泉と川遊び（後編）（後書き）

後二回閑話が入るかも……

感想、セシリアの料理案、宝具案などお待ちしております！

閑話 9 デュノア社襲撃と含みのある会話（前書き）

今回は皆様にお願ひがあります。

あとがきの方で書いておくのでもしよければよろしくお願ひします。

閑話9 デュノア社襲撃と含みのある会話

「……ここか」

一夏達にいらないうちよつかいを出してしまい、危うく殺されかけた次の週の日曜日。

麗我は、フランスにあるデュノア社本社の前に来ていた。

「よし、入るか」

おくびもなくビルの中に入り、正面玄関で取り次ぎを行う。

「今すぐ社長に取り次いでほしい」

「ご予約はおありでしょうか？」

「そんな物はない。が、今すぐ社長に取り次いでほしい」

「それでは面会することは出来ません」

「そんなことどうでもいいんだよ。早く取り次げ」

「……そろそろ警備員を呼びますよ？」

「別に構わない。が、一つだけ伝えておけ。《赤い錬鉄》が襲撃に来た、と」

次の瞬間、銃声が響いた。

「何があった！」

デュノア社社長は怒り狂っていた。

ただでさえ第三世代の開発が進まず、予算もカットされるかも知れなくて悩んでいた時に、いきなり銃声が響いたのだ。それは怒り狂うというものである。

だが、その声色は次の部下の言葉で変化することになる。

「……『赤い錬鉄』の……襲撃です……」
すなわち、怒りから純粹なる恐怖へと。

「邪魔だああああっ！どけええええっ！」

麗我は階段を走っていた。

その両手にはナイフ。だが、一人たりとも殺すことなく、手足の腱を斬り、戦意を喪失させるだけに止まっていた。

そして、わざわざ階段を使っている理由は、

「くそう……エレベーターを止めやがって……糞、忌々しいがああの野郎に教わったアレ（・・・）、使うか？でもアレ、まだ未完成だからな……コツは掴んだんだけどな……」

というわけだ。

「ふう。また敵さんか。怪我をしなくては退いて欲しいんだけど……無理か」

麗我の言葉が終わる前に、警備員は銃を乱射する。
が、

「いい加減覚えろよ……俺に銃はきかない（……………）、素直に格闘でしか効果がないってことをな」

当たる最低限の銃弾のみを見切り、当たる物のみをその剣で弾いて（……………）いく。

「……！！！！？」

話だけは聞いてはいたが、あまりにも予想外の行動により、警備員達の動きが一瞬止まる。

だが、その一瞬で、

「遅い」

麗我は、警備員達の間合いに入り、その双剣で彼らの腕の腱を切っていく。

「出来るだけ怪我はさせたくは無いが……悪い、今は気がたってるんだ、警告を聞かなかった自分を悪く思え」

そして、その一言のみを残し、また麗我は階段を駆け上がっていく。彼の信じる物の為に。

「駄目です、止まりません！」

「馬鹿な、銃を持つてるんだぞ、どうして男一人殺せない!？」

「しっかりと狙ってはいるのですが……全て持っている剣で銃弾を弾かれるのです。あれではどうしようも……」

「馬鹿な、銃弾を弾くだ!?!? そんなもの……」

「実際に弾いているのです！」

「最終防衛ライン、突破されました！」

社長室では、デュノア氏が連絡の応対に手間取っていた。

赤い錬鉄が自分の会社を襲ってきたという恐怖に加えて、次々に来る悪報。

手間取らない方がおかしいというものだろう。

「くっ……」

ギリギリと、彼以外だれもない社長室に、歯軋りの音が響く。

「……ISを出せ」

「社長?何を」

「ISを出せ!今すぐだ!」

無人の社長室にデュノア氏の怒号が響きわたるのに時間はかからな

かった。

「『赤い鍊鉄』、止まれ」

「……邪魔だ、どけと言わなかったか？」

そして、五分後、麗我の前には三機のISが立ちはだかっていた。どうでもいいが階段に三機が並んで立ちふさがっているのだ。かなりシユールな光景であることは想像にかたくない。

「それでもだ。それに、疑問がある。何故、我が社を襲撃する必要がある？ 貴様にそんな理由はないはずだ」

「シャルロットのためだ。嫌、違うな。これは単に俺の自己満足だ、本当にアイツのためがどうかも疑わしい」

「では」

「でもな、許せないんだよ」

麗我は、低く抑えた声で三人に言う。

「アイツはな、最近までずっと泣いてたんだぞ！？ 確かに顔では笑ってたけどな、ずっと、心の中では泣いてたんだよ！ そして、その原因はお前らだろうが！」

「確かに、私達と言えば私達の責任だ。だが、彼女のためというにはいささか行動が言動と違うようだ。何故彼女の父親の会社である我が社を襲う？ それでは本末転倒だ」

「そんなもの関係ないんだよ……アイツは三年後、本国に強制送還させられて刑務所行きだ」

「……何っ！！？」

初めて警備員達の表情が変化する。

無表情から、明らかな驚愕へと。

「だが、それでも攻撃をさせるわけにはいかない！」

「そんなことだろうと思ったよ。が、今までに何秒たってるんだろ
うな？」

「何が言いたいのだ、貴様！」

麗我は沈黙で返す。

が、彼の手には既に一本の剣が握られて、エネルギーを送り込まれて
いた。

そしてその剣は、セシリアをいとも簡単に倒した剣――

「悪いが早く終わらせてもらおう！」

――赤原をを往け、緋の猟犬――

「方位しろ！」

麗我が剣を弓につがえたと同時に三機のラファール・リヴァイブは
動き出す。

が、その行動は遅すぎると言うほかなく、

フルンテイング
「赤原猟犬」

三機のISは、操縦者が倒されたと理解する前にガラクタへと化した。
た。

「やっとたどり着いたぞ、糞野郎」

「やはり、あの程度では倒すことは出来んか……」

そして、数分後。麗我は、社長室でデュノア氏と相対していた。

「要件を言え、我々の負けだ」

「ほう、随分と潔いな」

「当たり前だ。私達は既に負けたのだ」

と、デュノア氏はベルトの後ろにある銃に手をかけ、

「最も、それは今かわるがね!!」

麗我に向かって発砲する。

が、その程度の銃弾が麗我の命を奪うわけもなく、

「甘いんだよ。その程度、戦場では基本だぜ？」

全て手のナイフで弾かれる。

「くっ……」

「さあ、銃をまず捨てろ」

デュノア氏は麗我の言葉に従い、素直に銃を麗我の方に放り投げる。

「では、要件だが、まず一つ……シャルロットに謝れ」

ピクリ、とデュノア氏の眉が動く。

「どうした？聞かないのか？」

「くっ……くっくっくっ」

「何がおかしい」

「ハアーツハツハツハツハツ！これが笑わずにいられるかつ！

あいつは私の所有物モノだぞ？なぜ私があんなモノに謝らねばならぬ？」

「モノって……お前の娘だろうが」

「はっ！アレが私の娘だと！？アレはただの私の便利で可愛いモノ

(どうぐ)だ！そんなものに感情は必要ないのだよ！」

「ふざけんなっ！そんな親がいてたまるかっ!!」

麗我はデュノア氏に対して激昂する。

「彼女はお前の娘だろうが……なんでみんな俺の本当の(・・・)

親みたいに自分の子供にそんな扱いが出来るんだよ！おかしいだろ

!!」

言い終わると同時に麗我は扉に向かって歩いていく。

「話は終わりだ」

「そうか」

「ああ。ついでに一つ言っておく。同じ話を次に耳にしたときは」

――この会社をこの世界から抹消してやる――

そして、麗我はデュノア社から姿を消し、後にはデュノア氏だけが残された。

そして、麗我のデュノア社襲撃から一時間後。

「お願いします！シャルロット・デュノアを、正規の試験に受けさせてやって下さい！」

麗我は、ある人に向かって土下座していた。

その人物は、

「Mr・氷雪、話は聞きましたが私の独断ではそれを決定することは困難だ」

「困難ということは、不可能じゃないってことでしょうか？大統領」

「流石ですね、Mr・氷雪」

フランスのトップである、大統領であった。

「まあ、これくらいはなんとかありますよ。それよりも、さっきの件についてです」

「全く、落ち着いて下さいよ麗我さん。いくら貸しがあるからといっても今は立場という物がですね」

「ああ、確かに。じゃ、体勢を戻しますよ？」

「どうぞ」

麗我は、立って大統領の隣に座る。

「で、です。先程の話は聞きました。……が、それだけでは私は動けません。何か、上を動かすことのできる物がありますか？」

「……それが目的ですか」

「さあ？どうでしょうか」

麗我の探るような視線を大統領は笑顔で返す。

（……狸め）

「で、なければこの話は――」

「わかりました。出しましょう。フランス政府を動かせる物を」

そして、麗我が持ってきたバッグの中から取り出した物は、

「……Mr・氷雪、何故貴方はこんな物を持っているのですか？」

「さあ、どうしてでしょう」

ISのコアだった。

「にしても、これはどこの国にも登録されていないコアですね」

「はい、そうですね」

「どうやって手に入れたのですか？」

「私の口からはお話出来ません」

大統領の探るような視線を麗我は笑顔で返す。

このコアは以前の『依頼』の時に報酬として篠ノ之束から譲り受けた物。

麗我が、シャルロットを救うために手に入れたとっておきの Joker（切り札）。

そして、

「これほどの品ならば、問題は一切ありません。わかりました、シャルロット・デュノアを正規の試験に受けさせることを約束しましょう」

この品は、一国の大統領をも動かした。

「ありがとうございます」

「礼を言うのはこちらですよ。では、Mr・氷雪。また依頼を申し込むかもしれませんが、その時はよろしく」

「わかった」

こうして麗我は、シャルロットを正規の試験に受けさせることを約束させた。

そしてその帰り道。

「タバ姉、コアありがとう」

「いいよー、れいくんのためだったらコアの一つや二つ、何も惜しくはないぜ!!」

麗我は、携帯で篠ノ之束と話していた。

内容は勿論、今日の件についてだ。

「全く、れいくんらしいよ。友人を助けるためだけに、コアを要求するなんてさ」

「それについては何も言えないな……それよりもタバ姉、一つだけ聞いていいかな？」

「なにー？」

「あの無人IS、作ったのタバ姉でしょ？」

一瞬だけ、二人の間を静寂が満ちた。

「な、なんの事かなー？束さんはそんなの」

「コアはタバ姉以外には作れないんでしょ？それにあの研究所の無人ISは、IS学園に来たのより弱く感じたがら、こういう結論になったんだよ」

「……れいくんはすごいなー。束さん憧れちゃうよ」

「そんなにおだてないでよ」

ハッハッハ、と二人して笑う。

十秒くらいしただろうか。

「ねえれいくん」

「何？タバ姉」

「今の世界は楽しい？」

それは、篠ノ之束が友人だと思っ者にのみ問う言葉。

だが、麗我はその問いに、

「世界なんてどうでもいい。俺は、俺の仲間が幸せにしてたらそれでいい」

誰もが予想しえない解答を返した。

「ふうん……れいくんはやっぱり歪だね」

「そうかな」

「そうだよ。じゃ、私はきるねばいい」

「ああ、ばいばいタバ姉」

そうして篠ノ之束との会話が終わった後、麗我は飛行機のシートに深く腰掛けて深く息を吐いた。

閑話9 デュノア社襲撃と含みのある会話（後書き）

依頼内容

ISの二次を書かれている皆様にはお願いです。
三巻が終わった後にカラオケ大会を開こうと思っているので、皆様の素敵なキャラをこの駄作者にお貸しください。

必要事項

キャラ名と作品名

歌わせたい曲

上手さ（うまい、普通、下手）

お願いしますm（――）m

後、一夏と篝ペアと麗我と鈴音は歌わせる曲はわかっているのですが、他のメインメンバーが歌わせる曲が決まっていなかったので何か歌わせたい曲があったら感想板までお願いします。

締め切りはこの駄作者が三巻の内容を終わらせるまでとさせていただきます。誠に身勝手だとは思いますが、皆様どうかこの駄作者に力を貸して下さいm（――）m

閑話10 デートと心の氷解（前書き）

最後までたっちゃん先輩久々の登場。

閑話10 デートと心の氷解

「簪……俺はお前のことが」

「……麗我、駄目……人が見てる……」

「いつそ見せつけてやればいいだろ？俺達が恋人同士だということを」

「麗我……」

そして、麗我と簪の唇が触れ――

「……また、この夢……？」

る瞬間、簪は目を覚ました。

（……どうして……あんなどうでもいい人の夢を見ちゃうんだろう
……しかも……）

夢の内容を思い出し、簪は赤面する。

きっかけはあの学年別トーナメントだった。

あの時、麗我に助けられてから簪の夢がおかしくなりだしたのだ。

「……顔洗ってこよ……」

ピンポン

突然、インターホンの機会音が響き渡る。

「……誰……？」

怪しく思いつつも簪はドアを開ける。すると、

「よ、簪」

夢に出てきた張本人が笑顔で立っていた。

（え！？え！！？）

簪は混乱の極みにいた。

無理もない。今朝恥ずかしい夢に出てきた当の本人が笑顔で立っていたのだ。

混乱しない方が難しいだろう。

「ど、どうしたの……？こんな、朝早くに……」

「お、よく聞いてくれたな。用つてのはこれだ。」

そして三重県の某絶叫マシーンしかない遊園地のチケットを取り出して、

「一緒に行こうぜ」

と爆弾を投下した。

（一緒に、って……まさかデ、デデ、デート……？）

「どうした？ああ絶叫マシーンが苦手なのか？それなら別の遊園地のチケットを買ってこれば良かったな……」

「問題は、ないけど……どうして私と……？」

「え？簪と行きたいから。それ以外に理由なんか必要か？」

ボンツ、という擬音を伴って簪の顔が真っ赤になる。

（え……？私と行きたいって、それは……って、なんでこんなこと考えてるの……？）

「そのチケットは明日用のだから。……後、凄いパジャマだな……」

「……あ……」

ここまで来て、ようやく簪は自分の来ている物を思い出す。

それは、仮面 イダー ウガのデフォルメパジャマ。

「いや、俺もこういうのは好きだぞ」

「……………！！」
声にならない悲鳴をあげ、簷は開けっ放しのドアを力いっぱい閉めた。

そして翌日。

「よし、ついたな」

「……………何、あれ……………」

「ああ、スチールド ギョウというジェットコースターだ」

麗我達は、ナガシ スパーランドに到着していた。

「よし、入るか」

「……………お金は……………」

「ああ、大丈夫だ。こういうのは男が払う物だろ？」

「……………（真っ赤）」

麗我のお金でチケットを買い、中へと入っていく。

「よし、あれ乗るか」

麗我が指指したのは、赤い巨大なジェットコースター、スチールド
ラゴン。

「あれ……………乗る、の……………」

「ああ、行くぞ」

「いや……………」

「でも駄目ですよ、っと」

そして麗我は簷をお姫様抱っこしながら順番待ちへと歩いていった。
その時、簷が恥ずかしさのあまりに顔がトマトを軽く凌駕するほど
に顔を赤く染めたり、周りの男達が射殺するような視線を向けていた
ことは割愛する。

「もう……駄目……」

「だよな……少々やりすぎた」

そして数多ものアトラクションを楽しんだ麗我と簪は昼食をとり一旦戻っていた。

「じゃ、ちよつと買ってくる」

「待つて……」

麗我を静止し、簪はある物を取り出す。

それは、

「おお……良くできてるな」

「一生懸命……頑張った、から……」

風呂敷に包まれた弁当だった。

「あれ？二つあるぞ」

「一つは……麗我の分……」

「え？くれるのか？」

麗我の問いに簪は無言で頷く。

「じゃ、いただきます」

「いただきます……」

パクパクモグモグ

「うん、美味しいし、一番いい調味料が入ってるな」

「……一番いい……調味料って……」

「作る人の気持ちだよ。食べて欲しい、っていう気持ちがしっかり入ってる。だから美味しく感じるんだ」

麗我の言葉に簪はさらに顔を赤く染める。

その時、

「おい兄ちゃん、見せつけてくれるじゃないか」

「そーそー。お嬢ちゃん、俺達とイイことしない？」

招かれざる者達が姿を表した。

「……ああ、一つ聞いていいか簪」

「……何……？」

「別に、アレを倒してしまっても構わんのだろう？」

その時、簪には麗我の背中が普段より大きく見えた。

「……遠慮はいらない、頑張つて、麗我……」

「了解したよ。ああ、その男達にも一つ聞いておきたいことがある」

「ああ？」

「――覚悟の貯蔵は十分か？」 「――舐めるなよ、カスが……」
そして、戦いが幕をあけ、

「ふっ」

「グハッ」

「どうした、そんなものか？」

「や、やべえコイ（バキッ）ぎゃあああああっ！」

「麗我……凄いな……」

「ははっ、簪の期待を一身に受けてるんだ、負けるわけがないだろう？」

「でも、軽く十人は超えてたけど……」

「雑魚がいくら集まっても雑魚だってね。さ、行こうぜ簪」

「……（コクリ）」

ほんの数秒で終わり、無傷の麗我は簪と共に去っていき、後には

ボロボロになり倒れた男達だけが残された。

「……楽しかった……」

「そうか。それなら何よりだ」

そして帰りの電車の中。麗我と簪は座って今日の感想を言いあっていた。

「……お姫様抱っこは、恥ずかしかった……」

「ああ、悪かった。並んでいる時ずっとあの姿勢だったもんな」それは拷問ではないか。

「でも、楽しかっただろ？」

麗我の問いに簪は無言で頷く。

「楽しかったって言って貰えるのが今の俺への最高のご褒美だよ」そう言つて、麗我は満面の笑みを浮かべる。

（……ああ、やっと……気づけた……私、あの人のことが……）そして、その女殺しの笑顔は、

（……好き、なんだ……）

堕ちかけている一人の女の子を完全に堕とすには十分だった。「…

…麗我……」

「どうした簪」

「……ちよつとだけ、目をつぶつて欲しい……」

簪は何かを決意した顔で麗我の目をつぶらせる。

そして、

「……ありがとう、麗我……」

麗我の頬に唇をくっつけた。

side 簪

「お姉ちゃん、話がある……」

「あら、簪じゃない。どうしたの？」

「好きな人が、出来たの……」

「え？ 誰々？」

「氷雪、麗我っていう、生徒会の、副会長……」

こう言うと、お姉ちゃんの表情が固まった。どうしたんだろう……

「私の好きな人と同じじゃない……」

……え……？

「お姉ちゃん、それ…… ということ……？」

「ねえ、簪、手を組まない？」

「……え……？」

「私達が力を合わせて麗我を籠絡するのよ。私も麗我のことが好きだし、貴女も麗我の事が好きなんでしょ？」

「……うん……」

「なら更識の家の力も使いながら麗我を二人で堕とそうよ」

「……それ、のった……」

「よし、それならこれからは共同戦線ね！一緒に麗我を堕としましょう！」

「……うん……！！」

そして、私とお姉ちゃんは、しっかりと手を握りあった。

閑話10 デートと心の氷解（後書き）

やっと、これだけやってやっと次から三巻突入……！！

お願いの方まだまだ募集中です。よろしく願いします。

第33話 二人の女の戦いと朝の騒動（前書き）

今回は短く、簪を優遇しました。

あの子はとても可愛いのです。

第33話 二人の女の戦いと朝の騒動

臨海学校を目前にしたある日。

「……ハッ!？」

午前四時に麗我は目を覚まし、布団からバック転してその後ズザザザと音をたてながら止まる。

「……来ているんだろ、ラウ」

「ちっ、やはりわかつていたか」

天井からラウラが姿を表す。

「今日は勘弁してくれ。明日ならいいから」

「何故だ?いつもなら仕方ないとか何とかいいながら布団に入れてくれるだろう?」

麗我の女殺しは昔からのようだ。

「いつもなら、だけどな。今日はあいにく」

そう言いながら麗我は布団をめくる。

そこにいたのは、

「すっ……すっ……」

「先客がいるんだ」

幸せそうな顔をしながら麗我のベッドで寝ている簪だった。

話は昨日に遡る。

「麗我……」

「お、どうした簪?」

夜の十一時頃、簪が突然麗我の部屋を訪れていた。

「眠れないの……一緒に寝ても、いい……」

「ああ、別にいいぜ。早くこっちにこいよ」

「……（真っ赤）」

顔を朱に染めつつも、簪は麗我の部屋へと入り、

「麗我……おやすみ……」

「って、おい簪、抱きつく……」

「……すう、すう……」

「……って、もう遅いか」

麗我に抱きつきながら寝始めた。

（……恥ずかしい……でも、寝たふりってばれてない……よかった……）

と簪が思っていた事を麗我は知らない。

そして、話は冒頭へと戻る。

「麗我……お前は……」

「待て、ラウ。なんでそんなにいきなりサバイバルナイフを構えるんだ！？」

「私という者がいながらあああつ……」

叫びながら、ラウラは麗我に突撃する。

「待て、ラウ。頼むから落ち着いてくれえっ……」

「うるさい！私という者がいながら、他の女子を自分の部屋に連れ込んで……」

こんな馬鹿げた話をしながらも、ラウラと麗我は激しく手の武器で打ち合っている。

「麗我の……馬鹿あああつ……」

「くっ……！？ラウのナイフの素早さが急に早く……！？」

ラウラが怒りの力で急激にパワーアップしたかと思えば、

「ならギアを少し上げるぞ。この剣劇に……」

「…ついてこれるか？」

「麗我あああっ！」

麗我も両手のナイフ捌きのレベルを上げる。

「うおおおっ！」

「はあああっ！」

二人の剣劇は止まることを知らず、このまま終わらないかと思われた、その時だった。

「……麗我、おはよ……」

簪が、目を覚ましたのは。

side 簪

え、これ……どうなってる、の……？

「おはよう簪。じゃあ、とっととこれを終わらせるか」

「もらったあああっ！！覚悟しろ、麗我あああっ！！」

「はいはい。また一時眠れ、ラウ」

そう麗我が言ったと思ったその時、麗我は目にも止まらない速さでラウって言われてた人の鳩尾に拳を叩き込んだ……

「うつ……くそう、例えここで私が倒れたとしても、第二、第三の私が貴様を……」

「どこのラスボスだ、どこの魔王だっ！！！！」

「では、さらばだ、麗我……」

この言葉を最後に、ラウって言われてた人は崩れ落ちた……

「簪。今はまだ午前四時だがどうする？」

麗我がこんな事を言ってくるけど、今の私の目的は、たった一つしかない……

それは……

「……麗我……一緒にまた寝よ……」

「はいはい。全く、普段なら鍛錬の時間なんだけどな……まあいいか。せつかくのお嬢様からのお誘いだ。受けなきゃ一流の執事じゃないってな」

こう言うと同時に、麗我は私のいる布団に入ってきてくれる……

「……（ぎゅっ）」

「おいおい、抱きつくなくて……ってもう寝てるし」

勿論寝たふり……って……！？

「よしよし、っと」

え？今、私、麗我に頭を……撫でられてる……？

「本当に可愛いな、簪は。今俺の布団にすることが信じられないくらいだよ」

ああ……顔が真っ赤になっていくのが自分でもよくわかる……

「いい夢を、簪」

と、麗我が私を起こしてくれるまで、私は麗我を堪能し続けた……。頭を撫でられるのって……とても、気持ちいい……

side
簪
end

第33話 二人の女の戦いと朝の騒動（後書き）

主人公設定にかなりのネタバレを追加しました。

第34話 食堂での騒動（前書き）

とても短い話です。

さあ！次はカオスのターンだ！

第34話 食堂での騒動

「よし。じゃあ朝になったし食べにいくか」

「そうだね……」

時間もいくらか過ぎ、午前七時。麗我と簪は食堂へと向かっていた。

「麗我、おはよう」

「おはようございます、たちちゃん先輩。今日も麗しいですね」

「……（真っ赤）」

麗我に挨拶した楯無もいきなりのこの言葉を受け顔が真っ赤になる。

「お姉ちゃん……」

「こ、これは別よ！！それよりも、麗我の布団はどうだった？」

「凄い、安心できた……いいものだね、好きな人と一緒って……」

「でしょう？さ、次の作戦を後で考えるわよ！！」

「……うん……！！」

姉妹はグツと拳を握り合う。

だが当の本人である麗我は何が起きているのかわからずに首を捻るだけだった。

「麗我、食べさせて……」

「はいはい」

「麗我、僕にもお願い」

「わかったよ」

「麗我、私にも頼む」

「はいはい。まったく、お前らは……」

「お前達は何をやってるんだ……」

食堂に筭の声が虚しく響く中、麗我は執事服で周りの女子に『はい、あーん』をやっていた。

「麗我、次は私が食べさせてあげる……」

「へっ？」

麗我がその言葉の真意に気づくよりも早く、簪は麗我の「飯を自身の箸で持ち、

「はい、あーん……」

「！？」

そのまま麗我の口の中に突っ込んだ。

「か、簪さん!？」

「早い者勝ち……麗我、口を開けて……」

簪は今度は麗我のおかずである鳥の唐揚げを箸で持ち、麗我の口の中に入れる。

「……麗我、はい、あーん……」

この光景に怒った四人の修羅が麗我に箸を突きつける。

（あ、これ死んだかも。父さん、母さん。俺、もうすぐそっちに行くよ）

突きつけられた箸を目の前にして、麗我が覚悟を決めた。

「何をやっているんだ、馬鹿者が」

が、天はまだ麗我を見捨てなかったようだ。

麗我に対して箸を突きつける女子達全員に出席簿アタックを繰り出した千冬は、叱責した後再び職員室へと戻っていった。

「痛いですわ……」

「大丈夫か？みんな」

「ええ……なんとか」

「うん、大丈夫だよ」

「ああ、何でもないぞ」

全員が頭をさすりながら返答する。

「そうか、良かった」

「……私には、何もないの……」
「う」

簪の涙目と上目使いのコンボで、危うく麗我は簪のことを抱きしめてしまいそうになる。

が、

「実は姉御に叩かれてないだろ、簪」

「……う」

しっかりと叩かれていなかったという事実を見られていた簪は軽く唇を噛む。

「あ、そうだ。この中に暇な人いる？」

「……どうした（の）、麗我（さん）（……）？」「……」

「いや、実は水着を一緒に買いに行こうと思うんだが、誰か一緒に

……」

「私は暇でしてよ」

言い終わらないうちにまずセシリアが立候補し、

「僕も大丈夫だよ」

ついでシャルロットも大丈夫だと返す。

「麗我、嫁の私を誘わないとはどういうことだ？」

ラウラが全員にプレッシャーをかければ、

「麗我、当然私達と行くよね」

「一緒に、行こ……」

更識姉妹が二人で他全員を牽制する。

「……」

彼女達の周りに広がる険悪な気配。

「あの、みんな……お願いだから、ISを展開するとかなしに……」

「なら、力で決めるとしましょう!!」

「いいな。私の力、見せてやろう!!」

「僕を忘れてもらっちゃ困るな」

「私達の力……味わってみる？」

「お姉ちゃん……行くよ……!!」

ヒートアップした女子達は麗我の制止を聞く素振りも見せずにISを展開して睨み合う。

そして、麗我を巡る争いが始まるかと思われたその時、

「五月蠅いぞ、馬鹿者どもめ」

いつの間にか来ていた千冬が、再び全員の頭に出席簿アタックを繰り出した。「痛い……ですわ……」

「うっ、教官……」

「うっ……」

「……痛い……」

「うっ、これは……」

「早く教室に行け、後お前達は元気が有り余っているようだからグラウンド十週をくれてやろう。嬉しいだろう？」

「……あ、ありがとうございます……」「」「」

「織斑先生、私もですか？」

「当たり前だろう更識」

「………わかりました」

「そうか。ではな」

言いたい事は言い終わったとばかりに千冬は食堂を出て行く。その後を追うかのように、麗我達は教室に向けて歩き出した。

第34話 食堂での騒動（後書き）

そして、無事に麗我と共に買い物に行ける者は誰か！？

第35話 格闘技術と師匠の力（前書き）

ごめんなさいっ！

カオスは次回です！

今回は説明回です。

第35話 格闘技術と師匠の力

「なあ、麗我」

「どうした」

「なんであいつらはグラウンドを走ってるんだ？」

グラウンドに座りながら一夏は聞く。

実は一夏は速く起きて竹刀を振っていたため、遅刻することもなかったのだ。

……目に出来ている隈には気づかないふりをしておこう。

「さあな……」

蹴りの練習をしながら麗我は返す。

「お、上手くいった。もう少しだな」

「……何の練習をしているんだ？」

「見たらわかるだろ。ただの飛び蹴りだ」

「それはわかるんだが……何か違うような気がするんだよな……」

一夏が見た通り、ただの飛び蹴りとは違う。

ただ前方に向かって足を突き出しているのではなく、振り向きざまに（…………）蹴りを放っていた。

「それも例の流派の技か？」

「いや違う。あれは陸奥の技じゃない。知り合いに教えてもらった技だ。俺は《陸奥》じゃないからな……」

「どういうことだ？」

「簡単だよ。俺は《陸奥》の技を使っているけど《陸奥》の名前を継いでないんだ。俺の師匠の名前は陸奥謙信だろ？」

「ああ。あの反則みたいな強さを持った人だよな……」

前に、IS学園のIS五機を素手で、しかも無傷で完全に破壊しつくした謙信。

その余りの強さを思い出し、一夏は思わず身震いする。

「あの人みたいに、《陸奥》の正当な継承者は陸奥の名前を継げる

んだ。でも、俺は陸奥の家に生まれたんじゃない。だから、俺は陸奥にはなれないんだ」

「うーむ……よくわからないな……」

「簡単に言つと、陸奥つてのは人外、化物の一族なんだ。なんせ、人を殺す為の技を千年間磨いてきた一族だからな」

「なんじゃそりゃ」

「ま、一夏にはわからないだろ。だって、俺にもわからん」

一夏の疑問を麗我は笑い飛ばす。

「ま、そういう訳で、陸奥の一族は生まれた時から（……………）修行をしている。でも、俺は陸奥の家に生まれたわけじゃない。

ただの一般的な両親の所に生まれたただの人間だ。だから、俺は本来の《陸奥》が積んできた修練には遠く及ばないし、何よりも才能がない。だから、俺は《陸奥》じゃないんだ」

「うーん、まだよく……」

「最も簡単な違いを教えてやろう。俺は、《奥義》と呼ばれる技を含めたいくつかの技が出せない」

そう言いながら麗我は地面に拳を押しつけ、構える。

「本当なのか？俺から見たら十分強いけど……」

「ま、簡単な例を見せてやるよ」

言うが速いか、麗我は地面に押しつけた手に全身の力を入れ放つ。

「……………すさまじい」

麗我が拳を放すと、そこには拳大の陥没が出来上がっていた。

「俺が使えるのは、この《虎砲》っていう技が限界で、師匠ならもっと凄い技を持ってる」

奥義の一つに、無空波という技がある。

全身の力を左拳に極限まで溜め、相手の体に押し当てた拳を振動させ、拳を突くという技だ。

拳による攻撃は避けられても、瞬間的に伝播された（……………）振動までは避けれず（……………）、その振動による（……………）内部への攻撃により敵を倒す、という技だ。

この技を扱う為には生まれてからの修練が肝心であり、それは麗我には全く足りていない。

だから、あの技が出せない、というわけだ。

「はあ……はあ……」

「お、戻ってきたな」

見ると、女子勢が罰走を終わらせ、麗我の所に集まってきた。

「お疲れ様。お茶があるけど、飲むか？」

「麗我、ありがと……」

「麗我、ありがと」

最初に来たのは更識姉妹で、麗我から差し出されるお茶を丁寧に受け取り、喉を潤す。

「……冷たくて、美味しい……」

「よく冷えてるね……」

「まあ、家の冷蔵庫のおかげですよ」

麗我はIS学園に入ってきた最初の日に部屋に入っていた冷蔵庫を無断で改造し、今の麗我印の冷蔵庫へと変えたのだ。

その効果は、言わなくても伝わるだろう。

「れ、麗我さん、私にも一杯、いただけませんか……？」

「麗我、僕にも一杯もらえる？」

「はいはい」

結局全員にお茶を渡すことになり、麗我は軽く息を吐く。

（一応全員分持ってきてよかったな）

「所で簪、たっちゃん先輩」

「何……？」

「何かしら？」

「ちょっと、つきあってくれないか？」

「……え（……）？」「」「」「」

第35話 格闘技術と師匠の力（後書き）

次回こそ……カオスのターンにするぞー！

第36話 ダブルデートと追跡者（起）（前書き）

俺のターン！

速攻魔法、狂戦士の魂を發動！
バーサーカー・ソウル

これにより、引いたカードがモンスターカードだった場合、俺のモンスターであるカオスはもう一度攻撃出来る！

ドロー！モンスターカード！

ネタですがカオスになりました。
次は一夏×第だよー。

第36話 ダブルデートと追跡者（起）

「うん、いい天気」

「麗我、一つ、いい……？」

「どうした簪」

「女心を弄ぶ人は、地獄に落ちて閻魔に舌を抜かれるといいと思う

……」

「それ嘘をついた時のじゃなかったっけ！？」

「五月蠅いよ麗我」

「俺が悪いのか……」

「あの三人とも、ここ路上なんだけど」

「……ごめんなさい」「……」

というわけで、麗我達はダブルデート状態で街へと繰り出していた。

「じゃあ、ここで一旦別行動だな」

「そうだな」

広場で一夏達と別れた麗我は、更識姉妹を連れて街へと繰り出す。

「にしても本当に悪いな。俺の水着選びにつきあってもらって」

「気に、しないで……私も、ちょうど新しいの欲しかった所だから

……」

「そうそう。気にしない気にしない」

更識姉妹のフォローで麗我は少し安心する。

「じゃあ、どこに行きます？」

「そうね、ゲームセンターなんかどうかしら？」

「いきなり遊び路線ですね……」

「一緒に、プリクラとか、とろ……？」

そう言うが速いか、簪は麗我と腕を組む。

「……!?」

「……どうしたの、麗我……？」

「い、いや、その、だな」

しどろもどろしながらも、麗我は自分に押しつけられた柔らかな二つの双胸の柔らかさを意識して顔を赤らめる。

「我慢、して……私だって、恥ずかしいんだから……」

そう言いながら、簪は後ろを見て牽制の意志をとった。

(……バレてますわっ!?)

(嘘!? 何でバレてるの!? 百メートルは離れている筈なのに……っ!?)

そして、麗我から百メートル以上離れた場所で離れて監視していた者達は、簪にバレていることに気づき戦慄した。

「わざわざ双眼鏡まで使って見ていましたのに……」

「まさか双眼鏡ごしに牽制されるとはね。恐れ入ったわ」

冷や汗をかきながら二人は話す。

「にしても、どうします? シャルロットさん」

「監視は続けるよ。もし麗我が若気の至りに入ろうとしたら、全力で止めなきゃいけない」

『ぜんぜん掴めない君の事ぜんぜん知らないうちに』

「はい、もしもし」

シャルロットが電話に出る。

どうやらさっきのはシャルロットの着信音らしい。

「私だ」

「ラウラ、そっちはどう？」

「大丈夫だ、問題ない。三キロ離れた所から軍用スコープで見ている。気づかれた様子はない」

「そう。なら、続けて。セシリア、鈴は僕と一緒にこのまま監視を続けよう」

「「「了解！」「」」」
ラジャー

シャルロットの指令に全員が二つ返事で返す。

どうやらいつの間にか追跡者のリーダーになっていたらしい。

だが、彼女達は「監視」と言っているが、これは立派なストーカー行為であるということに彼女達自身は気がついているのだろうか？

「ふう、全く。あいつらは暇なのか？」

そして、当然のように麗我もシャルロット達の尾行に気がついていました。

（ラウ……それ、金の無駄なんじゃないのか？）

また、麗我は三キロ先の場所にいるラウラの存在にも気がついていました。

「麗我、速く……行く……？」

「そうよ。麗我、速く行くよ」

「はいはい。わかったからそんなに引つ張らないでくれ」
と、右手を簪、左手を楯無に取られて近くのゲームセンターへと引つ張られていく麗我。
その姿を、追跡者達はハンカチを食い破らんかの勢いでみていた。
もしも視線に殺傷力があるのなら、おそらく三桁は死んでいるだろう。

「よし、メブラやるか」

と、ゲームセンターに入つてすぐに麗我は格闘ゲームの場所を見つけ、その中の一つに百円を入れる。

「うーむ、どれを使うか……よし、これでいいか」

と、麗我は学生服を着ていてメガネをしていない方のキャラを選択して進め始める。

「む、やっぱり久々だから腕がなまってるな……」

「腕がなまっている人の動きじゃないよ……」

「凄……」

腕がなまっていると言いながらも、コンピューター相手にパーフェクトを量産する麗我に二人は啞然とする。

その時だった。

「お、挑戦者か。面白い、受けてたとう」

突然ゲームが止まったかと思うと、キャラクターの選択画面へと移る。

どうやら誰か知らない人が乱入してきたらしい。

「じゃ、これでいいか」

麗我は先程と同じキャラクターの、比較的初心者向けと呼ばれるス

タイルを選択する。

一方相手は、

「ほーう。月姫好きなのかな？」筋骨隆々としたたくましい成人男性の、比較的上級者向けと呼ばれるスタイルを選択する。

「じゃあ、はじめるか」

麗我の言葉と同時に、ゲームが戦いの開始を宣言した。

「凄い……」

「化物ね……」

二人は、三十分間続けているが未だに一度も負けていない麗我を見てそう結論づけた。

「ああ、負けたか……まあいいか」

そして、やっと麗我が敗北するが、筐体に名前を刻める権利を得る。

「どうしようかな……お前ら何か入れたい名前あるか？」

「麗我、いれていい……？」

「別にいいぞ」

そして、簪が筐体に名前を打ち終わり、麗我達はプリクラへと向かった。

刻んだ名前は、S、Rだったらしい。

「麗我、あれ、とれる……？」

プリクラも取り終わり、一夏達との集合にもまだ余裕があり、店の中を適当にうろついていた時のこと。

突然、簪がこんなことを言い出した。

「簪、何が欲しいんだ？」

「あれ……」

と簪が指差したのは、仮面ライダー トシャイニ グフォームのフィギュアだった。

「わかった。とつてきてやるからちょっと待ってる」

「うん……」

簪が見守る中、麗我は五百円玉を筐体へと入れ、クレーンを動かしていく。

「……………とつた……！！」

麗我の言葉通り、取り出し口には簪の望んでいた物が置いてあった。

「ありがと、麗我……」

「何、まだ礼を言うのは早いぜ……！！」

その言葉と同時に、麗我は次の獲物である仮面ライダーカ トのフィギュアを強く睨みつけた。

「こんなに……いいの……？」

「ああ、俺の奢りだよ」

丁度よい時間となり、麗我達はゲームセンターを出て行く。簪の鞆の中には、色々なフィギュアが六個入っていた。

「私には何かないの？」

「じゃあ二人の水着代をすべてだしましょう。それなら文句はない

でしょう?」

「え……? いい、の……! ?」

「ああ、元々俺が誘ったからな。それくらい出さないで何が男かってね」

麗我の言葉に二人はさらに笑顔になる。

「さ、集合場所へ行こうぜ」

と言うが速いか、麗我達三人は決めていた集合場所に向かって歩き始めた。

第36話 ダブルデートと追跡者（起）（後書き）

S、Rの意味……よく考えればわかると思います!!

第37話 ダブルデートと追跡者（承）（前書き）

ドロー！モンスターカード！

引き続きカオスをお楽しみ下さいwww

短いですがww

第37話 ダブルデートと追跡者（承）

「じゃ、どこに行く？」

「そうだな、歩きながら決めよう」

「そっか」

麗我達と別れて、一夏達は行くあてもなく適当に歩くことにした。どちらからともなく、手を繋いで。

（一夏の手……暖かい……）

（箒の手、柔らかくて、気持ちいいな……って、何てこと考えてるんだ俺）

そんなことを考えているうちに二人の顔が赤くなり、目が合う事でさらに赤さが増した。

「い、一夏、ここに入ってみないか……？」

歩き始めて三十分後。箒が指差したのは宝石店だった。

「こ、ここか……？」

いきなりの申し出に一夏は思わず聞き返してしまう。

「だ、駄目なら別にいいが……」

「わ、わかった。入ろう」

そして、覚悟を決めた一夏は店の中に入る。

「うわ……」

「凄いな……」

そして、一夏は思わず溜め息をついてしまう。

店の中に所狭しと並べられた宝石。そのどれもが至高の一品であることが伺える。

一夏は知るよしも無いがこの会社は一年前にある者が株式の70パーセントを買い切り、そこから急成長を遂げたと業界では噂の会社だ。

そして、現在も保有し続けている謎の人物の偽名は、R・Hと言う。「いらつしやいませ。何をお探しですか？」

しばらく宝石に見とれていた二人に声をかけたのは、一人の年若い店員だった。

その頭は既に白く染まっているにも関わらず、その目は鷹のように鋭い。実は謎の人物であるR・Hの会社の中の片腕であり、前に写真を渡され「こいつらがもし来たら丁重にもてなしてくれ」と言われたとか。

「何をお探しですか？」

「い、いえ、特に……」

「ほう、お隣のお嬢さんへのプレゼントとお見受けしましたが」

「あ、はい、そんなものです」

「……！」

一夏の何気ない言葉に箒の顔が羞恥に染まる。

「でも、あまり宝石の種類がわからなくて……」

「ほうほう。それでは私が説明しましょうかな？」

「お願いします……！」

「ほうほう。ではついて来て下され」

そして、二人は笑顔の店員の後に続いて歩き始めた。

「こちらにあるのは、アメジストじゃ。ギリシア語の「酒から守る」が由来とされるのじゃ。宝石言葉は、誠実・高貴・心の平和とされているぞい」

「へえ……」

店員の丁寧な説明に驚きながらも二人は後をついていく。

そして、二人の目が一つの棚の前で止まる。

「やはり、これが気になりますかな」

「ええ……」

それは、ただの炭素の塊でありながら、世界で最も固いとされるモノ。

その名前は――

「ダイヤモンドですか」

「ええ。これがやっぱりコイツに一番良く似合うと思うので」

「い、一夏あ……」

簞が真っ赤に染めながら涙目で一夏の服の袖を引っ張る。

（か、可愛いな……）

「ほっほ。いい彼女ですな」

（か、彼女……！？そうか、私は端からそう思われているのか……）

店員の言葉に気を良くした簞は一夏の袖から手を離す。

「ダイヤモンドは、ギリシア語の「不屈なもの」が語源じゃ。宝石言葉は、清浄無垢とされていますぞい」

店員の親切な言葉も、今の一夏には半分しか届いていなかった。

（清浄無垢か……簞にぴったりだな……もしこれをプレゼントしたら、簞は喜んでくれるかな）

一夏が簞を見ると、簞はまるで子供のように宝石に見入っていた。

（絶対に喜んでくれるな。でも、今持ち合わせがなあ……）

「ほっほ。如何ですか」

「すみません……今は持ち合わせが足りないのでまた今度にします」「わかりましたわ。またいらして下され」

その後、二人は店員に見送られて店を出た。

その後の店では、店員がR・Hの携帯に留守電を残していた。
「ボス、私です。今日、例の二人が店に来ました。今日中に、二人
が見ていた物を送ります。それでは」

その言葉を聞いた者は、誰もいない。

第37話 ダブルデートと追跡者（承）（後書き）

店員の本名はキルシュ・ワイミーというそうですwww

第38話 ダブルデートと追跡者（転）（前書き）

ドロー！モンスターカード……？

そんな感じの出来です。

今回はネタの皮をかぶったシリアスの皮をかぶったネタです（ど
つちだよ

また、今回箒さんがマジ漢らしいwww

第38話 ダブルデートと追跡者（転）

「えーっと、水着売り場はここだな」

「そうだな。よし、行くか」

麗我が集合場所に指定したのは駅前のショッピングモール『レゾナンス』の西入口だった。

そこから移動し、今は全員が二階の水着売り場の前にいる。

……尾行している者達も含めて。

「これなんかどうだ？きつと似合うぞ」

麗我が簪に差し出したのは、水色の白玉模様の水着だった。

「それ、前から欲しかったのだけど、値段が……」

「大丈夫だよ。言っただろ、水着代くらい出してやるって」

「……ありがとう、麗我……っ……！！」

簪は麗我に満面の笑みを浮かべる。

その笑顔には、

（やばい、可愛い……抱きしめたくなくなってしまいそうだ……）

朴念仁オブ朴念仁の麗我にも効果は抜群、かいしんの一撃だった。

「麗我ー！これなんかどう？」

「たっちゃん先輩……って、なんてもの持ってきてるんですかああっ！」

「え？駄目なの？」

「御願いですからまともなやつを持ってきて下さい……」

楯無が持ってきた水着。それは、十八歳未満お断りの本にしか出て来ないような、ヒモだけで出来ている水着だった。

「わかったわよ。全く、麗我のいけず……」

「いけずも何もないでしょう……御願いだからまともな水着を持ってきて下さい……」

楯無は生返事を返し、水着売り場の奥へと入っていく。

それを見て、麗我は軽く息を吐いた。

「どうしたの……麗我……？」

「いや、姉の事を思い出しててさ」

「お姉さん……？」

「ああ、つっても俺は義理の息子だから義理のなんだけどな」

「……っ……！！」

「まあまあ、そんなに気にするなって簪。どうせ今たっちゃん先輩もいないし、少し暇つぶしにベンチで昔のことを話すが聞くか？」

麗我の申し出を簪は二つ返事で了承するのに時間はいらず、二人は近くのベンチへと歩いていった。

side 篇

ああ、どの水着にしようか……！！

あれもいいし、これも捨てがたい。いや、でもこれは派手すぎるか

……？

「おい、簪？」

ひゃああああああっ！

「い、一夏……？どどどどうした……？」

「テンパリすぎだろ。いいから、少し落ち着けよ。俺も待っててやるから」

い、一夏……

「あ、ありがとう……」

「気にすんなって。俺も選ぶの手伝おうか？」

「い、いやいい。一人で選ばしてくれ」

「そうか。じゃあ近くで暇をつぶしてるわ」

一夏を別の場所に行かせ、私はまた水着選ぴを再開する。

……しかし、これは本当にいいな。せつかくだから二つ程勝ってしまおうか。一つは臨海学校用で、一つは勝負用に。

「そのあなた」

む、私が呼ばれてるのか？

「ん？」

「男のあなたに言ってるのよ。その水着、片付けておいて」

なんだ、私ではないのか。では、水着選ぴを再開し

「なんでだよ、自分がやれよ。人にあれこれやらせる癖がつくと人間バカになるぞ」

一夏あああつ！

何絡まれているんだ！なんで無視しないんだ！

にしても、あの女腹が立つな……

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかっていないよね」

「わかっていないのはどちらだろうな」

声の大きさと方向からある程度の場所を割り出し、一夏の前へとたどり着く。

「あら、何かしら？貴方には関係ないわ。下がってなさい」

「私は、貴方の為に言っているのだぞ。そんな簡単なこともわからない程頭が春になっているのか？」

私も頭に来ているため、最大限の挑発をする。案の定、女の方も怒った様子を見せる。

「見てわからないのか？彼が誰だということを」

女は一夏のことをよく見た後、ハツとした様子で後ずさる。

「そう。彼は『世界で二人だけのISが使える男子』の一人、織斑一夏だ。そんな世界でも極少数の人間と、かたや掃いて捨てるほどのIS適正が絶望的にない貴方。警備員はどちらを優先するのか、貴方のない頭で考えてみるがいい」

「くっ……お、覚えてなさい」

逃げるようにコソコソと去っていく女。ふう、いい気味だ。

「箒……」

し、しまった！一夏にこの会話を全部聞かれていたんだ！
どうしよう……怖い女だと思われたらどうか……

「助かったよ、ありがとな」

が、そんなことは全くなく、出てきたのは感謝の言葉だった。

「き、気にする必要はないぞ。さあ、会計に行こうではないか！」

「強引に話をずらすなよ」

う、うるさい！恥ずかしくてまともに顔も見れないではないか！

「それに、あの時の箒、とても凛々しくて可憐だったぞ」

「そ、そうか」

う、嬉しすぎて涙が出そうだ……

「さ、会計に行こうぜ」

「そ、そうだな」

誉められた嬉しさでにやけそうな顔を引き締めつつ、籠に入れた選んだ二着の水着と共に会計へと向かった。

side 箒 end

「さて、暇だから簡単な身の上話をしよう。とある少年の話だ。かなりつらく、残酷な話になるが、それでもいいか、箒？」

「……うん……。だから、話して……」

「よしわかった。じゃ、始めるぞ」

そして、前置きは終わりだとばかりに、麗我は話始めた。
己の身の上話を。

「まず一つ。少年は親の顔を知りません」

「……？」

いきなり異常な言葉が飛び出して来たことに、簪は驚いてしまう。

「気がついた時は道路で捨てられてました。僅か4歳のことだったそうです」

「そ、そんな……」

「その時、幸運にも少年はとある人に拾われました。その男の人は言いました。『率直に聞くけど、知らないおじさんに引き取られるのと孤児院に引き取られるのどっちがいいかな？』と。少年は、前者を選び、男に引き取られることになりました」

「麗我……そんな、ことが……？」

「少年は、その時一生を共にするだろうという家族に出会いました。その後、色んなことがありながらも、今も大切な者を守り続けているでしょう、ってね」

ポタリ、と。

いきなり簪の目から涙が零れ落ちた。

「か、簪……？」

「ごめんなさい……」

「へ……？」

「麗我がそんな過去を抱えているなんて知らずに、ただ『聞きたいから』なんて理由で聞いてしまつて、ごめんなさい……！！」

簪の涙は止まる所を知らずに、今も流れ続けている。

「ふう、全く。そんなどうでもいいことで泣くなよ」
ポスッ、と。

何の前置きもおかずに麗我は簪の頭を抱きしめた。

「！！？」

突如として簪の顔が羞恥に染まる。

「俺はいいんだよ。今も、大切なモノを守れてるから」

「大切な……モノ、って……？」

「お前達だよ。今の俺の願いは、仲間を守りたいというコトだけなんだ」

その時はじめて、簪はあることを理解した。

麗我、『空っぽ』であると。

「麗我……」

「簪、どうし」

麗我がその言葉を言い終える前に、簪の唇が麗我の口を塞いだ。

「× ！？」

簪は、暴れる麗我を無視して舌を絡ませていく。

僅か十秒、本人達にとっては永遠にも思われた時間の後、簪は麗我の唇から自分の唇を離れた。

「おい、簪！いきなり何するんだ！」

「何って……キス……」

「いや、そうじゃなく……」

「全くだすわ。そうじゃないですわよ簪さん」

一瞬で出てきたセシリアが、簪に『スターライトmk?』を突きつける。

「全くだよ。なんてことをしてくれてるのさ」

後ろからはシャルロットが簪に『灰色の鱗殻』を突きつける。

「麗我、お前は……」

「ラウ、お前まで……」

ラウも遠くからの監視を止め、恋の力で瞬歩だか虚空瞬動だかを連発し、麗我にナイフを突きつけていた。

――しかし、完全に詰み（チェックメイト）にも関わらず、簪の余裕の笑みは消えなかった。

「どういうことですか」

「まだ一発逆転の秘策があるの？」

「後ろ……それだけでわかる……」

そう言われて、二人が振り向くと、

「何をやってるんだ、お前達は」

完全に反転した様子の千冬が般若のオーラを漂わせながら笑顔で歩いてきている所だった。

第38話 ダブルデートと追跡者（転）（後書き）

もう一話ぶんだけ余ってしまった……

次終わった後臨海学校突入です！もう一話だけ待って下さると嬉しいです！

後、この駄作もあと少してユニークが100000を突破しそうです（土下座）

なので、特別閑話のネタを募集します（頭を地面にこすりつける）

ネタは何でも構いません！クロスなども受け付けさせていただきま
すねで、何卒よろしく願います（もう一度深くお辞儀）

第39話 ダブルデートと追跡者（結）（前書き）

これでひとまず終わり、次から臨海学校編へと入っていきます……

第39話 ダブルデートと追跡者（結）

「全く、何をしているんだ……」

「あ、姉御……」

突如として表れた千冬の姿に全員が戸惑っていた。

「織斑、先生……お話が……」

ただ、一人以外は。

「どうした更識。言ってみろ」

「今の、見ての、通りです……」

「見ての通りと言うと、オルコットとデュノアがお前に向けてISを展開していたということか？」

「はい……ただ話してただけなのに……」

「と言っているが、何かあるか？」

簪のこの言葉に焦るのはセシリアとシャルロットだ。

明らかに『ただ話していた』わけではないのに、千冬はすっかりその話を信じてしまっている様子だ。

「ち、違うんですの織斑先生！これは……」

「ほう？ISを展開して無防備な一般人を襲おうとしていたことのが違うのかな？」

「くっ……セシリア、殺るよ……」

「ちょ、シャルロットさん字が間違ってますわよ……」

「間違ってる！勝てば官軍……！勝者が全てを手に入れるんだあつ……」

何やら暴走した様子でシャルロットは千冬に突撃する。

「麗我、武器をよこせ」

「無理だよ姉御。このISは限定展開が出来ないんだ」

「……仕方がない。これを使うか」

それを見た千冬は何故か持参していたIS用のナイフを居合いの形

で構える。

「麗我は……僕の所有物だあぁっ！」

「当て字が間違ってるぞ。それに」

シャラン、と音がした。

次の瞬間には、シャルロットが通路の上で気絶していた。

「麗我はそう簡単には渡さん。なんせ私の弟のような存在だからな」
そう言い残し、水着売り場へと歩いていく千冬。

（最大の敵は……織斑先生……）

そして、最後の一言を聞いた簪は、そんなことを思ったとか。

「で、本当はどういうことなんだ？」

「う……」

千冬が水着を書い終わった後。千冬は、麗我を問い詰めていた。

「じ、実は……」

問い詰め初めてから30分後。

ついに麗我は折れ、千冬に本当のことを話した。

「……更識」

「は、はい……」

びくつ、としながら麗我の後ろに隠れていた簪が少しだけ顔を見せる。

「……まあ、確かについやってしまいたくなる気持ちは私にもよくわかる。コイツは、自分のことを省みないからな」

「そんなことないって姉御」

「いや、あるぞ麗我」

千冬は、いつになく真剣な顔で麗我の方を向く。

「お前は、中国の研究所に追われていた時も、チャイニーズマフィ

アに追われていた時も、一切人を殺してなかっただろう」

「……それが、どうしたのさ」

「お前は優しすぎるんだ。遠くない未来、お前のその優しさが必ずお前に対して牙を向くぞ」

それは、一つの忠告。

織斑千冬という、一人の先達者からのメッセージ。

「ああ、わかってるよ。けど、助けられるのなら助けたいじゃないか」

「……だが、それを受けてなお、麗我は、この道を歩き続けると宣言した。」

「……それは、荊の道だぞ」

「わかってる。でも、俺にも殺すか殺さないかの境界線はちゃんとあるよ」

「それはなんだ」

「仲間だよ」

何？と千冬は呟く。

まるで、予想もしてかなったかのように。

「仲間だよ、姉御。俺一人を狙ってくるのなら出来るだけ助ける。けど、もしも俺の仲間が銃口を向けた時は、」

「……情け容赦一切なく殺してやるよ、姉御……」

そう、静かな声で宣言した。

「麗我、駄目……」

そんな中、ふと簪が口を開いた。

「どうしたんだ、簪？」

「麗我の過去に、何があったかは、まだ詳しく知らない……けど、

麗我は、人を殺しちゃ、駄目……!!」

簪はそう、麗我に請うかのように言う。

「……ふっ。とんだ邪魔が入ったな」

「そうだね姉御」

ハッハッハ、と二人して笑う。

そして、笑い終わった後。

「更識」

「はい……」

「麗我は渡さんぞ」

「何を……言っているんですか……？」

「麗我は、私の弟みたいなものだ。それに、コイツと関わっていくと、今以上のことに巻き込まれるだろう。お前にはまずその覚悟があるのか？まあ、あっても渡さないがな」

そう言って、千冬は簪を睨みつける。

それは、かつて世界最強の者が放つ重圧。
ブレッシャー

だが、簪は、

「別に、貰おうなんて思ってません……奪い取ります（……………）……」

そう、まるで重圧など感じていないかのように宣言した。

「簪、私達が、でしょ？」

そこで、やっと水着を買い終わったらしい楯無が姿を表す。

「麗我がどんな事件に巻き込まれていても、必ず救う。だって……」

「私は、麗我のことが……」

と、言いかけたその時だった。

「そっいえば、麗我はどこだ？」

「……あれ（…………）……」

いつの間にか麗我の姿が消えていたことに、三人が気づいたのは。

「色物の域を出ない！」

『何っ！？』

「隊長は確かに豊満なボディで男を籠絡というタイプではありません。ですが、ここで色物に逃げるようでは『気になるアイツ』からは前には進めないのです！」

『な、ならば……どうする？』

「ふっ、私に秘策が」

『はい、ストップ。頼むから落ち着けクラリツサ』

突然、プライベートチャンネルに割り込まれたことにクラリツサ・ハルフォーフは驚くが、声で誰かがわかった後はふうと息をつく。

「麗我さん、脅かさないで下さいよ」

『それはこっちの台詞だ。なんかラウが際物水着を選びながら誰かにプライベートチャンネルを開いているのがわかったからお前かなと思ったら、やっぱりそうか』

「やっぱり、とは聞き捨てならないですね麗我さん。私はただ、一人の人生の先輩として隊長にアドバイスをしていただけですよ？」

『そのアドバイスが問題なんだよ。昔からお前とは話し合う必要があると思っただけだ』

「あら、奇遇ですね麗我さん。私もですよ」

そう言いながら、クラリツサは獰猛な笑みを浮かべる。

「実はですね、私、八月に日本に行くんですよ」

『ほっ』

麗我の声のトーンが低くなる。

「東京の方に二泊三日で行くんですけど、良かったらそこで待ち合わせませんか？」

『聞きたくはないがいつどこで待ち合わせるんだ？』

「日は八月の十二、十三、十四。場所は……」

東京ビックサイト、です」

プライベートチャンネルを切った後、麗我は
（何でこんな弟子になってしまったんだ）
と、部屋で一人泣いていた。

第39話 ダブルデートと追跡者（結）（後書き）

どうしてこうなった？
どうしてこうなった？

そして、夏休みにクラリツサさんが東京ビックサイトに現れます（笑）

イベント名は……言わなくてもわかりますよね。しいて言うなら夏の祭典です。ちなみに私は多分行きます。

第40話 旅館と波乱と二人の姉（前書き）

地雷が一つあります。

ご注意ください。

第40話 旅館と波乱と二人の姉

「それでは、ここが今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないよう注意しろ」

「……よろしく願いしまーす」

臨海学校初日。天候にも恵まれながら、IS学園の生徒達は目的地である花月荘に到着する。

「……そういえば、麗我は？」

「ああ、私も知らないぞ」

一夏と箒が周りを見渡す。

実は、麗我はバスに乗ってはいなかった。その理由は、

「ああ、麗我さんでしたら」

「よう、一夏」

何故か女将さんの隣にいた。

「何してんだよ、お前……」

「ああ、私が働かせることにした」

「……はい？」

何も聞いてない一夏が固まる。「実は、急に板前さん（仮名山田太郎さん、75歳）がギックリ腰で倒れたそうだな、本当はこの旅館を止めようと思っていたのだが……」

「麗我さんが、自分が働くと言って下さったのですよ」

「そういう訳だ」

「……」

固まる一夏達をよそに、

「今晚は冰雪君の料理だつてー！」

「え、本当！？」

「またあの味が楽しめるの！？」

「え、そんなに美味しいの!？」

「うんうん!プロも裸足で逃げ出すくらいよ!！」

他の女子達は夕食についての話で盛り上がっていた。

「で、お前の部屋はどこなんだ?」

挨拶も終わり、自由時間になった途端、これ幸いと一夏が麗我に聞く。

「え?専用の個室を貰ったけど」

「何でお前は良くて俺は駄目なんだよ……」

「え?それは」

「麗我。とりあえず荷物は置き終わったよ」

突如、一夏が声の方向を向くと、そこには一夏の知らない女性がいる。た。

髪と瞳の色は、海のような青色。服はまるで軍人が着るような服であり、何よりもその瞳が印象的だった。

切れ長で、まるで敵を押し潰すかのような、鋭い瞳。

また、何もしなくても伝わる、数多の死線をくぐり抜けてきた者だけが持つ^{オーラ}雰囲気。

それに、一夏は吞まれてしまっていた。

「ん?そういえば一夏は知らなかったっけ」

「ま、知らなくてもしょうがないんじゃないのかい?」

女性がまるで海賊のようにケラケラと笑う。

「まあ、とりあえず説明しとこう。こいつはスプリング。先月からIS学園の用務員をやってもらってる」

「アンタが織斑一夏か。私はこいつの紹介通り、スプリングってい

う。会えて光栄だよ。よろしくな」

そう言つて、スプリングは右手を差し出す。

「あ、ああ、こちらこそ」

そう言つて、一夏がスプリングの手を握り返す瞬間、スプリングの眼光が鋭くなり、

「やめろスプリング。怒るぞ」

麗我の言葉により素直に一夏の手を握る。

「なんだよ、別にいいじゃないの」

「駄目だ。まだ一夏はそういうのに慣れていないんだから」

訳のわからない一夏は首を捻るばかりだ。

「すまん一夏。こいつの躰が足りていなかった」

「いや、何をされたのか全くわけがわからないんだけど」

「おいおい、私はお前に育てられた扱いかい？」

「話を進めるぞ」

正當なツツコミをいとも簡単にスルーされたスプリング。

次は頑張つて欲しい。

「こいつはな、お前の手を握るふりをしてお前の関節を極めにきたんだよ」

「いいじゃないか、単なる挨拶だよ」

「お前にとっては単なる挨拶でも、一夏にとっては挨拶じゃすまないんだよ」

麗我がスプリングを叱りつける。

しかし、今の一夏には、その言葉は全く届いていなかった。

（スプリングさんが俺の関節を極めにきてたのにも気づかなかったけど……麗我の奴、それを一瞬で察知するなんて……あいつは、どれだけ強いんだよ……）

強くなるう。

それを、新たに心に刻んだ一夏であつた。

「……………」
「……………」
「……………」

一夏と箒と麗我の三人は、目の前の珍妙な光景に声の一つも出せな
いでいた。

その後、麗我達と別れた一夏は、更衣室のある別館へ向かう途中で
ばったり出くわした。その後、それを発見し、その後にやってきた
麗我もそれを見て驚いているというわけだ。

その光景とは、ウサギの耳が地面から生えているというシニール極
まりない光景だった。

ウサギの耳といっても生の物ではない、『ウサミミ』という物であ
る。白色の。

「なあ、これって」

「好きにしる。私には全く、絶対、究極的に、関係ない。誰が関係
あるといっても私はあんな物は知らない」

一夏が言い切る前に箒は完全否定し、去っていく。

しかし、そこまで言うとは逆に関係がありそうである。

「なあ、一夏」

そこで、今まで黙っていた麗我がニヤリと笑いながら口を開いた。

「投影、開始」

と呟きながら。

瞬間、麗我がISを装着する。

「ど、どうした麗我」

「あれ、殺ってしまったても構わんのだろう？」

「落ちて着け麗我！それは死亡フラグだ！」

一夏の静止をよそに、

「……工程完了、全投影、待機　　バレット・クリア　フリーズアウト　ソードバレルフルオープン
停止解答、全投影連続層射」

空中から無数の剣がウサミミ目指して飛来する。

そして、ウサミミに当たった瞬間、

「な、なにいつ!?!」

ウサミミが、ポンツと音を立てて爆発し、煙幕となる。

「く、くそう……あの人の仕業ということはわかってるのに!」

悔しがる麗我をよそに、キイイイインと音を立て、何かが近づいてくる音がする。

「そこかつ!」

しかし、麗我也さる者。

音で方向と距離を予測し、剣を数本射出する。

しかして、結果は　見事、何かに直撃した。

「やった!」

「お、おい麗我、何をやってるんだ?」

「いいから来い一夏!」

ISを解除した麗我は、一夏を引き連れて撃ち落とした何かの元へと向かう。

「これは……」

「ああ……わかるだろ、一夏」

それは、どこからどう見ても人参にしか見えないようなモノだった。

麗我が近寄ると、それがパカッと割れて、一枚の紙が出る。

その紙には

「……ハ、ズ、レ?」

と一言。

瞬間、無音で近づいてきていたc a r r o t型飛行物体が、麗我達の近くで地面に突き刺さった。

「ふう、危うく殺される所だったよ」

「貴女は殺しても死なないでしょう？タバ姉」

carrot型飛行物体に乗っていたのは稀代の天才、篠ノ之束と、

「にしても久し振りね、レイガ」

「本当に久し振りだよ、イリ姉」

氷雪麗我の義理の姉、イリヤスフィール・衛宮・アインツベルン、
その人だった。

第40話 旅館と波乱と二人の姉（後書き）

スプリングさんのイメージはEXTRAライダーの青バージョンです。

そして……やっとイリヤを出せたあああつ！
ついにここまで来れました！作者である私としてはとても感慨深いです！

第41話 姉と姉と騒動の幕開け（前書き）

1ヶ月ぶりの投稿……

お待ちになられていた読者の皆様、本当に申し訳ありませんでした。

第41話 姉と姉と騒動の幕開け

「にしてもイリ姉、久し振りだね」

「本当ねレイガ。何年ぶりかしら？」

あれから数分後。麗我は、久し振りに会ったイリヤと話していた。

「ねーねーれいくん、これ、いつになったら解いてくれるのかな？」

「これ以上悪戯を行わないと誓うのなら解いてあげるよ、タバ姉」

……束を亀甲縛りで封じこめて。

「ねーねーいつくん、これ、解いてくれないかな？流石の束さんも、このままじゃ新たな世界に目覚めそうだよ」

「えーっと、こう言ってるが、どうする麗我？」

「無視しろ。未来永劫」

「……わかった」

麗我のほとばしる怒気オーラを見て、一夏は何も言わない事に決めた。

（今口を出すと、確実に死ぬからな）

「何か思ったか？一夏」

「いや、何も思ってたんじゃないぞ？」

冷や汗を垂らしながら反射的に答える一夏。

「……そうか、ならいい」

その必死さが功をきしたのか、麗我は何も疑う事はなかった。

「で、親父は元気か？」

「元気よ、元気すぎて怖いぐらい。お母様も、うまくキリツグを抑えてるわ」

「そうか、二人とも元気か……」

麗我は、一人目頭を緩めてしまう。

「泣きたい？」

「いや、まだ泣かないよ。イリ姉の方も、あの馬鹿を抑えるのが大変なんだろう？」

「ええ、本当に大変。シロウったら、『正義の味方』になるって言うて聞かないんだから。全く……」

そこまで言い切り、二人は一緒に息をつく。

「いっくん、私はいつまでこの格好でいればいいのかな？」

「麗我次第じゃない？タバ姉」

そして、それを見守る亀甲縛りでウサミミをつけた女子というのも、なかなかシニールな光景だった。

「さ、行こレイガ」

「そうだねイリ姉」

あれからさらに数分後。麗我は、あーだこーだ五月蠅い束を解放して、一夏を先に行かせていた。

姉弟二人の時間を堪能する為だ。

そして今、二人は手をつなぎながら砂浜に向かって歩いていく。

「にしてもタバネったら、解放した途端に煙幕を使って逃げだすんだから。私ったら笑っちゃったわ」

「全くだ。今度会ったら一発『虎砲』でも叩き込むか、それとも『偽・螺旋剣（カラドボルグ？）』でも叩き込むか、それとも……」

「待ちなさいレイガ。明らかに死ぬわ」

明らかに暴走しだした麗我を上手くイリヤが止める。

それが功をきしたのか、無事に麗我は止まった。

「御免イリ姉。暴走してた」

「まあしょうがないわ。それからレイガ、何か言う事を忘れてないかしら？」

チラッチラッ、と麗我を見るイリヤ。

それを見て、何かに気がついたのか麗我はポン、と手を叩く。

「背が伸びたね、イリ姉」

「ちっがーう！確かに背も伸びたけど、言うことが違うわ！」
全力で突っ込むイリヤ。

それを見て、何か間違ったかと麗我は首を捻る。

それを見て、イリヤは軽く溜め息をつく。

「はあ。レイガに期待したの私が馬鹿だったかしら」

「ん、何か言ったか、イリ姉？」

「何でもないわ！さ、行こレイガ！」

「お、おい引つ張るなよイリ姉！」

ぷんぷんと可愛い顔で怒りながら走るイリヤと、何が悪かったのか
悩みながら引つ張られる麗我。

そんな構図のまま、二人は砂浜まで走っていった。

「可愛いー！！」

「まるでお人形さんみたい！」

「冰雪君の妹？」

無事に砂浜についた二人だったが、イリヤは一瞬で女子に捕まり、
麗我は苦笑しながら見守っていた。

「私？私はね……」

自分の事を聞かれたイリヤが一瞬、ほんの一瞬だけニヤリ、と黒い
笑みを浮かべる。

ヤバイ、と思った麗我だったが、時既に遅し。

「私は、冰雪麗我の婚約者の、イリヤスフィール・衛宮・アインツ
ベルンよ。よろしくね」

「ええええーっ！？婚約者あああっ！？」
「イリヤの言葉を聞いた女子達の悲鳴が、空に響き渡った。」

第41話 姉と姉と騒動の幕開け（後書き）

感想を頂けると作者の投稿スピードが格段に上がります。

さあ、感想を書こう！！

ごめんなさいすみません。単に感想が欲しいだけです。
ただ、感想を頂けると投稿スピードが上がるのは確かです（キリッ

第42話 沈静化する所を知らない騒動（前書き）

私の投稿至上最大の力オスと思われます。

電車にいる方は御注意？下さい。

第42話 沈静化する所を知らない騒動

「「えええええええーっ!?」」」

砂浜に女子の悲鳴が響き渡る。

「ひ、氷雪君ってこ、婚約者がいたの!?」

「だからあんなに女子に興味がなさげだったのね……」

「それに見てよ、あの身長」

「背が、低いわね……」

「氷雪君って、もしかして……」

「「ロリコン?」」」

急速に浸透する麗我ロリコン節。

「イ、イリ姉!?!? な、なんて事を言ってるんだよ!」

麗我也流石に不味いと思ったか、事態の収集に入る。

が、その判断は遅かったと言う他なく、

「姉って、姉プレイ……?」

「氷雪君、そんな進んでんだ……?」

「結構格好良いと思ってたんだけどな……」

女子の間では完全に『麗我Ⅱロリコン』の等式が成り立っていた。

「あはははは! 麗我ったら大人気ね」

「笑ってる場合じゃねえよこのエターナルロリ娘! 早くこの事態を収めやがれ!」

「嫌よ。面白いじゃない」

「面白いですむかあああああっ!」

砂浜に麗我の叫びが響き渡る。

刹那、響き渡るのは恐ろしい速度で麗我に迫り来る五つ(・・)の足音。

「……やばい……どうしょ、これ……」

「逝ってらっしゃい」

「イリ姉、それは冗談にならな、って何？え、何？ちょ、ビームは駄目だってって、何かミサイルまでちょ、まっ、ぎゃああああああああああっ！！！！」

五分後。

「……天国の爺ちゃんらしい人物が、なんかサムズアップしながらこっちをイイ笑顔で見てた」

「お疲れ様、レイガ」

「誰のせいだと思ってるんだ」

「え？あの五人の女子じゃないの！？」

「罪の意識の欠片も無いのね……」

爆発やビームの直撃は無かったものの、余波を食らった麗我は、砂浜で倒れていた。

「ちなみに、さっきのは冗談だから安心してね」

「言つの遅いよ……」

イリヤのこの言葉に『えっ！？』と言いたげな女子達。

どうやら完全に浸透しきっていたらしい。

「それじゃあ、本当の自己紹介を、っと。私は麗我の義姉、イリヤスフィール・衛宮・アインツベルンよ。今はまだ婚約者じゃないから安心してね」

今はまだ、の部分を強調して言うイリヤ。

「や、やっぱりですか。おかしいと思っていたのですわ」

明後日の方を見ながら言うセシリア。

「そうだね。僕も完全に騙されちゃったよ」

あはははは……と苦笑いをしながらこかすシャルロット。

「しかし、麗我がいけないのだぞ。私という者がいながら……」
お前が悪い、と麗我を睨みつけるラウラ。

「……麗我、ごめんなさい……」

涙目と上目使いとシユンとした表情のトリプルコンボで麗我を揺るがす簪。

しかも天然である。

「ふう。お早う、麗我」

軽いノリでこまかそうとする楯無。

「よし。簪以外許さん」

「……そ、そんなっ！！？」「……」

「五月蠅い！悪い事しても素直に謝れない奴は例え女子であろうと許さん！」

断固とした決意と共に言う麗我。

「……でも私、麗我を……」

「大丈夫だよ簪。例え拳が砕けても1ヶ月で治るような人間にこの程度の怪我は掠り傷程度だから」

普通の人なら確実に十回は死んでいる爆発を食らっても『掠り傷』
と言い放つ麗我。

一体謙信はどんな修行（という名の虐め）をしたのだろうか。

「で、でも」

「俺が言いって言ってるんだから、いいんだよ。勝手に罪の意識を抱えるなよ」

な、と笑いながら簪の頭を撫でる麗我。

その光景を見て再び四人の目に殺意が浮かぶ。

「……うん」顔を真っ赤にしながら答える簪。
それを見て更に殺意のレベルが上がる。

「……はあ。わかったよ。全員許してやるよ」

麗我のこの言葉で減衰する殺意。

だが、次の言葉でその殺意はカンストする事になる。

「それと、簪には好きな願いを一つだけ叶える権利をやる」

ぶちっ、と五つの堪忍袋が切れた音がした。

「……………本当……………？」

「ああ。だからそう落ち込むな。せつかくの可愛い顔が台無しだぜ？」

「……………か、可愛い……………？」

顔を真っ赤に染める簪。

それを見て、五人の堪忍袋が二度と戻らない程激しく切れる音がした。

「麗我さん、ちょーつとよろしいかしら？」

再び《ブルー・ティアーズ》を展開し、《スターライトmk?》を構えるセシリア。

顔は笑っているが青筋が浮きあがっている。

「麗我、覚悟は十分かな？」

《ラファール・リブアイブカスタム?》を展開し、左腕の盾をパージして《灰色の鱗殻》グレー・スケールをあらわにするシャルロット。

その能面のような笑顔からは何を考えているのかが全く読めない。

「駄目な嫁には躰が必要だな」

ドスの効いた声で麗我に殺気を向けるラウラ。シュヴァルツェア・レーゲン当然を展開している。

「うふふ。麗我にはOSHIOKIが必要みたい」

口元は笑っているのだが明らかに目が笑っていない楯無。勿論『ミストルティンの槍』を使用した状態だ。

「頑張つて逃げてね。後、終わったら私とOHANASHIだから」

「くそ……………逃げるが勝ちだ!!」

中国武術の奥義である『縮地』を連続使用しその場から離れようとする麗我。

だが、ISは装備していない。その理由は、

(装備しようとする一瞬の隙で殺される……………!!)

という、虫のしらせにも似た直感によるものだった。

そして、同時に三つ(・・)の銃声が鳴る。

「麗我さん!!今止まれば五分の四殺しで許して差し上げますわ!

！」

「それ殆ど死んでんじゃねーか！」

「麗我！早く止まらないと酷い目にあうよー！！」

「麗我！早く止まれ！！」

「俺はまだ死にたくねえ！！生きてたいんだ！」

「大丈夫よ、死にはしないわ。ただ、ちょーっと私から離れられなくなるだけよ」

「アンタが一番怖いよ！後、なんでたっちゃん先輩がここにいますか！？」

「うーん……………愛の力？」

「答えになってねええ！」

そして、麗我は千冬が現状を確認するまで文字通り『リアル鬼ごっこ』を満喫する事になった。

森の奥。一人の少女が、ISを部分展開してビームライフルを持っていた。

紙の色は、紫がかった青色。表情は、影に隠れて見えない。

標的は、勿論　麗我。

「はあ。ま、私からのOSHIOKIはこれでいいか。にしても、アイツまた女の子を誑かしてるのね。誑かされる方の身にもなりなさい、っての……………」

そして、愚痴りながら少女は旅館へと戻っていった。

第42話 沈静化する所を知らない騒動（後書き）

感想を頂けると嬉しいです。

第43話 騒動は一時収まり二人は密かに隠れる（前書き）

簪の口調って……難しいね。

第43話 騒動は一時収まり二人は密かに隠れる

「で、何をやっているんだお前は……」

「た、助かったよ姉御……」

バシンッ！

「織斑先生、だ」

「すみませんでした」

あれから十分後。ひたすらビームやら実弾兵器やら槍から逃げ回っていた麗我を、千冬が見つけた保護した。

ちなみに、麗我を追ってきた四名は既に千冬によって気絶させられていた。

「もお。何するんですか、織斑先生」

楯無ただ一人を除いて。

「意外だな更識。お前には他の三人よりも力強く殴った筈なんだが」

「愛は何よりも強いんです……！」

楯無によつて展開される無茶理論。

その言葉に、千冬は何も突っ込まない事を決めた。

（どうせ『何故ここにいる』と聞いても『愛の力です』と答えられそうだから……）

「どうしたんですか織斑先生？ 顔色が悪いですよ？」

「何でもない。それより更識、学園の方は大丈夫なのか？」

内心で誰のせいだ、と毒づきつつも千冬は楯無に訪ねる。

そのあからさまな話の変更に楯無は気づかないふりをし、

「ええ。『先代』に頼んでおきました」

「……なる程。彼女なら確かに大丈夫だろう。あれは思慮深く慎重もある、まさにお前とは正反対だな」

「ちよつと、私を何だと思ってるんですか。私だって慎重深い淑女ですよ？」

「……それはおいといて、お前もこれに参加するのか？」

「さあ、どうでしょうね。まあ、場合によりますよ」

本心を隠したまま二人が笑う。

「……まあいい。ではな」

そう言うとは話は終わりだ、とばかりに千冬が別の方向へ歩き出す。

それを見送った後、

「……あれ、麗我はどこ？」

いつの間にか麗我がそばから離れていた事に、楯無はようやく気がつくのであった。

「はあ……はあ……ここまで来ればあの四人も来れないだろう」

「……うん」

麗我と簪は、千冬達が話していた場所から約五百メートル程度離れた場所に来ていた。

殺意の波動を持つ四人にこれ以上近づいていられなくなったからだ。

「ふう……もう駄目」

ただでさえ二回も死にかけ、それでいて千冬と楯無という猛者二人から逃れるため、簪と手を繋いで縮地を連続使用した麗我は、体力の限界とばかりに、盛大に倒れ込む。

「……！」

その時、何を考えたのか、簪は倒れ込む麗我の頭を掴み、正座している自らの膝に持つて行く。

「……！？簪、何」

「……暴れちゃだめ。元々、麗我がここまで傷ついたのも、私のせいだし……」

離れようとする麗我の頭をその腕で抱え込み、離すまいとする。

その姿を見て、麗我は抵抗する事を止めた。

ちなみに、どうして簪がここにいるかというところ、四人が血眼になって麗我を殺そうとしている時に、麗我の事が心配になり、四人の後を追いかけていったからだ。

当然ISを使っていない為引き離され、当たりを探しているうちに気絶している三人と会話している姉の姿を見て、今の内に麗我を安全な場所に避難させようと思ったからだ。

「……私の膝は……気持ちいい……？」

「……分かっている事をわざわざ聞くなよ」

麗我は、顔を真っ赤にして顔を背ける。

「くすっ……」

「何がおかしいんだ？」

「麗我が、恥ずかしがっているのが、どこか、おかしくて……」

笑う簪を見て麗我は感慨にふける。

（……なんというか、やっと、ここまでできたかなって、感じたな……）

簪と会う以前より、麗我は楯無から彼女の事を聞いていた。

が、会う機会がなく、結果的にあの日に会ってしまったわけだ。

（なんというか、色々と抱え込み過ぎてたからな……明らかにたちちゃん先輩とも仲がいいってわけではなかったし）

麗我の簪に対する第一印象は、ほぼ決壊しているダム、だった。

（聞いただけでも、打鉄式、たちちゃん先輩に対するコンプレックス、専用機……聞いてはないけどまだ色々抱えてそうだったかな）

そんな彼女を、麗我は救いたい、と思ってしまった。

常に気をつかっており、気を休める時がない簪の居場所になりたかった、と言い変えてもいい。

簪を遊園地に誘ったのもその為だ。

少しでも楽しんでもらい、二人の距離を短くして、自分と一緒にい

る時だけは素の彼女を出させて、彼女の負担を少しでも少なくする。そのくらいしか、麗我に出来る事は無かったからだ。

（まあ、おかげでこんなに綺麗な笑顔が見れるようになったんだけどな……）

「……どうしたの……？」

簪の声に我に返った麗我は、ずっと簪の顔を凝視していた事に気がつく。

「なんか、私の顔をずっと見てたけど……おかしかった……？」

「い、いや、何ともないぞ、うん」

顔を真っ赤にする麗我だが、頭を固定されているため、動かす事が出来ない。

「……………！！」

そして、麗我は今更ながら第二の脅威に気がついた。

麗我は、今現在簪の膝から彼女の顔を見ている。そして、膝と顔の間に、楯無ほどではないがたわわに実った二つの双丘があるという事に気がついてしまったのだ。

「…………… 本当に、何ともない……？」

簪が、麗我に顔を近づける。

それと同時に、近づいてくる双丘。

「か、簪、ま」

瞬間、麗我の背中に何か冷たい物が流れ落ちる。

「簪、あぶないっ！」

「きゃっ……………！！」

簪を突き飛ばし、自らもバックダッシュでその場から離れる。

瞬間、先ほどまで麗我がいた場所を数種類ものビームや砲弾が通っていた。

そして、襲い来るのは三つの殺気立った者達。

「……まずいな。簪、とりあえず放れとけ」

「……麗我は……？」

「時間を稼ぐ。お前だけでも逃げ切れ」

「……でも……!!」

「大丈夫だ。ここは俺に任せて先にいけ。必ず追いつく」

「……麗我を、信じる……。だから、必ず、戻ってきて……！」

「ああ」

簪を逃がし、三つの殺意に対抗しようとする。
が、

「麗我さん！覚悟なさい！」

「麗我麗我麗我麗我麗我麗我麗我麗我麗我麗我麗
我麗我麗我麗我麗……うふふふふふ」

「さあ、新しい兵器のどれを試そうか……今から楽しみだな……」

何も考える暇も無く、麗我の記憶は完全に失われた。

第43話 騒動は一時収まり二人は密かに隠れる（後書き）

感想待ってるぜ！！

そしてテスト勉強に戻ろうか……

第四十四話 夜でも変わらない騒動（前書き）

タイトル詐欺はこの駄文では良くあることです（諦観）

第四十四話 夜でも変わらない騒動

麗我が気絶している所を千冬が見つke、四人に出席簿アタックを叩き込んだ夜。

「うおおおおっ！」

無事に復活した麗我は、厨房でひたすら魚を捌いていた。

「はっはっはっは！やるな、坊主！」

そんな麗我を見て足をギブスで固めている板前が豪快に笑う。

どうやら無理やり退院してきたらしい。

「いや、俺が入院しているから厨房は大丈夫かと思いきや、まさかここまでやる坊主が厨房を切り盛りしてくれてるとはな。これほどの腕があるのなら何時でもバイトとして雇ってやるぞ？」

「はっはっはっは、冗談を言わないで下さいよ。俺なんて貴方に比べたら未熟千万、腕なんてないに等しいです！！」

「そうか！！それは嬉しい事を言ってくれるな！！あ、あとそれはそう捌くんじゃない。こう捌くんだ」

「なるほど！勉強になります！！」

そう言いつつ、魚をひたすら捌きながら笑い合う麗我と板前。

料理を志す者でもわかる者はそこまでいないと思われる、完全力才ス空間が出来上がっていた。

食事後。

「何の用ですか織斑先生」

「何か用があるとは思えないのですが」

「まあ、そう言うな。私個人のちよつとした興味だ」

第達五人に簪、楯無を加えた七人は、千冬に呼び出されていた。

「……ほら、適当なドリンク類だ。適当に分ける」

「なるほど。口止めってわけですね」

「察しがいいな更識姉」

「口止めってどういう事なのだ？」

「そのドリンクを口にした瞬間、賄賂が成立するようなものね
なるほど、と全員が頷く。

そして全員がドリンクを飲み、千冬は缶ビールを開く。

そして、千冬が二本目の缶ビールに手を伸ばした時に、

「で、お前ら。あの馬鹿どもの事をどう思ってるんだ？」
ようやく、本題に入った。

「……あいつら、って……？」

「何、決まっているだろう。うちの愚弟とあの馬鹿のことだ」

一夏と麗我の事だと気づき、少女達は顔を赤らめる。

「そ、それは、その……ただけのですか？」

「馬鹿、誰がやるか」

千冬のもつけない言葉を聞いて、半数が気を落とす。

「別に私は問題ありません」

「私、も……」

「私も別に問題はないかな」

そう、この三人以外は。

「ほう、何が言いたいんだ？篠ノ之、更識姉、更識妹」

「別に、貴女の許可なんて私にはいりません。一夏は、私の力で

奪いとります」

そう、確固たる自信を持って宣言した。

「……私も、同じ……麗我は、私と姉さんで、籠絡する……！！」
「ま、そういうこと。いい？私と簪の恋路は「誰にも邪魔はさせない」」

最後は流石姉妹というべきか、揃って宣言した。

「……ほう。だが最初の質問の答えになっていないな。私は何故あの愚弟と馬鹿の事が気になっているのか、と聞いたんだ」

「人が恋に落ちるのに理由なんか必要ですか？」

「……麗我は、もう精神的にもたなかった私を、その身体一つで、助けてくれた人だから……」

「それと、直接的には関係ないけど私と簪の仲も良くなったしね。

まあ、大部分は箒ちゃんと同じ意見ですけど」

「もし、私が立ちふさがるとしても、か？」

「……当たり前です（……）！！！！」

箒達の最後の言葉を聞いた後、千冬は満足そうに頷いて三人を部屋から出した。

「それほどの覚悟があるのなら十分だ。篠ノ之はせいぜい頑張る事だ。そして、更識姉妹。お前達はイリヤから話を聞いておけ。それでも麗我の事を思い続けることが出来るのなら、私からは何も言わん」

そう、最後に伝えて。

夜は、まだ終わらない。

第四十四話 夜でも変わらない騒動（後書き）

夜は、まだ続きます。

第45話 イリヤとの邂逅（前）（前書き）

今回、少し訳がわからない所があると思いますが、次回説明します
（汗）

第45話 イリヤとの邂逅（前）

「……漸く来たわね。待ちくたびれたわ」

扉が開く音と共に、イリヤは言った。

「……どうして私達が来るってわかったのかしら？」

最初に部屋の中に入ったのは、楯無。どこか警戒した様子でイリヤを見る。

「別に貴女達が来るとわかったわけじゃないわ。でも、チフユが誰かをここに行かせると言ったから、私はここで素直に待つてただけ」
言い終わった直後、入るのを躊躇っていた簪を部屋に入れる。

「さ、ここに来たからには覚悟は決まってるわね？」

返事の言葉はなく、二人はただ首を縦に振る。

「そ。なら始めましょうか。レイガの過去の話を……」

そう言つて、イリヤは語り始めた。

side 簪

「まず最初に言っておくわ。私の父、衛宮切嗣はレイガの両親を殺している」

！！

とつさに出た私の手を止めたのは、お姉ちゃんだった……

「お姉ちゃん、何を……！！」

「落ち着きなさい簪。その衛宮切嗣という人は、麗我をきちんと育てている。ただ悪い人では無いはずよ」

確かに……

「流石は『楯無』の名前を受け継ぎし者ね。そう、麗我の両親は犯罪者だった。それも、かなり悪質なテロリストよ」

え……？

「そして、それを殺したキリツグは、後でその子供が生きているという事をしたの。そして、私達はそれを引き取ったわ。その子供が」

「麗我……と、いうこと……？」

「そういうこと。それが、私とレイガの出会い」

「かなり壮絶な人生の始まりね……」

「そんな……麗我……っ」

酷すぎ、る……

「そんなこんなで月日は経ち、麗我が六歳になった時にある事件が起きたの」

「ある、事件……？」

「ええ。麗我が陸奥謙信に拉致られたの」

あの、意味が、わからな……どういうこと……？

side 簪 end

side 楯無

あれ？あの人にそんな性癖なんてあったっけ？

「ま、正確にはケンシンが町の不良共を暇つぶしとばかりに倒しまくっていた所に感動して、自ら弟子にしてくれと頼み込んだらしい

んだけど……あいつ、なんの連絡もしないんだもの。私達は一ヶ月無駄にしたわ」

あー、なるほど。ある程度は理解出来たわ。

「その二年後に、私達家族は冬木って所に引っ越すんだけど、麗我はついて来なかったわ」

「……どうし、て……？」

「本人は、一夏達といたいから、って言ってたけど、本当は謙信に師事したかったからね」

「あの変態に師事したいって、麗我もなかなか肝が据わってるわね」

「お姉ちゃん……変態、ってどういうこと……？」

あら、そう言えば簪には話してなかったわね。

「昔、更識の家を継いだ時に、『陸奥』の党首に挨拶に行ったのよ。そうしたら、いきなり勝負を申し込まれて……後は、思い出したくもないわ」

だって、身体をかけた戦いに負けて、あの人の好きなように調きよ

されたなんて大切な妹には話したくなんてないじゃない。

簪があの人と会った時に無駄なプレッシャーを感じさせない為に、ね。

「で、時は経ち、あの日、ISが世界に発表、いや」

「発表、以外に言葉が見つからないから発表でいいんじゃない？ま、実際にやった事は単なる脅迫だったけど」

当時の科学力ではまだ試作品段階の荷電粒子砲を粒子から生み出し、当時の最新鋭機を傷一つ負わずに落としまくって、おまけに完璧なステルス性能。これを脅迫と言わずなんというの？

「ま、その日に私達、特別な七人に、空からある物が降ってきたの」「ある物……？」

「ええ、ISが、私達の所に降りてきたの」

え……？は、話が掴めなくなってきたんだけど……？

第45話 イリヤとの邂逅（前）（後書き）

感想待ってるぜ。

第46話 イリヤとの邂逅（中）（前書き）

中途半端になったので区切ってしまった……
今回も説明会です。

第46話 イリヤとの邂逅（中）

「……空から？」

「そう、当時のIS、第一世代を遥かに超え、第4世代と同等、いやそれ以上ともいえるようなISがね」

イリヤの言葉に二人は何も言えなくなる。

そんな怪訝そうな顔の二人を無視してイリヤは話を続ける、と訳にはいかず、

「ま、信じられないでしょうね」

一度、それを信じさせる為に話を止めた。

「当たり前、って言った所かしら」

「非科学的……」

「ま、それなら証拠を見せればいいんだけど ヘラクレス！」

『如何なさいましたかお嬢様？』

「へええっ!？」

突然、どこからともなく聞こえて来た野太い声に、思わず二人は奇声をあげてしまう。

「はははははははっ!! 面白い! 面白いわ!!」

そして、それを見て笑い転げるイリヤ。

「……で、それが貴女のISなのかしら？」

「そう。これが私のIS」

そう言つて、イリヤは背中中に手を向け、

「バーサーカー、真名はヘラクレス」

巨大な斧剣を持ち上げた。

「……銃刀法、違反……」

「大丈夫よ。これ自体に殺傷能力はないから」

『お嬢様の言う通りですよマドモアゼル。今の状態の私には殺傷能力はありません。だから安心して頂いて結構です』

だから大丈夫だ、と太鼓判を押す危険物。

かなりシニールな状況が繰り広げられている。

「……なんか凄い光景ね」

「……うん……」

楯無達も二の句がつけない状態である。

「ね？わかったでしょう？」

「……何が……？」

「決まってるでしょ。ヘラクレスが、この世界の物ではない（……・……・……）ということが」

唐突に切り出されたイリヤの言葉に、簪は考え込み、楯無はそういうことかと啞然とした顔でイリヤを見る。

「まさか、でも……言葉を話す（……・……）ISなんて」

「そ、正解」

「ど、どういうことなの……？お姉ちゃん……」

「簪。今までに意思を持ったISが開発されたという話を聞いた事がある？」

簪は縦に首を振る。

「そう。ISには自己学習機能があるから意思を持ったISが現れる事はある。じゃあ、言葉を話すISは？」

簪は首を横に振り、そして有り得ないような物を見たような目でイリヤを見る。

「二人とも理解できたようね。そう、今現在、言葉を話すISなんて開発されてはいない。でも、私はそれを持っている。これが、ヘラクレスがこの世界の物ではないという確固たる証拠」

二人は何も言えないまま、イリヤを見ていた。

十分後。

「話せるようになったかしら？」

「ええ、なんとか」

「……うん、大丈夫……」

漸く先程のショックから回復した二人は、イリヤの出したお茶を飲んでいた。

「ま、いいのなら元の話に戻るわね」

閑話休題、とばかりにイリヤは話に戻り、話し始める。

二人は、一字一句聞き漏らすまいとさらに集中し始めた。

「……それで、レイガはそれから、世界中を見て回りたいという思いを私達にぶつけるようになったの」

「麗我、らしい……」

「カンザシの言う通りね。私も、麗我らしいな、と初めに思ったから」

イリヤは、感慨深げな顔で天を仰いだ。

「で、貴女達は許可したの？」

「許可するしかないじゃない。もう、ここでも動かないような強い目をしてたんだから」

イリヤはふう、と溜め息をつく。

だが、その溜め息には、諦めと共に愛情がこもっていたことを二人は直感的に理解した。

「ま、ある条件をつけたんだけどね」

「……条件？」

「ええ。行くのならせめて大学の修了過程までは終わらせる、っていう課題をね」

「……………」

「大丈夫よ？ちゃんと私が教えたから」

そういう問題ではない、と二人は同時に思った。

「ま、二年で終わらせるのは少し厳しかったけどね。主に身体が」

「……………身体、が……………」

「ええ。一日の睡眠時間が約三十分で、それ以外の時間は全て勉強に費やさせたから」

絶対に大丈夫ではない、とまた二人は同時に思った。

「まあ、挫折してくれたら一番良かったんだけどね……………それをやり遂げて行っちゃわなければ……………あんなことには……………」

「な、何があつたの？」

「レイガが、『赤い錬鉄』と呼ばれる最初の事件が、あろうことが最初に渡った中国で起きたのよ」

イリヤは、悲しそうに目を伏せた。

第46話 イリヤとの邂逅（中）（後書き）

貴方に出来ますか？俺？出来るわけないじゃん（笑）

第47話 イリヤとの邂逅（後）（前書き）

後とか書いてるけどもう一話あります。

後、今週は更新出来ないかもしれませんが。
夏休みの宿題等が溜まっているのです。

第47話 イリヤとの邂逅（後）

「……事件？」

「ええ。あの思い出すのもおぞましい事件がね」
そう言つて、イリヤは顔をそむけ、

「いい？これが最後の警告よ。これはレイガの中でも最大の秘密、これを知つたと知つたら、レイガはどこかに行くかもしれないわ。それでも聞くの？」

二人に、最後の決断を促した。

「……是非もない……」

最初に口を開いたのは、簪だつた。

「どうして？これはレイガが今まで私達家族以外誰にも伝えてない最大の秘密よ。レイガこれを知つたと聞いて、貴女の前から姿を消してもいいの？」

「そこ、おかしい……どうして、麗我が私の前から姿を消すのと、麗我の秘密を聞くのが、イコールになるの……？」

「そ、それは……」「機密、それも国家規模の、ね」

「……お姉ちゃん……？」

イリヤの言葉を継いだのは、ずっと話さなかつた楯無だつた。

「これを聞いてしまった場合、どこかの軍の秘密部隊に処理されてしまうかもしれない、ってことじゃない？」

「……嘘……？」

「……正解よ。流石は『楯無』ね」

「……とりあえず、続けるわね。どうも、その女の子は研究所に雇われた傭兵に追われてて、それをレイガは自らの力を使って倒した。ここまではいいんだけど、その後、怒ったらしい研究所は、ある強行手段に出た」

「ある……？」

「……まさか、でもそんな……！？」

「察しがいいわね、タテナシ。そう、その研究所は、ナツの親を拉致した（……………）」

「……………っ！！？」

「まさか、でも、国際法に……」

「その研究所は国と繋がってたの。国際法なんて、拉致された現地の国が、『現在、鋭意努力して探しています』なんて言えば無駄になるのよ？ 例え、拉致したのがその言った国でも（……………）………ね」

憤る二人を、冷たく突き放したい方で話すイリヤ。

まるで、諭しているかねような話し方に激昂していた二人も冷静さを取り戻した。

「そして、麗我の身につけていたのがISだと知ると、その研究所の所長は救いに来たレイガ達にナツの親に銃を突きつけながらこう言ったの。『救いたければそのISを外して娘を渡せ』ってね」

「……そいつ、人間？」

「科学に魂を売った、ね。そして、十分間の時間を与えられたレイガは、迷いに迷ったレイガは、ついにISを外そうとした瞬間」
「瞬間？」

「『おっと、手が滑った』って言って、その所長は二人の頭を銃で打ち抜いたらしいわ」

イリヤは、苦虫を噛み潰したかのような声で、そう言った。

「恐らく、元から全員生かして帰す気は無かったんでしょうね。相手はたかが小学生だし、血を見た事がないと侮ったんだとも思っうね。事実、それを見た瞬間、ISが二機出てきて、レイガに襲いかかつ

たらしいし」

「それで、麗我は……？」

「……相手にとって唯一の誤算は、麗我が『地上最強』、陸奥謙信の弟子だったことでしょうね。レイガは、冷静だった（……）の」

「……………え……？」

「そう、冷静すぎた（……）の。普通、目の前で人が死ぬ所を見たら、少しは動揺するでしょう？それをレイガは、普通にIS展開して、ISに『約束された終焉の焰をぶつけたの。それでISを一瞬で倒した後、動揺する所長の右手を剣で壁に縫い付けて、その後ISを展開したまま、ナツを連れて逃げたらしいわ。その職員を一人残らず（……）半殺しにしながら（……）……」

「……………半殺しって、殺してないの？」

「ええ。レイガは甘すぎるのよ。そして、それがまた更なる火種になった（……）の」

「更なる……火種……？」

「ええ。その殺さなかった職員全員から話を聞いた中国政府は、名前を知らないレイガの事を『赤い錬鉄』と二つ名をつけて、賞金をかけたの。後、ただの被害者であるナツにも……ね」

「どうして……そこまで……？」

「自分の国のIS、つまり最強戦力を相手にもしなかったISが欲しかったんですよ。ご丁寧に半壊していた監視カメラから写真を取りだしてたぐらいたし」

「……………」

何も話せなくなった二人。

何かを考える時間が必要だと思い、イリヤは二人の復活を待つことにした。

「……その後は……どうなったの……？」

五分後。静寂が場を満たす中、最初に口を開いたのは簪だった。

「その後は、レイガはタバネにナツ用のISを頼み、それと並行して追ってくる軍や賞金稼ぎと戦いながら、中国を出て、その後は便利屋の真似事や賞金稼ぎの真似事をして、お金を稼いでいたらしいわ。そのままそこである程度の言語を覚えながら生活してたらしいわ」

「……そういえば、麗我は、どうして中国語を……？」

「小学生の時に、死ぬ程勉強させたって言ったでしょ？あの時に、ね」

「……」

黙り込む二人を無視して、

「さ、話はお終い。とりあえず今日は部屋に戻りなさい。チフユに怒られても知らないわよ？」

そう言つて、イリヤは二人を部屋から追い出した。

第47話 イリヤとの邂逅（後）（後書き）

実は、結構難産だった。

第48話 それぞれの夜（前書き）

とりあえず、これでひと区切りです。

第48話 それぞれの夜

sideイリヤ

「……もういいわよ、ナツ」

「……全く。急に私を押し入れの中に押し込んだと思ったら、そういう事だったのね」

不満気な表情と共に出て来るナツ。

本名は篠ノ原夏、レイガが救った女の子んだけど……なんでこんなのに襲われちゃうのかしら。

そりゃあその紫がかった髪は特有のもので綺麗だと思うし顔もそれなりにいいしプロポーションも悔しい事に私よりいいけど……だからって油断しすぎじゃない？女の子に寝込みを襲われるなんて。

「ちよつと義姉さん、今何か変な事考えてない？」

「何も考えてないわ。それよりナツ、『義姉さん』ってどういう事？私は貴女を妹にした覚えは無いんだけど？」

「あら、わからなかった？簡単な話よ。麗我は私の夫になる人なんだから、その義姉である貴女は私の義姉になる。これくらい当然の理でしょ？」

はあ。これだからこの子の相手は疲れるのよね。

しょうがない。ちよつと早いけど最終兵器を投下しようかしら。

「ナツ」

「何？義姉さ」

「この部屋を貸してるのが誰だと思っているのかしら？」
ピシッ、とナツの表情が固まる。

「別に貴女を追い出してあげても私はな——んにも困らないのよ？そこら辺をよく」

「本当に申し訳ありませんでしたイリヤ様」

「よろしい」

一瞬で土下座したナツを見下しながら言っただけ。うん、気分が少しはマシになったわね。

「……にしてもやっぱりそれ（・・・）はつけてるのね」

「当たり前じゃない。麗我が私にくれた大切な物なのよ？ 無くすわけ」

「それで色々な組織の依頼を受けているのかしら？ 『顔無しネームレスの狙撃ナイパー主』」

「……やっぱりイリヤさんには隠し事は出来ないわね」

そう言っただけ、私から顔を背けるナツ。

「安心して。レイガには伝えてないから。ま、恐らくは『顔無しの狙撃主』の噂くらいは聞いているでしょうけど。どれだけ金を積まれても『赤い錬鉄』の殺害、いや傷害の依頼すら受けない、変わったプロスナイパーの話位は、ね」

「……そ。麗我、私を嫌ってないといいんだけど……」

そう言っただけ、目の所だけが空いた仮面を取り出し、それを抱くナツ。

「それもレイガからのプレゼント、かしら？」

「そうよ。戦場に私もついていきたい、とわがママを言った時に、私に渡してくれた仮面。でも、もうかなりボロボロになっちゃってるけど、ね……」

そう言いながらも、大切そうに仮面を抱きしめるナツ。

「……まあいいわ。それよりも、今日は話しあいましょ」

「……そうね。主に、私と麗我の結婚式の段取りについて、ね」

誰もそんなこと話すなんて言っただけ。

sideイリヤ end

side 簪

「どうするの？お姉ちゃん……」

「……不味いわね。一旦、部屋に戻って考えましょ。これは、緊急事態よ」

「うん、わかった……」

「そ。じゃ、明日」

部屋に戻るお姉ちゃんを見送った後、私は、麗我の部屋の扉を叩いた……

『おや？どちら様かな？』

ひゃあっ！？

「……あ、あの……麗我は、いますか……？」

「……おや？あんたも麗我に惚れたクチかい？」

ど、どうして私の思考がわかるの！？

「ま、諦めるこつ　え？入れてやれ？そして外に出ていてくれ、だって？……わかったよ。全く、世話のかかる雇い主だ」

え？え？ど、どうなってるの……？

「入りの嬢ちゃん。恋人が待ってるよ」

「こ、恋人じゃ、ない……っ！！」

「はいはい。そんじゃま私は外で寝てきますかね」

そう言っ出て行く青い髪の女の人……

ちよつと、苦手なタイプ……

「簪？」

「ひゃああっ！！？」

振り向いたら、至近距離に麗我の顔があったから、腰を抜かしてしまった……

「か、簪？どうしたんだ？」

「ちよつと、腰が……」

そう言った途端、私の膝と首に手を向けて、
「よつと」

「ひゃああつ！！？」
いきなり抱き起こして……って、今、私……！？
「どうしたんだ？」
「あ、あう、あう……」
「ま、落ち着いてから聞かか」
そう言うが早いか、部屋の奥の方へと連れていかれる私……
駄目、もう、意識、が……

「……ここは……？」
「気がついたか、簪」
起きたら、布団の中だった……
って、今何時……！？
「今はもう一時だよ」
「……っ！？消灯時間……！！それに、見回りも……！！」
「大丈夫だ。姉御に事情を説明してなんとかしてもらってる」
「……良かった……」
良かった……また、あの出席簿攻撃は食らいたくない……
あれ、痛い……
「で、なんで俺を訪ねてきたんだ？」
「あ、あの、麗我の、過去を……」
「聞いたのか！？」
急に、殺気を出して私を睨んでくる麗我……
怖い……
「おっと。怖がらしてしまったな。多分、イリ姉から聞いたんだろ？」

殺気を抑えた麗我に対し、私は首を縦に振る……

「……そうか。軽蔑したか？ いや、しただろうな……」

「そんな事、ない……っ！！私は、麗我の、事が……」

「落ち着いてくれ簪。俺は、お前に釣り合うような人間じゃ無いんだよ」

「……どういう、事……？」

「俺はな、自分が生き残る為に多くの人を傷つけてきたんだよ。人を殺したか殺してないかなんて関係なんてないんだ。俺が、多くの人を傷つけて、それで俺自身も傷ついて、代わりに手に入れたのはこんな平和な世の中じゃ何の役にも立たない双剣術と知らない名声、そして……俺を狙う殺し屋や、名声や賞金目当てで俺を狙う賞金稼ぎ、そして……中国から送られてくる刺客、そんなのばかりだ。俺はもう、出来れば戦いたくなんかない。でも、敵は待ってなんかないんだ。そんな俺に、お前みたいな綺麗な人が釣り合う訳がない。だから、考え直せ簪。お前なら、もっといい人が……」

何故なら、私が、自らの唇で、麗我の唇を塞いだから……

「……！？簪、何を……っ」

これ以上、麗我に自分を罵倒して欲しくない。そんな思いと共に、私は麗我の口の中を蹂躪する……

「あふっ、れろっ、ふあっ……」

「……っ」

私にとっては永遠にも思えた時間の後、私は、唇を離れた……

「麗我がどんな人間でも、私には、関係ない……私は、麗我の事が好きだから……」そう言い切った瞬間、

「更識妹……そろそろ部屋に戻って貰うぞ……こんな深夜に愛の告白とは、いい御身分だな？」

「……お、織斑、先生……？」

「さあ、行くぞ。……麗我、早く寝ろ。告白された事を考えてもいいが、明日の集合時間には遅れるな。いいな」

「ラ、ラジャー！！」

「さあ、逝くぞ更識」

「い、行くの字が……」

抵抗虚しく、今日は織斑先生に引っ張られていくんだ……

第48話 それぞれの夜（後書き）

簪ファンの皆様、ごめんなさい。
でもやりたかったんです。

第49話 白い小悪魔と模擬戦と専用機（前書き）

1ヶ月……スランプって凄いね（遠い目）

第49話 白い小悪魔と模擬戦と専用機

二日目。その日は一日中ISの訓練の日となっているのだが、麗我は嫌な予感がしてならなかった。

（頼むから乱入して来ないでくれよ、タバ姉、イリ姉……！！）
しかし、そのささやかな祈りも無駄となり、現在束は『紅椿』の調整を行っていた。
そして今

「ねえねえ、その程度なの？それじゃあすぐ終わっちゃうわ？」

「くっ……黙りなさい！」

「まだまだ！いくよラファール！」

「この程度で終わるわけがなかるう！」

「そうよ！！まだまだ、これからなんだから！」

「行くぞ！白式！」

イリヤが麗我以外全員と模擬戦をしているのを見て、麗我は頭を抱えていた。

きっかけは、束によるお願いだった。

「ねえねえ、いっくん」

「どうしたんですか？束さん」

「ちよっと、模擬戦をしてくれないかな。白式のデータが欲しいん

だよ」

「はあ。別に構いませんが」

「やった！じゃあイリりん、よろしくね」

「わかったわ。じゃあイチカ、よろしくね。後、別に他の専用機持ちも入っていいわ。別に代表候補生ごとき何人いても敵じゃないしね」

ブチンッ！

イリヤが挑発を行った瞬間、してはいけない音が四人の頭から響いた。

「……上等、ですわ……」

「……嘗められた、ものね……」

「ラファール、いけるよね……？」

「……確実に、潰す……！！」

そして、一瞬の間にISを装着し、イリヤに武器を向ける四人。

それを見て、イリヤは妖艶な笑みを浮かべた。

「さ、イチカも早く装着しなさい。この程度じゃハンデにもならないわ」

「あ、ああ」

後ろから、さらに堪忍袋の尾が切れる音が響くのを聞き、慌てて一夏はISを装着した。

「……いいわね。行くわよ、『ヘラクレス』」

『了解した、マスター』

そして、イリヤもISを装着し

「……こうなってるんだよな」

「……麗我、大丈夫……？」

「ああ、ありがと簪。俺はただ、イリ姉の馬鹿げた行動に内心で感動を抑えきれないだけだから」

「それ、ただの皮肉……」

「わかつてるよ……」

空中で行われる戦いから目を離さずに会話する麗我と簪。

「くっ、これでっ……」

「甘いわ。その程度の射撃で何を撃ち落とそうっていうの？」

セシリアのピットが縦横無尽にイリヤを狙撃するも、イリヤは避ける事すらせずに近接攻撃を叩き込む。

「僕がいるのを忘れないでよね……」

セシリアに肉迫するイリヤの隙をつき、シャルロットが『レイン・オブ・サタデイ』による超至近距離の銃弾を叩き込んだ。

が。

「その程度の攻撃、意味なんてないわ」

「……なっ……」

灰色の巨人のような姿をしたイリヤのISは、傷一つなくセシリアへの突撃を続けていた。

「……なら私が……」

右肩のレールカノンで牽制しつつ、ラウラのプラズマ手刀とワイヤーブレード、計八つの刃がイリヤに襲いかかる。

それは、確かに普通の、どこにでもあるISであれば十分すぎるほどの攻撃であっただろう。

が、二つ。ラウラにとって想定外だったのは。

「だから言っているでしょ。私の『ヘラクレス』にその程度の攻撃は効かない、って」

イリヤのISが、普通のISではなかった事だった。

そしてもう一つ。ラウラにとっての間合いは、イリヤにとっての間合いでもあるということを考えず、先程セシリアのピット、シャルロットの『レイン・オブ・サタデイ』の攻撃がシールドエネルギーを全く削っていなかったということのを忘れ、無闇に近接攻撃を仕掛けたということだった。

そして、そのミスは、

「終わりよ」

ラウラ自身の敗北という、確かな形となって返っていた。

「じゃ、次行くわ」

ラウラを自らの斧剣による一撃で下したイリヤは、次の標的であるセシリアを見つけ出した瞬間、

「話にならないわ」

一瞬で、セシリアの背後に回り込んでいた。

「……！！！」

慌てて『インターセプター』を取り出そうとするが、時既に遅く。

「二人目。イギリスの第三世代型もこんなものかしらね」

セシリアが気がついた時には、既に、彼女のISのシールドエネルギーは零になっていた。

「さあ、次は誰かしら？」

イリヤは、子供のようなあどけなさの残る目で残る二人を睨んだ。

「……ああ、怖いな」

イリヤの目を見た麗我は、ダラダラと冷や汗を流した。

「どうしたの、麗我……？」

「嫌、昔のイリ姉にISを教えて貰った時、あの目をされた時は確実にボコボコにされたんだ……ほとんどISを扱えなかった時でも容赦なくボコボコにされたしな……」

「れ、麗我……？」

「でも『弓』を出してないってことは、あの『射殺す百頭』を使う気はないって事か……よかったな、シャル、一夏。あの鬼畜ホーミンググレーザーがなくて……あれをなんとか防いでも、後ろに回り込まれてそのま斬られて負けてたなあ……ということは」

「麗我……戻って来て……」

「うおっ！？」

思考の無限ループに入ろうとした麗我を、簪が軽く小突いた。

「やあやあお二人さん。なんでそんなところでらぶーな雰囲気醸し出してるんだい？ 束さんはそんなれない君にジェラシーなんだよ」

そして、二人がまた試合観戦に戻ろうとした瞬間、後ろから飛んできた束が麗我に抱きついた。

「……麗我から、離れて……」

瞬間、それを間近で見ていた簪から不機嫌オーラが湧き上がる。

「おや？ 君は誰だい？ まあ誰でもいいけど。話しかけないでくれるかな。私は今麗我分を補給するのに忙しいんだよ」

「そんなの一生補給しなくていい……麗我は、私の物だから……！！」

断固たる決意を込めて言い放つ簪。

それを見て、束がさらに不機嫌になる。

「誰の許可を得てそんな事を言っているのかな？ 近寄るな。全く、これだからちーちゃんといつくんとれいくんと箒ちゃん以外の日本人は。全く。なんでさっき私は日本人さいこーなんて言っちゃったんだろうね。まあどうでもいいけど。君は全くもって理解不能だよ。今すぐ私の半径五キロから消えろ」

「許可なんて必要ない……私が決めたんだから、貴方の言うことになんて従わない……！！」

束の突然の口調の変化にも全く動じる事なく、簪は束を睨みつける。

「……面白いね」

「……え？」

しかし、次に束から出て来た言葉は、そんな予想もしない言葉だった。

「えーっと。何々、君の名前は更識簪、面倒だからかんちゃんね。

日本の代表候補生だけど、いつくんの『白式』のせいでまだ専用機がない、と……成る程成る程」

「……え……？」

一瞬で自分の情報を揃えられた簪は、何を話してよいかわからずに止まってしまう。

そんな簪に構わず、束は、

「ねえかんちゃん」

「はい……？」

「専用機、欲しくない？」

悪魔のような笑顔で、そんなことを囁いた。

第49話 白い小悪魔と模擬戦と専用機（後書き）

なんという御都合主義www

そして、後半に続く!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8679q/>

IS～インフィニット・ストラトス～ 破戒の錬鉄者

2011年9月2日23時40分発行